

寒山詩講義

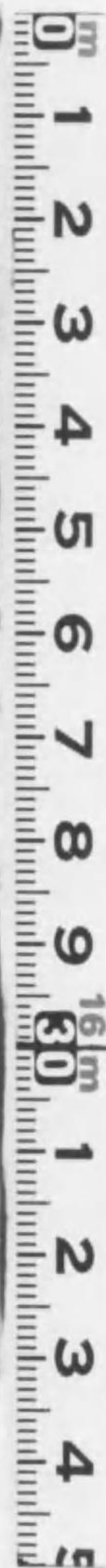
全

921.4-W257



1200500759579

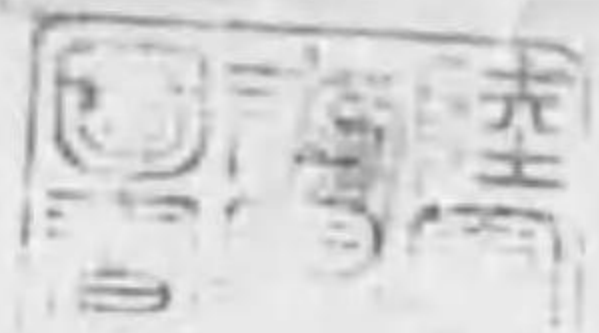
×
複写



始



J 2 7



4
921.8
W.25

若生國榮著

寒山詩講義

東京 光融館藏版

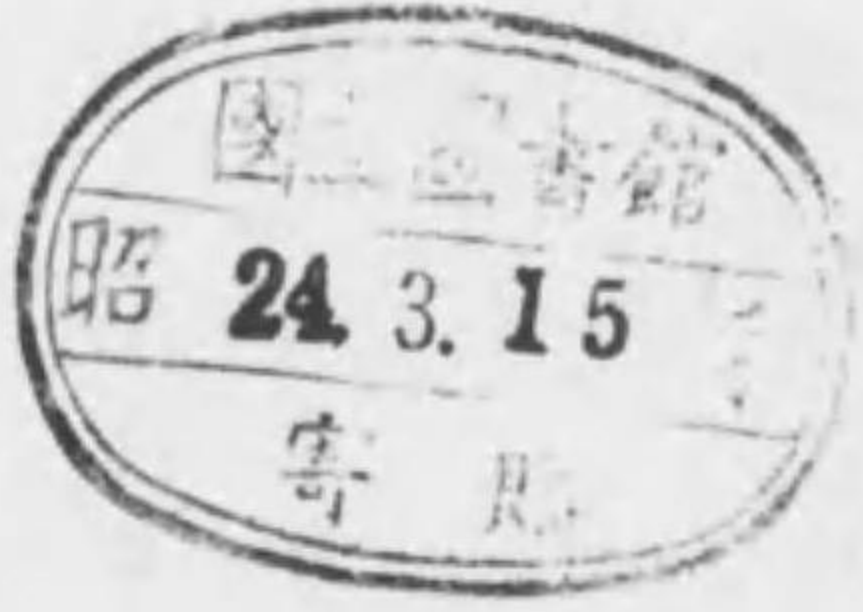


目序
 詩文にも亦愛嬌と不愛嬌なるものごある歟。艶麗流暢讀で甚だ面白きものは人厭嫌せず。崎嶇難澁讀で甚だ面白からざるものは人渴望せず。寒山詩は古來人稱して高調和し難きものごせり。されど中江就ては甚だ面白きものご。左ほご面白からざるものごあり。余顧ふに寒山は五慾を抖擻し六塵を拂拭し生死を解脱し涅槃を證得せんことを勸進したるものなればもとより良藥は口に苦けれごも病に利あり。忠言は耳に逆へごも行ひに益あり。この格言にはづれずされば詩句の面白きものは寒山が手に持てる箒子にて掃ひ棄つるが如き。我儘勝手なる振舞あるべからず。讀者若し詩相句面の愛嬌不愛嬌を論ぜず逐次誦讀しその眞義妙理を咀嚼して平生照心の鏡とせば三隱の涕唾も豈に珠璣

にあらずとせんやあなかしこ。

丁酉の中秋明月の下にて

形山 若生國榮識す



自 序

寒山詩講義

形山 若生 國榮講述



寒山詩講義

此集は唐の太宗貞觀の冊、朝儀大夫使持節台州諸軍事刺史上柱國賜緋魚袋闕丘胤が編集する所なり。詳にするに夾れ寒山子は。何れの許の人と云ふことを知らず。古老より之を見て。皆謂へらる。天台唐興縣の西。七十里に隱居す。號して寒巖とす。折りく國清寺に拾得と云ふものあり。食堂をつかさどる。よのつね餘殘の榮澤を竹筒の内に收めたくはへて。寒山もし來れば。すなはち負て去る。或は長廊下に。徐ろに行て叫喚し。快活に獨言獨笑す。時に寺僧逐ひとらへて罵り打ち越ふときは乃ち駐り立て掌を拊て呵々大笑。やゝ久ふして去る。狀ちは貧子の如し。形貌は枯悴せり。一言一語皆真理に合ふ。つゝしんで之を思へば。隱に道情を増す。凡そ言をひらく所。玄々微妙の義を洞該す。權皮を冠となし。布裘破弊せり。木屐地をふむ。是れことさらに。真人跡を避れて類を同し物を化するなり。或は長廊下に唱詠して唯だ咄哉々々三界輪回と言ふ。或は村壁に於て牧牛子と歌笑す。或は逆或は順みづから其の情を樂ましむ。賢哲にあらざれば。安ぞ之を識るべけんや。闕丘胤さきに丹丘の薄官を受く。途

に臨むの日。頭痛にまつはる。遂に日者と醫師とを召して治するに轉々重し。時に一人の禪師に
 遇ふ。名は豊干と云ふ。天台の國清寺より來て。特に此に相訪ふと。乃ち命じて疾を救はしむ。師
 乃ち從容にして笑ていはく。身は四大（地、水、火、風、處）としてあらざることなき。故に之を大
 と云ふ）に居す。病は幻より生ず。若し之を除かんと欲せば。應に淨水をもちゆるべし。時に
 乃ち淨水を持って師にたてまつる。師すなはち水を含で噴く。しばらくにして病はらひのぞく。
 乃ち胤に謂ていはく。臺州は海嶋にして嵐毒あり。到らん日。必ず須らく保護すべし。胤すなは
 ち問ていはく。いふかし彼の地に當さに何の賢哲ありて師として仰ぐに堪へたるべき。師いはく。
 形相を以て之を見れば。其の真相を識るべからず。其の真相を識らば。其の形相を以て見るべか
 らず。若し之を見んと欲せば。形相を取ることを得ざれ。乃ち之れが真相を見るべし。寒山は文
 殊なり。跡を國清寺にのがる。拾得は普賢なり。狀ち貧士の如く。又風狂に似たり。或は去り或
 は來る。國清寺の庫院に在り。厨中に走使して火を著くと言ひ訖て辭し去る。胤乃ち途に進み臺州
 に任たるに至て。その事を忘れず。任に到るの三日の後みづから寺院に往て禪僧に問ふ。果して
 豊干の言に合ふ。乃ち唐興縣に寒山拾得ありや否やと云ふことをしらべしむ。時に縣申すらく。縣
 の界西七十里の内に當て一巖あり。岩中古老より貧士あるを見る。頻りに國清寺に往き。寺の庫
 中に止宿す。一人の行者あり。名けて拾得と云ふ。胤乃ち特に往て禮拜せんとして。國清寺に到

て。乃ち寺衆に問ふ。此寺さきに豊干禪師の院ありと。何れの處にか在る、并に拾得寒山子、現
 に何の處にか在る、時に僧道翹なるもの、答へていはく、豊干禪師の院は經藏の後に在り、即今
 人の住し得るなし、毎に一の虎ありて、をりく此に來て吼ゆ、寒山拾得の二人は現に厨中に在
 り、僧胤を引て豊干禪師の院に至る、乃ち房を開けば、唯だ虎跡を見るのみ、乃ち僧寶德道翹に
 問ふ、禪師いませし日、何の行業かある、僧いはく、豊干いませし日、唯だ米を舂て供養するこ
 とをつとむ、夜は乃ち唱歌して自から樂む、遂に厨中にいたれば、竈の前に二人火に向て大笑す
 るを見る、胤便ち禮拜す、二人連聲に胤を喝して、みづから手を相ひ把て呵呵大笑叫喚して乃ち
 いはく、豊干饒舌々々（多言の義なり）彌陀（阿彌陀、こゝに譯して無量壽と云ふ）を識らず、我を
 禮して何かせんと云ふ、僧徒奔り集り、たがひに相ひおどろき訝る、何故ぞ尊官、二人の貧士
 を禮する、時に二人乃ち手を把て走て寺を出づ、乃ち之を逐はしむるに急に走て去る、すなはち
 寒巖にかへる、胤乃ち重ねて僧に問ていはく、此二人肯て此寺に止らんや否や、乃ち房をもどめ
 しめ、曠で寺に歸して安置せんとす、胤乃ち郡に歸て遂に淨衣二對を製して香藥等特に送て供養
 す、時に二人更に寺にかへらず、使者乃ち巖に就て送り上つる、而して寒山子を見るに、乃ち高
 聲に喝して曰く、賊々ど、退て巖穴に入る、乃ちいはく、汝諸人に報ず、各々努力せよと云て、
 穴に入りて去る、その穴おのづから合て、之を追ふべきなし、その拾得の迹は沈で所なし、乃ち僧

遺題をしてその往日の行状を尋ねしむるに、唯だ竹、木、石、壁、に於て書するの詩并に村墅家人
應壁の上へ書する所の文句三百餘首、及び拾得土地堂の壁上に於て書する言偈并に纂集して巻を
成す、但し胤心を佛理に棲まじむ、幸に道人に逢ふ、乃ち讚を爲て曰く、

菩薩遊世。示同貧士。獨居寒山。自樂其志。貌悴形枯。布裘弊止。
出言成章。誦實至理。凡人不測。謂風狂子。時來天台。入國清寺。
徐步長廊。呵々折指。或走或立。喃喃獨語。所食厨中。殘食菜滓。
吟偈悲哀。僧俗咄捶。都不動搖。時人自耻。作用自在。凡思難值。
即出一言。頓祛塵累。是故國清。圖寫儀軌。永切供養。長爲弟子。
昔居寒山。時來此地。稽首文殊。寒山之七。南無普賢。拾得定是。
聊申讚嘆。願超生死。

寒山詩

これは此集の題目なるが、一本には三隱詩集に作る、三隱は所謂豐干禪師、寒山子拾得子なり、
傳は傳燈錄、會元等の僧史にのせたり、此集と大同少異あり、隱は字彙に蔽なり、安なり、藏
なり、詩は字彙に志の言に發するなり、釋名に詩は之なり、志の之く所なり、集は雜なり、聚な
り、説文に鳥に樹木に在るなり、隱にこれありいはく、小隱は山に隱る、大隱は市に隱ると、是

れ膚淺皮薄の言にして、論の精密なるものにあらず、嗚呼隱乎、まことに得がたく、ことに辨じ
がたきものなり、夫れ隱は徳を韬み光を晦ます所以のものなり、たとひ荷を被り、藜を杖つさ、瓢
を負ひ、巻を携へて、石上に枯立し、樹間に鼻吟すとも、内に道德の貴ぶべきなく、外に才器の
取るべきものなくんば、是れ徒に隱を衒ひ、流輩を欺誑する底の癡奴のみ、たとひ鋤をになひ、畝
を握て、妄りに自から隱者を稱し、市に山に總べて是れ困寒の餓夫まことに笑ふべし、何ぞ隱者
と稱するに足らん、こゝに真隱あり、市にあらず、山にあらず、非相の山に寄り、無聲の谷にひ
そみ、不朽の林に入て、無住の室を結び、頻りに無所有の市に走て、常に不思議の薪をひささ、大
に如化含識を利し、高く無生の薪歌を唱ふ、巢父許由も憐ふこと能はず、伯夷叔齊も、伍すべき
にあらず、何によりて此の如くなる、彼れ常に三界に於て心意を現せざるが故なり、寂滅道場を
起たすして、諸の威儀を現す、それこれが大隱と云ふ、今寒山子は蓬頭垢面斷衫破衣、これ他の
寂滅場中の威儀にあらずや、豈にその人にあらざらんや、寒山子みづから言ふ、五言五百篇、七
字七十九、三字三十一、都來六百首、今之を考ふるに、五言二百八十五首、七言二十首三言六首、
都べて三百十一首あり、しからば道翹が採集する所に漏落あるや知るべし、林間録に曰く、寒山
子の詩に曰く、人是黑頭虫。剛作三千年調。鑄鐵作三門限。鬼見拍手笑。これを此集に考ふるに、
見る所なし。此れは是れ二百八十五首の外の逸なるものにして、之を得たる乎、編年通論第二十

卷に曰く、昔し寶覺禪師嘗て大史山谷道人に命じて、寒山詩を和せよと、山谷之を諾す、數十日に及ぶも一辭を得ず、後ち寶覺禪師に見へて曰く、更に書を讀み文を作ること十年せば、或は陶淵明に比すべし、寒山子の若きは再世すといへども、亦能く及ぶこと莫けん、寶覺以て言を知るを謂へり、山谷は宋の少陵なり、言ふ所此の如し大凡を聖賢の造意深妙を遠なる達識の洞然たるにあらざるよりは亦能く辨することなし、又黃山谷ある時晦堂禪師に侍して道話の次、晦堂曰く、庭堅今詩律を以て天下に鳴る、寒山詩の如きは韻を廣で和するを得るや否や、魯直答へて曰く、昔杜少陵寒山詩を一覽して舌を結ぶのみ、吾今豈に敢て容易に韻を和すべけんや、たとい一生二生を経て詩吟を作るといへども、老杜が境界にだも到りがたし、況んや亦寒山詩をや、晦堂之を首肯すと、寒山詩の高妙なるは尋常の唐宋諸賢の口吻と比すべからざること推して知るべし、吾今より逐條解釋を下し、諸彦の清鑑に供せんと欲す、寒山子が果して生を脱し死を離れ、凡を超へ聖を越へて、衆生の沈淪を救済せんがために、假りに貧窮下賤の身を現じて、縱説横説するの菩薩子たることを知らば幸なり、

凡讀我詩者心中須護淨。慳貪繼日廉。詔曲登時正。驅遣除惡業。歸依受眞性。今日得佛身。急急如律令。

此詩は五言律の体にして、八庚の仄韻を用ゆ、寒山詩は僧道翹が採集の時、得るに隨て便ち録し

たるものなれば、其の述ぶる所の前後は、もとより知るべくもならず、其の詩、我が詩を讀まんことを勸む、故に卷中の序分となせり、乃ち勸發を以て皮相となし、護淨を以て骨肉となし、見性を以て心髓となせり、「凡そ我が詩を讀まん者は、心中須らく護淨すべし」凡、廣韻に、常なり、皆なり、或は總計なりとある、我は、寒山自稱の辭なり、護淨は護持淨盡の義なり、護淨に四種あり、一には上を欣び下を厭ひ、専ら勝佗の見を挾で、精鍊刻苦する者あり、是れ外道の護淨なり、二には生死を厭ひ涅槃を求め、久しく四諦の法門を觀じて、喧しさを嫌ひ靜を求め、灰心浪智を以て、最後の寶處と爲る者は聲聞の護淨なり、三には外飛花落葉を感じ、内十二緣起を觀じて、我空偏眞の理を覺て、證果となす者は、緣覺の護淨なり、四には、常に四弘の願海に游泳し、深く我法二空の眞理に達し。大に夢中の佛事を成じて、廣く如化の群有を度する者は、菩薩の護淨なり、凡そ僧俗男女智愚利鈍に拘はらず、人として寒山が詩を讀まんものは、人々の心中に於て、能く記臆して、龜鑑となし、保護淨盡の志操を失することなきやうにせよ、能く讀み能く護らは自から心中清淨にならん、然るときは「慳貪は日に繼で廉となり、詔曲は時を登て正からん。慳貪はオシミ、ムサボル、取るべからざる財を取を貪なり、與ふべき物を與へざるは慳なり、此れ人情の私慾にして公平なる良心にあらす、詔曲は詔諛阿曲と熟字して面従を諛と云ひ、佞言を諂と云ふ、ヘツラヒと云ふこと、直からざるを曲と云ふ、オモナルと云ふこと、廉は廉直と熟字

して常に樂で、分外に求めざることを、正は公明正大なり、心中を護淨するときは、慳貪諂曲の邪念、日につき時を登(逐の義)て廉直となり、公正となり、「驅遣して惡業を除き、歸依して眞性を受けよ」驅遣は、カリヤルなり、心猿意馬と云はん乎、煩惱の賊とも云つべき、貪、瞋、痴の罪惡業を、かりやり、拂ひ除き、歸依は歸入依頼と熟字して、佛、法、僧、の三寶の門に歸入し、三界の大導師たる定惠圓明の菩薩に依頼して、手を把り耳を擗ぐるの教化を受け生死の苦海を越渡して、眞性、眞實不安なる佛性を受けて、自体常住不變不異なる涅槃の妙境に逍遙せよとなり、今こゝに受けよとあれど、實際は人々個々本來具有せる佛性を見破するに過ぎざるなり、「今日佛身を得んこと、急々律令の如くせよ」律令は雷邊の提鬼なり、此の鬼よく走り、雷と相ひ疾速す即今諸人が且つ誦讀し且つ護淨し去らは、不生不滅の惠日朗然として照し、慳貪の層氷、諂曲の積雪、たちまち消除し、無量劫來生死の罪業、即時に寂滅して、歩を移さずして眞淨無漏の性海に歸入し、肉身を轉せずして、佛身を成就せんことを、急々迅速なること律令鬼の迅速に走るが如くせよとなり、

重巖我卜居。鳥道絶人跡。庭際何所有。白雲抱幽石。住茲凡幾年。屢見春冬易。寄語鐘鼎家。虛名定無益。

此篇も亦五律にして、十二陌の韻を用ひ、而して山居の幽致、隱棲の高閑なることを述べて、浮

世の名塵利埃を逐ふ人を教誡したるもの乎、「重巖に我れ居を下す、鳥道人跡を絶ず、」重巖とはカサナリタル、イワホ、の穴の内に、我は(塞山の自稱辭)生居を卜(うらなひ)し取りさめたり、鳥道とは山路幅はそく、且つせまくして、やうく鳥の通るだけほどのなれば、訪づるものもなきゆゑ、人の足跡さへ絶へてなし、かく人烟まれなる山居の「庭際には何の有所ぞ。白雲幽石を抱く」庭際には唯だ無心なる一片の白雲が幽石を抱てをるばかり、何も塵俗のわづらはしさもの、目に觸るゝことは少しもなし、心閑なれば、物おのづから閑なり、心地清淨なれば、佛土清淨なり、白雲幽石限りなき風流、「茲に住して凡そ幾ばく年ぞ。屢は春冬の易るを見る」この巖穴に住みはじめてから、凡そあらまし、幾多の年月を閑たか、しかど記憶せぬが。屢はタビく〜と云ふ義、山中厝日なし乎、されど春來れば花笑ひ鳥歌ふ、冬至れば木凋み葉落ちて、四時の移り易るを見るのみ、「語を寄す鐘鼎の家。虛名定めて益なし」いふ塞山が教誡の語を以て鐘を撃ちて鼎に食する富貴利達に心醉する高閑朱門の客に寄す、富貴風前の塵、功名水上の泡、趙孟能く與ふる所以のものは、趙孟能く之を奪ふ、人爵は限りあり、天祿は窮まりなし、人事觀來れば一も盤石の堅なし、之に心醉しては、定めて三界の苦縛を解脱するには毫も益なきことならん

可笑寒山路。而無車馬蹤。聯溪難記曲。疊嶂不知重。泣露千般草。吟風一樣松。此時迷徑處。形影何從。

是れまた山中の幽邃、通居の佳趣を述ぶ、詩韻は二冬韻を用ゆ、露に泣く千般の草、風に吟す一様の松の一聯の如きは、趣味最も深遠、韻調極めて高尚、重吟して宜しく、講説して宜しからず、「笑ふべし寒山の路、而も車馬の蹤なし」寒山の路は極めて幽邃なれば、唯だ白雲の時に去來するを見るのみ絶へて名走利奔の客が馬車を驅て往來したる蹤かたもなさは、實に笑ふ可く、憐むべく、又愛すべし、「聯溪曲を記しがたし。疊障重なることを知らず、」聯溪は、ツラナリタル、タニガハなり、曲はマガルなり、幾まがりにも、連りたる溪川を、いくたびか往來すとも、其のいくばく曲をなせるかを記憶し難し、疊障、障は山なり、疊はヌムなり、たゞみかさなりたる山が、其のいくばく、たゞみかさなりてあるかを知らず、寒山の境界は、行雲流水、洒然として跡なし、「露に泣く千般の草、風に吟す一様の松、」千般は種々と云ふ義、桔梗、輕茅、女郎花、千萬無量の秋草が、露に沾ひてあり、泣の字は、吟の字に對したるものなるが、又別段の風味あり、味ふべきなり、見わたせば、限り知られぬ松林には、古今不改の緑一色、秋風颯々、ひらきて、龍の吟するが如く聞へけり、この一聯句、寒山一區の佳境、寒山九虎の嶮關にして、見易くして透り難きものなり、故にいはいく、重吟すべく、講説すべからず、「此の時徑に迷ふ處、形ち影に問ふ何れ從かせん、」此時は即ち山中往來の時、徑は小路なり、寒山が來時の徑を忘却して、歸路に迷ふところ、歸路を問ふべき人もなし、唯だ我形が影坊子に、何れの方より行たもの乎と問ふばかり、聯

溪難記曲、疊障不知重の句と、おのづから照應せり、寒山の境界、洒々落落々獨言獨笑、應ずるものは谷神のみ、

吾家好隱淪、居處絕羣塵、踐草成三徑、瞻雲成四隣、助歌聲有鳥、問法語無人、今日娑婆樹、幾年爲一春。

十一眞の韻を用ゆ、「吾が家好隱淪、居處羣塵を絶す」隱淪字彙に淪は没なり、又小波を淪と云ふ、桓譚新論に云く、天下の神人五つ、一に曰く、神仙、二に曰く、隱淪、三に曰く、使鬼物、四に曰く、先知、五に曰く、鑄凝、今、寒山の家は誠に好き隱棲である、羣はカマビスシ、塵はチリ、吾が居る處は、功名を争ふが如き、かまびすしきことや、名塵利熱の、うるさきことは、さつぱり絶へてなし、「草を踐で三徑を成し、雲を瞻で四隣を成す、」三徑は陶淵明の歸去來辭に、三徑荒に就て松菊猶は存すとあり、隱棲幽寂の境には唯だ荒蕪せる三逕の草と、白雲の四方に隣をなせるを瞻るのみ、「歌聲を助くるに鳥あり法語を問ふに人無し、眞如實相の歌を歌ふ聲を助けて相和するものは、困鳥の啼くあり、離苦得樂の法語を問はんと欲するも聖徳の人なし、「今日娑婆の樹幾年か一春をなさん、」莊子逍遙遊篇にいはいく、楚の南に冥靈と云ふ者あり、五百歳を以て春と爲し、五百歳を以て秋と爲す、上古に大椿と云ふものあり、八千歳を以て春と爲し、八千歳を以て秋と爲す、今この娑婆樹亦これに類するに似たれど、敢てしかるにあらず、これを細説すれば、甚

だ面倒なり、約言すれば娑婆世界と云て可なり、一切の衆生共に此の樹間に蠢々たり、今日此の娑婆樹下に大慈大悲の菩薩の出で一切衆生、生死罪業の水雪を融解して不生不滅眞如實相の花を開かしめ、松、竹、櫻、當位即妙の春を回すことは何の日にあるぞ、五百年乎、八千年乎、五十
六億七千萬歳乎、寒山、法語を問ふに人なしと云て限りなき嘆息を發したり、春の字、樹の字に照し見るべし、

琴書須自隨。祿位用何爲。投輦從賢婦。巾車有孝兒。風吹曝麥地。水溢沃魚池。常念鷓鴣鳥。安身在一枝。

四支の韻を用ゆ、琴書須らく自から隨ふべし、祿位用を何にか爲ん、古列女傳に曰く、楚王、於陵の子終が賢を聞て相と爲さんと欲す、使者をして黄金百鎰を持って往て聘して之を迎へしめん
とす、子終入て妻に謂ていはく、王、我を以て相と爲さんと欲す、今日相とならば、明日は駟を
結び騎を連ね、方丈を前に食はん可ならん乎、妻いはく、夫子履を織て以て食となす、物と治す
ること無きにあらず、琴を左にし、書を右にし、樂も亦其の中に在り、夫れ駟を結び騎を連ぬる
も、安する所は膝を容るゝに過ぎず、方丈を前に食ふも、甘ずる所は一肉に過ぎず、今膝を容る
ゝの安と、一肉の味とを以て、楚國の憂を懷く、其れ可なるものならんや、亂世には害多し、妾
恐らくは先生の命を保たざることを、こゝに於て子終出で使者に謝し、遂に相與に通れて人の爲

めに園に灌ぐと云ふ、輦を投じて賢婦に従ひ、車を巾るに孝兒あり、車を巾る孝兒とは、南史隱
傳に曰く、陶潛嘗て廬山に往く潛が故人龐通之、酒具を齎らして之を贈る、半途にして之に遇ふ、
潛、脚疾あり、一人の門生、二人の兒童をして籃輿を擧げしめて至り、欣然として共に飲燕す、
今子終の如く顯貴の輦を擧げて、賢婦の諫めに從て隱遁し。陶潛の如く孝兒に籃輿を巾らせて燕
遊するも亦風流天地の開日月にあらずや、風は麥を曝す地に吹き、水は魚に沃ぐ池に溢る、麥を
曝すとは後漢の高鳳字は文通、南陽、葉の人なり、家、農を以て業となす、鳳専ら誦讀に精し、
晝夜息まず、妻嘗て田に行く、麥を庭に曝す、風をして雞を護らしむ、天暴かに雨ふる、鳳竿を
持して經を誦す、潦水、麥を流がすを覺へず、妻還て怪み問ふときは方さに悟る、後ち名儒とな
る、年老て志を執て倦まず、太守連りに召請すれども就かず、免ることを得ざらんことを恐れて
乃ち詐て寡嫂と田を訟へ後ち直言に擧げられ公車に至る、病に託して身を漁釣に隱す、云々、魚に
沃ぐ池とは、吳越春秋に曰く、范蠡功成り名遂げ、隱居して魚を養ふ、其の池、會稽山の下にあ
り、水中に三江、四瀆の流、九溪六谷の模様ありて、之を娛ひ、云々、曝麥、沃魚の二句共に隱
士の故事を引て、以て隱棲の閑事を寫し出したるもの、常に念ふ鷓鴣鳥、身を安すること一枝
に在り、鷓鴣、ミンサツエ、莊子逍遙遊篇に曰く、鷓鴣深林に巢ふとも、一枝に過ぎず、云々、
苟も生命を亂世に全ふして、道心を養はんと欲せば、太鵬圖南の機心を息めて、常に鷓鴣一枝の

安を念ふべし、此詩、古賢各々清閑を愛して枯淡を樂み、道を守り徳を養ふ底の高風を述べ以て浮華の世人を警誡したるもの乎、

弟兄同五郡。父子本三州。欲驗飛鳥集。須旌白兔遊。靈瓜夢裡受。神橋座中收。鄉國何迢遞。同魚寄水流。

この詩は唯識論に説く所の人の心意の第六意識といへるもの、零落流浪することを嘆きて、人々をして三界を出離し生死を解脱するの大事を發起せしむることを述べ、弟兄五郡を同し、父子本三州、弟兄五郡を同すトハ、暗に第六意識を指す、五郡トハ、即ち眼識、耳識、鼻識、舌識、身識等なり、これに意識を加れば六識となる、我に六兄弟ありと云ふ詩と同じ、言ふ心は、五識各々一郡を領じて功勳封賞互に相同じ、獨り意識が流落するか故に、眼、耳、鼻、舌、身の五郡各々混亂し五子各々處を失ひ、父も亦隨て困苦す、父子本三州、父トハ第八阿賴耶識なり、又これを心王とも云ふ、三州トハ法身、般若、解脱の三徳を具有する底の常住寂光の本質にして、法王天然の貴胤なり、圓らざりき、今は浪落して他家の傭奴となり、客作の賤人となりて、進むに常住寂滅の快樂なく、退くに三界生死の恐怖あり、このゆえに長生久視の仙術を學で、生、老、病、死の苦を免れんと欲す、「飛鳥の集ることを驗せん」と欲し、須らく白兔の遊を旌すべし、「飛鳥トハ後漢の王喬、河東の人、葉縣の令となる、喬、神術あり、月の朔望毎に、常にみづから臺に

詣して朝す、顯宗皇帝との來ることしばしばにして車騎を見ざることを怪みて、ひそかに太中に命じて之を伺ひ望ましむ、太中白すその至るに臨みて輒はち雙鳥の南より飛び來るありと、於て鳥の至るをうかがひ羅をあげて張るたゞ一雙の鳥を得たり、のち大より玉棺を堂前に下す、喬いはく、天帝獨り我を召すやと云て、乃ち沐浴服飾して其中に寝ぬ、蓋すなはち立どころに復ふ、城東に葬る、百姓これが爲めに廟を立て、葉君の祠と號す云々、白兔トハ抱朴子に曰く、白兔公は彭祖仙人の弟子なり、或は云ふ赤松子の師なりと、つねに白兔にのりて、人間に往來す云々、「靈瓜夢裡に受け、神橋座中に收む、靈瓜トハ韻府群玉にいはく、東方朔曾て朱陵山の靈瓜を武帝に獻す、帝之を嘗めて美となす云々、神橋トハ幽冥録にいはく、巴園の人、兩の大橋を收む、その大さ二斗の蓋のごとし、之れを割れば中に二人の叟ありて相對す、身の長尺餘にして象戲す、一叟のいはく、橋中の樂み商山に滅せず但だ根を深し蒂を固ふすることを得ざるを恨むのみと云々、「郷國何ぞ迢遞たる、魚の水流に寄るに同じ、前さにとく眼、耳、鼻、舌、身の五子各々處を失ひ、他郷に流落し、心王の父も亦隨て困苦し、仙術を學で老死を免れんと欲し、飛鳥にのり、或は白兔の遊をなし、或は靈瓜をなめ、或は橋中の仙人の樂みも、畢竟丹藥功を成す底のしづらくの功果にして、たどひ百千の歲月を経るも、閃電の拂ふが如く、石火の照すに似て、終には遷流に歸し去らん、悲ひかな、不變常住の郷國、不生本有の家山には、迢々遞々、はるかに、へ

だたりて、三界を出離し、生死を解脱するの大志なきを、譬へば小魚の履の齒痕の涼水に身を寄せて、大うな原の浩渺たるを知らざるが如く、誠に危きことなるかな、然らば諸人、仙神の術を求めんよりは、果満圓成の佛道を求むるの確實なるにしかざるべしと勸誡したるもの、詩は十一尤の韻を用ゆ、

一爲書劍客。二遇聖明君。東守文不賞。西征武不動。學文兼學武。學武兼學文。今日既老矣。餘生不足云。

「一たび書劍の客となりて、二たび聖明の君に遇ふ、書劍の客とは、史記の項羽本紀にいはいはく、項籍少なる時、書を學んで成らず、去て劍を學ぶ、又成らず項梁これを怒る、籍はいはく、書は姓名を記するに足るのみ、劍は一人の敵、學ぶに足らず、萬人の敵を學びんと云て乃ち兵法を學ぶ云々、東守して文賞せられず、西征して武勳あらず、」文を學び兼ねて武を學び、武を學び兼ねて文を學ぶ、「今日既に老ひぬ矣、餘生云ふに足らず、」二の字、一の字に照應し、文武の字、書劍の字に照應す、文を學び武を學び、武を學び文を學ぶ、反覆重句、吟じ來り吟じ去ればおのづから妙味を覺ふ、東守、西征とは、本傳にいはいはく尹翁歸、河東の守田延年、縣を行ぐる、平陽に至り故吏を召す、文ある者をして東せしめ、武あるものをして西せしむ、數十人を閱て次に尹翁歸に到る、獨り伏して肯へて起す、對へていはいはく、翁歸は文武兼ね備はる、たゞ施設する所のみならん

や云々、二遇聖明君、今日既老矣、書言故事考類にいはいはく、顏驥、漢の文帝の時、郎となる、武帝の輩、郎署に過るに至る。驥が龐眉駁髮なるを見て、上問ていはいはく、叟何の時か郎となるや、何ぞそれ老たるやと、答ていはいはく、臣文帝の時郎となる、文帝文を好みたまひ而して臣武を好む、景帝美を好みたまひ而して臣貌容貌醜し、今陛下少年を好みたまひ而して臣已に老ひたり、こゝをもちて三世遇はず、上飯を擲て會稽の都尉となす云々、上來二三の故事に由て此の詩略ば解すべし、主意とする所は、浮世の榮華の求めがたくて、たゞひ幸に求めうるとも亦暫時の邯鄲の塵生が夢境にして畢竟三界輪回の原因となるものと云ふことを賦して却て三界の生死輪回を蟬脱して、不生不滅、不垢不淨、不増不減の妙境に遊ばんことを勸告したるものや知るべし、韻字は十二分を踏む、

莊子説送終。天地爲棺槨。凡歸此有時。唯須一番箔。死將餒青蠅。弔不勞。白鶴。餓著首陽山。生廉死亦樂。

この詩は十一葉の韻を用ひ、寒山子が、世間の人多く葬儀の煩はしく華麗に執り行ふことを見て、卒然にこの詩を賦したるもの乎、いかに葬儀を華麗にしたればとて、畢竟佛道に證入するの資料とはならずと警策するものなり、かく云はゞ當世の或る社會の者は定めて怒るならん、怒るものは無髮の俗人、寒山子は有髮の高僧、莊子送終を説て、天地を棺槨と爲す、莊子まさに死なん

十八
 とす、弟子厚くこれを葬らんと欲す、莊子のいはく、吾天地を以て棺槨となし、日月を以て連壁となし、星辰を珠璣となし、萬物を齋贈となす、吾が葬具豈備はらざらんや、何を以てか是れに加へんと、弟子いはく、吾等烏鳶の夫子を食はんことを恐る、莊子がいはく、上に在ては烏鳶の爲めに食れん、下に在ては螻蟻の爲めに食れん、彼を奪て此に與ふ、何ぞ其れ偏頗なるや云々と莊子列禦冠に見へたり、棺槨、禮記の注に、身に附くるを棺と云ひ、棺に附くるを槨と云ふ、底あるを棺と云ひ、底なきを槨と云ふ、莊子は楚國の人なり虚無説を唱へて、孔子の學説を駁撃したり、今寒山子は天地と根を同じ、萬物と一體の境界なれば、生きては天地を以て屋宅となし、死ぬるときは天地を以て棺槨となす、「凡そ此に歸せんこと時有り、唯だ一番の筈を須よ、」凡そ世間何人に拘らず、死に歸することは免れざることにて、おそいか、はやいか臨終と云ふものに遇はねばならぬ、これを厭ふて三千大千世界を馳せ廻はりて、のがれ匿くれんとするも到底免るべきや、もしも此の時に捕へられ、據なく幽界に移住するには、あまり散財して生花造花、華麗なる棺槨を作りて、他人に見せびらかすには及ばぬ、たゞ一番(一枚の義)の筈(簾なり和名スダレ)を須(用の義)めて屍骸を捲げば可なり、「死してまことに青蠅を食はんとす、用白鶴を勞せず、青蠅、吳の虞翻、南方に放棄せらる、自から恨む疏節骨體媚ひず、上を犯して罪を獲たり、當に長く海隅に没すべし、生きて與に語る可き無し、死して青蠅を以て用客となす、天下をして一人の己を

知るものなからしめて以て恨みざるに足れりと活法に見えたり、白鶴。晋の陶侃、江夏の太守と爲る、母の喪の爲めに職を去る、二客ありて來り吊ふ、既に去て雙鶴と化して天に冲る云々と活法に見ゆ、それ人死すれば四肢五體悉く腐壞し、地、水、火、風、各々分離して元に歸し去らば、その時そこ權兵衛も太郎兵衛も無し飽くまで青蠅の腹を肥すが好し、敢て白鶴の弔哭を煩はすには及ばし寒山子は眞理を裸體にして天下の人の大觀に供す、故に詩も亦洒然として眞卒、飄然として神逸、中に青蠅白鶴を履て、文采風致を飾る、是れまた一場の愛嬌、「餓へて首陽の山に著ば、生きては塵に死も亦樂まん、」生廉。孟子萬章の篇に、伯夷が風をさくものは、頑夫も廉云々、廉とは食らざるの義、首陽の山。史記に孤竹君の二子伯夷叔齊、周の武王が殷の紂王を伐つを諫めて殷已に亡ぶ、二人これを耻ぢ、周の粟を食はずとて、首陽山に餓死す、孔子これを稱して曰く、伯夷叔齊は聖の清なるものと、今寒山子も不義の財を取らず、不義の粟を食はずして若しも餓へたるときはこれを眞の廉潔の大丈夫、よしや死すとも誠に心が清浄にして快樂なることよ、生きては清白の宅に住し、死しては極樂の國に遊ばん、首陽の字は、潔白廉耻の胸襟を換言したり、畢竟人々自家本有家山の潔白なることは、富士山頭の雪と千秋光を争はん、

人問寒山道寒山路不通夏天水未釋日出霧朦朧似我何由屈與君
 心不同君心若似我還得到其中

主意とする所は、寒山高勝にして諸人の入得なきことを嘆ずるなり、韻字は一東を用ゆ、すべて世人の有様は、喜ぶものあれば「又悲むものもあり、樂むものあれば、又憂ふものもあり、腹を立てるものあれば、また一方には臍を抱へて笑ふものもある、蒸氣船を造て五大洲に横行し巨利を攫まんとするものあれば、又一方には電信機を發明して居ながら世界の出來事を聞かんとするものあり彼の國が甲鐵艦を造れば、又此の國は水雷艇を造て之を顛覆せんと計り、道徳を修むるものある乎とすれば、權利義務を唱ふるものあり、文學を講ずるものあれば、法律を究むるものあり、義太夫を語るものあれば、演劇を行ふものあり、ヘラ／＼を踊るものあれば、オツベケペーを歌ふものあり、あちらを立ては、こちらが立たない、あなたが好きでも、私がいやだと、種々さまざま、千變萬化の世の中、寒山子細に見來れば、みな是れ聲色を迷逐し、好醜を取捨し、自他を憎愛する底の妄心ならざるはなし、これを名けて衆生生滅の心と云ふ、天下誰人能く寒山の心を知らん、薦着ても、やつれ顔なき水仙花、寒山は溪流に飲み、寒岩に栖み、破衣浪落、蓬頭垢面、枯槁憔悴するも、一片靈心の高明なること秋月の如く、其の清潔なること碧潭の如く、其の物に感ずるや清風の如く、其の不動なるや巨岳の如し、これを名けて寒山と云ふ、「人寒山の道を問ふ、寒山路通せず、夫れ聲色を迷逐し、好醜を取捨し、自他を愛憎する妄心の人々、若しや來て寒山へ登る道すがらは何方なりやと問はるゝも、寒山の道は仲々險峻で通られぬ、寒山は

素より聲色に迷逐せず、好醜を取捨せず、自他を憎愛せず、平等にして私なく、萬里一條鐵なれど。惜ひ哉問ひ來る人々の心が、四の五のと馳せ廻るゆえ、寒山の許す許さぬは扱て置き其の人自身が登り難かるべし、そは何故ぞ、寒山の孤峰頂上には、「夏天に氷未だ釋けず、日出て霧朦朧」、炎帝威を逞ふし、金鐵も鎔解する六月の頃さへ、未だ三冬の氷雪そのまゝにて釋け消えず、太陽已に出しかど霧たちふさがりて、晝もなほ朦朧(ウスグラシ)暗澹たり是れ何の風光ぞ、佛界か魔界か、地獄餓鬼畜生修羅人間天上聲聞緣覺か、否々、これぞ陰陽不到一片穩密の心界これを名けて妙峰孤頂となし、常寂光土となす、又之を名けて寒山と云ふ、上下四維全く鐵塵を絶す、この頂上は、入得する底の賢聖なく出頭する底の佛祖なし、この故に寒山自から云ふ寒山路通せずと、左りながら、我心の一點靈犀を悟り知るならば、七通八達、何の處か寒山ならざらん、千仞萬丈、險崖峻壁も、蹈み得て平坦々地ならん、「我に似るは何に由て屈らん、君と心同じからず」、(我は寒山自稱の辭)寒山に似るのみならず、寒山の心と同一不二の境界に到らんは、何の邊よりかせん、悲ひかな、君の心は我的心と薄紙ばかり取捨憎愛の妄心と、心佛衆生平等不二の真心との差あるが故に、雲泥霄壤の隔をなす、「君が心若し我に似ば、還てその中に到ることを得ん」、君トハ(諸人を指す辭)諸人たとひ寒山が形狀を學びて、溪に飲み岩に栖み、破衣浪落し、蓬頭垢面、憔悴枯槁となり來るもいかで此の中に到るを許さんや、君もし輪廻の心生滅門を推倒し、不壞の心眞

如門に悟入し來らば、すなはち君に寒山の青苔を踏むことを許し、寒山の白月自然に君が袖にや
せらむ

天生百尺樹、剪作長條木、可惜棟梁才、拋之在幽谷、年多心尙勁、日久
皮漸禿、識者取將來、猶堪挂馬屋。

天百尺の樹を生ず、剪りて長條の木と作す、此の詩の主意は、賢人野に在るの嘆を賦するに似て、
底意は、聲聞緣覺の二乘偏真空裏に枯槁せる輩を呵責したるものなり、天百尺の樹を生ずトハ、
人々具足、個々圓成の佛心、若し人能く之を辨得し去りて衆生無邊誓願度、煩惱無盡誓願斷、法
門無量誓願學、佛道無上誓願成と云ふ四弘の願行に依りて、聖體を長養せば、七覺、八正、四無
畏、無盡の法門、體中に圓備せること、譬へば長樹の華果枝條盡く貝有するが如し、しかれども、
釋迦牟尼世尊、しばらく中根下根の衆生を攝取教化せんか爲めに、四諦即ち(苦、集、滅、道、)
及び十二因緣即ち(無明、行、識、名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、老、死)の法門を演説
したまふ、之を二漸教法と云ふ、こゝに於て、我空偏眞の理を覺り、有餘涅槃の小果を證得して
菩薩の威儀を學ばんことを欲せず、圓滿なる佛土を淨むるに心無し、是れ即ち剪りて長條の木と
作すものなり、「惜む可し棟梁の材、之れを抛ちて幽谷に在くこと」と、これをもて、彼の神仙、
婆羅門、外道、凡夫等の道とする所に比するときは、甚だ好箇の長條(條は枝なり)良木に似たり

といへども、これをもて菩薩の自覺覺他、覺行圓滿の願行に比するときは、木蔭深き幽谷中
一片枯槁する底の朽木なり、是の故に惜むべきの嘆あり、世尊もどより十界の階級を説きたまふ、
十界トハ、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛、等を云ふ、地獄、餓
鬼、畜生、修羅、人間、天上、之れを六凡と云ひ、聲聞、緣覺、菩薩、佛、之を四聖と云ふ、聲
聞緣覺は前に説く如く二漸教法なるが故に菩薩、佛、の如く自覺りて他を覺らしめ、覺と行と圓
滿なること能はず、故に眞實の佛道を修行する者の最も卑視する所なり、「年多くして心尙は勁
し、日久ふして皮漸く禿す、」聲聞緣覺の道を修行する者は已に三生六十劫の難艱辛苦を経て退
困の念を生せず、信心堅牢なること、譬へば老樹の多く歳月を歴て、中心猶ほ堅實なるが如く、日
久ふして皮漸く禿すトハ、聲聞緣覺の道を行ずる者曰、久く世事を退休して、煩惱を拂拭するが
故に、見、思、惑等の煩惱滲漏を空すること宛も朽樹の皮膚脱落し盡きて唯だ眞實のみ存するが
如し、他日たとひ人天彼を推殺して、彼をして佛に代りて教化を宣揚せしむるも、彼れ汲々とし
て閑淡を守り、心猿意馬を制伏する底の窮子の主長と爲り得んのみ、故に古聖は、外道の見を立
るども二乘聲聞の道に人ること莫れとまで擯斥せられたり、その故は、外道の見を立つる者は、
翻ることあるも、一旦二乘聲聞に入るものは、信心堅牢にして翻ること難し、是の故に道ふ、諱
る者取り將ち來りて、猶ほ馬屋を挂ふるに堪へたり、「閑淡を守り、心猿意馬を制伏するに汲々

として、他の衆生濟渡に念なき者ゆへ、佛とか菩薩とも云ふべき有識者は之を取り將ち來りて馬を容れる屋を柱へ維持する位の主長として待遇せば可なり、萬徳圓滿の主人公と仰ぐに足らずと呵責したるものなり、詩韻は一屋を用ゆ、長條の木トハ、尙書の禹貢に、厥の木惟れ條とあり、易の説封にいはいく、坎を水となす、その木に於けるや、堅ふして心多しと爲す云々、

驅馬度荒城。荒城動客情。高低舊雉堞。大小古墳塋。自振孤蓬影。長凝拱木聲。所嗟皆俗骨。仙史更無名。

韻字は八庚を用ゆ、此詩は荒城の敗落、墳墓の傾頽を賦して、人をして道念を憤起せしむるなり、「馬を驅せて荒城を渡る。荒城客情を動かす、試に鞍馬に跨りて荒廢せる城址を觀交はるに昔日英雄か雄圖の跡は絶えはて、落日寒鴉松林に歸るを見るのみ、白馬金鞍の影は消えうせて、たい荒草の茫々たるを見るのみ、此の慘狀を視ては千里天外の遊子、何を羈旅の感情を動かさやらんや、高低舊雉堞、大小古墳塋、雉堞とは、左傳隱公元年に、都城百雉に過ぎたるは國の害なりと、注に、方丈を堵と云ひ、三堵を雉と云ふ。一雉の堵長さ三丈、高さ一丈、又字彙に、雉堞は城上の女垣なり、白を以て之を聖る、故に又粉堞と云ふ、墳塋とは墳墓なり、塋城は葬地なり、荒城の舊き女垣が、高くなり低くなりて白聖頽敗して幾分か残りたる、大のやら小のやら彼處此處に古き墳塋のあるは定めて英雄埋骨の處なるべし、自から振ふ孤蓬の影、長に凝らす拱木の聲、

孤蓬の影とは、鮑明遠が蕪城の賦に曰く、孤蓬自から振ふ驚沙坐るに飛ふ云云、孤は(ヒトツ)蓬は(ヨモギ)拱木とは、手を合するを拱と云ふ、文選、恨の賦にいはいく、試に平原を望めば、蔓草骨に縈はり、拱木鬼を飲む、注に、合拱の木、死人の骸骨を縈繞するの義なり、孤蓬が自から風に振ひうごき、大木に風が觸れて龍吟の聲を發す、孤蓬の影、拱木の聲、荒廢せる城址の慘狀寫し得て妙なり、「嗟く所は皆俗骨、仙史更に名なきことを、史とは籍なり、事を記するものなり、今寒山荒城を觀渡せば、かく廣大なる城廓を築きたるは、畢竟何の爲めぞ、皆な是れ權謀術數、封豕長蛇の貪慾を逞ふしたる跡方にして、腥き俗骨を埋めたるもの、我が如き生死と聖凡とを出離したる者の仙史には、更に芳き姓名の記録すべき無きこと衰れなれ、

鸚鵡宅西國。虞羅捕得歸美人。朝夕弄出入在庭幃。賜以金籠貯扇。扇羽衣不如鴻與鶴。颺颺入雲飛。

詩には、比、賦、興、風、雅、頌の六體あり、この詩は即ち比の體なり、主意とする所は、譬へは世の榮華に纏縛せられ、爵祿に關鎖せらるゝ人を見るに、恰も鸚鵡の黄金造りの籠の中に畜はれてをるが如し、外形は福貴に似たりといへども、中心常に憂惱す、世を過れて道を楽しむ者の如きは、飛鳥の山林に在るに似たり、寵撫せらるゝことを欠くといへども、身心常に快樂なり、「鸚鵡西國を宅とす、虞羅捕へて歸へることを得たり、「美人朝夕に弄す、出入庭幃に在り、鸚鵡とは、

禮記に、鸚鵡能く言ふとも飛鳥を離れず云云、背は金色に似たり、腹は馬腦石の如し、山海經に曰く、黃山に鳥あり、その狀ち鸚鵡の如し、青羽赤喙、人舌能く言ふ、鸚鵡と名づく、又文選の賦の類に鸚鵡の賦あり見るべし、虞羅とは、虞人の網羅なり、孟子に、虞人を招くに旌を以てす、造らず云云、虞人は山澤を司り、禽獸を捕ふる者、周禮に、虞人獸を數ふ云云、鸚鵡と云へる鳥は西國即ち天竺の方に宅(家なり)とし生育するものなるか虞人か捕へ歸り來りし王に獻す、王宮の嬋娟窈窕たる美人か朝夕に之を翫弄して、庭(ニハ)幃(トバリ)庭さきに出たり、幃の中に入り、賜ふには金籠を以て貯へ、扇哉しては羽衣を損す、鴻と鶴と鴈として雲に入り飛ばんには如かず、之れに賜ふに黃金づくりの籠を以てして之れを貯へをき、出したり入たりして戸をどさす毎に、之れが羽翼を損害す、これは、いくら寵愛せられても、鳥に取りては迷惑にて、中心常に憂惱することを演べたるもの、鴻は(カリガチ)鶴ハ(ツル)彼の鴻や鶴は鴈(飛び揚る貌)として自由自在に雲間に翱翔して聲を張りあげて叫號する、その快樂には中々しき及ばぬぞかし、大論の三にいはいく、孔雀(鳥の名)色有り身を嚴にすと云へども、鴻雁の能く遠く飛ぶに如かず、白衣、富貴の力ありといへども、出家の功德の勝れたるに如かずと、此の詩蓋し此の語に本づく乎、詩韻は五微を用ゆ、

玉堂挂珠簾。中有嬋娟子。其貌勝神仙。容華若桃李。東家春霧合。西舍

秋風起。更過三十年。還成甘蔗滓。
 「玉堂に珠簾を挂く、中に嬋娟の子あり、其貌ち神仙に勝り、容華桃李の若し、容華トハ、文選、曹子建が詩にいはいく、南國に美人あり、容華桃李の若し云云、黃金や珠玉をもて飾り造りたてたる高堂に珠もて造りたる簾が掛けてある、之れをか、けて見れば、中に嬋娟(うるはしき)たる美女子が盛粧して坐してをる、其美女の顔貌のうるはしきこと、世にたとへん物なく、神仙にも勝りやしけん、其容華(うるはしき容貌)は、先づたとへて言へば、春風に紅唇を開く桃や李の花にやさも似らんか、東家に春霧合し、西舍に秋風起る、更に三十年を過ぎば、還て甘蔗の滓と成る、春園深き處、鴛鴦の夢暖に、霧立ちふさがりて、中に如何なる快樂を籠むらん、しかし、人間の快夢は、須臾の間のみ、何ぞ知らん戶外秋風の荒吹きて、世は凋落蕭殺の景色とならんとは、東家西舍の字、別に拘泥するに及ばず、唯だ對句法を取るのみ、夜叉も十八、晚茶も出初と云ふが、西施小町とても、美人さかりから更に三十年の月日を歴たらんには、鬢毛も薄霜を留め、額邊に波皺を生ずるに至らん、その時こそ甘蔗(砂糖の草なり、之れを壓搾して砂糖を取る)の已に壓せられて、其の滓には復た甘味なきが如く、美人盛年の色香消えうせて尋ねるに處なし、秋柳秋楊人の一顧する無し、噫、涅槃會疏第一、聖行品に云く、譬へば甘蔗の如し、既に壓せられ已りて、滓復味無し、壯年の盛色亦復是の如し、既に老壓せられて三種の味無し、三種トハ一に

は出家の味、二には讀誦の味、三には坐禪の味、此の詩は、香花の永に香からず、美人の長く美ならざることを賦して、人間に老死の變あることを示せるものなり、韻字四支を用ゆ、

城中蛾眉女。珠珮珂珊珊。鸚鵡花前弄。琵琶月下彈。長歌三月響。短舞萬人看。未必長如此。芙蓉不耐寒。

十四寒の韻を用ゆ、「城中蛾眉の女、珠珮珂珊珊たり、鸚鵡を花前に弄し、琵琶を月下に彈ず、」蛾眉トハ陸倕が曰く、蛾は黃蝶に似て而も小なり、その眉勾曲にして畫くがごとし、珂トハ石の玉に次ぐものなり、一にいはいはく、瑪瑙、潔白雪の如し、一に曰く、螺の屬にして海中に生ず云云、城市の中には蛾の如き眉を畫ける嬋娟婀娜たる美女が、腰間に珠や珂にて造りたる佩（帶飾の玉なり）が珊珊（珠玉の鳴る音）と鳴らして、春風暖かに吹き吹かせたる、うるはしき桃李の花の前にて、鸚鵡をもてあそび、又朦朧たる春月の下に、琵琶を弾して、相思可憐の音曲を弄す、「長歌三月響き、短舞萬人看る、未必しも長く此の如くならず、芙蓉寒に耐へず、三月響トハ、此れには種々の説あれども、敢て拘泥するに足らず、三日と云ふ説と、三時と云ふ説とあれど、國榮は今此の三月の説に従はん、論語の述而篇に、孔子齊にありて韶を聞く、三月肉の味を知らず、いはく圖らざりき樂をするの斯に至らんとは云云、三月の字蓋し此に本づくならん乎、人もし美人絃歌の聲を聞くときは、その音韻、心肝の間に薰染して、魂蕩し魄漾て眷戀の餘り、媚々として耳根に充つるが如し、豈に但た三月のみならんや、甚だしき者は幾年ふるも猶ほ忘ること能はず、然れども今茲に且らく三月響くと謂ふなり。短舞、短の字は長歌の長の字に對するのみ、深き意あるにあらず、寧ろ輕の字に見作して解すれば面白からん、窈窕婀娜たる二八の美人が玉喉を放ちて長歌すれば、聲啾啾として梁塵を動かして三日も絶たざるべし。綾羅錦繡の袖を翻し、翻遷婆娑として舞をなせば、あまたの人々、之れを觀て、心飛び身も消えうせぬばかり眷戀するならん、さりながら、これも未だ必しも長く此のごとくなる者ならず、彼の芙蓉と云へる花は、誠にうるはしき花なれども、どこしなへに愛せらるべきかは、秋の風一たび拂はゞ、寒に耐へずして枯摧くるならずや、是れ亦世の聲音色香の、どこしなへに愛すべからざることを演べて、底意に、溪聲廣長舌、山色清淨身の永く樂むべきことを懇に勸めたるものなり、

父母續經多。田園不羨他。婦搖機。兒弄口。颯々拍手催花舞。搢願聽鳥歌。誰當來嘆賀。樵客屢經過。

「父母續經多し、田園他を羨まず、婦は機を搢かして軋々、兒は口を弄して颯々、」續經とは經營（ナワバリ、又、ハタラク）なり、軋々トハ、車の輾る聲なり、颯々トハ、小兒の應ずる聲なり、さて我が父母が、丹精して、はたらき置かれたる故に、田畑莊園も相應に所有しをるから、他人の富有を羨むやうなことはなし、婦妻は機織して朝から晩まで、軋々と機の音がする、小兒等は遊戯

家住綠巖下。庭蕪更不_レ茂。新藤垂_レ繚繞。古石豎_レ巉巖。山果獼猴摘。池魚白鷺銜。仙書一兩卷。樹下讀_レ喃喃。

この詩、山居の幽邃なることを賦す、又是れ寒山九虎の關鎖、よく重吟すれば、深妙の意を悟らん、「家は住す綠岩の下、庭蕪れて更に茂らず、寒山の家は綠の苔むす岩の下にあるが、庭前草

して喧しく口を弄して、ワイツイと叫ぶ、この間聲色醇真にして、紫意紅情奸佞邪曲の絶えてなきなり。「手を拍ちて花舞を催し頤を措いて鳥歌を聴く、誰か當に來りて嘆賀すべき樵客、屢は經過するのみ、憂世の塵を離れたる山家には、心にも無き御へつらいを言ふに及ばず、長官の御鬚の塵を拂ふにも及ばず、桃紅李白今を春べと咲きそるいたる其の下で、手を拍ちてコレハノサと舞踏をしたり、薜蘿の纏ひたる破れ窓の下に、頤を措へて春鳥が意のまゝに啼するを聴く、この閑天地、この閑富貴、人間の三公も及ぶべきやは、唯だ寒山と心ざしを同ふする人は、この快味を知るべし、此快樂を誰が來て替嘆慶賀すべきか、我が柴の戸は名を求め利を趁ふの俗客には叩くことを許さず、唯だ無爲無我天真醇朴の樵客(ソマビト)ばかり屢(タビ)く經過(往來の義)するのみ、亦是れ一種の武陵桃源を幻出したたり、韻字は五歌を用ゆ、此詩、山家の即事を賦す寒山詩中深密の秘訣なり、學者若し熟讀して一回手を拍することを得ば、卷中多少の峻處、同時に氷融せん、

蓬々と生ひしげりて荒蕪するも更に更に取らず、造作を入れず、天然のまゝの景色、「新藤垂れて繚繞たり、古石豎ちて巉巖、山中厝日なけれど、春來れば藤の絲新たに垂れて繚繞(藤の葛の纏ふ貌)たり、古き岩石は頑平として堅(立なり)て巉巖(岩の高き貌)ち又尖銳の貌、山果獼猴摘み、池魚白鷺銜ひ、獼猴一本には青猿に作る、白鷺に對して然る乎、時に獼猴(サル)が山林の果物を摘み去り、又白鷺(シラサギ)の飛び來りて池の魚を銜み去るを見る、是れ天地自然造化の妙理、活々濼々として、眼前に顯露せるものなり、「仙書一兩卷、樹下に讀で喃喃たり、寒山獨り天竺の釋迦老仙の書一二卷、大樹の下に踞まりて讀で喃喃(讀書の聲の貌)たり、諸人宜しく高く眼を着けて觀るべし、天地萬物、悉く寒山の仙書ならざるは無し、嗚呼この仙書、能く讀み破る者、天下幾何人か有る、韻字十五咸、

四時無_レ止息。年去_レ又_レ年來。萬物有_レ代謝。九天無_レ朽摧。東明又_レ西暗。花落復_レ花開。唯有_レ黃泉客。冥々去_レ不_レ廻。
韻十灰を用ゆ、「四時止息すること無し、年去りて又年來る、萬物は代謝すること有れども、九天は朽摧する無し、「天地物言はざれども、春暖、夏熱、秋冷、冬寒の四時行れて、嘗て止息(ヤスミ)せしことなし、一年去れば又一年來り、歲月の移りかはることは逝く川の水の如く、引き駐むべきよしも無し、萬物即ち春來れば花咲き鳥歌ひ、夏至れば螢飛び蛙鳴き、草木生長して新緑

瀾らんと欲し、秋來れば木凋み葉落ち、山骨瘦容をあらはし、冬至れば白雪江山を埋没して銀世
 界を幻出す、小兒が老爺となり、新嬢が老婆となり、雀が蛤となり、山の芋が鰻となり、桑田
 變じて滄海となり、深谷も丘陵となりて、物は皆な新陳代謝せざるは無けれども、彼の蒼々たる
 九天は、萬古不變にして、嘗て朽ち摧けたること無し、九天トハ大玄經に曰く、九天、一には中
 天、二には美天、三には從天、四には更天、五には降天、六には廓天、七には威天、八には沈天、
 九には成天、東明け又西暗し、花落ちて復花開く、唯た黄泉の客のみ有りて、冥々として去りて
 廻らず、東方が白みて夜が明けたかどすれば、又西の方へ日が落ちて、世の中が暗くなる、春風
 たちて花を開かしめたかどすれば、又春雨の荒れて花を散らしむ、世の中の有様は誠に走馬燈に
 齊しく少時も止息すること無し、しかしながら、夜は明くる事あり、花は又來る春に咲くと雖も、
 唯た一旦死して黄泉(地の下)の客となりたる者ばかりは、冥々(クラシ)漠々、跡の追ふ手段もな
 し、年々歳々花相ひ似たり、歳々年々人同じからず、昨日見し人はと問へば今日は無し、明日は
 我身も人に問はれん、嗚呼人生、草露水沫、嗚呼世事、夢幻空華、然りと雖も、夢幻空華の處に
 住着すること勿れ、住着せば三十棒、茲に於て轉身の活路を解せば、煩惱即ち菩提、生死即ち涅槃、
 諸法即ち實相、娑婆即ち淨土の妙境に入ることあらん、

歲去換愁年、春來物色鮮、山花笑綠水、岩樹舞青烟、蜂蝶自云樂、禽魚

更可憐、朋遊情未已、徹曉不能眠

韻字は一先を用ゆ、歳去りて愁年を換へ、春來りて物色鮮なり、山花綠水に笑ひ、岩樹青烟に舞
 ふ、蜂蝶自から云に樂む、禽魚更に憐むべし、朋とし遊で情未だ已まず、曉に徹して眠むること
 能はず、年窮まり歳盡きて、貧乏神や借金取りが、門前に群るやうな愁るさい年を換へて、今朝
 は新らしき春を迎へ、昨夜の債鬼が禮に來て、滿面に笑ひを含みて、先づ御目出度の屠蘇の盃も
 數重なれば、四百四病の内一番つらき貧の病も苦にならず、見る物聞く物悉くあざやかなり、眼
 前の山には紅の花笑ひを含みて緑の水の流に映りて、寒岩の枯木も一陽來復して、青々たる苔む
 して、暖なる烟の中に舞ふが如く見ゆ、舞の字は笑の字に對して見るべし、蜂や蝶も香花爛漫の
 間に時を得顔に自から樂み、禽(鳥なり)や魚も春が來て山水の色めきたれば、なほさら憐むべく、
 愛すべき風情なり、此の魚や鳥、此の蝶や蜂、朋(友なり)とし遊ぶ寒山の心情は、樂みてその樂
 みの無邪氣にして飽くことなければ、朝から晩まで、晩から朝まで、樂みの已まざれば、曉に徹
 (通なり)しても無明の睡眠の成る能はずなん、これ山中の逸樂は、世榮に換ふべからざることを
 賦したるなり、萬事無心一釣竿、三公も換へず此の江山、平生識ることを恨む劉文叔、虛名を惹
 起して世間に満たしむ、この詩もつてこの詩を評するに足らん。

手筆太縱橫、身才極瓌璋、生爲有限身、死作無名鬼、自古如此、多君今

争奈何可來白雲裡教爾紫芝歌

この詩は、英雄豪傑の士といへども、終に黄泉の客と爲り、北邙の塵と爲るは、免かれ難きの嘆を演べたるものなり。韻字は五歌を用ゆ、手筆太だ縦横、身才極めて瓊瑋、生きて限り有るの身と爲り、死しては名無しの鬼と作る、古より此の如きこと多し、今君争奈何がせん、白雲の裡に來る可し、爾に紫芝の歌を教へん、紫芝の歌とは、臯甫諡が高士傳にいはいはく、秦の世、道滅び徳消えて、儒術を坑黜す、四皓こゝに於て退て歌を作りていはく、莫々高山。深谷透迤。暉々紫芝。可三以療飢。唐虞世遠。吾將何歸。駟馬高蓋。其憂甚大。富貴之畏人。存不_レ如貧賤之肆志と、乃ち共に商洛に入り、地肺山に隱る云云、四皓とは、東園公、角里先生其外二人、四人の老翁なり、皓とは(シロシ)白なり白髪を云ふ、傀瑋とは廣雅にいはいはく、琦玩なり、人才傀偉、傀は大なる貌、人才人に秀で、身体のたくましさを云ふ、扱て世の中の英傑俊才とも云はるゝ人は、手に筆を揮て流麗巧妙の文章を草することは縦に自由、横に自在なり、また身体も才能も人に秀でゝ大に勝れてゐることである、しかし、人の此の世に生るゝや、五十年の限りある命、死したる時は、北邙山上、一片の白骨、復た誰れ彼れと名の尋ねべきなし、唯だ狐狸の嘯噬するに一任するのみ、古へより皆な此の如きものなるが、今諸君は如何で御座る、葵徽二百年の霸業も今は如何で御座る、荻藤二十年の政權も今は如何で御座る、邯鄲の廬生が夢一攪すれば、駟馬高蓋も半

欲得安身處寒山可長保微風吹幽松近聽聲愈好下有斑白人喃喃
讀黃老十年歸不得忘却來時道

錢の價なし左様なほかなき夢の世を食らんよりは、早く寒山が住する青山、白雲深き處に來る可し、御前様(爾に)方に、あの商山の隱士四皓が咏じたる紫芝の歌を教へまゐらせんほどに、白雲紫芝、寒山の高調、重吟すべく、穿鑿すべからず。
欲得安身處寒山可長保微風吹幽松近聽聲愈好下有斑白人喃喃
讀黃老十年歸不得忘却來時道
韻字は十九皓の仄韻を用ゆ、喃喃とは、燕の語なり今は暫らく讀書の聲を形容す、此の詩の主意は極めて幽かつ長なり、安身の處を得ると云ひ、寒山長へに保つ可しと云ひ、草卒に吟し去るべからず、微風幽松を吹く、近く聽けば聲愈よ好し、詩意深遠幽妙なり、黃老とは道教の書にして長生久視不老不死の大道を論述したるものなり、今こゝに黃老と云ふは暫らく文字を借り用ひて、菩薩の深く不生不滅、不増不減、不空不色、不垢不淨の實相真觀に入りて長時休罷せざるの意を云ひあらはしたるもの、十年とは佛道成就の時を云ふ、佛道修行の人、最初には真諦あり、俗諦あり、空理あり、假觀あり、薰鍊日久しき時はすなはち真俗不二、假空一如、途中と家舍と兩つながら忘却す、是れすなはち絶対的中道一實相にして佛道の真面目なり、この時始めて彼の來時の真諦と俗諦と、空理と假觀との差別物を忘却し了りたるの十年で御座る、安身の處を得んと欲せば、寒山長く保つ可し、微風幽松を吹く、近く聽けば聲愈よ好し、下に斑白の人有り、喃喃と

して。黄老と讀ひ、十年歸ること得ざれば、來時の道を忘却す。サテ諸君よ、不生不滅、不空不色、不垢不淨、不増不減なる眞如實相の安心立命の本来郷を得んと思召さば、諸縁を放捨し萬事を休息して、憂き世の紅塵、飛で到らざる寒山、これを永久御保持なされ、寒山は悪ひ事を申さぬぞよ、寒山の有様を申さうならば微風幽松を吹く、だうで御座るナ、ドンナ氣持が致すかな、實に云ふに云へない妙音が微かに聞へるで御坐ろう、これを近く耳をそばだて、聴くと、いよゝますゝよろしい、實に不生不滅不空不色不垢不淨不増不減の妙聲が聴へます、オヤゝゝゝ其の下の方に斑白(胡麻塩髪頭)の老人が坐して、喃々ゴジャゝと黄老とか云ふ面白さうな書物を讀で居らるゝ、サテ其の黄老で御座るゾ、その黄老の妙味が諸君に知らせたいのじや、修行者たる諸君が、十年の日月をいとせられず、精進勇猛に、一生懸命に、餘念無く、わき目もふらず、黄老の堂奥に深入して、十年歸り得ずば、ソレ御覽ヨ、來た時の路傍に、イヤ眞諦で御座るの、イヤ俗諦で御座るの、イヤ空理で御座るの、イヤ假觀で御座るのと云ふやうなゴタゝゝ物をサツバリと忘却して、眞俗不二、假空一如、途中と家舎と雨つながら忘却したる(絶對的)中道一實相の妙寶座にドツカリと坐り込で、安住不動、如須彌山、八風吹けども動せず天邊の月。

俊傑馬上郎。揮鞭指柳楊。謂言無死日。終不作梯航。四運花自好。一朝成萎黃。醍醐與石蜜。至死不能嘗。

主意とする處は、無頼の少年を呵責して學道の心を發せしむるなり、俊傑トハ才徳の衆人に秀逸せるものを云ふ、四運トハ運氣論にいはいく、春木の運を初運と爲し、夏火の運を二運と爲し、土用の運を三運と爲し、秋金の運を四運と爲す云々、萎黃トハ(シホレ、キバム)涅槃經十一にいはいく、猶は秋月有る所の蓮花みな衆人の爲めに愛見せらるゝが如し、其萎黃するに及では人に惡賤せらる、盛年の壯色も亦復かくの如し云々、醍醐、石蜜共に是れ妙藥の名、涅槃經八にいはいく、無碍智甘露とは、謂はゆる大乘典、かくの如きの大乗典亦雜毒藥と名づく、酥酪醍醐等および諸の石蜜の如し、服して消するときは藥と爲り、消せざれば毒と爲る、方等も亦是の如し、智者は甘露と爲り、愚にして佛性を知らずして服する者は毒と爲る云々、柳楊トハ街賣の妖色に比へて云ふ、梯航と作らずトハ梯は(ハシゴ)航は(フナワタリ)生死の海中に沈没して、出世の船筏を求めざるを云ふ、俊傑なり馬上の郎、鞭を揮て楊柳を指す、謂ふ言れ(吾なり)死する日無しと、終に梯航を作らず、四運花自から好きも、一朝萎黃と成らん、醍醐と石蜜と、死に至るまで嘗むる能はず、韻字は七陽を用ゆ、サテ寒山が首を回らしてフトあたりを眺むれば、俊傑なる(郎)美少年が華鮮なる錦衣を着て、白馬金鞍に跨り、珊瑚の鞭を打ち揮り、章臺の楊柳を指して、その身は未だ如露亦如電の幻生なることを悟らずして、謂ふ言れ(吾なり)死する日無しと、ア、憐れなるかや此の郎、いつ迄も街賣の妖色に惑溺し、生死の海中に沈没して、出世成佛の彼の岸に渡る

べき航船、成果生天の楷梯を作りたまはざるか、四運とは四季と見てもよろしい、春は花、夏は橘、秋は菊、冬は水仙梅の花、四季折り／＼の花は咲き匂ひて、おのづから見目好きも、實に山風を嵐と云ものが吹けば花は散り、鶴のわたせる橋に置く霜の白き時節には、美麗なり、婀娜なりと愛見られたる蓮の花も萎れ黄めば、人に悪み賤めらるゝが如く、少年の壯色も亦復かくのこどきぞかし、こゝに氣が付かずして、前境の色香を追逐する人等は、無碍智甘露とも云ふべき、大乘典の醍醐石蜜の妙薬は、いつがいつまで死するに至るまでも嘗めて見て、頓悟妙樂の境界に入ることは、むづかしかるべし、

有一餐霞子其居諱俗遊論時實蕭爽在夏亦如秋幽澗常瀝瀝高松風颯々其中半日坐忘却百年愁

この詩の主意は、寒山子が山居の有様を述べられたるものなり、韻字は十一尤を用ゆ、餐霞トハ顔延年が嵇中散を詠する時に、中散不偶世。本自餐霞人と、註に、霞を餐するトハ仙を謂ふなり、論時トハ時は時運なり、滕王閣の序に、時運等しからず、命途違ふこと多し云云、瀝々とは流水の鳴る貌、颯々トハ風の吹く聲なり、蕭爽とはモノサビシク、サハヤカなる貌、一の餐霞の子有り、其の居俗の遊びを諱む、時を論ずれば實に蕭爽たり、夏に在りても亦秋の如し、幽澗常に瀝々たり、高松風颯々たり、其の半日坐、百年の愁ひを忘却す、扱てこゝに一人の雲や

霞を餐(クラウ)食して生命をつないでをるものがある、これは仙人で御座る、その平生居住まゐりてをる處へは、世上の名利を追逐する俗客の來遊を諱み(キラウ)で御坐る、その時候を論述して見れば實に蕭條凄爽、夏の日も涼しくて秋天の如くである、幽澗かすかにして奥深き谷川には、常に號々と碧水の流る聲がする、見わぐれば、千年の綠色かえぬ丈高き松には、風が颯々と響てをるかく世俗を脱却したる山中に、寒山子わつか半日ばかり禪坐してをれば、イヤハヤ眼、耳、鼻、舌、身、意の六識は湛々然として波立たず、人世百年の愁苦を忘却(ワスル)したことで御坐る、サテ世上の利名に狂奔する人等は、未だこの妙味は御存じあるまい、今こゝにねんごろに長生久視の術を物語りした事で御坐るが、諸君も敢て寒山の生計を、まねるには及ばねど、寒山の廉潔なる精神は、今の世の人々も學得せらるゝは必要ならぬ。

妾在邯鄲住歌聲亦抑揚賴我安居處此曲舊來長既醉莫言歸留連日未央兒家寢宿處綉被滿銀床

「妾は邯鄲に在て住す、歌聲亦抑揚す、賴に我が安居の處、この曲舊來長し、既に醉て言に歸ること莫し、留連日未だ央ばならず、兒家寢宿の處、綉被銀床に滿つ、邯鄲、文選舞鶴の賦に、邯鄲善く歌曲を爲す云々、妾とは寒山子自稱の辭なり、已に妾と稱す、故に邯鄲、歌聲、此の曲等の縁語を引く、既に醉ふと云ふ、故に留連の縁語を引く、安居の處、寢宿の處、銀床等みな照應

あり、七陽の韻を歩ひ、この詩の主意は、もつばら接引の懷を演ぶ、邯鄲は今こゝに自家本有の家郷を指す、歌聲また抑揚、唯一乗の圓音、上下の根機に應じて唱へ出す、その巧妙なること、歌聲の意に隨て抑揚するが如し。この曲舊來長しトハ、過去威音王よりこのかた、番々御出世あらせられる如來さまがたには、その說法全く別調なきなり、既に醉て言に歸ること莫しトハ、一切衆生、財、色、食、名、睡の五濁の惡酒に沈酔して、諸佛諸祖がたが、百計千謀、誘引し給ふども、出離の意なく、火宅の内に在りて、留著して、長夜の苦患を以て、猶は半日の看を爲す、四火の來るを知らず、寢宿の處トハ、菩提の堂奥、本具の家舎、百味具足、羅綺千重なり。銀床トハ、白一色、露地の白牛車なり。サテ妾ハ(寒山子)邯鄲といへる繁華なる處に住みて、御客の根機すなはち御望みに任せて、聲色を揚げたり抑げたりして調子を取てをりまするが、頼(サイハイ)に我が安居せる處、自家本面目、自家本具の佛性の演説は、ひかしから長いことよ、三世の諸佛、歴代の祖師たち、幾かはりか、かはりて御出世なされても、やはり自家本具の歌ならざるはなし。しかるに、一切の衆生は、財、色、食、名、睡、等の五慾の(五濁)毒酒に醉沈して、自家本郷に立ち歸ること莫く、諸佛諸祖たちが、百計千謀、誘導し給ふども少しも、出離解脱の意立なし。三界の火宅に住著し、無明長夜の苦患もなんのその、なは半日ばかりの看をなして、四火の來るを知らざるなり。留連、その火宅に居つゞけして、己に返ることを忘れたり。兒家、みなさんの寢

どまりをなされる本家郷の處は元來立派なものダ、綉(ニシキ)被錦繡の蒲團が、白一色の銀をもて作りたる床の上に敷きつめて有るぞよ、これぞ唯一乘法、無二亦無三の第一乘底の大白牛車なり、天下の俊傑、乗らんと要せば速かに乘れ、敢て逡巡するものは三十棒。
 快榜三翼舟、善乘千里馬、莫能造我家、謂言最幽野、巖岫深嶂裏、雲雷竟日下、自非孔丘公、無能相救者。

この詩の主意は、賢人野に在るの嘆を述べ、言ふこゝろは、我は先進にして幽野の人なり、身を終れども顧み問ふもの無し、只だ孔子のみ一人、我は先進の野人に従はんと云ひき、故に我が知己は孔夫子ばかりで有らう、韻字は二十二禡の仄韻を用ゆ。三翼、文選に、三翼を浮べて中沚に戯ひる云々、注に三翼は船なり、沚は池なり、越絶書、伍子書が内經に、大翼一艘、廣さ一丈五尺三寸、長さ十丈、中翼廣さ一丈三尺、長さ五丈六尺、小翼廣さ一丈二尺、長さ五丈、孔丘公史記の世家にいはいく、孔氏名は丘、字は仲尼云云。論語の先進に、子のいはく、先進の禮樂に於けるは野人なり、後進の禮樂に於けるは君子なり、如し之れを用ゐば則ち吾は先進に従はんと。程子のいはく、先進の禮樂に於ける、文質共に宜きを得たり、今は反りて之を質朴と謂ふて以て野人と爲す、後進の禮樂に於けるは、文その質に過ぎたり、今反てこれを彬々と謂て以て君子となす。サテ快かに三翼の舟を榜りて、善く一日に千里も走せる駿馬に打ち乗り、誰か能く我が茅屋に造り

おとづるものが有らうや、謂ふてみるに言(我)れはいと幽野、朴訥にして、かざり無き田舎ものなりと。巖(イハヤ)岫(クキ)深き嶂(ヤマ)の裡、雲雷竟日して下る、嗚呼さびしいことじや、嗚呼物すといことじや、かのことき深山幽谷に逸居してゐる有徳の君子は、質直朴訥、おへつらひも無ければ、かざりも無し、權謀術數、附耳蹈足、時勢を攀摩して、功名を獲取せんとするが如き野心無き故に、天下三鼎の策を問はんとて、大耳將軍の草廬に三顧するなし。我は先進の質朴なる野人の禮樂に従はんと申されたる孔子先生の様な人でなければ、到底この深山幽谷の君子を世上に紹介して呉れるものは有るまいよ。しかし、相救ふものなきも亦好し、草野の君子、幽谷の蘭蕙、韻致高風、おのづから香し。

智者君抛我。愚者我抛君。非愚亦非智。從此斷相聞。入夜歌明月。侵晨舞白雲。焉能拱口手。端坐鬢紛々。

韻字は十二分の韻を用ゆ、この詩、寒山が法成就に到て快樂の境界を賦す。いはゆる智者の君は我を抛つトハ、言ふ心は真空寂滅の空理に在る人は、有爲差別の假諦を恐れ、有爲差別の假諦に在る人は、真空寂滅の空諦を捨つ、智は假諦を指し、愚は空諦を指す、寒山今既に眞俗不二、空假同時、中道純圓の聖諦を得て、その快樂言ふ可からず、豈にそれ我空偏眞の假城を證して痴坐して鬢毛紛々たる底の漢と同日に語る可けんや。若し眞正に寒山の深意を知らんと要せば、大寶

積經の文應に再三熟讀すべし。寶積經にいはく、佛のたまはく、文殊師利、憍ぢ不思議三昧に入るや、文殊言さく、不なり。世尊我れ即ち不思議更に心相の思議するもの有るを見ず、云何ぞ而るを不思議三昧に入ると言はん、我れ初め心を起して此の定に入らんと欲せき、而して今思惟するに實に心相の三昧に入るなし、譬へば人の射を學ぶが如し、久しく習ふときは則ち巧みなり、後ち無心なりといへども、久しく習ふが故に、箭發すれば皆な中る、我も亦此の如し、初め心を起して、不思議三昧を學で、心を一縁に繋ぎ、久習して成熟するが若き、更に無心なりと雖も恒に定と俱なりと(以上經之文也)今詩中に謂はゆる智者の君とは、分別知見の思議を指すなり、愚者の我とは、根本大智不思議を指すなり、思議は不思議を捨て、思議し、不思議は思議を捨て、不思議なり、故に言ふ互に相ひ抛つと、覺えず一朝思議にあらす、不思議にあらざる底の本面目に契當すれば、歡喜して足らず、曉を侵して歌ひ夜に入て舞はん。さて分別智見の智者も、寂滅空諦の愚者も、共に抛下し見れば、愚の空諦も無ければ、智の假諦も無し、空にも着せず、假にも着せず、これより空諦假諦の聲は斷絶して聞くこと無し、その時こそ愉快々々大愉快、大法成就の眞俗不二、空假同時、中道純圓の道場に坐して、夜は皎潔たる明月の下に無生の歌曲をうたひ、晨には無心なる白雲の上に無相の歌舞を試み、歡喜踊躍盡くる時なく、焉ぞ(どう致して)能く口を拊み手を拱いて端坐たしく坐して鬢毛白く紛々(ミダレテ)愁面つくりて居られやうぞとなり。みなさん、

だうで御坐る、少しはわかりましたか、五慾の水を以て、五臟六腑に漲らせてをる人たちは、速に來りて、この仙氣ある、道骨ある、寒山が詩話を御聞きなされ、少しは變的乎な氣持ちがするかも知れん。

有鳥五色文。棲桐食竹實。徐動合禮儀。和鳴中音律。昨來何以至。爲吾暫時出。儻聞絃歌聲。作舞欣今日。

「鳥あり五色の文あり、桐に棲で竹實を食ふ、徐かに動て禮儀に合ふ、和ぎ鳴て音律に中る、昨來何を以てか至る、吾が爲めに暫らく時に出づ、儻々絃歌の聲を聞て、舞ひを作して今日を欣ぶ、韻字は四質の仄韻、この詩は、山中にて圖らずも希有の珍禽を見て、偶然として賦したるものか、この鳥は鳳凰で御坐る、その狀ち鶴の如くにして五采あり、飲食みづから歌ひ、みづから舞ふ、あらはるときは、天下安寧なり、韓詩外傳にいはいく、鳳凰、黃帝の東園に止まる、梧桐に集まり竹實を食ふ云云、扱てこゝに鳳皇といへる鳥が御坐る、青、黃、赤、白、黒、の文彩を具へて梧桐に棲で竹の實を餌食としてをります、徐(ジツカニ)に進退して自から禮儀作法にかなつてをります、和(ヤワラギ)ぎ鳴きてその聲自から六律六呂の音樂に中たることである、なんと珍らしい鳥で御坐るな。昨日以來、何とてこゝに來りしか、定めし乃公の爲めに暫時の間出たことか、まさか乃公を聖人と誤認したか、今の末世を堯天舜日と誤認したか、儻(タマ)古詩の絃唱の聲を

聞いた、サテ魯の孔夫子でも再來したか、兎に角嬉れしき事よ、歌ふたり舞ふたりして、今日の大平を欣ぶことじや。

茅棟埜人居。門前車馬疎。林幽偏聚鳥。谿闊本藏魚。山果携兒摘。阜田共婦鋤。家中何所有。唯有一床書。

この詩は、野人清閑の居處を見て、卒然として述ぶ。茅棟は白屋なり、猶ほ艸廬と云ふが如し。韻字は六魚の韻、茅(チガヤ)をもて家根を葺きたる家が一軒御坐る、これは埜人すなはち百姓の家と見える、扱て清閑純朴なる生計、門の前には貴公子の威光めかしたる墨ばかりの車馬の音も一向疎にして静かなことじや、松柏の森林いよ深くかつ幽かにして、忘機の鳥は、我物顔にこゝに聚まり來て棲でをる、扱て面白いな、谿(タニ)川の流れ、闊(ヒロク)かつ深くして、もどより香魚が優遊と樂みををる、扱て面白いぞ、山樹には、種々の果物が熟した、家兒を連れ立ちて摘みにゆく、これも面白い、阜(サハ)の田には、家婦と共に、たのしげに耕鋤してをる、それも面白い、その家の内には、何を所有してをるぞ、他の俗物の有りとは見えねど、たゞ一床(ユカ)に澤山な書物が有る、それは何の書物で御坐らうな、わかりませんか、考へて御覽、林幽にして偏に鳥を聚め、谿闊ふして本より魚を藏くす、面白い書物だ、これを天地自然、活潑々地の一大經卷、高く眼を着けて見よ。

登涉寒山道寒山路不窮谿長石磊磊澗闊草濛々苔滑非關雨松鳴
不假風誰能超世累共坐白雲中

四十六

文選の古詩に、青々陵上柏、磊々澗中石、韻會には磊は衆石なりとある、韻字は一東を用ゆ。この詩の主意とする所は、寒山子が山栖して、超俗脱塵、天真獨朗、洒々落々の景況を述べて、世の厭く無きを憇を逞ふするものを警醒したるなり。登涉トハ(ノボリ)、ツタル(澗トハ(タニ)、澗トハ(ヒロシ)、濼々トハ(草の多く茂れる貌)、サテ寒山の有り様は、如何なる乎と、登涉すれば、寒山の路は實に奥深くして、行ても行ても窮まり盡きせぬことよ、谿、溪川の流れば、いと長くして、小石が磊々と澤山あるぞ、又あちらの方の澗は、いと、闊ひろくして綠草は生ひ繁りてあるぞ、綠苔の滑なめらかなりてあるは、雨がしげく、降るの、降らぬのと云ふ譯にあらざ、深山幽谷の事ゆゑ、自然濕氣つよければなり。古松は時を擇ばず、號々と鳴りてをるは、風がつよく吹くの、吹かぬのと云ふ故にあらす、空に聳ゆる老松なれば、風が無くとも、自然に號々と鳴るものなり。みなさん、如何で御坐る、人間の有爲造作を假らぬ、天真自然の妙境には、誰れが能く塵世の絆累を超脱し來りて、寒山子ともろ共に、忘機無心の白雲の中に坐臥して、無生法忍の話をなすや、末法の世、悲ひ哉知音稀れなり。

六極常櫻困九維徒自論有才遺草澤無藝閉蓬門日上巖猶暗湮消

谷尚昏其中長者子箇々總無禪

「六極常に櫻り困す、九維徒に自から論す、才有りて草澤に遺らる、藝無くして蓬門を閉づ、日上りて巖猶は暗く、煙消へて谷尚は昏し、その中の長者子、箇々總に禪無し、」韻字は十二文を用ゆ。六極とは、尙書の洪範に、一には凶短折、二には疾、三には憂、四には貧、五には悪、六には弱、注には、凶とは其の死を得ざるなり、短折とは横夭なり、九維とは九疇を云ふ乎、尙書の洪範には、天乃ち禹に洪範九疇を錫ふ、一には曰く五行、二には敬で五事を用ゆ、三には農八政を用ゆ、四には協ゆるに五紀を用ゆ、五には建るに皇極を用ゆ、六には入るに三徳を用ゆ、七には明かにするに稽疑を用ゆ、八には念に庶徴を用ゆ、九には曰く嚮ふるに五福を用ゆ、感するに六極を用ゆ云云、草澤に遺てらるとは、文選の左大冲が史を詠するの詩に、何世無奇才遺之在草澤蓬門を閉づとは、高士傳に張仲蔚は博物なり、文を善くし詩賦を好くす、常に窮素に居る、所居蓬蒿門を沒す云々。長者窮子とは、法華經第三譬喻品に出づ、扱てこの詩は比の体なり、五福を受く可きの賢人、野に在て六極に困す、然れば九疇等の書經を皆な閑事なる乎の嘆を賦して、以て行人多く邪路に在りて、真正の大道に入ること能はざるに比す、謂はゆる六極とは、第六意識なり、極は不祥の極なり、九維とは行人最後の證果、第九清淨識を指すなり、言ふこゝろは、人々本有圓成の自性を具有して、十虚を舍容して狭しと爲

さす、微塵に歸収して廣しと爲さず、本來明妙、本來清淨なりと雖ども、心源を了知せざるが故に、意識態に混亂纏縛して、種々困苦懊惱す、九維徒に自から論ずとは、第八阿頼耶の暗窟を踏破すれば則ち第九清淨の眞識、たちまち煥發して大解脱の田地に到ること、諸佛ねもごろに教諭すと雖ども、人の此の眞修に越く無し、諸佛只だ自から徒に論説したまふに似たり、たとひ又聰明強記の才徳を具ふる底の人あるも、永く經論文字の草窠に陷墜して、終に草澤に吟ずる底の窮兒と爲りぬ。才無くして蓬門を閉づとは、或は又一文不知、昏愚の鈍漢は、一般の痴禪を死執して、文字は把るに足らず、話頭は看るに足らず、只だ箇の不思議、不思議の處、すなはち佛法の樞要、祖庭の玄機なりと道ふ、目を閉ぢ齒を切りて、今日も亦昏昏々地にし去り、明日も亦昏昏々地にし去りて、終に一生黑暗鬼窟の守屍と爲りぬ、まことに悲む可きなり、日上りて巖猶は暗しとは、言ふこゝろは、寒山面前に、阿字不生の惠日は霄漢に透り、黄泉に徹し、はなはだ洞然、はなはだ明白なりと雖ども、如上の輩は、見ること能はざるなり、煙消へて谷猶は昏しとは、夫れ三界夢幻の火宅は、毒火既に消へ、臭煙永く滅して、娑婆即寂光の淨土と爲ると雖ども、如上の輩の爲めには、黑暗長夜の牢獄と爲りぬ、故にいふ、その中の長者子、箇々總に禪無しと、長者子とは、富豪家の息子なり、然れども、自性本有の寶藏を放棄して、他郷に流落するが故に、箇々總に禪なし、禪とは(ハダバカマ)俗に云ふフンドシなり、男子としてフンドシも無いやうな

白雲高嵯峨、綠水蕩潭波。此處聞漁父、時々鼓棹歌。聲々不可聽。令我愁思多。誰謂雀無角、其如穿屋何。

奴なれば、いづれ意氣地の無いものに相違なし、その様な奴は、速かに活埋坑に蹴り込でしまへ、五歌の韻を用ゆ。此の詩の主意は、世の文人詩夫と稱する者は、明眸皓齒、朝歌夜絃を以し樂みど爲る所以の者に非らず、笛聲を聴て以て頰を擡め、棹歌を聞て以て涙を落すところ、多少の感情あり、多少の佳趣あり、是れ詩家の身を抛ち命を捨つるの處、謂はゆる誰れか謂ふ歌聲意無しと、何を以てか我をして愁思多からしむ、白雲高ふして嵯峨たり、綠水潭波蕩たり、この處漁父の時々棹歌を鼓するを聞くに、聲々聞く可からず、我をして愁思多からしむ、誰れか謂ふ雀に角無しと、その屋を穿つを如何し、棹歌、文選、注に棹歌に棹を發して歌ふなり、誰謂、詩經、行露の篇にいはいく、誰謂雀無角、何以穿我屋。云々、サテ白雲多きところは、必ず山の高さものなり、嵯峨とは山の高さ貌、綠水、みどりの水湛々として波を蕩たゞへ、山は嵯峨として高し、嗚呼好景色じや、此の處で、漁父の折々、棹を發して歌ふを聞くに、その聲の何となく悲愴にして聽くに堪へざるものありて、我をして(寒山子自稱)愁の思ひ多からしむ、之れに就て思ひ出さるゝ事が有る、彼の詩經にも謂ふてある如く、誰か謂ふ雀に角無しと。その屋根を穿ちて穴をあけるをいかん、雀には角が無いとは云へども、なせあの様に家根に穴をあけるぞ、棹歌の聲は深

意無しとは云へども、何となく我をして愁思多からしむ、詩人の溫柔、能く人を感化するものありと、寒山子が棹歌を聴くに就て感述べられたるなり。
杳々寒山道、落々冷澗濱、啾々常有鳥、寂々更無人、浙々風吹面、紛々雪積身、朝々不見日、歲々不知春。

杳々とは遙かなる貌、落々とは字彙に、離合也とある、啾々とは、鳥の鳴く聲なり、浙々とは風の聲なり、寂々とは、さびしき貌、紛々とは雪の亂れ飛ぶ貌、韻字は十一真なり。詩の主は、寒山子が幽栖する所の寒山の奥深くして、人烟稀少、紅塵不到、寒つきて春の來るをも知らざるが如き有様を述べて、底意は、人々屋裡の心王の居所は、實に深々微妙不可思議、不可商量なることを唱出せられたるものなり。
「杳々たり寒山の道、落々たり冷澗の濱り、啾々として常に鳥あり、寂々として更に人なし、浙々として風面を吹く、紛々として雪身に積もる、朝々日を見ず、歲々春を知らず、」さて寒山が幽栖する寒山は實に奥深く、隨て溪川の流幾筋も有りて、や、もすれば道に迷はんばかりじや、鳥啼て山更に幽なり、寒き風が頻りに我が面を吹き、冷かなる雪は次第に降り積もりて我が身を埋没せんばかりじや、いつもかやうの天氣なれば、陰雲冥濛として、太陽の光を見たることもなければ、いつがいつともわからずして、その日を送ることじや、山中曆日無し、年盡きて春を知らず、

少年何所愁、愁見鬢毛白、白更何所愁、愁見日逼迫、移向東岱居、配守北邙宅、何忍出此言、此言傷老客。

少年何所愁、愁見鬢毛白、白更何所愁、愁見日逼迫、移向東岱居、配守北邙宅、何忍出此言、此言傷老客。
主意は、佛説の謂はゆる、生、佳、異、滅、又は生、老、病、死は、人間の到底免るゝこと能はざるものなるを述べて、醉生夢死の客を警醒せられたるなり。韻字は十二陌を用ゆ。少年何の愁ふる所ぞ、鬢毛の白さを見るを愁ふ、白ふしては更に何の愁ふる所ぞ、日の逼迫するを見ることを愁ふ、移して東岱の居に向はしめ、配して北邙の宅を守らしむ、何ぞ此の言を出だすに忍びん、此の言老客を傷ましむ、東岱とは、文選の古詩に、常に愁る岱宗に遊ぶを、復た故人を見ず、注に岱宗は太山なり、人命これに屬す、白樂天が詩に、東岳前後の魂、北邙新舊の骨、北邙宅とは、訓解の註に、老經その宅兆を卜すと云云、注に塚穴を宅と云ひ、墓城を兆と云ふ、サテ鮮妍たる美少年、御前さんたちは、何が苦しくて其様に愁ふるぞ、定めて段々と年を取て、鬢の毛のあたり雪が降り、耳には蟬が鳴き、目には霞がかゝり、秋風が吹ちて葉が(齒)落ち、額には漣をたはいよはせ、腰には梓弓を張らねばならぬやうに相成るを心配なさるので有らう、もはや頭髪雪白くなりたる上は、何を御心配なさる乎、定めて御他界の日が逼迫りて來るを氣づかひなさるので有らう、そんな事ならば愁苦なさるには及ばぬぞ、なせなれば、古俳にも、盪より盪に移る五十年とある、もちつときびしく云て有るのが、ギャツと生まるゝ死出の旅、みなさんだうでげす、

我が四千有餘萬の同胞は、みな此の極に到らざる者誰か有る、御氣の毒ながら皆な然り矣、若し此の出る息が一たび入らざる曉には、少くも三日を出でずして、この屍を移して東岱の居に向はしめ、この屍を配して北邙の宅を守らしむ、その北邙の宅だの、東岱の居だのと云ふは何れの處ぞ、乃公も確とは知らぬが、白氏の詩に謂はゆる、東岳前後の魂、北邙新舊の骨、と云ふ句で見れば、どうやら墓門のやうに思はれるワイ、イヤ誰れしも、この様な縁起の悪い話はし度は無い、こんな話を致すと、老年の人等は氣持をわるくするからサ、ダガ仕方が無いや、據無き次第で御坐る、縁に隨て生れ、縁に隨て滅し、縁に隨て去り、縁に隨て來る、復た之れを奈何とし難からん、これは是れ生死去來底、那箇か是れ生死去來にあづからざる底の物有ることを知るや、證據ある者は言へ言へ、有るぞ有るぞ、聲がするから遠方では有るまい。

問道愁難遣斯言謂不眞
昨朝曾趁卻今日又纏身
月盡愁難盡年新
愁更新誰知席帽下元是昔愁人

十一眞の韻を用ゆ、聞くならく愁ひ遣り難しと、斯の言眞ならずと謂ひき、昨朝曾て趁ひ卻れば、今日又身に纏はる、月は盡くるも愁は盡さ難し、年新たなれば愁更に新なり、誰か知らん席帽の下、元是れ昔の愁人なることを、席帽の席の字、まことに蓆に改作すべし、もどこれ差人の首服なり、羊毛を以て之れを爲る、氈帽といふ。秦漢の人競て之れを服す、後ち蓆を以て骨と爲して

之れを用ゆ、之れを蓆帽と謂ふ、この詩の主意は、菩薩利佗の悲願を稱賛す、愁トハ度生の大慈悲、大悲を指すなり、今言ふ心は新發意の菩薩、初め諸佛菩薩の度生願海の深廣にして、苦趣を棄置するに忍びざるを聞いて、常に疑悔を生じき、後ち大事成辨し了るに隨て、次第に悲願厚重にして、謂はゆる衆生界未だ空しからざれば我が心終に飽かずと云ふものに似たり。ゆゑに言ふ、年新たなれば愁ひ更に新たなりと、誰れか知らん席帽の下トハ、言ふこゝろは、我が愁思の切なる、唯だ今日のみにあらず、曠劫以來、二利の願行に切なる底の愁人なり、扱て寒山が自利を後どにし、て利他を先きにし、自未得度先度他の大願行をなさる、菩薩がたの御心配の多くて遣り去り難しと云ふことを聞くに就けて謂もひました、そんな事は眞實ならずして定めて虚妄ならんと、その菩薩がたの心配の有様は如何。昨朝曾て趁ひ卻ぞくれば、今日又々身に纏ひ來て離れ難し、日月は次第に盡きて行くも、この衆生を救濟せねばならんと云ふ(愁)心配は、だうしてもかうしても盡さず消へ難し、歳々年々新陳代謝すれども、新陳代謝するに隨て此の心配も亦更に新たに出來することと、誰がこの心配を計り知る者で有らうか、我が愁思の切なるは、唯だ今日のみでは御坐らぬ、過去空劫以前よりこのかた、かの衆生を濟度し盡さずんば、我れは正覺を成せずと云はれて濟度衆生に熱心なる愁人すきはち大慈大悲の觀世音菩薩摩訶薩、六道能化の地藏尊、ヤレ有り難たや南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

兩龜乘轎車。蓋出路頭戲。一蠶從傍來。苦死欲求寄。不載爽人情。始載被沈累。彈指不可論。行恩卻遭刺。

「兩龜轎車に乗て、慕に路頭に出て戯る、一蠶傍より來り、苦死して寄せんことを求めんと欲す、載せざれば人情に爽ふ、始めて載せて沈累せらる、彈指して論す可からず、恩を行てかへつて刺さる」蠶は字彙に丑介の切、和名(ハチ)、長尾を蠶と爲し、短尾を蠶と爲す、蜂蠶芒を垂るその毒たること後へに在り、云云、この詩の主意は、初心の菩薩根力の微なる時を賦して以て行道の客を教諭す、龜は古來智恵と爲す、正宗贊に石頭禪師の傳に云く、石頭和尚一日夢むらく、六祖大師と一龜に乗りて深池に游泳す、さめて之れを原せしめて曰く靈龜は智なり、池は聖海なり、又兩龜は定惠の二法および二利すなはち自利利他の願行なり、今こゝに言ふこゝろは、根力成熟の菩薩、自利利他の願行に依りて大白牛車に乗じて一切の衆生を利益す、今この詩の言ふ所は、根力未熟の菩薩なるが故に言ふ轎車に乗ると、轎トハ兒牛なり、路頭に出づるとハ、入廊垂手、和光同塵、拖泥帶水、憐兒忘醜、應病與藥、爲人度生の義なり、一蠶傍より來るとハ、一點の客塵縁なり、行道の客、正受三昧の力微弱なるが故に、彼れを觀照して轉じ得ること能はず、領納して道情を損す、是れ沈累せらるなり、恩を行ふて卻て刺さるとハ、譬へば錯まつて水に投ずる人を救はんと欲するに力微なるが故に卻て共に溺死するの義なり、韻字は七曷を用ゆ、扱て二の龜

三月蠶猶小。女人來采花。隈牆弄蝴蝶。臨水擲蝦蟇。羅袖盛梅子。金篋挑荀芽。鬪論多物色。此地勝余家。

この詩も亦是れ寒山九虎の關鎖なり、學者かならず崑崙にし去ること莫れ、韻字は六麻を用ゆ、金篋とは、魏の武帝目を患ふ、華陀といへる者金篋を以て之を刮る、遂に瘡ゆ云云、「三月蠶猶は小さし、女人來て花を採る、牆に限ふて蝴蝶を弄し、水に臨で蝦蟇を擲つ、羅袖に梅子を盛り、金篋に荀芽を挑ふ、鬪論して物色多し、此の地余が家に勝れり、扱て頃しも柳は青眼を垂れて眠れるが如く、花は紅唇を開ひて笑へるが如き春の三月なれど、蠶の虫はまだ小さくて、農家の賤女等が事無さまに、出で來りて菜を摘み花を採り、或は人家の垣根にそうては蝴蝶をもてあそび、或は

池沼の水にのぞみては蝦蟇を擲つ、或は綾羅の衣袖に梅の子を澤山盛り、或は金篋をもて符の芽を打ち挑ふ、あーダノこーダノと喧しく闘論して、色々様々の景色を見る、あゝ好景色ダ、あゝ樂ひことダ、この邊の土地は實に余が家舎に勝れてをることダ、此の地余が家に勝れりと寒山子言はれたが、何れの處が是れ寒山の家舎で有らう又何れの處か是れ勝れた處で御坐らう、須らく是れ子細に參究すべし、見得分明ならば、寒山處々の佳境なることを見ん。文明開化といはんすけれども、花や紅葉は本のよゝい。

東家一老婆富來三五年昔日負於我今笑我無錢渠笑我在後我笑渠在前相笑儻不止東邊復西邊

我が家の東隣に、ひとりの老婆があるが、この老婆さんは、なか／＼の慾張り婆さんで、貰ふ事なら元日の屍體でも貰ふ、出す事なら小便を出すのも好まないといふ云ふやうな大慾張り、ですから追々と隣邊の邊に留めこみまして、三五年の間に、めつさり金満家に相成りました、ツヒ先日まで彼の婆さんは、我よりも貧乏で有たに、ふりかはつて今日はあの婆さんが我れの錢の無いのをあざ笑ふやうなことに立ち至りた、我れも、我れだ、一匹前の男子として、うか／＼と月花に世をくらし、今は赤貧乏と成り、あの婆さんに笑はれるとは、嗚呼味氣無い憂世ではある、我れだつて、今は此様に腰抜け野郎に見へるものゝ、昔しや立派な名主の息子、村の氏神様の御祭にや、

若い衆を指圖して、山鋒をかつひだ事も有る、今はあの婆さんに笑はれるとも、前には婆さんを笑てやつた事もある、して見りやヤ笑ひ合ひダ、むかふも、こつちを笑ひ、こつちも、むかふを笑ひ、互に笑て儻しも止まなければだうで御坐らう、東邊復た西邊ダ、前にや東から笑て、こんどは、西から笑ふ、西笑東笑ダ、こゝに至てその笑はれた者が笑ひ、笑ふた者も笑はるゝ、しからば、笑ふ笑はるの跡絶へて、如靈亦如電、夢幻空華のうき世かな、此の詩も亦是れ寒山一處の好風景、韻字は一先の韻を用ゆ。

富兒多鞅掌觸事難祇承倉米已赫赤不貸人斗升轉懷鉤距意買絹先揀綾若至臨終日弔客有蒼蠅

鞅掌トハ、莊士在宥の篇に、遊者は鞅掌以て無妄を觀る、注に鞅掌は紛泊なり、詩經に、或は王事鞅掌たり、鞅掌は容を失ふなり、言ふこゝろは、煩勞を事として儀容を爲すに暇あらざるなり、祇承トハ、字彙に章衫の切、音支、適なり但なり、蓋し祇の字は兩音あり、音岐なる者は神祇の祇、大なり、音支なる者は適なり但なり、書の大禹謨に、祇んで帝に承く云云、人に斗升を貸さずトハ、事文類聚の別集第十八卷に、王符が傳に、寧ろ朽貫千萬を見れども、人に一錢を貸すに忍びず、まことに粟を積んで倉に朽れども、他人に一斗を貸すに忍びざるを知る、親戚骨肉は家に怨望み、他人細民は道に謗讟る云云、鉤距トハ、多智計較を鉤距と云ふ、漢の趙廣漢、京兆の尹

義 講 詩 山 塞

と爲る善く鉤距を爲し以て事情を得、設し馬の價を問はんと欲するときは先づ狗を問ひ、次に羊を問ひ又牛を問ひ、しかる後馬に及び、その價を参伍し、類を以て相ひ準ずるときは、馬價の貴賤を知てその實を失はず、是れを鉤距と云ふ、注に距は鉤の如く、鉤は倒掛なり、(ヒツカケル)之れを存むときは順、之れを吐くときは逆、人をしてその術中に入りて出づること能はざらしむ、索を以て其の隱情を鉤るなり云云、絹を先づ綾を擇ぶトハ、譬へば茲に一夫有らんに、常に姦計を施して人を欺くを以て賢なりと爲す、一日衣を整へ襟を正ふして一奴を従へ、直ちに市上に行く、行て巨商の家を擇で警咳して入る、商家も亦聲を調へて迎へ入る、夫がいはいく使命ありて予に命ず、綾及び綺羅幾何軸を擇ばしむ、その精好なる者ありや、商家のいはく有り、まことに極めて精好なる者あり、請ふ且らく入てこれを選べと、こゝにおいて席を設けて延き、酒菜をもて之れを饗應す、しばらくあつて綺羅を抱き來り、その前に推し出す、その綺羅の美麗なること目を奪ふばかりなるもの數十軸、夫すなはち公然として飲噉して口を結び目を眇めにして、豎に擇び横に擇び、擇び擇で漸く十數軸を得て、之れをつましめて自からその上頭に印し了て、かつ商をして其の價直を記せしめ印を搭かしめて之れを懐ろにして告げていはく、主家必らず之を要せば今明日の間に金と予が手紙とを送て以て之れを取らんと云て出づ、商家も亦走り出で、兩手を履頭に托して之れを送る、その夫行くこと三五歩にして還り來りて告げていはく、好絹二

義 講 詩 山 塞

匹を與へよ、是れ亦予が妻の需にして、金は予が囊中を空ふするの量なりと云て、金囊を掃出して、金を擇で之れを取らしむ、商家好絹二匹を出して、その價直の三分の一を落して以て之れに與へ、亦送ること始めの如し、是れ但た心を彼の夫に得て、快く彼の向きに擇ぶ所の品物を賣却せんと欲する者なり、その後ち一ヶ月を経ると雖も、寐として消息無し終に商家をして空しく頭を搔かしむと、實に惡む可きならずや、富兒映掌多し、事に觸れて祇承し難し、倉米已に赫赤なれども、人に斗升を貸さず、轉た鉤距の意を懐かしむ、絹を買ふに先づ綾を擇ぶ、若し臨終の日に至らば、弔客は蒼蠅のみ有らん、十蒸の韻を用ゆ、この詩の主意は、世上の所謂鉤距、知計を設けて利を獲む人を呵責するなり、扱て金は金庫に滿ち、米は米庫に溢る、ばかりの富豪家の人は、兎角慾を逞ふし利をつかむに多忙で有るから、外より何かの事が出來しても、一々丁寧に取扱ふことも仕難き有様ダ、米倉には米が幾萬石と積みあげてあり、久しく年を経て、舊米赤くなりて陳腐すと雖も、他人には一升の米を貸す事はいやで御坐る、その上に種々様々の知計を設けて他人の金品を詐取せんと計り、奸黠狡猾至らざる所なきやうにして、此の一生を送り、若し據無く命終に臨むの日に至らば、誰れ一人も哀悼して呉れる者も無し、追弔に來る御客様は、唯だ臭氣を追ひまはる蒼蠅あるのみ。

白鶴銜苦桃千里作一息欲往蓬萊山將此充糧食未達毛摧落離群

心慘惻卻歸舊來巢。妻子不相識。

十四職の韻を歩む。この詩の主意は、多少仙術を學び、長生久視を求むるの人、古來一人も成就し得るもの無し、空しく困苦して終に老死に歸することを賦して、以て離苦得樂、轉凡入聖の道を眞修眞參する人を鞭進警醒せしむるものなり、白鶴苦桃を銜ひ、千里に一たび息むことを作す、蓬萊山に往かんことを欲して、此れを將て糧食に充つ、未だ達たらざるに毛摧落す、群を離れて心慘惻す、卻て舊來の巢に歸れば、妻子も相ひ識らず。離群とは、禮記檀弓の上篇に、子夏はいはく吾れ群を離れて索居すること亦久矣云々、扱てこゝに一羽の白鶴がある、この白鶴が、一つの企てを起して、一つの苦桃を口に銜みて、飛び行て一千里ごとに、一たび休息するとである、蓬萊山とか云へる不老長生の仙人の御座る山へ往かんと企て、この苦桃をもて糧食に充てたるが未だかの蓬萊山に到達しないうちに總身の羽毛が皆な摧け落ちて、身は困れ、氣は沮み、進退奈何ともなし難し、ア、残念千萬、どんでも無い企望を起し、わざ／＼群鶴の仲間を離れて、憐れさびしき獨り旅、何方を回顧しても知るもの無くて心慘惻す(イタミ、イタム)仕方が無いから後へもどり舊の巢に歸り見れば、あはれ浮世の歲月は、幾千年もたち歴て、ひかし記す山川の是、今いたひ人代の非だ、兒童相ひ見て相ひ識らず、笑て問ふ老翁何の處よりか來ると、そのみならず、吾が妻子さへも、相ひ識らざるやうな事にたち至りたり、ア、馬鹿な事を仕たわい、しん

慣居隱幽處。乍向國清中。時訪豐干道。仍來看拾公。獨迴上寒巖。無入話合同。尋究無源水。源窮水不窮。

この仕損、くたびれ儲けだ、ながら眞修正道、眞參心性の人たちよ、長生久視の仙術を學ぶと云ふやふな、雲の根を尋ね、電の種を蒔かんとするが如き妄事に苦心するよりは、快鞭一番、無上勝眞の道に上り、正法眼藏を獲得せられんことを希望む、
慣居隱幽處。乍向國清中。時訪豐干道。仍來看拾公。獨迴上寒巖。無入話合同。尋究無源水。源窮水不窮。
諸子さん、この詩は近頃面白い詩である、早く來て御さ、なさい、韻字は一東の韻を歩んである、「隱幽の處に居るに慣れて、乍ち國清の中に向ふ、時に豐干の道を訪て、仍りに來りて拾公を看る、獨り廻りて嚴寒に上れば、人の語りて同すべき無し、無源の水を尋ね究むれば、源は窮むれども水は窮まらず、一寸一吟しても面白いでせう、その上に無源の水を呑で、その眞味が分りなば、又ますます面白からう、その筈さ、この詩の主意は、寒山子が自得底の佳趣を賦したるもの、(無源の水を尋ね究むれば、源は窮むれども水は窮まらず)此の二句は、一篇の主意で御坐る、無源の水とは、人々心上、生滅の妄想、霧の浮べるが如く、煙の曳くに似て、晝夜相ひ續ぐこと、譬へば溪間一脈の流水、滾々として四時間斷無さが如し、二乗即ち聲聞緣覺は之れを汲み盡くして、この枯竭の日を得て以て菩提(佛道)を成せんと欲す、所以に晝夜困苦して三僧祇劫(長時間)を歷、菩薩は直ちに根本(心性)に向て大事(生死)を究竟す、作麼生か究竟すとならば、辨道の人、その

精神を憤起^{ふんき}して、親して彼の起處に向て尋ね、この水^{みづ}生滅^{しょうめつ}の念^{ねん}何れの處よりか起り、何れの處をか本源^{ほんげん}（心性）と爲すと、豎に尋ね、横に窮め、尋ね窮めて、終に尋究する底の心に和して一時に打失す、此れ即ち虚空消殞^{くうくうしょうえん}し、鐵山摧^{てつざんさい}くる底の時節なり、嶮崖^{けんがい}に手を撒^さして、絶後に再び蘇^そへる底の好消息なり、これを無源の水を窮盡すと云ふ、しかも窮め盡くすと雖ども、水は舊きによりて滾滾^{こんこん}として間竭^{かんけつ}すること無し、未だ本源心性を徹見せざる以前は、生滅無明の妄心、既に徹見得出するの時は、薩波若^{さつぱにゃく}海中、最妙最底の大法雨、滴々圓明、滴々窮竟、酒いで三草の根莖^{こんけい}を沾^{せん}し、滴て六趣の饑渴^{きかつ}を資^すく、三大劫^{さんだいけつ}（無量の長時）を歴て盡くる時無し、一切衆生を濟度するに乏しき時無し、それ之れを源は究むれども、水は窮まらずと云ふなり。扱て寒山子^{さんざんし}は、平生隱逸幽靜の處に居慣れてある時は乍ち天台山國清寺の境内に向て遊び、折り〜豐干禪師を訪問して大道を商量す、又仍^{また}（シキリニ）に來りて特別懇親なる拾得子^{しつとくし}に面會して呵々として大笑し、あるひは獨り廻廊をめぐりて寒巖に上りてみれば、多くは皆な凡客俗人、吾れと物語りして清淨無爲の同情を表すべきもの無し、無爲清淨、本源自性の心水を尋ね究めて見るに、何んにも無い、この處即ち嶮崖に手を撒^さして、大死一番、再活現成して本來の面目を看破するの時なり、しかれども、前念後念起滅するの念水は、なほ從晝至夜相續滾々として窮盡すること無し、この相續無間斷の念こそ誠に無爲清淨の正念にして、即ち上求菩提、下化衆生の妙水なれ。

生前太愚痴^{たいぐち}不爲^な今日悟^ご今日如許^{にょじょ}貧總^{ひんそう}是前生作^{ぜぜんじやう}今日又不^{また}修^{しゆ}來生還^{また}如故^{にょごと}兩岸各無^{ふたがはごころな}船^{ふね}渺渺^{みょうみょう}難^{がた}濟渡^{しやうた}。

七虞の仄韻を歩ひ、扱て諸子^{しよし}さんよ、諸子^{しよし}さんが、此の娑婆世界に生れ來らぬ以前、即ち前きの世に於て、無明の雲、煩惱の霧、本來の明德を暗らさして、爲る事作^な事みな愚癡暗昧ならざるはなきが故に、その因縁に依りて、今日此世に生れ來ても、やはり正道に縁薄くして、煩惱の霧を掃ひ、無明の雲を排して、本源自性、天真妙境に悟入するの勇資なし、又みなさんが、今日この世に生れ來て、かくのごとく正法の福に貧^{ひん}き所以は是れ必竟如何なる原因なるかと推窮して見ればすべて是れ前の世に、善法の種子^{たね}を蒔^まきおかすして、惡作惡業を増長せし故へならん、だから諸子^{しよし}さんよ、幸ひにこの諸佛諸菩薩の御教化厚^{あつ}き人間界に出生したからは、少しは眞修眞參なさるが宜しいぞ、この世にて又修行證果なき時は、來世も亦故の如く貧窮^{ひんきゆう}下賤^{げせん}ならん、兩岸とは、生死の岸と、涅槃^{ねはん}（不生不滅）の岸となり、涅槃と生死との兩岸に、若しも諸子^{しよし}さんを載せむたすべき般若^{へんげ}（智慧）の船筏^{せんぱつ}子が無くば、渺々^{みょう々}（海廣貌）として見わたしもつかない生死の大海を渡航して、無爲清淨、不生不滅の彼の岸に到着し得ることは、ちと六かしからんめり、故に摩訶般若波羅密多心經を修行するが、何によりの肝要で御坐るワ、もう一度讀で聽かそう、生前太だ愚痴、今日の悟りを爲さず、今日許の如き貧^{ひん}きことば、總べて是れ前生の作、今日又修せずんば、來

生も還たぬの如けん、兩岸各々船無くんば、渺々として濟渡し難からん、

璨璨盧家女、舊來名莫愁、貪乘摘花馬、樂榜采蓮舟、膝坐綠熊席、身披

青鳳裘、哀傷百年内、不免歸山丘。

「璨々たる盧家の女、舊來莫愁と名づく、貪りて摘花馬に乗り、樂んで采蓮舟を榜ぐ、膝は綠熊の席に坐し、身は青鳳の裘を披たり、哀傷す百年の内、山丘に歸ることを免れず。」韻字は十一尤、璨璨とは、文選の注に、衣服鮮明の貌とある、莫愁とは、圓機活法に曰く、石城に女子あり莫愁と名づく、歌謠を善くす、若し人これを聞かば、愁を忘るゝの聲あり、ゆゑに莫愁と名づくるなり、摘花馬とは、天寶遺事にいはく、長安の俠少年、春時に至る毎ごとに、朋を結び黨を聯れて、各々矮馬を置き、飾るに錦韞金絡を以てし、轡を并べて花木の下に往來して、僕従をして酒杯を執て之れに隨はしむ、好酒の人に遇ふときは、馬を駐めて飲ひ云云、采蓮とは、李太白が採蓮の曲に曰く、若耶溪の傍ら、採蓮の女笑て荷花を隔て、人と共に語る云云、古文前集に見る、綠熊の席とは、事文類聚の十一にいはく、衛の靈公、天寒に池を鑿る、宛春諫めていはく、天寒くして土を起す、恐らくは民を傷めんと、公いはく、天寒さ乎と、宛春がいはく、公は孤裘を衣、熊席に坐す、是を以て寒からざるなり云云、青鳳とは、韻瑞に、拾遺記を引いていはく、周の昭王、青鳳の毛を以て裘を爲る云云山丘に歸るとは、文選曹子建が詩に曰く、生きて花屋に在て、零

落して山丘に歸る、先民誰か死せざらん、命を知らて復た何を憂へん云云、扱てかの璨々鮮明たる衣服をまたふて、よなくしく遊べる盧氏の家の女、いつもにこころは、をみ顔、實にその莫愁の名とひとしく愁苦も無さうに見へるが、日々の仕事は、どのやうな事を仕てをるゾ、春花の咲く頃には、従僕に酒をもたせて、白馬金鞍に跨り、花木の間に遊遊し、夏の頃は、彩舟に棹して歌をうたふて蓮花を採り、その驕奢や王侯をしのぎ、その優樂や天國にひとし、その美女の膝を受くる席は常に綠熊の皮もて作りたる筵を布き、その美女の身にまとへる衣服は、常に青鳳の毛もて作りたる裘を披てをるが、此の優樂や、永久に保有する事は出来ませるか、ア、哀れ傷ましいことには、百年の間は、ちと六かしい、必ず五十年も歴ては、北邙山上、一片の煙と爲らざるを得ざるならん、一休和尚が元日早々から、獨體を笏の頭につけて、門松や冥土の旅の一里塚、目出度も有り目出度も無しと嘔鳴りあるき、獨體を人の鼻さきにつきつけて、御用心く〜と警醒せられたるは、全く這般の輩の大乗妙典にして、大慈大悲の御教化にこそ、

氏眼、鄒公妻、邯鄲杜生母、二人同老少、一種好面首、昨日會客場、惡衣排、在後祇爲著破裙、喫花殘、齧麩。

六十六
 ぞけられて後へに在り、祇だ破裙を著くるが爲めに、佗の發せる踏躑を喫ふ。惡衣にして排りぞけられて後へに在りとは、智度論十四に曰く、たとへば窟賓三藏比丘の如し、阿蘭若の法を行て一ツの王寺に至る、寺に大會を設く、門を守るの人その比丘の衣服の麤弊なるを見て、門を遮りて前めず、かくの如くなること數數なりき、衣服の粗惡なるを以ての故に前ひことを得ず、便ち一の方便を作して、好衣をかり衣て來る、守門の人之れを見て前ひことを聽るして禁せず既に會に至りて坐して、種々の好食を得、先づ以て衣服に與ふ、衆人間て言く、何を以てか、爾するやと答て曰く、我このをろ數數來れども、毎に入ることを得ず、今日は我れ好衣を着るを以ての故に、この會に列坐することを得て、種々の好食を得るは、實に是れ衣服の好きが故にしかなり、故に先づ衣服に與ふるなりと、扱て氏眼と云ふ處の鄒公が妻と、邯鄲と云ふ處の杜生が母とは、二人ともにいづれ老か少か、少年なれば老年となるべく、老少はつまり同じ事じや、しかし、どちらも同じく一種の好面首で、艶容冶姿あり、しかるに人情といふものは淺間しいものよ、昨日樓上客を會飲する場處でサ、一人の婦人の衣てをる衣服が粗惡で有たばかりで、擯斥けられて人の後りの方へ坐らされた、そりや何故じや、祇だ破れた紅裙をまどふて居たばかりで、佗人の食ひ殘したる踏躑(餅なり)を喫はされて乞食同様の取あつかひに逢ふたとじやが、も一人の婦人も同じ様な艶容冶姿なれども、衣服が鮮華なるが故に 前の方へすゝんで優待されたトハマア世の中

中の人情と云ふものは、淺薄極まりたるもの哉、飛鳥川、昨日の淵は、今日の瀬と、變り易きは人ごゝろ、戀れたは戀れたが御前にや戀れぬ、私しや御前の金に戀れ、君子の交は水の如し、故に常に淡泊にして變すること無し、小人の交や醜の如し、故に時に、濃淡變動有り、世人それ宜しく猛省すべきなり。

獨臥重巖下。蒸雲晝不消。室中雖爾暖。心裡絕喧囂。夢去遊金闕。魂歸度石橋。拋除閤我者。歷歷樹間瓢。

扱て此詩の主意とする所は、清閑獨脱の境界を述べたものと見える、韻字は二蒸の韻を歩む、獨り重巖の下に臥す、蒸雲晝る消せず、室中爾暖たりと雖も、心裡喧囂を絶つ、夢には去て金闕に遊び、魂は歸て石橋を渡る、拋除せん我を鬧する者、歷々たる樹間の瓢、踏暖トハ、暗き貌、石橋は、天台山に在り樹間の瓢トハ、逸士傳に、許由箕山に隱る、盃器無くして手を以て水を捧げて之れを飲む、人之れに一瓢を遺る、之れを以ちて飲み、飲み終りて樹枝に掛く、風吹けば漉漉として聲あり、許由之れを煩しく思ひて、遂に之れを拋棄せりと云々。寒山子は、遠く塵寰を離脱して、獨り重々疊々たる深山幽谷の巖石の下とに。閑臥してをりしに、蒸雲(密雲)濛々として、晝も猶ほ消えさらず、巖室の中は爲めに臙暖として暗味なれども、寒山の心中は、洒々落々、靈光不昧、塵世の喧囂を絶ちて、常に心は安祥三昧に安住してをるゾ、折々には、夢に法王の金闕

に遊び、時々我魂は歸り来て、天台山の石橋を渡ることもある。萬事無心、任運無作の日用だ、本來無一物、何れの處にか塵埃を惹かん、これが真に寒山の天真にして妙用ある處で御坐る、我を煩はし、我を鬧がせる物は。瀝々風に鳴る樹頭の水瓢も抛却し去らん寒山が如斯言はるゝは、諸子に、本來無一物の端的を示されたので御坐る。

夫物有所用。用之各有宜。用之若失所。一闕復一虧。圓鑿而方枘。悲哉空爾爲。驕驕將捕鼠。不及跛猫兒。

「夫れ物に所用有り、之れを用ふるに各々宜しきこと有り、之れを用ゆること若し所を失へば、一闕復た一虧、鑿を圓にして枘を方ならず、悲ひ哉空しく爾爲ることを、驕驕將に鼠を捕へしめん」とせば、跛猫兒にだも及ばず、四支の韻を用ゆ、詩の主意は、物各々其の性に隨て用ゆ可きの意を述べたり、圓鑿、方枘トハ、史記の孟子傳に、方なる枘を持して圓鑿に内れんと欲するも其れ能く入らんや云云、索隱にいはいく、方枘は筭なり、圓鑿は其の孔なり、謂ふこゝろは、工人木を斲て、方筭を以て之を圓孔に内るゝも入るべからざるなり、故に楚詞に云く、方枘を以て圓鑿に納ると云ふは、吾れ其の齟齬して入らざることを知る云云、爾爲トハ、王仲宣が史を詠する詩に、秦穆殺三良。惜哉空爾爲。と文選に見えたり、驕驕トハ、莊子秋水篇に曰く、騏驎驕驕。一日にして千里に馳せども、鼠を捕ふることは、狸註に如かず云云。今寒山子は、諸子に向て方枘方位、

世間相成就の法を示されたるので有る。方木は圓孔に入らず、車は横に推すべからず、耳かきをもて杓子となすべからず、長持をもて、枕子となすべからず、お釜をもて、三助となすべからず、もし其れ強ひてしかせんか、物各々その宜しき所を失はん、其の天真の妙用を傷けん、是れ大雄氏所説の法に非ず、山は突ん、それ御覽なさい真如法性、海波渺漫、それ御覽なさい真如法性、吾れ爾ちに藏す無し、驕驕千里に馳するは馬の真如で御坐る、猫兒の巧みに鼠を弄するは猫兒の真如で御坐る、しかるを、強ひて驕驕をして鼠を捕えしめんとするは、ちと物を任せ理を屈するの仕方では御坐らんか、諸子も、この處に御注意ありて、真參真修なされて御覽、まことに面白い事で御坐るは、物各々その性に隨て應用する時は、南山に鼓を打てば、北山に舞を作し、三門頭に喚呼すれば、兩廊下に點頭す、鳶飛び魚躍り、山峙ち水流る、一二三四五。真如の露現で御坐り、六七八九十。真如の露現で御坐り、目若鼻着、左右逢源、其れ御覽、其れ御覽、鴨は寒ふして水に下り鶏は寒ふして樹に上る、盧山は烟雨、浙江は潮、誰が家長不死。死事舊來均。始憶八尺漢。俄成一聚塵。黃泉無曉日。青草有時春。行到傷心處。松風愁殺人。

誰が家か長く死なざらんトハ、左傳に、子彥がいはいく、人誰か死なざらん、始めは八尺の漢と憶ひきトハ、文選に、陸子が詩に曰く、昔は四民の宅に居れり、今は萬鬼の隣に託す、昔は七尺の

躬たり、今は灰と塵とに成る、漢トハ、漢と稱するの説ハ、事物紀原の第十に見ゆ、心を傷ましむる處トハ、北邙の地なり、韻字は十一真を用ゆ、誰が家か長く死なざらん死の事舊來均し、始めは八尺の漢と憶ひき、俄かに一聚の塵と成る、黄泉曉日無し、青草時に春あり、行て心を傷ましむるの處に到れば、松風人を愁殺す、サア今吾れコーやつて諸子の面容を一覽するに、誰れも皆な壽命は限りある事である、人間僅か五十年、此の忍土に生れ來らば、又死事あるは古來みな然り先聖後賢も亦ひとしく免れざるなり、始めのほどは四肢五臓、いとたくましくて、八尺も有るかと思ふばかりの人(漢)と憶ひしに、何んぞ圖らん一朝俄かに無常の風に誘はれ給ひて、墓邊一聚の灰塵と成り了んぬ、黄泉といふ處は、吾が申す迄もなく地の下の事なれば、曉日(朝日)の照臨すること無く、陰陽不到の處であるが一年の中に、一度づゝは、春風吹き來るたびごとに、緑草青々として古欄腰を弔ふあるのみ、吾れ偶々北邙山上列墳塋の處に到り、四方を視まはせば、ア、いたまじや、松風の物すごく颯と吹き來りて唯た人を愁殺するのみ。

驢馬珊瑚鞭、驅馳洛陽道。自矜美少年、不信有衰老。白髮會應生、紅顏豈長保。但看北邙山、箇是蓬萊島。

此詩の主意は、人々竟に遷流遷滅に歸し去ることを述べて、唯一無二の實處を示す、北邙は是れ死屍抛向の地、蓬萊は是れ神仙長生の境、寒山子何に依りて今北邙を指して蓬萊島といふや、も

し人見徹して徹骨徹髓分明ならば、汝に許す、自から長生久視の神仙と稱することを、若しそれ未だ然らずんば、依草附木の野鬼閑鬼ならん、驢馬珊瑚の鞭、驅馳す洛陽の道、自から誇る美少年、衰老有ることを信せず、白髮會を應に生ずべき、紅顏豈に長く保たんや、但だ看よ北邙の山、箇は是れ蓬萊島、美少年とは、文選の阮嗣宗が詠懐の詩に曰く、朝には媚少年たれども、夕暮は醜老と成る、王子晋に非るよりは、誰れか能く常に美好ならん、蓬萊島とは、釋の曇鸞法師、初め仙術を學ぶ、後ち菩提流支三藏に請して無量壽經を受く、丹經を擲て燒棄す、たどひ弱水三萬里の蓬萊島を隔つるも、猶は身裡蓬萊十二樓あり、韻府、呂洞賓、袖裡の青蛇を抛て、黃龍禪師に參す海外の蓬萊島を以て、唯心の淨土に換ふる者なり、韻字は四豪の仄韻を用ゆ、回顧せよ、猛省せよ、昔日は少年。今は白髮となることを、人生頭べをして雪の如くならしむること勿れ、たどひ春風を得るとも復た消せず、請ふ看よ北邙の山、これは是れ長生不死の蓬萊嶋なることを、唯だ願くば、人々胸中に向て唯心の淨土、長生の蓬萊を開拓せんことを、

竟日常如醉、流年不暫停。埋著蓬蒿下、曉月何冥冥。骨肉消散盡、魂魄幾凋零。遮莫銕口無、因讀老經。

韻、九青を歩ひ、醉へるが如しとは、詩經の黍離の篇に曰く、中心醉へるが如し云云、蓬蒿とは、祖庭事苑の六に曰く、漢の田横死す、門人これを傷んで遂に悲歌を作て言く、人命蓬上の露の如

し、啼滅し易きなり、亦謂く人死して精魂蒿里に歸す、冥々とは、後漢書の張奐が傳に曰く、奐光和四年に卒す、年七十八、遺命して曰く、地底冥々、長へに晩期無し、遮莫とは、事文類聚別集の六に曰く、藝苑雌黃に曰く、遮莫は、蓋し俚語なり、猶ほ儘教と言ふが如し云云、鏡を敲むとは、佛祖三經の注に曰く、世諦の樂みは盡く苦の本と爲る、虚しく信施を受けば債を負ふこと何ぞ疑はん、鏡を叩くみ較を負ふことは、猶ほ是れ輕々の報ひなり、老經とは老子道德真經なり、「竟日常に醉へるか如し、流年しばらくも停まらず、蓬蒿の下に埋著せられて、曉月何ぞ冥々たる、骨肉消散し盡きて、魂魄幾ばくか凋零する、遮莫れ鏡を敲む口、老經を讀むに因無きことを、この詩の主意とする所は、無常の意を述ぶるなり、老經を讀むトハ、彼の經に、委しく谷神不死の大道を説示すと雖も、一度泉下に陥るときは、再び讀むこと能はざるなり、然りと雖ども、今いはゆる老經トハ、特り李鼎が留の置きたる底の陳編を指すのみに非ず、再び言ふ鏡を敲むトハ、今世の罪業に因りて、地獄の苦を受くることを云ふなり、地獄の苦を受くる身と成りし上は、不生不死の老經を讀んで、生死の一大事を覺ることハ、いと六かしからんが、竟日常に醉へるが如く流年を送る醉生夢死の輩は、云ふソソナ事はマ、ヨヤレと、しかして遂に生死解脱の好因縁を結ばないことで有るは、いと憐れなるかな。

一向寒山坐淹留三十年 昨來訪親友 太半入黃泉 漸減如殘燭 長流

似逝川今朝對孤影不覺淚雙懸

「一たび寒山に向て坐す、淹流すること三十年、昨來て親友を訪へば、太半黃泉に入る、漸く減ずること殘燭の如し、長く流れて逝川に似たり、今朝孤影に對して、覺えず涙だ雙び懸る、韻字は一先を歩む、淹留トハ左傳の注に、淹は久なり云云、太半トハ、漢書音義に曰く、韋昭が曰く、およそ數三分、二有るを太半と爲す云云、殘燭の如しトハ、涅槃經十一に曰く、譬へば灯炷の唯だ膏油に頼りて、膏油既に盡れば勢ひ久しく停まらざるが如し、人も亦是の如し、唯だ壯膏に頼る、壯膏既に盡くれば、衰老の炷何んぞ久しく停まらざるを得んや云云、逝川トハ、論語子罕の篇に曰く、子、川の上在りて曰く、逝く者は斯の如き夫、晝夜を捨てず云云、孤影トハ、文選、潘安仁が寡婦の賦に曰く、廓として孤立影を顧みる、塊として獨り言て響きを聽く、注に、丁儀が妻の寡婦の賦に曰く、賤妾鞏々として影を顧みて儔と爲す云云、涙だ雙び懸るとは、杜詩に曰く、素交零落し盡く、白首淚雙び垂る云云、扱て一たび寒山の中に安坐してから、久しく留まりをると、もはや三十年にもなるが昨日も一寸親しき友だちを訪問して見れば、いや恐れ入たことには、もはや三分の二は、死して黃泉に身を藏くし去たワイ、嗚呼人世無常の有様は、宛も灯炷の炎へて、段々と滅消してゆく様なものや、又日月年華の過ぎゆくは、その速かなること逝く川の水の如くじや、今は親友も無くなりて、孤影相ひ顧みれば、哀れはかなくて、覺えず知らず、兩方

の目から涙がばらばらと雙び下ることで御坐る、幻世の友人は、そのはかなき事夢の如し、唯だ願くは、生々世々の伴侶たる、不生不死の親友を結交せられんことを。

相喚採芙蓉。可憐清江裡。游戲不覺暮。屢見狂風起。浪捧鴛鴦兒。波搖鷓鴣子。此時居舟楫。浩蕩情無已。

韻字は四支の仄韻を歩む、この詩は、寒山子が盤に和して托出する底の驪珠、仲々文藻流麗、韻致優雅なるものである、相ひ喚て芙蓉を採る、憐むべし清江の裡、游戲暮るゝを覺えず、屢は狂風の起るを見る、浪は捧ぐ鴛鴦兒、波は搖かす鷓鴣子、此の時舟楫を居く、浩蕩として情已むこと無し、清江トハ、杜子美が江村に題する詩に曰く、清江一曲村を抱て流る云云、鴛鴦、鷓鴣トハ、天寶遺事に曰く、五月五日、明皇暑を避けて、興慶池に遊ぶ、妃子と畫水殿に寝ぬ、宮嬪の輩、欄檻に凭倚して、雌雄の二鴛鴦、雙鷓鴣の水中に戯るを争ひ看る、明皇其時に貴妃を絹帳の内に擁して宮嬪に謂て曰く、爾等水中の鷓鴣を愛す、争でか我が被底の鴛鴦に如かんやと云云、鷓鴣は、五色の尾、船舵の如きあり、鴨よりも小なりと書言に見ゆ、艶冶の美少女が兩三個、相ひ喚び相答へて、いと嬉しげに芙蓉の花を採りてをるツイ、憐むべく愛すべき清らかに流るゝ江の中に、遊び戯れて、長さ日の暮るゝをも覺えざる有様、屢たび狂風荒ら吹く風の起るが故に江の水も波立ちさはぎ、清き水に浮び戯る鴛鴦や鷓鴣は、浪のゆり揺かすがまゝに、行く末善

し悪し定め無き浮世の波に身を信せながらも、何の苦勞の無きが如く見ゆ、美少女等この時、舟楫を浮べて水中に優遊し、我れを忘れて鴛鴦の雌雄相ひ戯むるを貪り看て、清江の水の浩蕩と廣く限りなく流るゝと共に、無限の艶情を起すことあらめ、寒山來て見れば、こゝも浮世の百戲場真如實相の色々かな。

吾心似秋月。碧潭清皎潔。無物堪比倫。教我如何說。

この詩は、寒山子が得力の處、物の比倫に堪ふる無き底の意を賦したるものなり、韻字は入聲の仄韻を歩む、言ふこゝろは、吾が禪心は、高閑圓明、皎潔靈妙、世に等比すべき物は無けれども、一寸假りに譬へて見やうならば、秋月十分の光輝、一點の瑕翳なきが如きもの乎、いや三五の月は、たとひ瑕翳一點なしと雖ども、なほ中間に銀盤の昇沈する底の物あり、所以に棄て去る、棄て去てまた碧潭の徹底皎潔明淨なるに比す、碧潭は皎潔なりといへども、なほ四面に椀丘際涯底の物あり、ゆへに棄て去る、棄て去り棄て來りて西東を望むに、一の比倫すべき物無し、ゆへに言ふ我をして如何が説かまゆんど、人々本具の禪心は、有にあらず、無にあらず、色にあらず、空にあらず、因果の法にもあらず、みだりに天邊の月に向て禪心を問ふこと勿れ、退てひたすらに自己の胸襟より露出し來れ、

垂柳暗如烟。蜚花飄似霰。夫居離婦州。婦住思夫縣。各在天一涯。何時

得相見寄語明月樓莫貯雙蜚鷲。

雙飛燕とは、文選古詩に曰く、雙飛の燕となりて、泥を銜んで君が屋に巢くはんことを思ふ云云、蜚は飛なり、韻字は先仙の仄韻を歩む、此の詩は、寒山が紫羅帳裡の眞珠なり、垂柳暗ふして烟の如し、飛花飄として霞に似たり、夫は離婦州に居り、婦は思夫縣に住む、各々天の一涯に在り、何れの時か相ひ見ることを得ん、語を寄す明月樓、雙飛燕を貯ふること莫れ、春も早や老ひ去りて、柳の絲長く垂れ、緑こまやかに陰暗ふして、暗淡たる烟りの如し、風に吹かれて飛ぶ花は、飄然として香氣ある雪霰にぞ似たりける、夫は婦に別れて他州に住し、婦は夫に離れて居し、常に夫を思ひ、夫婦おのゝ相ひ隔て、天の一涯に在り、何の年、何れの時、復た相ひ逢ひ見ることを得るならん、そこで寒山が一語を寄せて戒むるには、明月さわかにか高樓を照し、流光正さに徘徊す、その上に愁思の婦あり、月を見て夫を思ふこと切なり、故に必らず泥を銜む雙飛の燕子をして樓檐に巢くはまはむることなかれ、若しも然あらんには、思夫の婦をして、益々斷腸に堪へざらまめん、又是れ寒山子が、遊戯三昧中、無吾人の解語なりけり、

有酒相招飲有肉相呼喫黃泉前後人少壯須努力玉帶暫時華金釵非久飾張翁與鄭婆一去無消息。

「酒あれば相ひ招て飲む、肉あれば相ひ呼で喫す、黃泉前後の人、少壯にして須らく努力すべし、玉

可憐好丈夫身體極稜稜春秋未三十才藝百般能金羈逐俠客玉饌集良朋唯有一般惡不傳無盡燈。

十蒸の韻を用ゆ、稜々とは、韻會に稜一には稜に作る、漢書、李廣が傳に曰く、威稜隣國に儻たり、注に李奇が曰く、神靈の威を稜と云ふ云云、春秋とは、後漢書の樂恢が傳に曰く、春秋に富めりと、注に、春秋とは年を謂ふなり、俠客とは、俠の音は叶なり、權力を以て人を俠輔するな

り、苟悦が曰く、氣を立て齊しく威福を作し、和交を結で以て強を世に立つる者、これを遊俠といふ、史記にいはいく、今の遊俠は、その行ひ正儀に軌らずと雖も、然れども其の言必ず信あり、その行ひ必らず果なり、己に諾して必らず誠あり、その軀を愛せず、士の阨困に赴く、既に已に存亡死生す、而も其の能に矜らず、その徳に伐ることを羞づ、蓋し亦た多しとするに足ること有るものなり、玉僕とは、猶ほ珍饈の如し、良朋、仲長統が樂志論にいはいく、良朋萃まり止まるときは則ち酒肴を陳ねて以て之を娛ましむ、嘉時吉日には則ち羔豚を烹て以て之れを奉ず、無盡燈とは、維摩經第四に曰く、譬へば一燈をして、百千燈に燃すが如し、冥者皆な明かにして、明終に盡さず、如是諸姉、夫れ一りの菩薩、百千の衆生を開導して、阿耨多羅三藐三菩提心を發せしむ、その道意に於て亦滅盡せず、所説の法に隨て、しかも自から一切の善法を増益す、是れを無盡燈と名づく云云、「憐ひべし好丈夫、身体極めて稜々たり、春秋未だ三十ならず、才藝百般の能、金羈俠客を逐ふ、玉僕良朋を集む、唯だ一般の惡きこと有り、無盡燈を傳へず、實に愛憐すべき好き男子が、こゝに一人御坐るが、身体は極めて威稜ありて犯すべからざる風采で御坐る、年はまだ三十にも足りないが、種々の才智藝能がありて、ある時は、白馬に金の羈を飾り、連鬮として西北に馳せまはり、遊俠の兒と強を争ひ、ある時は、嘉時吉日に、美酒佳肴を設けて、良友親明をあつめ、共に一時の快樂を取るも、みな是れ有爲の作業にして、善根功德の種と成らず、唯

だ一般の惡業に過ぎざるべし、佛の所説を一切衆生に流布して、一切衆生を利益して、無盡の法燈を永劫に傳へん事は、夢にだも知らざるべし、寒山がかく唱道せらるゝ所以は、人々本來、清淨圓明、妙明虛靈底の物を具有せり、之れを明むるときは賢聖佛祖たり、之れを暗ますときは凡愚鬼畜たり、凡にありては、之れを心火と云ふ、五欲三毒の根となる、聖に在りては、之れを智光と云ふ、大千を包容して、全く纖塵を見ず、靈照を萬有に傳へて盡くることなし、此れ是れを正法眼藏涅槃妙心と云ひ、又これを無盡燈とも云ふなり、諸子それ猛省せよとなり、

桃華欲^レ經^レ夏^ノ風月催^レ不^レ待^レ訪^レ覓^レ漢^ノ時^ノ人^ノ能^レ無^レ一^ノ箇^ノ在^レ朝^ノ朝^ノ花^ノ遷^レ落^レ歲^ノ歲^ノ人^ノ移^レ改^レ今^ノ日^ノ揚^レ塵^ノ處^ノ昔^ノ時^ノ爲^レ大^ノ海^ノ

この詩の主意は、天地萬物、皆な新陳代謝窮まり無きものにして無常迅速の意を示し、世人に猛者を促がしたるものなり、アノ野邊に紅霞を躡せる天桃の花は、餘まりうつくしきければ、夏迄も持ち越させんとすれども、風雨しきりに來りて、なか／＼に許さざりし、又人を訪問して、古の前漢後漢時代の人物を求覓りても、なか／＼一人も居られません、朝々花遷り落ち、今日の殘花は昨日開くなり、今朝の開花は明朝の落花なり、歳々人移り改まる、古歌にもある如く、さのみ見し人はと問へばけふは無し、あすは吾身も人に問はれん、みなさん如何で御坐る、今日塵を揚ぐる處、昔時は大海なり、桑田變じて海となり、深谷變じて岡となる、宮闕變じて麥畑となり、

龍變じて雪隠となり、梅花變じて梅干となり、蚯蚓變じて蛟龍となる、うき世のさまは大概みな是の如きものなりと知るべし、

我見東家女、年可有十八。西舍競來問、願姻夫妻。恬烹羊、煮衆命、聚頭作、搖殺合、笑樂呵、呵啼哭、受殃抉。

東家の女トハ、文選宋玉が登徒子好色の賦にいはいはく、天下の佳人は、楚國に若くは莫し、楚國の麗しき者は、臣が里に若くはなし、臣が里の美なる者は、臣が東家の女に若くはなし、恬とは、詩經、君子于役の篇にいはいはく、君子役に于て、日あらず月あらず、曷ぞ其れ恬ふこと有らん、註に、恬は會也、殃とは、左傳襄公二十八年穆子がいはいはく、善人の富める之れを賞と謂ふ、淫人の富める之れを殃と謂ふ、天それ之れを殃するか、その聚めて旂れを殲さんとするなり云云、この詩の主意は、世人婚姻の日、往々に多くの物命を殺害して慶會を作す、是れ盡く地獄の因縁なること、を訶責するなり、入聲の仄韻を歩む、我東家の女を見るに、年有十八可り、西舍競ひ來て問ふ、願くは姻して夫妻恬せんと、羊を煮て衆命を煮、頭べを聚めて姪殺を作す、笑ひを合で樂み呵呵たれども、啼哭して殃抉を受けん、我れ我が家の東隣の家の娘を見るに、年はたしか十八ばかりと稱ほしくて、窈窕たる艶姿に、花の顔、月の眉、誰れか念ひを掛けざる者やある、近處隣家の美少年、麗ひ來りて問ひ曰く、願くは婚姻して夫妻一室に居て終生の契りを結ばんと、今夜は是れ

吉時良日なるをもて、親戚朋友を會合して、牛や豕や羊の衆くの物の命あるものを殺戮して、頭をあつめて相ひ娛み、情を含み笑ひを帯びて歡樂す、呵々とは、笑ふ貌なり、しかしながら、人生は半樂半苦、苦中に樂あり、樂中に苦あり、歡樂極まりて哀情多し、今はかく相笑相樂むとも、いつか又啼血哭泣して、死別生別、怨憎悲哀の殃抉を受くること有らん程に、諸子それ能く清淨の大戒を護持すべし、

田舍多桑園、牛犢滿廐、轍冒信有因果。頑皮早晚裂、眼看消磨盡當頭。各自活、紙袴瓦作禪、到頭凍餓殺。

田舍に桑園多し、牛犢廐に滿つ、肯へて因果あるを信せんや、頑皮早晚裂けん、眼に看る消磨し盡くることを、當頭に各自に活す、紙の袴瓦を禪に作る、到頭凍餓し殺さる、韻字は入聲の仄韻を用ゆ、頑皮トハ、智度論に云く譬へば、牛皮の如し、未だ柔かならずんば屈折すべからず、信無き人も亦是の如し、この詩の主意は、世の癡福の人を呵す、常に儒者を行じて恣に不善を作す、一朝福力盡き、禍害聚まるの日、百計も亦救ふ可からず、是れ畢竟因果を知らざるに依る、紙の袴瓦を禪に作る、夫れ紙は袴に作る可からず、まかるを把りて袴に裁して著く、夫れ瓦は禪に宜しからず、まかるを把りて禪に綴て帶ぶ、その落魄鬼怪、目を驚かすの形摸、即當破墮、常に反するの体裁、一幅の巧書を展るが如し、是れ寒山が人意の表に超過し、文字の外に遊戯する

出格脱酒、活達微妙三昧力より唱へ出だす者なり、但だ恨むらくは知音の腹を抱へて大笑する無きことを。扱て田舎の農家には、桑麻の田園を澤山に所有し、牛や小牛(犢)も多く有りて廐屋に満ちて有るゆへ、衣食住に不自由無ければ、敢て善因善果、惡因惡果の道理を信せんや、口に徳義の言を語らざるを頑と云ふ、いはゆる因果の道理を信せざる頑皮、何れの日か裂け破れ去らん、眼に看る消え去り磨し去りつくることを、當頭に各々自から活計す、紙をもて袴を作り著、瓦をもて禪を作る、畢竟みな是れ因果を信せざる不道理の仕方なり、賊に笑ふ可き事なり、かくの如き者は、到底凍へ餓へて殺さるゝならん、

我見百千狗箇箇毛拳擊臥者渠自臥行者渠自行投之一塊骨相與
嗥喋爭良由爲骨少狗多分不平

詩の作方には、比、賦、興、風、雅、頌、の六義あり、此詩は、比の体なり、世人の小利の爲めに、鬭争困苦することを呵責す、自臥自行トハ、戰國策に、昭襄王の篇にいはいはく、秦の相應候がいはく、大王の狗を見るに、臥すものは臥し、起る者は起き、止まるものは止まる、相共に鬭ふものなし、これに一塊の骨を投すれば、軽く起き相ひ鬭ふ者は何ぞや、争ふ意あればなり、鬭擊トハ、毛髮の亂れたるなり、嗥喋トハ、狗嘯さんと欲するなり、法華譬喻品科註に、嗥喋嗥吠は、言論に發して是非を決するの理なり、嗥喋トハ、唇を張り齒を露はすなり、我れは、寒山自

稱の辞也、我れ百千の狗を見るに、箇々みな毛色鬭擊として亂れてある、臥すものは彼れみづから臥し、行くものは彼れみづから行く、まかし、之れに一塊の骨を投げ與ふれば、群狗相ひどもに、相ひ争ひ相ひ呀む、その故へ如何ぞや、骨少くして狗多きが爲めに、相ひ分つことあらず、强者の爲めに制せられて、弱者みな不平の心を懷けり、

極目兮長望白雲四茫茫鷓鴣飽腹騰鸞鳳飢徬徨駿馬放石磧蹇驢
能至堂天高不可問鷓鴣在滄浪

寒山今日を張り極めて遠さを望めば、白雲は四方に立ち塞がりて茫茫たり、鷓鴣や鴉の如き惡鳥は、肉に飽て腹脹と能く肥へ太りてをる、鸞や鳳の如き靈鳥は、食物に乏しく飢へて、徬徨と徘徊て心安すからず、駿馬は、千里の馬で御坐る、かやうの名馬は打ち棄てられて、石磧に放たれ、蹇驢トハ、ピツコ引きの驢馬が用ひられて堂奥に上る、嗚呼世は倒様ぞや、君子野に在り、小人位に上り、石が流れて木の葉が沈む、是非輕重混亂ぞや、龍蛇玉石混淆ぞや、天に問はんと欲するも、天高ふして答へず、鷓鴣トハ(和名、ミンサソヘ)、小鳥で御坐る、鯢魚は滄浪に躍り、鷓鴣は一枝に安ずる筈なるに、まかるに、鷓鴣が滄浪に在るトハ、是れ亦倒様事ぞや、嗚呼世も澆季に成り果つる哉

洛陽多女兒春日逞華麗共折路邊花各持挿高髻髻高花浴匝人見

皆睥睨。別求醪々。伶將歸見夫婿。

韻字は仄韻を歩む、この詩、全体提起なり、啓匣トハ、當に匣匣に作るべし、周繞なり、睥睨トハ、喜びを含みて微笑して以て窺み視るの義なり、流眇の貌なり、又邪視なり、醪トハ酢味なり、扱て洛陽の都には、嬋娟窈窕たる少女が澤山とざる、春の日に、金の釵玉の帶、それと成るたけの華麗なる装ひをなし、共に路傍の美麗なる花枝を手折りて、名々に手にもちて高き髻りに挿ひ、雲の如き鬢髪、蟬翼の鬢、高く結ひたる髻に、花が澤山匣匣と周繞あり、人これを見て正に見る能はず、皆な情を含み笑みを含みて流し目にして視る、特に醪味なる怜意を求むるには及ばぬぞ、相ひ共に將ひ歸りて夫婿に見へよ、

春女街容儀相將南陌睡看花愁日晚隱樹怕風吹年少從傍來白馬黃金羈何須久相弄兒家夫婿知

街トハ音眩なり、自から於るなり、曹子建が曰く、街女は貞ならず、街士は信あらず、陌トハ、市中の街を陌と云ふ、南北に通ずるを阡と云ひ、東西に通ずるを陌と云ふ、四支の韻を歩む、春情を懐ける少女、容儀の艶麗を矜りて、群を作して手を取りて南陌の睡りに徘徊す、花を看ては興に乗じ永き日の早く没するを惜み、木影にかくれては、風に吹かるゝを怖るゝが如し、まだ年少き美男見、傍らより來る、その扮装は、白馬に黄金もて作れる羈を引く、少女少年久しくこゝに

相ひ弄むるべからず、兒家の夫婿が知る事もや有らんはせに、

群女戲夕陽風來滿路香綴裙金蛺蝶挿髻玉鴛鴦角婢紅羅縵閨奴紫錦裳爲觀失道者鬢白心惶惶

此詩は、毀刺て自から省せしむるなり、七陽の韻を用ゆ、滿路香トハ、開元遺事に曰く、都中の名姫楚蓮と云ふ者、國色無雙なり、時に貴門の子弟相ひ詣す、蓮香出入毎に蜂蝶相ひ隨ふ、蓋し其の香を慕ふなり、角婢トハ、丁角の小婢を謂ふなり、縵トハ、韻會に結ぶなり、絲縵なり、閨奴トハ、閨豎を云ふなり、惶トハ音黃、惑なり、恐なり、夕方の頃、多くの美女が粧ひを凝らして戯れ遊でをるが、涼風がそよ〜と吹きくるに隨て、そこはかと無く香しき事よ、紅の裙には、金もて作りたる蛺蝶を綴り、高き髻には、玉もて縫ひ出せる鴛鴦をさしはさむ、蛺蝶や鴛鴦は、少女が無限の春懷を形容す、丁角の小婢は、紅羅の縵を髻に結び、閨奴は紫錦の裳を着る、嗚呼果たして艶か果たして醜か、それに就て能く觀察せよ、眞誠の大道を失却する底の人、少年は老ひ易く、學道は成り難し、鬢毛白ふして心恐惶して安からざるなり、

若人逢鬼魅第一莫驚據捺硬莫采渠呼名自當去燒香請佛力禮拜求僧助蚊子釘鉄牛無渠下背處

仄韻を用ゆ、鬼魅とは、法華文句の十陀羅尼品の釋にいはく、咒は是れ鬼神王の名なり、その王

の名を稱すれば、部落、主を敬して敢へて非を爲さず、故に能く一切の魍魎を降伏す、鬼魅とは妖怪で御坐る、もしも人が妖怪にでも出逢ふたならば、第一番に驚きおそれてはならんぞよ、捺硬なつて妖怪に執着するなよ、向ふから、おれは一ツ目小僧じやぞうといつて出て來たら、おれは目が一ツも無いと云つて目を閉ぢよ、しからば、妖怪も自づから消滅し去らん、唯だ一向に禪心堅固にして、沈水香を焼て、佛陀の神通力を請ひ願ひ、禮拜供養して和合僧の助力を頼み求めよ、かく禪心定念が堅牢なる時は、魍魎魍魎、狐狼野干も奈何ともすること能はず、あだかも、蚊虻が鐵で作た牛に向て噛み付く様なものじや、到底その術を下す可き場處も無きことで御坐る、浩浩黃河水東流長不息悠悠不見清人人壽有極苟欲乘白雲曷由生羽翼唯當鬢髮時行住須努力

浩浩とは、水の廣く流るゝ貌、曷とは何なり、鬢とは、詩經に、鬢髮如雲云、注に、鬢は黒髮なり、韻字は入聲の仄韻を用ゆ、此詩の主意は、専ら遷流無常を賦す、問ふ、鬢髮の時須らく努力むべしと、如何んが努力めて菩提を成ずることを得ん、答ふ、若し眞實につとめて菩提を得んと欲せば、須らく見性一回すべし、もし見性の眼無くんば、眞行を行じて、たとひ僧祇劫數を歴るゝも、總べて是れ生死の大兆なり、さて浩浩と廣く流るゝ黃河の水、東流して千里遠く去て息まず、見渡せば悠悠として清きことを見ず、丹丘千年に一たび焼け、黃河千年一たび清む、人

々の壽命は僅かに百年に足らざれば、黃河の清むは俟つべからず、苟も彼の白雲に乗じて青天に登らんと欲するゝも、何に由りてか此の身に羽翼を生ずることを得んや、唯だ當さに青年黒髮の間に、行住にも坐臥にも、この生死の一大事因縁を悟覺せんことに勤勉努力して怠るべからず、乘茲朽木船采彼維婆子行至大海中波濤復不止唯齋一宿糧去岸

三千里煩惱從何生愁哉緣苦起
四支の灰韻を用ゆ、煩惱トハ、涅槃經第三十四迦葉品、迦葉菩薩、佛に白ふして言さく、煩惱トハ、謂はゆる惡なり、惡煩惱に從て生ずる所の煩惱を、又名づけて惡と爲す、是の如きの煩惱則ち二種あり、一には因、二には果、因惡なるが故に果も惡なり、果惡なるが故に子惡なり、維婆果の其の子苦なるが故に、華果莖葉一切みな苦なるが如し、猶ほ毒樹の其の子毒なるが故に果も亦是れ毒なるが如し云云、この詩の主意は、人世の危殆を説く、朽木の船トハ、五蘊の形質を云ふなり、維婆子と云ふは苦果なり、言ふこゝろは、人々、四大假合、幻化敗壞の漏船に乗じて、錯まりて堅固安逸の思ひを作す、五慾を恣にして、五塵の苦果を貪り求む、永く生死苦海の中に在り、是の故に、利衰譏譽の八風、四山を碎て怒り吼へ、貪瞋痴慢の萬浪、九天を没して漲り激す、永夜長切苦聚無間斷、一宿の糧を齎すもの、言ふこゝろは、只だ一念の希望、貪求の安心のみ、毫

どに一點も菩提資糧の貯へ無し、岸を去る三千里トハ、言ふこゝろは、涅槃常樂の彼岸、湛然と

して、當處を離れず、觸目みな是にして、塵々刹々、寂光の本土なりと雖も、三毒の電影に障礙せられて、終に三千萬里の波浪を隔て、永く三界二十五有の苦趣に流轉す、なに、因りて是の如くなりとせば、諸苦の因る所、貪慾を本と爲すが故に、苦因をもて苦果を結ぶ、たとへば維婆果の如し、何れの時か休期あらんや、寔に悲むべきものなり、

默黙永無言後生何所述隱居在林藪智境何由出枯槁非堅衛風霜成天疾土牛耕石田未有得稻日

無言とは、論語陽貨の篇に曰く、予れ言無なからんと欲す、子貢いはく、子もし言はざれば則ち小子何をか述べん、子いはく、天何をか言ふ哉、四時行はれ百物生ず、天何をか言ふ哉、枯槁とは、莊子齊物論の篇にいはいく、形は固に槁木の如くならしむ可し、而して心は固に死灰の如くならしむべきか、今の凡に隠くる、者は昔の凡に隠る、者にあらざるなり、石田とは、史記、子胥がいはいく、猶は石田の用ふる所なきが如し、注に、石田は耕すべからざるなり、述とは、字彙に、食律の切、音、術、循なり、又人の事を紀し、人の言を纂む、皆な述といふ、この詩の主意は、方等彈呵の主旨を賦して、以て緘黙枯坐、一生皆處屠地にして、かの小乘偏執の窮子を學で、おや、まりて佛法と爲す底の默照邪黨を呵責するなり、かの二乘聲聞縁覺の輩は、自覺ありて他覺なく、永く緘黙して藪林の中に獨坐し居らんには、後進晚學の者、誰れの力に資りて學道に進むことを

得んや、たゞ隱居して飛花落葉を見て自から樂んで、大慈度他の大誓願無き時は、大圓鏡智の妙徳は、何に由りてか顯露し來らん、その様に枯木死灰の如くに成ては、眞の堅固なる護衛とは作し難し、雪風霜露これが爲めに天然の痼疾を作り出し、春風溫和の妙境に出て、神通妙用を伸ぶること能はざるべし、その用に立たざる事を譬へて見ようものならば、土泥をもて作りたる牛にて石の田を耕す様なものじや、幾年骨を折り力を盡すとも、一向に一穗の稻を得る日は有らざるべし、

山中何太冷自古非今年杳嶂恒凝雪幽林每吐煙草生芒種後葉落
立秋前此有沈迷客窺窺不見天

杳嶂トハ、文選の註に、重山なり、芒種トハ、五月の節なり、立秋トハ、七月の節なり、沈迷の客トハ、劉從益が詩に曰く、陰魄沈迷終鬼歸、陽精飛鍊即心全、三山縹緲誰能到、日下身安亦是仙、韻字ハ一先を用ゆ、詩の主意、無明晝夜の境界を賦したり、山中何ぞ太だ冷しきトハ、言ふころは、無明人我の山中、終に惠日の照耀に逢ふこと能はず、故にその凍饑候寒忍ぶべからず、是れ今日かくの如くなるのみにあらず、未來永劫の貧困知るべきなり、杳嶂恒に雪を凝らすトハ、杳ハ字彙に、達合の切、重疊なり、言ふころは、人我重疊たる深山、一點も般若の智火に觸るべし、こと能はず、故に慳貪執着の氷雪、とこしなへに堅剛にして詔曲阿諛の稠林、晝夜煙を吐く、苦

聚知りぬべし、草は生ずと種の後は、根本の所見顛倒するが故に、萬境みな顛倒す、此に沈迷の客有りトハ、此の中の長者子、迷中に迷を添へ、暗上に暗を重さぬ、いづれの日か阿字不生の惠日を見ることを得んや、いくたびか真如の明月を見んと欲して天を窺ひ窺ふとも、何ぞ得べけんや、

山客心悄悄常嗟歲序遷辛勤采芝朮排斥詎成仙庭廓雲初卷林明月正圓不歸何所爲桂樹相留連

悄トハ、説文に憂なり、詩經に、憂ふる心悄悄たり芝朮トハ、芝ハ瑞草なり、本草に赤白黒青黄等の芝あり、朮ハ本草に、一にハ山薊と名づく、一にハ山姜と名づく、并に久しく服すれば身を軽くし年を延べて飢へず、搾トハ、字彙に、疏鳩の切、音蒐なり、索むるなり、求むるなり、桂樹トハ、(和名カツラ)この詩の主意は、鍊鍛の道士、終に所益なきことを述ぶるなり、山客トハ、谷に飲み、岩に棲みて、不老長生を求むる底の道士仙客なり、悄悄トハ、常に憂愁を懐いて、安からず樂まざるなり、何によりてかくの如くなるや、今千辛萬苦して、長生久視の法術を求むといへども、歲月の序は日に隨て遷流し去り、形骸は歲月を逐て困衰し去る、伏苓、葛根、等の藥物を尋ね求め、山徑を耕破し、林藪を鑿開して、搾斥と擇び拾ふと雖も、一箇も仙道を成し得る底の漢魏の時の人を見ず、庭廓にして雲初めて卷くトハ、人々本具底の寒山(心性)ハまことに不

有_レ人坐_二山_一徑_二雲_一卷_レ兮霞_二纓_一秉_レ芳_二兮欲_レ寄_レ路_二漫_一兮難_レ征_レ心_二惆_一悵_レ狐_二疑_一年_二老_一已_レ無_レ成_レ衆_二嗶_一斯_二蹇_一獨立_レ兮忠_レ貞

老不死の郷國である、霧盡き雲收て、洞然明白、寥廓虛靈、只だ一輪の明月のみなり、何によりてか人々具有底の家山に歸入せずして、徒らに辛苦して丹竈の功を求むるや、みな盡く老死して道士舊棲修鍊の場には山月のみなり、桂樹の花は、天香を發して舊きによりて留連するなり、有_レ人坐_二山_一徑_二雲_一卷_レ兮霞_二纓_一秉_レ芳_二兮欲_レ寄_レ路_二漫_一兮難_レ征_レ心_二惆_一悵_レ狐_二疑_一年_二老_一已_レ無_レ成_レ衆_二嗶_一斯_二蹇_一獨立_レ兮忠_レ貞、徑トハ、奚輕の切、音、刑、廣韻に、連山の中絶なり、この詩の主意は、賢才君子野に在りて聖明の君に逢はざるの嘆を述ぶ、楚辭の躋裁あり、人あり山_二徑_一に坐すトハ、寒公自から言ふなり、言ふころハ、寒公既に大道に入得して、本分の家山を斷坐す、雲卷き兮霞纓ふトハ、おのづからはれ人跡不到底の妙峰頂なり、芳を乗りて兮寄せんと欲すればトハ、此の道德の餘薫を以て一切の人に施與して人天を利益せんと欲すれども、路道漫々として相ひ隔絶するなり、是れ寒山子が世人を捨てて隔つるに非らず、人人みづから人我の山岳を築て、驕慢の林樹に培ふて終に救濟し難きなり、この故に、或は惆悵し、或は狐疑す、斯の蹇者トハ、寒山子今窮港凍餓の貧士にして、教化を信受する底の一人あるを見ず、このゆへに、人みな冷笑して輕忽にすといへども、誰か知らん乾坤大地、寒公一箇の全身、萬象森羅、日月星彩、總に是れ寒山萬德の瑞相好なることを、この時度し盡さざる底の衆生なく、聖化に漏る、底の品類無し、このゆへに言ふ獨立して兮忠貞な

りど、惆悵トハ、玉篇に、悲愁なり、増韻に、志を失て望み恨むる貌、蹇トハ、足跛なり、嘔啞トハ、強て語り笑ふなり、冷笑と同じ、獨立とは、文選、李蕭遠が運命論にいはく、夫れ忠直の主に逆ふ、獨立の俗に負く、理勢の然るなり云云、

猪喫死人肉、人喫死猪腸、猪不嫌人、人返道猪、香猪死、抛水内、人死掘土藏、彼此莫相瞰、蓮花生沸湯。

韻字は七陽を用ゆ、此の詩の主意は、卵、胎、濕、化の四生、互に相ひ喰ふて、生死はまじり無きことを呵責す、蓮華トハ、佛劫禪師、戒殺の文にいはく、他の一樹を食れば、又他に一樹を還せ、古聖言ばを留むること終に偽りならず、若し能く殺を戒め念佛を勤めば、決して蓮臺上品會に到らんこと必せり云云、猪トハ、(和名イノシシ)扱て猪ハ死人の肉を喫ひ、人は又死したる猪の腸を喫ふ、かの猪ハ死人の臭氣あるを嫌ひません、之かるに人は却りて猪肉の香しきを道て喜びます、猪は死してその屍を水の内に抛うち、人は死してその屍を土を掘て藏めて、彼の猪と此の人と、互に相ひ瞰ひ合ひするやうな事は無ければ、無垢清淨、清香積郁たる蓮華が沸にへ立ちたる熱湯の中に開發するで御坐ろう、なんとなれば、相ひ互に殺害するの罪障消滅すればな

快哉混沌身、不飲復不尿、遭得誰鑽鑿、因茲立九竅、朝朝爲衣食、歲歲

愁租調、千箇爭一錢、聚頭亡命叫

混沌トハ、莊子、應帝王の篇に曰く、南海の帝を僞と爲し、北海の帝を忽と爲し、中央の帝を渾沌と爲す、僞と忽と時に相ひ與に渾沌の地に遇ふ、渾沌之れを待すこと甚だ善し、僞と忽と渾沌の徳に報いんことを謀る、曰く人みな七竅あり、以て視聽食息す、此れ獨り有るなし、嘗て試みに之れを鑿たんと云ふ、日に一竅を鑿つて、七日にして渾沌死す云云、租調トハ、後漢書、明帝の本紀にいはく、今年の租調を收むること勿らしめよ、租ハ田賦なり、又聚なり、詩の幽風に、予が畜へ租る所云々、唐の武德二年、初めて租庸調の法を定む、注に、田あれば則ち租あり、家あれば調あり、身あれば庸あり、租は穀を出し、庸は絹を出し、調は絹を出す云云、一錢を争ふトハ、事文類聚前集二十六に曰く、曹子建樂府にいはく、巢許四海を蔑し、商賈一錢を争ふ、亡命トハ、史記の張耳が傳にいはく、張耳嘗て亡命して外黃に遊ぶ、注に、崔浩がいはく、亡は無なり、命は名なり、逃れ匿る、ときは名籍を削除す、故に逃るを以て亡命と爲す、外黃トハ、處の名なり、ア、心よき哉かの渾沌の身軀は、目も無ければ鼻もない、耳も無ければ口も無い、肛門も尿口も何にも無い、ゆへに飲み食ひせざれば尿尿することも無し、ある時誰れか來りて、之れに九の竅を鑿つことをうるに遭ふ、これが爲めに耳二、目二、口一、鼻二、陰陽二、の九の竅を立つ、サア其れから段々と事がやかましく成りて來て、朝々夜々、衣たり食ふたり飲たりす

るが爲めに色々種々と心配せねばならぬ上に、毎年毎歳、御上から御調收になる年貢租税の厚きを愁ひ、眉毛の間に皺のよる様な事ばかりじや、とかく世の中は愁の世の中で、古の巢父ダノ許由ダノと云ふやうな人は、天下の富も御無用ダと云て遁れ去りたとか云ふ事は、古話と跡たへて、今ははや、愁の皮の千枚張りど云ふやうな人々が大勢寄り合て、わづか一銭の銅貨をも争奪する、ア、此れではたまらんとて、父母の國にも居ることもならず、止むを得ず夜通を致さねばならんことに至るとは、世の中が不景氣で、ねから錢もうけも無いのに、物價は追々騰貴米價も次第に騰貴、御上の租税の御取立は嚴酷、酷吏爪牙を磨して村落に入り租税を督促することは恰も蒼鷹の雀を驅るが如く、猛虎の群羊を逐ふが如し、これではどうして夜通をせず居られうぞ、

啼哭縁何事。淚如珠子顆。應當有別離。復是遭喪禍。所爲在貧窮。未能了因果。冢間瞻死屍。六道不干我。

扱てこの詩の主意は、人の啼哭するの聲をきいて、卒爾として述ぶるものなり、六道我に干からずトハ、言ふこゝろは、生死輪轉は皆な盡く妄心假我の所爲にして本有自性の真我の上には、毫釐も相ひ干渉からざるなり、云々、涙如珠子顆トハ、蒙求の上卷にいはいく、淵客珠に泣くと、舊注に博物志を引て云く、斂人水中より出で、人家に向て寄住し、日を積で絹を賣る、去るに臨で主人より一器を索め、泣て珠を出だし、盤に滿て以て主人に與ふ云云、別離トハ、楚辭の九歌に曰

く、悲は生きて別離するより悲きは莫し云云、扱て世の人々が、聲を限りと泣啼働哭するは、つまり何の事にか由るや、その流るゝ涙は、恰も日南の斂人の涙の珠を成せるが如くじや、あのやうに泣くからには、まさに生別離か死別離かの事なるべし、大かた裘の禍に遭ふたので有つう、その啼泣が若しも貧窮の爲めにするならば、その人は未だ善因善果、惡因惡果の道理を悟了すること能はざる人なるべし、早く冢間に行て御覽なされ、白骨墓間に狼藉たり、生老病死、四苦八苦、六道輪回の苦みは、みな是れ貧賤痴三毒煩惱の仕業にて、本來本法性、天然自性心の上には、秋毫も相ひあづからざるなり、

婦女慵經織。男夫嬾耨田。輕浮耽挾彈。跼蹐拈抹絃。凍骨衣應急。充腸食在先。今誰念於汝。苦痛哭蒼天。

備、嬾、ともに是れ心の怠るなり、(和訓、モノウシ)輕浮トハ、阮嗣宗が詠懷の詩にいはいく、平生少年の時、輕浮にして絃歌を好むと文選に見ゆ、彈を挾むトハ、說苑にいはいく、吳王刑を重くせんと欲す、諫者死す、舍人の曰く、園に蟬あり、悲鳴して露を飲む、蟬の其の後へに在ること知らず、蟬蟬を捕へて黃雀の其の後へに在ることを知らず、臣彈丸を挾んで黃雀を取らんと欲す、露の衣を沾すことを覺へず、かくの如く皆な務め其の前に得んと欲して、その後へを顧みざるなり、吳王乃罷む、跼蹐トハ、韻會に、跼、的協の切、一には曰く徐行なり、又行て履を

人ダから、誰れか能く伊れどもに談を出来やうぞ、令教やれ此の様な人と共に、この處に居らぬが宜しからん、

有漢姓傲慢名貪字不廉一身無所解百事被他嫌死惡黃連苦生伶白蜜甜喫魚猶未止食肉更無厭

漢あり姓は傲慢。名は貪字は不廉。一身解する所なし。百事他に嫌はる。死は黃連苦しと惡み。牛は白蜜甜しと恰む。魚喫つて猶は未だ止まず。肉を食つて更に厭くことなし。漢トハ、彼地風俗、人を呼で漢と云ふ。黃連トハ、本草綱目十三に、黃連は性寒に味苦し、白蜜トハ、本草綱目三十九に、蜂蜜或は石蜜と名け、或は白蜜と名つくるの説あり云云、こゝに一の人物がある、その姓は傲慢と申す、その意はおどろ、たかぶり、人をあなごるといふ事じやさうダ、その名は貪、これも物をむさぼり、慾を張る意じやさうダ、その字は不廉とて、何んでもかんでも取る事なら正月元日の屍骸でも、出す事と來たら、手を出すのもと云ふ様な慾ばり房で御坐る、百事何事も他人にさらはるゝ事ばかりをする可厭な奴、さうして死ぬることを嫌ふさまは、黃連の苦味の如くし、生ることを欲するさまは、蜂蜜の甜味の如くす、魚肉を喫て止まず、牛肉を食て厭くことを知らず、嗚呼此輩ハかく貪慾を逞ふするからには、業罪消滅の曉は御座らんど、生死解脱の夕は御座らんど、

縱偏居犀角饒君帶虎睛桃枝將辟穢菘穀取爲瓔暖腹菜羹酒空心
枸杞羹終歸不免死浪自覓長生

犀角とは、本草綱目に、犀能く邪精鬼魅中惡毒の氣を避く、或る一説には、避塵犀、避邪犀、避寒犀、云云、桃枝トハ、禮記、檀弓の下篇にいはいはく、君臨三臣喪以三巫祝桃刻執戈惡之也、注にいはいはく、桃の性惡を避く、鬼神之れを畏る云云、又事物紀原の八に、桃版、桃符の説、當に併はせ看るべし、菘穀トハ、翻譯名義集に、五辛、一にハ葱、二にハ薤、三にハ韭、四にハ蒜、五にハ興渠、云云、菜羹の酒トハ、群玉府にいはいはく、費長房、桓景に謂つていはいはく、汝が家九日當に災厄有るべし、急に宜しく去て家をして多く糝囊を作りて菜羹を盛り以て臂に繫け、高きに登り菊の花の酒を飯ぬ、此の禍消すべしと、景、その言の如く、家を擧つて山に登る、夕べに還り見れば鶏狗牛羊、一時に暴死すと云云、虎睛を帶ふトハ、未跡未だ詳かならず、枸杞トハ、事文類聚後集二十九に、朱孺子幼にして道士王元成に事へて大若岩に居れり、一日溪流に汲む、二華犬を見る、因て之れを逐へば枸杞叢下に入る、之れを掘れば根の形ち二犬の如し、煮て之れを食はば忽ちにして身の輕さを覺ふ、千峰の上に飛ぶ、雲氣之れを捲して去る云云、擬て擬令ひ御前さん輩が、犀角や、虎睛や、桃枝や、菘穀や、菜羹の酒や、枸杞などを取り集めて、邪氣を掃ふたり、穢氣を避けたり、腹を暖めたり、心を空ふしたりした處が、到頭のつまりは、何にもならないや、

どうしても、こうしても、此の死といふ一事件は免かれられぬぞ、その様な色々と心配して藥物を食用して、浪りに自から不老長生の法を覚むることを用ゐるんや、世の中を何處から見ても噓ばかり死ぬことばかり實なりけり、

ト擇幽居地天台更莫言猿啼谿霧冷嶽色草門連折葉覆松室開池引澗泉已甘休萬事采蕨度殘年

この詩は仲々面白ひ、諸子それを重吟せよ、トして幽居の地を擇ば、天台更に言ふこと莫し、猿啼て谿霧冷し、嶽色草門に連る、葉を折りて松室を覆ひ、池を開いて澗泉を引く、已に萬事を休すること甘なつて、蕨を采りて殘年を度る、韻字は一先を用ゆ、扱て幽靜の住居をトひ擇ば、天台山が第一で御座る、その有様は、山猿叫で谿間の霧深く立ちふさがりて冷いぞ、山嶽の色蒼々として草庵の門頭に連りてある、ある時は、木の葉を折りて松室を覆ひ、池を穿ちて澗の泉を引きとる、ア、善い心もちじや、塵世の俗事を休罷するを甘しとして、山中に蕨を探りて惠命を續き、清貧を樂で僅かに残れる年齒を送ることで御座る、益者益其精可名爲有益易者易其形是名爲有易能益復能易當得上仙籍無益復無易終不免死厄

を益すトハ、精トハ謂はゆる精神なり、素問にいはいく、恬憺虛無なれば、眞氣これに従ふ、精神内に守り、病ひ何れよりか來らんと、今言ふこゝろは、平生守一無適にし去て、もつばら本元の氣を養ふ、精神をして内に充たしむれば、則ちまことに謂はゆる其の精を益す者なり、扱て我が云ふ所の益と云ふことは、その人々の精神を益して、眞氣を充たしむるなり、之れを名づけて利益學道と云ふ可きなり、易とは、その人々の凡形を易へて、仙形を得るなり、これを名づけて形をかへると云ふなり、能く精神を益し、また能く形をかへ、しかる時は、まさに仙人に登上することを得らるべし、若しそれ精神を益し、眞氣を充實ならしむること無き時は、又た凡形を易へ仙骨を得る事無くんば、終に病死の厄難を免かれざるなり、

徒勞說三史浪自看五經泊老檢黃籍依前注白丁筮遭連蹇卦生主虛危星不及河邊樹年々一度青

此の詩の主意は、博文を恃んで、みだりに官祿を願ふことを嘲て、禍福は因果に縁ることを示す、三史トハ、韻府に曰く、史記及び前漢書、後漢書を三史と爲す、五經トハ、詩、書、易、春秋、禮記を五經と爲す、黃籍トハ、黃ハ書帙の色なり、白丁トハ、前漢書鄒陽が傳にいはいく、白徒の衆を毆る師古が注にいはいく、白徒ハ、もとより軍旅の人に非るを言ふ、今の白丁と言はんがごとし矣、註トハ、韻會に註通じて注に作る、蹇なり、蹇トハ、艮下坎上の卦なり、易にいはいく、蹇は

難なり、險前へに在るなり、虛危星トハ、惡星なり、左傳に云く、玄武の宿ハ虚危の星なり、群
玉府に、虚危ハ北方の星なり、大明三處法數四十八に、北方七宿の内、虚宿は那遮羅國を主とる、
危宿ハ、昔華冠を主とる云云、いたづらに勞苦して、三史を講説したり、みだりに自から勤勞し
て四書五經を讀む、老年に及でから書物をしらべ、依前としてやはり白丁の人等に註釋せられ、
ト筮しては連塞の難卦に遭逢し、世に生れてハ、虚ダノ危ダノと云ふやうな惡星を主とる、嗚呼
不仕合な身の上とや、是れ因果應報の然らしむる處ぞ、福少き身の上ハ、彼の河の邊りの柳の樹
の年々一度春來れば青々たることもあるにも及ばざる事で御坐る、

碧澗泉水清寒山月華白默知神自明觀空境逾寂

この詩の主意は、寒山の境致を賦して、真心の現成することを示す、扱て碧色濃かなる澗には、
泉の水が滾々と流れて清らかな事で御坐るが、是れ取りも直さず真心の現成で御坐り、寒山夜深
けて月の光皎々として白し、これも真心の現成で御坐る、默然として打坐すれば、理智冥合して
精神おのづから洞然明白なり、彼の眞空を觀すれば、前境いよく寂靜なり、これも真心の現成
で御坐る、

我今有一襦非羅復非綺借問作何色不紅亦不紫夏天將作衫冬天將作被冬夏遞互用長年祇這是

この詩の意は、空劫以前も、空劫以後も、唯だ此の一襦にして足ることを示す、謂はゆる珍御の
服なり、襦は説文に短衣なりとある、我トハ寒山自稱の辭なり、我今一牧の襦衣が有る、その襦
衣ハ、羅といふ薄絹にもあらず、又綺といふ錦にもあらず、ついでに御たづね申す其の襦衣は、
何の色に染めてあるか、その色は、紅にもあらず、又紫にもあらず、夏の日には、これを以て衫
といふ薄衣になし、冬天には、これを以て被といふ暖衣に作る、冬天夏日たがひに用ゐて、長年
從劫至劫祇是是れ是れで、別に異風は御坐らぬ事である、

白拂梅檀柄馨香竟日聞柔和如卷霧搖拽似行雲禮奉宜當暑高提復去塵時時方丈內將用指迷人

扱てこゝに一の拂子が御坐る、白毛にして梅檀の木で柄が作りてある、その梅檀が、馨香と香ば
しくて、竟日聞へかほる事で御坐る、その白毛が、柔和かにして、霧を巻くが如く見へる、搖拽
どうごさうといて行く雲の如し、禮儀禮奉には、暑さにあたるに宜し、高く提げて又塵埃を拂ひ
去るべし、時々方丈の室内に於て之れを將ひて道に迷ふ人を指示す、故に拂子と云ふ物は、道人
の必需品で御坐る、この詩は、學者須らく子細に吟弄すべきなり、

多少般數人百計求名利心貪覓榮華經營圖富貴心未片時歇奔突如烟氣家眷寔團圓一呼百諾至不過七十年冰消瓦解置死了萬事

休誰人承後嗣水浸泥彈丸方知無意智。

百諾トハ、韓詩外傳には、前に當て意を決し、一呼すれば再諾する者は人の類なり、韻瑞に見へたり、七十年トハ、枉詩に曰く、人生七十古來稀なり云云、瓦の如くに解置ストハ、前漢難陽が傳に、瓦の如く解け、土の如く崩るゝの語あり、無意智トハ、六祖大師のいはく、下下の人に上上の智あり、上上の人に沒意智あり、團圓トハ、一には圓を圖に作る、この詩の意ハ、不義にして富み且つ貴きハ、竟に壞滅に歸することを呵責するなり、扱て世の中の種々さつたの人たちは、百計又いろ／＼さまざまと工夫して名聞利養を貪り求め、心中には榮耀榮華を貪り覓め、經營といとなみいとなみて富み且つ貴きを計る、その心未だ片時も歇まず、奔突と馳せかけづりまはりて、烟氣の如し、家内眷屬は、まことに親昵和合して、團圓と相ひ集まり坐す、一たび呼べば百諾直ちに至る、人生七十年を過ぎざるに、多年の計畫ハ、氷の如くに解消し、瓦の如くに崩解す人もし死し了らば、萬事休息す、誰れ人か其の相續を承くべき、世計のはかなき事は、あだかも泥土をもて作りたる彈丸を水中に浸すが如く、ついに消滅し去りて跡の尋ねべき無し、方を知る意識分別の有らんや、

貪人好聚財恰如梟愛子子大而食母財多還害己散之即福生聚之即禍起無財亦無禍鼓翼青雲裡。

此の詩の主意は、富貴利達の人を害することを責めて、清貧の己れを樂むを示す、梟の子を愛ストハ、楞嚴第七に、破鏡鳥の毒樹の果を以て其の子と爲す、子成て父母みな其れが爲めに食はるゝが如し、或は史記の孝武本紀に在り、扱て貪慾心の深き人は、すき好んで財貨を聚めることに汲々としてをるが、それハ恰も梟鳥の子を愛して養成するが如きもの、その子が成長した後は、直ちにその母を食てしまふ、だから世の人よ、財多ければ還て其の身を害するはせに、成るべく財を散じて、貧民を賑はし、棄兒を養へ、しかる時は、國家の爲めにも成るし、又其身にも幸福が生じて來るぞ、慾を張りて財を聚めんとするが故に、いろ／＼の禍が起るぞ、貪慾心を放下して、胸襟一たび洒々落落たらば、財も無ければ亦隨て禍も起らない、小人罪無し、玉を懷て罪有りダ、胸襟洒々落落なる人ハ、翼を青雲外に放ちて、登仙するが如き心もちがするで有ろう、

去家一萬里提劍擊匈奴得利渠即死失利汝即殂渠命既不惜汝命有何辜教汝百勝術不貪爲上謀。

提^ひげ^て、北^{きた}の方^{あた}向^む奴^をを征^{せい}伐^{はく}する、中^{ちゆう}國^{こく}が利^りを得^えて勝^{かち}つときは、渠^か何^{なん}奴^をハ死^しぬで有^あるうが、若^ももこ
ちらが利^りを失^して敗^はれ取りしならば、汝^に等^らは死^しな、ければならん、渠^か何^{なん}奴^をハ本^{ほん}より猛^{まう}烈^{れつ}なる性^{せい}質^{しつ}に
て生命^{せいめい}を惜^{おぼ}む者^{もの}にあらす、しかるに若^もしも敗^はれ取りたらば死^しなねばならん汝^に等^らの生命^{せいめい}ハ何^{なん}の辜^{つら}か
有^ある、本^{ほん}より辜^{つら}有^あるわけで無いのに、むざ／＼と北^{きた}邊^{へん}氷^{ひやう}雪^{せつ}の間に骸^かを埋^うめねばならん、ソコデ今
寒^{かん}山^{さん}が汝^に等^らに百^{ひやく}戰^{せん}百^{ひやく}勝^{しょう}の法^{ほふ}術^{じゆつ}を教^{おし}へまいらせん、その百^{ひやく}戰^{せん}百^{ひやく}勝^{しょう}の法^{ほふ}術^{じゆつ}とは何^{なん}ぞや、別^{べつ}義^ぎで御^ご坐^ざら
ん、貪^{ひん}らざるを上^う々の謀^{はかり}略^{りやく}となす、

瞋^{しん}是^ぜ心^{しん}中^{ちゆう}火^か能^{のう}燒^{やう}功^{こう}德^{とく}林^{りん}欲^{よく}行^{ぎやう}善^{ぜん}薩^{さつ}道^{だう}忍^{にん}辱^{じやく}護^ご眞^{しん}心^{しん}

これハ實^{じつ}に結^{けつ}搆^{たう}する詩^しで御^ご坐^ざる、今^{いま}一^{いつ}應^{おう}吟^{いん}咏^{ぎやう}して聽^きせん、瞋^{しん}は是^ぜれ心^{しん}中^{ちゆう}の火^か、功^{こう}德^{とく}の林^{りん}を燒^やく、
善^{ぜん}薩^{さつ}の道^{だう}を行^いはんと欲^{よく}せば、忍^{にん}辱^{じやく}して眞^{しん}心^{しん}を護^ごせよ。韻^{いん}字^じは十一^{じゅういち}侵^{いん}を用^{もち}ゆ、この詩^しは、人^{ひと}に貪^{ひん}、
瞋^{しん}、痴^ち、の三^{さん}毒^{どく}の内^{うち}の瞋^{しん}(イカル)と云^いふこと、の眞^{しん}心^{しん}を損^{そん}害^{がい}すること、を述^のべて、瞋^{しん}を恚^いにせしめ
ざることを述^のべたるなり、瞋^{しん}といふことハ、是^ぜれ心^{しん}中^{ちゆう}の火^か炎^{えん}である、その火^か炎^{えん}を起^{おこ}す毎^{ごと}に能^よく
諸^{しよ}の功^{こう}德^{とく}の聚^{あつ}まる所^{ところ}の林^{りん}を燒^やきはろぼします、我^{われ}未^まだ正^{せい}覺^{かく}を成^{せい}せずと雖^なども、先^{まづ}づ他^たの衆^{しゆ}生^{じやう}を
て正^{せい}覺^{かく}の位^いに坐^ざせしめんと、大^{だい}慈^じ大^{だい}悲^ひの誓^{せい}願^{げん}を立て、衆^{しゆ}生^{じやう}濟^じ度^どに致^{いた}すとして日^ひも亦^{また}定^{じやう}らざる大
善^{ぜん}薩^{さつ}の道^{だう}を行^いはんと欲^{よく}する者^{もの}は、辱^{じやく}を忍^{にん}びて瞋^{しん}を起^{おこ}さしめ、而^{しか}して本^{ほん}來^{らい}具^ぐ有^{ゆう}の佛^{ぶつ}性^{じやう}眞^{しん}心^{しん}を保
護^ごし、法^{ほふ}器^きを成^{せい}就^{じゆう}して善^{ぜん}薩^{さつ}水^{すい}を充^{ちゆう}滿^{まん}せしむべしとなり、遺^い教^{ぎやう}經^{きやう}には、汝^に等^ら比丘^{びくしう}、若^もし人^{ひと}

りて節^{せつ}々^{じやく}支^し解^げすること有^ありども、當^{まさ}に自^{みづか}ら心^{こころ}を攝^{しやく}めて瞋^{しん}恨^{げん}せしむること無^なかるべし、亦^{また}當^{まさ}に口
を護^ごりて惡^{あく}言^{げん}を出^しだすこと勿^なかるべし、若^もし患^{いん}心^{しん}を縱^{じゆう}にせば、則^{すなは}ち自^{みづか}ら道^{だう}を妨^{ぼう}げ、功^{こう}德^{とく}の利^り
を失^しす、忍^{にん}の德^{とく}たること、持^ぢ戒^{がい}苦^く行^{ぎやう}も及^{およ}ぶ能^よはざる所^{ところ}なり、能^よく忍^{にん}を行^いする者^{もの}ハ、乃^なち有^あ力^{りき}の大^{だい}
人^{ひと}と爲^なす可^べし、若^もし其^{その}れ惡^{あく}罵^まの毒^{どく}を歡^{くわん}喜^き忍^{にん}受^{じゆう}して甘^{かん}露^ろを飲^のむが如^{ごと}くすること能^よはざる者^{もの}ハ、入^に道^{だう}
智^ち惠^ゑの人^{ひと}と名^なづけざるなり、ゆへいかんとなれば、瞋^{しん}患^{えん}の害^{がい}ハ則^{すなは}ち諸^{しよ}の善^{ぜん}法^{ほふ}を破^{やぶ}り、好^{こう}名^{めい}聞^{もん}を壞^{くわい}
す、今^{いま}世^ぜ後^ご世^ぜの人^{ひと}、見^みることを喜^{よろこ}ばず、當^{まさ}に知^しるべし、瞋^{しん}心^{しん}ハ猛^{まう}火^かよりも甚^しきことを、常^{じやう}に當^{まさ}
に防^{ぼう}護^ごして入^にることを得^えせしむること勿^なかるべし、功^{こう}德^{とく}を切^きむるの賊^{ぞく}は、瞋^{しん}患^{えん}に過^かぎたるは無^なし、
白^{びやく}衣^い愛^{あい}慾^{よく}非^ひ行^{ぎやう}道^{だう}の人^{ひと}、法^{ほふ}の自^{みづか}ら制^{せい}すること無^なきすら、瞋^{しん}猶^{なほ}は怨^{おん}むべし、出^し家^け行^{ぎやう}道^{だう}無^な慾^{よく}の人^{ひと}にし
て、しかも瞋^{しん}患^{えん}を懷^{いだ}けるは甚^しだ不可^べなり、譬^{たと}へば青^{せい}冷^{りやう}の雲^{うん}の中に、霹^{へき}靂^{れき}として火^かを起^{おこ}すことは所^{ところ}
應^{おう}にあらざるが如^{ごと}きなり、云^い云^い、忍^{にん}辱^{じやく}トハ、六^{ろく}波^は羅^ら密^{みつ}經^{きやう}に、宛^{おん}親^{しん}平^{へい}等^{とう}、罵^{のの}詈^ち打^{うち}擲^{ちやく}すども、瞋^{しん}患^{えん}起^{おこ}
さいるを是^ぜれを忍^{にん}辱^{じやく}と曰^いふ、

惡^{あく}趣^{しゆ}甚^し茫^{ぼう}茫^{ぼう}冥^{めい}冥^{めい}無^な日^{じつ}光^{くわう}人^{にん}間^{かん}八^{はち}百^{ひやく}歲^{さい}未^ま抵^{たい}半^{はん}霄^{せう}長^{ちやう}此^こ等^{とう}諸^{しよ}痴^ち子^し論^{ろん}情^{じやう}
甚^し可^べ傷^{やう}勸^{くわん}君^{きん}求^{きう}出^し離^り認^{にん}取^{しゆ}法^{ほふ}中^{ちゆう}王^{わう}

列^{れつ}子^し力^{りき}命^{めい}の篇^{ぺん}にいはいく、彭^{ほう}祖^そ壽^{じゆう}八^{はち}百^{ひやく}歲^{さい}とある、この詩^しの主^{しゆ}意^いは、人^{ひと}に向^{むか}て愚^ぐ痴^ちの情^{じやう}を増^{ぞう}長^{ちやう}せしめ
ざることを述^のべて、人^{ひと}をして戒^{かい}心^{しん}せしむるなり、法^{ほふ}中^{ちゆう}の王^{わう}トハ、王^{わう}に多^た種^{しゆ}あり、梵^{ぼん}王^{わう}あり、帝^{たい}釋^{しやく}

天王あり、四王あり、轉輪聖王あり、神王あり、閻羅法王及び大力鬼王あり、八龍王あり、乾達婆王乃至摩騰羅王等あり、中に就て最尊最貴最大最上なる者は心王に越へたるは無し、是れを法中の王と道ふ、人々具有して一箇も欠少する底の人なし、いかに識取することを得ん、いはく、備ぢ只だ一切處に於て、時々點檢せよ、即今聽法底是れ何物ぞと、慙慙に尋覓ひる底又誰ぞと、靜中闇處、點檢して間斷なくんば、日ならずして法中の王に朝謁することを得ん、わづかに出現するるときハ、梵釋四王、日月星辰、草木國土、有情非情、同時に渾身を打失す、佛祖も亦須らく命を乞ふべし、何故に此の如くなる、他曾て燈下に爪を截らず、ゆへに云ふ釋迦彌勒も猶ほ是れ伊が奴、しばらく道へ伊れハ是れ誰ぞ、扱て地獄、餓鬼、畜生、修羅等の惡趣道は甚だ茫々として、取りとめも、見分けも付かぬことで御坐る、なせなれば冥々として暗昧く日光の照り渡たすこと無ければなり、人間界の壽命が、よしんば八百歳とした處が、畢竟半宵(夜)の長さにも抵(至)らない、此れ等の諸の痴子、その痴情を論ずるに甚だ傷ましき、憐ひべき事じや、故に君(諸君)に勸め申すにハ、早く煩惱の苦海を出離解脱して、諸の王の中に於て最尊最貴最大最上の心王を認得して、天上天下、唯我獨尊の境界に達せんことを、

世有多解人、愚痴徒苦辛。不求當來善、唯知造惡因。五逆十惡輩、三毒以爲親。一死入地獄、長如鎮庫銀。

韻字は、十二分を用ゆ、五逆、十惡、三毒、ハ共に三藏法數に見へたり、鎮庫の銀トハ、或ハ曰く、異域の人、府庫の災を鎮護せんが爲めに、銀を柱礎の下に布く、此の説可なり、此の詩も亦前詩と同じく、愚痴の爲めに、造惡墮獄することを述べ、扱て世の中に、色々と智解分別計經ト度することの多き人がある、それは何の爲めじや、多く愚痴蒙昧の爲めに徒らに苦辛艱難して、爲めに惱まざる、なり、當來トハ未來と云ふ義なり、來世の善根を種ふることを求めずして、唯だ惡業を造くる因縁ばかりに奔走してをる、五逆罪ダノ、十惡罪ダノ、といふ様な色々様々の罪科ハ、みな是れ貪、瞋、痴、の三毒の煩惱が親となりて、諸の罪子を生ずる譯である、其の様な人たちが、一たび死んだなら、直ちに地獄道に落ちて、長く出づること能はざるハ、宛も府庫の中に鎮護せられてある金銀貨の如くで有らうよ、

天高高不窮、地厚厚無極。動物在其人、憑茲造化力。爭頭覓飽暖、作計相噉食。因果都未詳、盲兒問乳色。

天高く地厚しトハ、詩の正月の篇に曰く、天を蓋し高しと云ふ、敢て局まらずんばならず、地を蓋し厚しと云ふ、敢て踏せずんばならず、云云、計を作して相ひ噉食すトハ、列子說符の篇に曰く、齊の田氏、庭に於て食客千人に祖す、坐中、魚雁を献する者あり、田氏之れを視て乃ち嘆じていはく、天の民に於ける厚し、五穀を殖し、魚雁を生じて以て之れが用を爲す、衆客之れを和

すること響きの如しと、鮑氏の子年十二、次に預かる、進んでいはく、君の言の如くならず、天地萬物、我ど並びに生類なり、類貴賤と無く徒らに小大の智力を以て相ひ迭ひに相ひ食す、相ひ爲めにして之れを生ずるにあらず、人食ふ可き者を取りて之れを食ふ、豈に天本人の爲めに之れを生せんや、是れ蚊蚋膚を嗜ひ、虎狼肉を食ふ、天本蚊蚋の爲めに人を生じ、虎狼の爲めに肉を生ずる者ならん哉、云云、又楞嚴經四にいはく、諸の世間、卵、化、濕、胎、力の強弱に隨て遞ひに相ひ吞食す、又いはく、人、羊を食ふを以て、羊死して人と爲り、人死して羊と爲る、是の如し、乃至四生の類、死死生生、互に來て相ひ瞰ふ、云云、盲兒トハ、涅槃經十三にいはく、生盲人の乳色を識らざるが如し、便ち他に問ふ、いはく、乳色はなに、か似たるや、他人答へていはく、色白くして貝の如しと、盲人復た問ふ、是れ乳色ハ貝の聲の如くなるや、答へていはく、否なり、復た問ふ貝の色、なに、似たりとするや、答へていはく、稻米糶の如し、盲人復た問ふ、乳色は柔軟にして稻米糶の如くなるや、稻米ハ復た何の似たる所ぞ、答へていはく、雪の如しと、盲人復た言ふ、かの稻米糶ハ冷なること雪の如くなるや、雪復た何にか似たるや、答へていはく、猶ほ白鶴の如し、是の生盲人、是の如く四種の譬喩を聞くと雖ども、終に乳の眞色を識ることを得ること能はざるなり、云云、サテ天ハ高く窮むべからず、他は厚くして極まり無し、人類や獸類や鳥類の如き動物ハ、高天厚地の間に栖息でをることを得る所以の者ハ、全く造化神

の神通力に憑らざるは無し、萬物皆な各々頭べを争ふて飽食暖衣を貪り愛む、人は羊を喰ひ、鳥は蠱を瞰ひ、虎は人を瞰ひ、相ひ互に瞰食して窮まり無し、善因善果、惡因惡果と相ひ酬報して窮まり無し、しかしながら因果の道理を詳知せざることは、宛も盲兒の乳色を問ふが如く、幾度復問すと雖ども、終に乳の眞色を知ることを得る能はざるが如きものなり、

天下幾種人論時色數有賈婆如許夫黃老元無婦衛氏兒可憐鍾家女極醜渠若向西行我便東邊走

賈婆、衛氏トハ、蒙求中卷に曰く、晋の惠帝の賈皇后ハ名ハ南風と云ふ、父克而も三公に位す、初め武帝太子の爲めに衛權が女を取らんと欲して曰く、衛公が女ハ五可あり、賈公が女ハ五不可あり、衛家の種ハ賢にして子多し、美にして長高く色白し、賈家の種は妬んで子少く、醜にして長短く色黒し、元后固く請ふ、荀顛、荀勗并に克女の美を稱して乃ち婚を定む、鍾家トハ事文類聚前集二十に曰く、鍾離春ハ齊の無鹽邑の女なり、人となり極めて醜、自から宣王に詣して一たび見へんことを願ひ乞ふ、宣王召して之れを見る、乃ち手を舉げて膝を拊ちて曰く、殆ひ哉殆ひ哉と、宣王の曰く、願くは命を聞かん、對へて曰く、今西の方橫秦の患ひ有り、南の方強楚の讐有り、春秋四十、壯勇立たず、一つの殆きなり、漸臺五層、萬民疲困す、二つの殆きなり、賢者山林に伏し匿くる、諂諛左右に強ふ、三つの殆きなり、酒醬流而、日を以て夜に繼ぎ、女樂俳優、

縦横大笑す、四つの殆きなり、宣王喟然として嘆じて無撞の女を拜して以て王后と爲す、黄老トハ、應さにはれ老子を指すなるべし、然りと雖も、史記を考ふるに曰く、老子の子宗と名づくど、既に子あるときは則ち當に婦有るべし、今謂はゆる黄老とハ、元と婦無しと云ふ者は未だ之れを考へざるなり、集中是の例多し、猶は張三李四と謂ふが如し、強ひて論ずべからざるなり、此の詩の主意は、人天地の間に生ず、各々宿福の淺深、善行の多寡に依りて、媚あり醜あり、窮あり富あり、宿因の致す所なることを知らず、亂りに自から愛憎取捨して、彼れ西すれば我れ東す、大に錯まり了れり、願くは其の賢を貴んで而して形摸を執らずんば、おのづから賢者多くして不肖者は少からんか、宣王鍾離春を愛するハ、寔に賢明の君なり、貴ぶ可きこといもなりき、賢士不貪婪痴人好鑪冶麥地占他家竹園皆我者努膊覓錢財切齒驅奴馬須看郭門外壘壘松柏下。

此の詩の主意は、みだりに貪慾心を専らにして、無常の風の迅速なることを知らざるを呵責す、麥地他家を占むトハ、譬へば茲に貪婪の士有らんには、一日行て豪家の門を過ぐれば、絃歌遠く聞へ、水碓列り鳴る、一呼すれば百諾至り、一笑萬人賀す、屋影山光を壓し、家鷺水溝に滿つ、土つらく視て黙計して曰く、我れ若し此の地と竹園とを得れば、屋宅を毀つて以て、麥田と爲さん、種を下だすこと何ん十斛、穀を得ること何ん百車、竹も亦歳々伐採して何ん千竿を放たば、

金を得ること何ん十斤、その富有は陶朱綺頓も亦羨むに足らざるなりと、是に於て怡悦して蹈舞を忘る、終に行て、而も行くことを知らず、然りと雖も之れを得るの計無し、空しく首を搔て過ぐるのみ、云云、貪婪トハ、漢書の南夷傳に曰く、蠻獸は心貪婪なり、率ふるに禮を以てし難し云云、鑪冶トハ、後漢書の五に曰く、鐵を出だすこと多き者は鐵官を置て鼓鑄を主らしむ、注に曰く、銅を鑄て器械と爲す、鑄冶するの時に當て其の火を扇熾す、之れを鼓鑄と謂ふ、云云、齒を切るトハ、戰國策、魏の哀王の篇に、目を瞞らし齒を切るの語あり、壘々トハ、列仙傳に曰く、丁令威ハ本と遼東の人なり、道を雲居山に學ぶ、後ち鶴と化して歸りて華表に集まつて吟じていはく、鳥あり鳥あり丁令威、家を去りて、千歳今來り歸る、城郭は故の如くにして人民は非なり、何ぞ仙を學ばずして塚壘壘たると云云、サテ賢人と云ふものに、兎角心胸が瀟洒として、貪婪とむさばる根性は薄し、又愚痴深き人ハ、兎角慾心が深いから、鑪冶を開て金銀を鑄出すことを好むものじや、他人の富豪を見てハ、取りて我が所有の麥田となさんと欲し、他人の所有の田苑を見てハ、取りて我が所有の竹園となさんと欲し、膊を努らしてハ錢財を覓め、齒を切りてハ奴馬を驅る、その様に貪慾婪心を專にせずと、須らく城郭門の外を御覽なされ、松柏の下にハ、壘壘と澤山な死人塚が御座るツ、

願願買魚肉擔歸餓妻子何須殺他命將來活汝己此非天堂緣純是

地獄、滓、徐六語破確始知沒道理

噴の字、疑ふらくは露の字ならん歟、字彙に呼騎の切、音號、噴なり、又市を露と云ふ、猶は後世市を名づけて墟と云ふなり、交ぬに市合する時は、露しく、市散するときは、墟なり、又曰く、徐六語破堆、堆の字疑ふらくは確に作りて、可ならんか、此の五字、沒道理の三字を形容す、テ露々とかまびすしく叫び合ひて市場にて魚の肉を買ひ擔ひ歸りて妻子眷屬を饑ふ、いかに妻子を養ふとても、他の魚鳥の肉を取らずとも、別に其の法方も有りそうなるものぞや、他の魚鳥の肉を將ち來りて、汝が身(已)を活かまひとは、餘りなさない、かやうな業は天堂極樂園に生まるゝ因縁でハ御座らんツイ、純ばらされ地獄の苦境に墮落する滓因縁ぞや、徐六と云ふ馬鹿ものが

破確に語るにハ、もとより道理の有りそうなる事ハ申さない、韻字は仄韻を用ゆ、
有人把椿樹喚作白栴檀學道多沙數幾箇得泥洹棄金卻擔草謾他亦自謾似聚砂一處成團也大難

破確に語るにハ、もとより道理の有りそうなる事ハ申さない、韻字は仄韻を用ゆ、
有人把椿樹喚作白栴檀學道多沙數幾箇得泥洹棄金卻擔草謾他亦自謾似聚砂一處成團也大難
禪に相似の禪あり、道に相似の道あり、涅槃に相似の涅槃あり、何が故へぞ、只だ見性分明ならざるに依るが故へなり、若し真正底を得んと欲せば、先づ須らく見性すべし、見性即ち是れ真正の道、見性即ち是れ真正の禪、見性即ち是れ真正の涅槃なり、汝若し見性せずんば呼んで禪と爲すも亦是れ相似の禪、呼んで道と爲すも亦是れ相似の道、然らば則ち見性せずして禪を論じ道

を説く、豈に是れ相似の僧ならんや、所以に達磨大師曰く、佛道を成せんと欲せば、先づ須らく見性すべし、寔に知る見性せずして佛道を修行する底の人、椿樹を把て白栴檀と作し、楚雞を呼んで丹山の鳳と爲す者と一般底の大痴漢なることを、たとひ恒沙の行人有るも皆な是れ相似の行人にして、一箇も真正の涅槃を得る者無し、須らく知るべし見性せずして種々の善道佛法を行する底、總に是れ金を棄て草を擔ふ、他を謾じ自から慢する底の鈍魔なることを、たとひ塵劫を経て精鍊刻苦すと雖ども、恰も砂を聚めて團と成すに似たり、何れの日か佛道を成ずることを得んや、椿樹、栴檀とは、古徳の歌に曰く、嗟く所は世上岐途の者の終日崎嶇として枉げて心を用ゆ、平垣の栴檀肯へて取らず、登渉して椿林を訪はんと要須すと、宗鏡錄の九に見ゆ、泥洹トハ、梵語には涅槃、或は泥洹と云ふ、此の土には滅度と云ふ、云云、金を棄て草を擔ふトハ、涅槃經の九に曰く、譬へば痴賊の眞寶を棄捨して、草木を擔負するが如し、圭峰圓覺の疏に云く、麻を擔ひ金を棄つ云云、砂を聚むトハ、古詩にいはいく、親友沙を搏むるが如し、手を放てハ還て自から散す云云、韻字は十四寒を用ゆ、

蒸砂擬作飯臨渴始掘井用力磨甌甑那堪將作鏡佛說元平等總有眞如性但自審思量不用閑爭競
砂を蒸すトハ、楞嚴經の六に曰く、砂石を蒸して其れを飯と成さんと欲して、百千劫を経ても抵

だ熱砂と名づくるが如し、何を以ての故に此れ飯ハ本と砂石の成するにあらざるが故へなり、云云、渴に臨むトハ、曹植が文に曰く、渴して後ち井を穿ち、餓へて後ちに植すと韻端に見へたり、願瓶を磨すトハ、禪林類聚に、南岳讓禪師南嶽に居する時、馬祖彼れに在て住庵す、日に唯だ坐禪す、師因に往て問て云く、こゝに在りて何をか爲す、祖曰く、坐禪す、師曰く、坐禪は何の圖る所ぞ、祖曰く、作佛を圖る、師一日瓶一片を將て庵前に於て磨す、祖曰く、これを磨して何をか爲さん、師曰く、鏡と作さんと要す、祖曰く、瓶を磨して豈に鏡と成すことを得んや、師曰く坐禪豈に成佛することを得んや、祖曰く、如何が即ち是ならん、師曰く、人の車を駕するが如し、車若し行かずんば車を打つが即ち是か、牛を打つが即ち是か、祖こゝに於て旨を言下に悟る、遂に心を印して法を傳ふ、云云、この詩の主意ハ、見性せずんば佛道を成ずること大に難きの意を述べ、夫れ砂を蒸して飯と作さんと欲すと雖ども、何百千年を経るとも飯とは成し難かるべし、口中が渴する際に臨んで水が無いから井を掘るとも其の急を救ふことは難かるべし、力を用ひ手を勞して瓶を磨し、之れを鏡と成さんとするも何百千年を経るとも之れを鏡と成すことは難かるべし、故に未だ渴せざる時に當りて井を掘るべし、未だ暑からざる時に當りて葛衣を縫ふべし、未だ寒からざる時に當りて縋縷を綴るべし、人の命數も亦かくの如し、未だ臨終命終に至らざる時に於て、宜しく見性成佛を懇求すべし、佛陀の所説、元來平等之や、怨親も自他も有情も非情も一

切萬物みな悉く、眞如法性を具有して、佛陀如來と異なることなし、故に諸人者、唯だひたすらに自から審細に思量工夫せよ、閑に世俗凡俗の輩と爭利競名して、無益に貴重之光陰を消費すること勿れ、

推尋世間事、子細總皆知、凡事莫容易、盡愛討便宜、護即弊成好、毀即

是成非、故知雜濫口、背面總由伊、冷暖我自量、不信奴唇皮。

寒山が凡そ有爲世間の人事を推したづぬるに、委細に推究すれば萬事總べてみな其の道理を知る事が出来する大凡世間の人事は、仲々六かしいから容易い事と思つて、大に差過了が、世間の人ハ盡く皆な自分の便宜都合の好い事を尋(討)ぬることを愛するものぞや、百法法を設けて辨護をしたり、保護をしたりすれバ、弊惡なる事も好事と成り、百法法を設けて誹毀誹謗するところハ、是事も非事となる、故に自心に於て能く是非善惡、利害得失を決定して、他の俗人奴輩の言語を信ずること勿れ、彼の奴輩が雜濫の口ハ、表面にハ好事を粧ひ、背面にハ如何なる害心を懷き居るかも知れません、人情の冷と暖とハ自分に於て能く自から識別思量して、決して彼の俗奴等の口

(唇皮)を信用してはならんぞ、韻字は四支を用ゆ、

踏踏諸貧士、飢寒成至極、閑居好作詩、札札用心力、賤人言孰采、勸君

休嘆息、題安餅餅上、乞狗也不喫。

龍字は入聲の仄韻を踏む、踏踏トハ、文選木玄虛が海の賦に、踏踏の語有り、註に曰く、踏踏トハ勢を失ふの貌なりと、又禮部韻に、道を失ふて其の志を遂げざるなりと、札札トハ、字彙に、乙甲の切、音鴨、車の輾なり云云、サテ踏踏と道を失ひ志を失ふたる貧諸士は、飢に泣き寒に凍へて貧の至極に至る、静處に閑居して好で詩を作り、札札と車輪の輾るが如く心力を用ひて心苦艱難を極める、心中に道無く、品行に徳無き賤人の語ハ執人が採用しやうぞや、諸君に勸告することである、決して嘆息することを休めよ、賤人の言を題書して餠餅の上に安置して御覽なされ、其の様な道徳無きもの、言ハ、狗に投げ與ふれども狗も嫌つて食べません、

欲識生死譬、且將氷水比。氷結即成氷、氷消返成水。已死必應生、出生還復死。氷水不相傷、生死還雙美。

氷水トハ、楞嚴經の三に曰く、水の氷と成り、氷還りて水と爲るが如し、云云、諸君が今生死の譬喩を知りたいと思召すならば、寒山しばらく水と氷とをもち來りて比喻となさん、碧水凝結すれば則ち白氷と成り、白氷消融すれば返りて碧水と成るが如く、人已に死去すれば必ず應に出産すべきもの、出産しては還て復た死去するものぞや、しかるに、氷消へて水害せられず、水結で水害せられず、氷と水と兩ながら相ひ傷つ害せられざるが如く、寒山の如く、佛陀の如く、己に見性成佛の眼目より見來るときハ、死や全機現なり、生や全機現なり、生惡きに非ず、死善に

非ず、生も得たり、死も得たりダ、生の厭ふ可きなく、死の取る可きなし、六道輪廻も亦風流玄や、故に云ふ生死還て雙び美なりと、然りと雖ども、未見性未成佛の者に猥りにかくの如き謾語を吐くべからず、寒山の境界にして始めて稱することを得、

尋思少年日、遊獵向平陵。國使職非願、神仙未足稱。聯翩騎白馬、喝免放蒼鷹。不覺大流落、皤皤誰見矜。

聯翩トハ、馬の奔走するの貌なり、皤皤トハ、老人白髮の貌なり、此の詩の主意は、人生の無常迅速なることを賦したるなり、皤々たる白髮の老衰に及びてから、少壯の時の事を尋思するに、榮衣鮮華、豪奢を競ふて、平陵といふ繁華の地に向て、遊獵をして娛樂を極めてをりし時分には、榮譽ある國使の官職となるも願はしからず、獨立羽化して登仙するの快樂も稱するに足らず、聯翩と白馬を奔馳させて、狐や兔を喝して、敏捷なる蒼鷹を放ちて、大に豪華奢侈を極めたる事なるが、光陰の移り換はるは寔に迅速なるが故に覺へざる内に、産も傾き年も老い、家族眷屬も共に流離零落して、頭髮皤々として白く、腰は屈して弓の如くなるも誰れか之れを見て矜れとも思ふものかは、

偃息深林下、從生是農夫。立身既質直、出語無諂諛。保我不鑑壁、信君方得珠。焉能同汎灩、極目波上鳥。

假息トハ、猶ほ臥栖と云ふ如し、深山幽林に下の閑臥栖息して、一生是れ野農の身となる、生活は既に極めて質朴正直にして附け飾りなく心正直であるから、貴人權位の前に出づることも、少しも諂諛とへつらひを申し上げるやうなこともない、我が身を保護して璧玉を鑑護する様な事もせず、諸君が珠がほしくば、珠を得て將ち去るに信す、焉んぞ能く彼の波の上に浮び居る見と同く、汎々濯々、波の上下するに任せて、此の愚直の身を全ふしたいものと、しきりに水上の見と視線を注でをるワイ、

不須攻人惡何用伐己善行則可行卷之則可卷祿厚憂責大言深慮交淺聞茲若念茲小兒當自見

人の惡を攻むるトハ、論語、顔淵の篇に、その惡を攻めて、人の惡を攻むること無きハ、惡を修するに非ずや云云、已れが善に伐るトハ、論語、公冶長の篇に曰く、顔淵が曰く、願くハ善に伐ること無けんト云云、行レ之則可行トハ、論語、述而の篇に曰く、子顔淵に謂て曰く、之れを用ゐんには則ち行ひ、之れを舍つるときハ則ち廢くる惟だ我れと爾ちと是れあるか、之れを卷けバ則ち卷く可しトハ、論語、衛靈公の篇に曰く、子の曰く、君子なるかな蘧伯玉、邦進めれば則ち仕ふ、邦道なきときは則ち卷いて之れを懷るにす可しと云云、後漢書、崔駰が傳に曰く、交り淺ふして言深き者は愚なりと云云、書の大禹謨に曰く、茲れを念ふ茲に在り云云、おほよそ道徳ある

君子ハ、自分の惡を責めて、他人の惡を攻めないやうにするが好い、又善行佳言殊勳異功が自分に在りとも、決して他人に向て伐り自慢をしてハならん、我が事業に従ふにハ、決して他人の差圖に従ふ様な事ではダメです、必ず特立獨行、卷舒時に従はずと云ふが如く、之れを行ふ可き時ハ則ち之れを行ひ、之れを卷く可きときハ則ち卷く、祿位の厚貴なるハ亦隨て責任も大なるものじや、言語の餘りに深く濃かなるハ、未だ交情の淺きかと慮る、人もし此の話を聞て此の話の意味を思惟想念すれば、小兒の如き無智者と雖ども、自から獨立特行の氣象を見ることが得るべきなり、

富兒會高堂華燈何焯焯此時無燭者心願處其傍不意遭排遣還歸暗處藏益人明詎損頓訝惜餘光

千字文に曰く、銀燭焯焯、注に曰く、焯焯トハ、燭の光を言ふなり、列女傳に曰く、齊女の徐吾ハ、齊の東海の上りの貧婦人なり、鄰婦季吾が屬と燭に會して相ひ從て、夜績らむ徐吾最も貧ふして燭しばし屬す、李吾ハ其の屬と共に曰く、徐吾燭しばし屬かず請ふ夜を與にすること無からん、徐吾が曰く、是れ何んと云ふことぞや、妾貧にして燭屬ざるを以ての故に、起ること常に先だち息ひこと常に後る、灑掃して席を陳べ以て來者を待つ、自からは蔽薄と與に坐し、常に下きに處る、およそ貧の燭の屬かざるが爲めの故なり、夫れ一室の中、一人を益すとも燭爲めに

暗からず、一人を損すとも燭爲めに明かならず、何ぞ東壁の餘光を惜んで、貧妾をして哀まるゝの恩を蒙むることを得せまめざる、長へに妾ハ之の事に役し、諸君をして常に妾に恩施する有らまひることを爲せば、亦可ならずや、李吾能く應ずること莫し、遂に復た夜を與にして終に後言すること無しと云云、

世有聰明士、勤苦探幽文。三端自孤立、六藝越諸君。神氣卓然異、精彩超衆群。不識箇中意、逐境亂紛紛。

三端トハ、韓詩外傳に曰く、君子ハ宜しく三端を避くべし、文士の筆端、武士の鋒端、辨士の舌端、六藝トハ、禮、樂、射、御、書、數、箇の中の意トハ、懶瓚の頌に、削除人我本冥合箇中意ニ云云、サテ計我不實の妄心を認めて箇の中と爲る者ハ凡夫なり、頼耶湛寂の暗窟を認めて、思想を空盡せんと欲する者は、聲聞の箇の中なり、我空偏眞の空穴を認めて、一切すべて管せざることを要するは、辟支の箇の中なり、理事不二、凡聖一如、常照寂にして圓融無碍、者邊を透過し了りて御り來りて一切を利益するものハ、菩薩の箇の中なり、作塵生か是れ禪僧が箇の中の意、兎角龜毛過三別山。サテ世の中にハ、聰明俊傑、博學宏才の士有り、勤勉辛苦して幽玄微妙の文章を討探す、文士の筆端、武士の鋒端、辨士の舌端を避けて自から孤立し、禮、樂、射、御、書、數、の六藝の研究は諸の君子に越へ秀で、神聖あらたかなる氣概ハ卓然として衆人に異絶し、精粹の

風彩ハ衆の群賢に超へ高し、まかしながら、人々本具の正法眼藏の端的を(箇の中の意を指す)覺る能はざるが故に、心猿意馬狂奔迷走して、前境の六塵を追逐して亂りに紛々ど絲のもつれたるが如く取りおさめも付かざるさまとはなりはてにけり、噫、噫、

層層山水秀、烟霞鎖翠微。嵐拂紗巾濕、露濡蓑草衣。足躡遊方履、手執古藤枝。更觀塵世外、夢境復何爲。

五微の韻を踏む、翠微トハ、爾雅に、山未だ上に及ばざるを翠微といふ、一にハ、山腰を曰ふ、層々どかさなり、たる山ハ翠色蒼々として高く雲表に秀てある、滾々と流る、溪水は藍色を漲らし、烟霞ハ霧々として翠微を鎖ざし、晴嵐吹き拂て紗巾が濕ふ、なんと面白く云つたナ、禪路の露は蓑草で作りの衣服を濡らす、なんと面白くできたナ、我が足にハ、諸方に遊歴する木履を躡み、我が手にハ、古き藤の木枝を執る、更に觀る塵世の外。我が神仙の眼より見來る時は、他の塵世ハ皆な夢幻空華の妄境なり、かくの如き妄境、眞道修行の我れに於て、何の用をか爲すに堪へんや、

滿卷才子詩、溢壺聖人酒。行愛觀牛犢、坐不離左右。霜露入茅檐、月華明。蠶牖此時吸兩甌。吟詩三兩首。

聖人の酒トハ、古文眞寶前集に、李太白、獨酌の詩に曰く、已に聞く清めるを聖に比すと、復た

道ふ濁れるハ賢の如しと、注に、酒の清めるを聖人と爲し、濁れるを賢人と爲す、云云、瓮牖トハ、禮記の儒行の篇に、蓬戸甕牖の語あり、云云、卷に滿つる才子の詩、壺に溢るる聖人の酒、行てハ牛犢を愛し觀る、坐してハ左右を離れず、霜露茅擔に入る、月華瓮牖に明かなり、この時雨の甌の酒を吸て、詩を吟すること二三首、坐してハ左右を離れずトハ、日々夜々、行、住、坐、臥の間、造、次、顛、沛の中、左右源に逢ひ、須臾も道を離れず、本來の面目、正法眼藏、到處觸處に露顯して、曾て晦すこと無き妙處を言ひあらはしたるもの、然りと雖ども、この左右、中間底を識得する者極めて稀れなり、咄哉咄哉、三界輪廻、

施家有二兩兒以藝于齊楚文武各自備託身爲得所孟公問其術我子親教汝秦衛兩不成失時成齟齬

施家、孟公トハ、これハ列子說符の篇に曰く、魯の國の施氏と云ふ家に二人の子が有りました、その一人ハ學問が好きで大に文學を修めました、又一人の方ハ、兵學が好きで、大に兵法を研究しました、文學を好む方の子ハ兵法を以て齊侯に仕へんことを干む、齊侯之れを登用して諸公子の師匠とせられました、又一人の兵法を研究したる子は、楚の國に行て、兵法を以て楚王に仕へんことを干む、王之れを悦で軍正と云ふ官に任じて、厚祿貴爵を賜ひ、その家を富まし、その族を榮やかす、又その隣家に孟氏といふ家がありました、これも同じく二人の子が有りまして、其

の業とする所も亦文學と武藝とである、しかるに、貧窮に困窮で、施氏の家の榮耀を羨み、因みに有る時行て從て進達の道を教へんことを請ふ、施家の二子實を以て孟氏に告ぐ、こゝに於て、孟氏の一子は、秦の國に行きまして、法術を以て秦王に仕へんことを干む、秦王の曰く、當今の諸侯は力を以て争ふ、務むる所のものハ兵食のみなり、若し仁義を用て吾が國を治めば是れ滅亡の道である、と云つて遂に其男根を斷て之を放つ、又一人の子ハ、衛の國に行て、法術を以て仕へんことを衛侯に干む、衛侯が申さるゝにハ、吾が國ハ弱き國である、しかも大國の間に攝する、大國には吾れ之れに事へ、小國をば吾れ之を撫す、是れ安を求めの道なり、若し兵權を頼まば滅亡ハ立ちどころに待つべし、若し此の者を其のまゝにして歸さば、他國に適て仕へ、吾が國の患を致さんとして、遂に之れが(別)足を斷ちて諸れを魯の國に還へす、既に返り來れば、孟氏の父子胸を打て施氏の二子を護む、施氏が曰く、凡そ時を得る者ハ昌へ、時を失ふ者ハ亡ぶ、子が道ハ吾等と同じくして、功吾等と齊しからざるハ是れ時を失ふ者なり、行道の謬れるにあらざるなり、且つ天下の理、常の是無し、事常の非無し、先日を用ふる所、今ハ或ハ之れを棄つ、今の棄つる所、後ち或ハ之れを用ゐん、この用ゆると用ゐざるとは是非を定むること無きなり、隙に投じ時に抵り、事に應じて方無きハ智に屬す、智苟も足らざれば、汝ちをして博識なること孔夫子の如く、法術あること呂尚の如くならしむるとも、いづくに往くとも窮困せざることあらず、

孟氏の父子釋然として憫れる容ち無し、いはく吾れ之れを知れり子重て言ふこと勿れ云云、託身トハ、謝靈運が鄴中の詠に擬する詩に曰く、天下昔より未だ定まらず、身を託て早く所を得たり云云、齟齬トハ、行道時に遇はず、志を得ざるの貌なり、齟齬は本と犬の牙なり、

止宿鴛鴦鳥。一雄兼一雌銜花相共食。刷羽每相隨。戲入烟霄裡。宿歸沙岸湄。自怜生處樂。不奪鳳凰池。

雌雄トハ、小補韻會に曰く、飛ぶを雌雄と云ひ、走るを牝牡と云ふ、爾雅に、鳥の雌雄、以て別の可からざる者ハ、翼の右を以て左を掩ふを雄となし、左の翼を以て右を掩ふを雌となす、生處トハ、五代史、唐の昭宗いはく、紇千山頭凍死の雀。何ぞ生處に飛び去て樂まざる云云、韻瑞に見へたり、鳳凰池トハ、事物紀原の六にいはく、晋の荀勗中書監と爲る、尙書令に遷る、勗久しく中書に在り、これを失て甚だ志る、之れを賀する者あり、怒りて曰く、我が鳳凰池を奪ふ何を賀せんと云云、刷羽トハ、羽を拂ふなり、韻字は四支を用ゆ、鴛鴦といふ鳥が一雄と一雌と相ひ雙び遊でをる、ある時ハ、花を銜みて相共に食ひ、ある時ハ、羽を打ち拂て毎に相ひ隨ふ、雌雄相ひ戯れてハ、高く烟の横れる青霄の中に飛び入り、又ハ廣き白沙の湄りに歸り來りて宿す、自から我が生れたる處の樂みを恰み愛して、我が最愛なる鳳凰池を奪はれずして、相呼び相隨て相樂でをるワイ、是れ寒山が鴛鴦の鳥に寄せて、優遊自適の情懷を賦したるもの、

或有銜行人。才藝過周孔。見罷頭兀兀。看時身侗侗。繩牽未肯行。錐刺猶不動。恰似羊公鶴。可怜生氈毼。

銜トハ、字彙に干眷の切、音眩、説文に自から矜るなり、人媒なり、又買るなり、兀兀トハ、不働の貌なり、侗侗トハ増韻に長なり、又未だ器と成らざるなり、論語、秦伯の篇の注に、侗ハ無知の貌ちなり、錐を以て刺すトハ、涅槃經梵行品に曰く、善男子譬へハ豌豆の乾ける時、錐を以て刺すとも著かざが如し、諸の煩惱の堅きことも亦復た是の如し、云云、羊公の鶴トハ、五車韻瑞、劉遵祖殷浩中軍、之を庾公に稱す、既に見へて獨榻上に坐せしむ、與に語りて稱はず、遂に劉を目標けて美公が鶴と爲す、注に、美叔子、鶴善く舞ふと稱す、客試みに驅り來たれば乃ち肯て舞はず、云云、恰トハ、俗に憐愛の憐に作るハ非なり、氈毼トハ、字彙に毛の散る貌ちなり、サテ世の中にハ、隨分有徳有道の君子の風を、銜賣して僻村寒地の愚夫愚婦を勉す者がある、其の自から稱するにハ、才能學藝ハ、周公孔子にも超越したりと、時に寒山も人の風説を聞き傳へて、如何なる高德の人かと思ひ、一度謁見して物語りして見んとて、行ひて見る所が、別に異なる高德でも無い、唯だ行儀正しく坐り込で居て、何とも言はない、禿頭が兀兀として不動なるのみ、その何の智識も無く、木偶人の如くに過ぎざるのみ、この無智無徳の木強子、何のはたらきも無く、繩を以て引けども肯へて行かず、錐を以て刺せども猶は動かす、恰も羊叔子が自から舞ふと

云はれた鶴。其鶴を試して見ると、一向舞はなかつたが如く、唯だ怜れなるかな、頭の毛が麤糲と散亂してをるばかりじや、

少小帶經鋤本將兄共居緣遣他輩責剩被自妻疎抛絶紅塵境常遊好閱書誰能借斗水活取轍中魚

經を帯びて鋤くトハ、魏略に曰く、常林字は伯槐、少ふして單貧なり、手力にあらざるよりハ之れを人に取らず、性學を好む、漢の末に諸生と爲る、經を帯びて耕鋤す、その妻之れに餉す、田野に在りと雖も、相ひ敬すること賓客の如し、云云、自妻に疎せらるトハ、前漢書に曰く、朱買臣家貧ふして書を讀むことを好で、産業を治せず、常に薪樵を爰る、賣て以て食に給す、妻之れを差ぢて去らんことを求む、買臣笑て曰く、汝苦むこと日久し、我が富貴ならんを待て汝の功に報いん、妻大に怒りていはく、公等が如きは終に溝中に餓死せんのみと、買臣留むること能はず、すなはち去るに聽かず、云云、轍中の魚トハ、莊子外物篇にいはいく、莊周家貧し、故に往て、粟を監河侯に貸る、侯のいはく、諾、我れ將に邑金を得んとす、將さに子に三百金を貸さんどす、可ならんや、莊周忿然として色を作して曰く、周昨日來るとき、中道にして呼ぶもの有り、周顧視すれば、車轉の中に鮒魚あり、周之れに問て曰く、鮒魚來れ子何爲の者ぞや、對て曰く、我は東海の波臣なり、君豈に斗升の水有て而も我を活せんや、周曰く、諾、我れ且つ南の方吳越の王に

遊び、西江の水を激して子を迎へば可ならんや、鮒魚忿然として色を作して曰く、吾れ我が常與を失ふ、我れ處る所無し、吾れ斗升の水を得ば然も活せんのみ、君乃ち此を言ふ、曾て早く我を枯魚の肆に索めんには如かず云云、

變化計無窮生死竟不止三途鳥雀身五嶽龍魚已世濁作親羈時清爲驪駒前廻是富兒今度成貧士

變化トハ、易の上象の傳に、乾道變化、各々性命を正す、荀子の註に、其の舊質を改む、之れを變と云ふ、致を善に馴らす、之れを化と云ふ、己トハ、字彙に、居里の切。音鷄、上聲、身なり、人の對なり、親羈トハ、字彙に、胡羊の名なり、驪駒トハ、字彙に、駿馬なり、此の詩ハ、因果應報に依りて、身の浮沈出沒窮まり無き様子を述べたるものなり、サテ六道輪廻の身ハ、變化窮まりなきものよ、出生入死も窮まりなきものよ、三途に於てハ鳥雀の身となり、五嶽に於ては龍魚の身となり、世道が濁る時は胡羊(親羈)の身となり、時勢が清める時ハ駿馬(驪駒)の身となり、或は、天寒さ時は氷雪と成り、天熱する時は蛙蟬と成り、前世ハ富家の兒となり、今の身ハ貧乏の士と成る、しかし見性成佛の境界に至りたる寒山は、六道輪廻も亦風流で御座らう、書判全非弱嫌身不得官銓曹被拗折洗垢覓瘡癥必也關天命今年更識看盲兒射雀目偶中亦非難

書判トハ、唐宗記に、定銓の註に、法ハ身言書判是れ唐の選法、人を取るの術なり、一にいはいく
身軀豊偉、二にいはいく言辭辨正、三にいはいく、書法諧遵美、四にいはいく、判文優長、四事皆な取
るべし、云云、嫌トハ、字彙に胡兼の切、音賢、心に不平なり、又ハ疑なり憎なり、女子嫌疑多
し、故に女を以す、銓トハ、且縁の切、音銓、量なり、三詮、唐の選法、尙書詮、七品以上の選
を掌る、侍郎詮、八品以下の選を掌る、流外之れを小選と云ふ、拗トハ、於巧の切、音凹、上聲、
手に拉折也、瘡癥を覓むトハ、後漢書の趙壹が傳に曰く、好みする所則ち皮を鑽て、其の毛羽を
出だす、惡する所は則ち垢を洗ふ、其の癩痕を求む、雀目を射るトハ、帝王世紀に曰く、帝羿有
窮氏、吳賀と北に遊ぶ、賀、羿をして雀を射しむ、羿がいはいく、之れを生さん乎、之れを殺さん
乎。賀が曰く、其の左りの目を射よ、羿、弓を引て之れを射る、誤まりて右の目に中づ。羿、首を抑
へて之れを婉づ、身を終るまで忘れず、故に羿の射を善する今に至るまで之れを稱す、識看の識
は、應に是れ試に改作すべき乎、この詩の主意は、進士に及第するにも、又落第するも皆な天運
なるが故に、落第したとて、落膽するには及ばぬぞ、百折不撓の志を有するならば、何れの日が宿
志を達することもあらん、試みに看よ彼の盲兒も、雀の目を射貫くことも亦難きにあらざるべき
なり、

貧驢欠二尺富狗剩三寸若分貧不平中平富與困始取驢飽足却令

狗飢頓爲汝熟思量令我愁悶

分貧トハ、左傳の昭公十四年に曰く、貧に分へ窮を振ふ、註に曰く、分は與なり、振は救なり、頓
トハ、世説に、羅友がいはいく、一頓の食を乞はんと欲すと、字彙に、都困の切、首を下して地に
至るなり、又拜して頭べ地に叩くなり、或る説に、此の篇の主意は、謂ふ、こゝに二尺の食あり、
之れを中分して、一尺を驢に與へ、一尺を狗に與ふ、狗は富で飽く故に七寸を喫して三寸を餘ま
す、驢は貧ふして飢ゆ故に一尺を喫し了りても而もなほ一尺足らずといふ、若し二尺共に驢に與
ふれば則ち又七寸の喫す可き無くして、而して狗をして飢頓ならまめん、飢頓トハ、飢餓困頓な
り、

柳郎八十一藍嫂一十八夫妻共百年相憐情狡猾弄璋字鳥腕擲瓦
名娼嬪屢見枯楊蕒常遭青女殺

狡猾トハ、猾は亂なり、弄璋。擲瓦。トハ、詩の斯干の篇に曰く、乃ち男子を生むときは載ち之
れを牀に寝ねさせ、載ち之れに裳を衣す、載ち之れに璋を弄ばしむ、又曰く、乃ち女子を生むと
きは、載ち之れを地に寝ねさせ、載ち之れに棍を衣せ、載ち之れに瓦を弄ばしむ、云云、鳥腕トハ、
字彙に曰く、楚人虎を謂て鳥腕と爲す、左傳の宣公の四年に、姓ハ鬩、名ハ殺、於菟と云ふ者あ
り、云云、賸納トハ、字彙に曰く、小兒肥へたるの貌、枯楊の蕒トハ、易の大過の卦に曰く、九

二、枯楊萌を生ず、老夫其の女妻を得たり、利あらざる無し、象に曰く、老夫女妻過ぎて以て相ひ與みするなり、青女トハ、淮南子の天文の訓に曰く、青女乃ち出で、霜雪を降す、注に曰く、青女は天神青荜玉女は霜雪を主るなり、或る説にいはく、八十二と一十八、これを合すれば百年と爲る、故に夫妻共に百年と曰ふ、枯楊は八十二の柳郎を謂ふなり、青女は一十八の藍嫂を指すなり、此れ老年にして淫を貪り、みだりに少女を娶りて、これが爲身命を害殞し、生壽を短縮すること述べて、世の貪淫者を警誡したるものなり、

大有飢寒客、生將獸魚殊、長存廟石下、時哭路邊隅、屢日空思飯、終冬不識襦、唯齋一束草、并帶五升麩、

一束の草トハ、三輔決錄に曰く、孫晨字ハ元公、家貧にして席を織るを以て業と爲す、詩書に明通せり、京兆の功曹と爲る、冬日被無し、藁一束有り、暮に臥し朝に收む、云云、こゝに大に飢餓寒困の客あり、人間に生を受けて、幸に禽獸鳥魚に異なる輩に伴ふことを得ると雖も住するに大厦高堂無きが故に、長く佛堂神廟の檐下石上に起臥し、時々には路邊の隅に哭泣し、屢日トハ毎日と云ふが如し、毎日一腹を満たすこと能はず、唯だ空しく喫飯を思ふのみ、三冬の中の寒さにも、襦袢一枚衣ることも成りません、唯だ一束の藁草と、五升の麩を併せ帯びて、之れを出だして臥し、之れを巻て收め、麩食わづかに生息を繼ぐのみ、此れ何等の事を述べたるものぞ、

富家も吟ず可く、貧士も吟ず可し、貴人も詠ず可く、賤者も嘖ず可し、赫赫誰甌肆、其酒甚濃厚、可憐高幡幟、極目平升斗、何意訝不售、其家多猛狗、童子欲來沽、狗齧便是走、

赫赫トハ、盛なる貌なり、甌は酒の甌なり、猛狗トハ、韓非子の外儲の篇に曰く、宋人酒を酤る者あり、升概甚だ平なり、客に遇て甚だ謹めり、その酒甚だ美なり、幟を掛ぐる可き甚だ高著なり、然れども售れずして酒酸し、其の故を怪で其の知る所の長者楊倩に問ふ、倩が曰く、汝が狗猛き耶、いはく狗猛きと云ふハ酒何が故ぞ售られざる、曰く、人畏れバなり、或ハ孺子をして錢を懐き壺甌を挈て往て酤はしむ、狗逆て之れを乾む、此れ酒の酸にして售れざる所以なり、夫れ國にも亦狗あり、有道の士、其術を懷て以て萬乘の主を明さんと欲すれば、大臣猛狗と爲て、迎へて之れを乾む、此れ人主の蔽脇せらる、所以にして、有道の士の用ゐられざる所以なり、云云、吁嗟濁濫處、羅刹共賢人、謂是等流類焉、知道不親、狐假師子勢、詐妄卻稱珍、鈿礦入鑪冶、方知金不眞、

吁嗟トハ、嘆聲を發するの詞なり、さても、世の中が混濁濫雜にして、夜叉羅刹も聖賢君子も共に同一と見成されるやうな世の中とはなりて、皆謂ふ是れ流類同等なりと、そのやうな輩ハ、何ぞ其のもの、道德の親しきや否やを知らず、彼の狡黠なる野狐ハ、群獸を欺つて降伏させ、一時

ハ歌中の大王と成ると雖ども、皆是れ詐妄なるが故に、獅子一たび哮吼すれば、乍ち喪心失命せん、故に云ふ狐、獅子の勢威を假り、自から獸王と稱し、珍と稱せらるゝも畢竟眞物にあらざる、彼の鈿や礪ハ鑪冶の中に入れて焼きたり、打ちたり、磨したりして、然る後ち眞金と否ざることを知らん、

田家避暑月斗酒共誰歡
雜雜排山果疎疎圍酒樽
蘆苳將代席蕉葉且充盤
醉後搢願坐須彌小彈丸

扱て氣樂なる憂世をかけ離れたる田舎住居、盛夏の炎暑を避けて、夏夜の月影の冷さに、一斗の酒を誰どもに酌み交はして歡樂せん、雜々と寄りたかりて山林の菓實を打ち拂ひて下物に充て、疎々と三兩人酒樽を取り圍みて飲み、蘆や苳を藉きて席に代へ、芭蕉の葉をもて杯盤に充つ、十二分に酣醉しての後、願を搢へて詩を吟じて坐すれば、心優遊として十方に充滿し、縱横七千由旬、周匝一萬由旬の須彌山も、小彈丸に異ならず、

箇是何措大時來省南院
年可三二十餘曾經四五選
囊裡無青蚨篋中有黃絹
行到食店前不敢暫廻面

措大トハ、祖庭事苑の六に曰く、倉故の切、置なり、言ふことゝるハ、天下の大なる者に措置す云云、又大慧武庫上の二に、張無盡丞相、十九歳にして擧に應じ京に入り、向家を經由す、向家夜

夢見るらく、人報じていはく。明日相公を接せんと、晨を凌いで室を淨め以て待つ、晩に至りて一の窮措大が、黄道服を著けて來れるを見る、乃ち無盡なり、「青蚨」トハ、書言故事金寶の類に曰く、常に錢を稱して青蚨と云ふ、搜神記に曰く、青蚨ハ蟬に似て稍や大なり、子を草の間に生む蚕の如し、其の子を取れば母すなはち飛び來る、母の血を以て錢八十一文に塗り、子の血を以て錢八十一文に塗り物を市ふ先づ母錢を用ひ、或は先づ子錢を用ゆるに、みな復た飛び歸り、輪環已ひこと無し、扱て此の人ハ如何なる窮措大ぞ、時々來りて南院を見舞ひます、年ハおよそ三十才餘り老やが、曾て四五選を経ぐり、囊中には一文の錢も無し、篋の中には、黄色なる絹布あり、行くく飲食の店の前を過ぐれども、敢て暫らくも面を廻らして食を欲する様な風をしませんワ

爲人常嗅用愛意須慳惜
老去不自漸被他推斥
送向荒山頭一生願虛擲
亡羊罷補牢失意終無極

羊を亡ふて牢を補ふを罷めよトハ、戰國策楚項襄王の篇に曰く、莊辛のいはく、兔を見て犬を顧る、未だ晚しと爲さず、羊を亡ふて牢を補ふ、未だ遲と爲ざるなり、云云、人の爲めに常に嗅し用ゐらるゝ愛意須らく慳惜なるべし、老ひ去て自由ならず、漸く佗に推斥せらるゝ、荒山の頭りに送向せられて、一生の願虚しく擲らうつ。羊を亡ふて牢を補ふことを罷めよ、失意終に極まり無し、

此の詩、寒山詩中、最上々の難透難解なり、我等みだりに容喙せず、

浪造凌霄閣、虚登百尺樓、養生仍天命、誘讀詎封侯、不用從黃口、何須厭白頭、未能端似箭、且莫曲如鈎、

排韻、魏の明帝、凌雲觀を立つ、誤て先づ、榜に釘うつ、籠を以て韋中將を盛て扁に書せしむ、轆轤にして之れを引く、地を去ること二十五丈、既に下る鬚髮白し、唐の貞觀中に太宗嘗て功臣李靖等二十四人を凌烟閣に畫かしむ、云云、前漢書、夏侯勝が傳に曰く、勝常に諸生に謂て曰く、士は經術に明ならざることを病へよ、苟くも明經ならば其の青紫を取ること俛して地芥を拾ふが如くならんのみ、經を學で明かならずんば歸耕せんには如かず、此れ讀むことを誘むるの事なり、家語の六本の篇に曰く、孔子、雀を羅する者を見る、得る所みな黃口の小雀なり、夫子之れを問て曰く、大雀獨り得ざることをハ何ぞや、羅する者の曰く、大雀は善く驚て得難し、黃口ハ食を貪りて得易し、黃口も大雀に従ふときハ即ち得ず、大雀黃口に從ふも亦得ず、孔子顧みて弟子に謂て曰く、善く驚てハ以て害を遠ざき、食を利りて患にかゝる自から其の心なり、獨り從ふ所を以て禍福を爲す、故に君子ハ其の從ふ所を慎む、長者の慮を以すれば則ち身を全ふするの階あり、小人の懸なるに隨へバ而も危亡の敗あり、端しきこと箭に似たりトハ、論語衛の靈公の篇に曰く、子の曰く、直なる哉史魚、邦道有るときハ矢の如し、邦道無るときハ矢の如し、云云、又維摩經に

曰く、直心道場、端心靜坐、云云、後漢書五行志の一に曰く、順帝の末へ、京都の童謠に曰く、直きこと絃の如くなれば道邊に死す、曲ること鈎の如くなれば反て侯に封せらる、云云、

富貴疎親聚、祇爲多錢米、貧賤骨肉離、非關少兄弟、急須歸去來、招賢閣未啓、浪行朱雀街、踏破皮鞋底、

文選の曹顔遠が舊を感せし詩に曰く、富貴なれば他人合ふ、貧賤なれば親戚離る、云云、呂氏春秋に曰く、父母の子に於けるや、子の父母に於けるや、此れ之れを骨肉の親と謂ふ、招賢閣トハ、戰國策の燕の昭王の篇に曰く、燕の昭王即位、身を卑ふし幣を厚ふし以て賢者を招ぐ云云、朱雀トハ、天台の四教儀集解の下卷に曰く、帝王の南門を名けて朱雀と爲す、門外百姓往還して碍ること無し云云、扱て身が富貴榮耀なれば、疎き佗人も、親しき親戚も、我れもくど聚まり來りて門下に伺候して諂言と諛笑とをならべる、ソハ何んが故へぞ、外でハ無い、唯だ金錢や米穀を多く所有してをる故に、甘味を貪りに來るのじや、又我が身が若しも貧賤なれば、骨肉の親戚も、みな遠ざかり離れて來るものも無い、ソハ兄弟が少きが爲めでハ御坐らん、甘味が無いからじや、利徳が無いからじや、ア、急々に須らく歸り來るべし、世の中の人ハ薄情じや、賢者を招く高閣も未だ啓けない、定めて未だ聖明の天子が御即位にならないか、世が未だ太平文明にならないか、ア、仕方が無い、浪りに禁闕の南の方の朱雀街頭に彷徨して、皮鞋の底を踏み破るのみ、噫夫天

命なる哉。

我見一癡漢仍居三兩婦養得八九兒。總是隨宜手。丁防是新差資財。非舊有黃檗作驢糞始知苦在後。

仍トハ、時往の切、音成、重なり、類なり、丁防トハ、左傳の襄公二十五年に曰く、原防を町にす、注に曰く、廣平を原と曰ふ、防は隄なり、隄防は間地、方正なること井田の如くなることを得ず、別に爲めに頃町を小にす、是に由て之を考れば、丁の字疑ふらくハ町乎、差トハ、初佳の切、貳なり、貳とは副へ益すなり、云云、此の詩ハ、癡漢みだりに淫慾を逞ふし、貪慾を恣にして、田園所有を益すと雖ども、業苦の其の後邊に附き添ふことを知らざるを云ふ、

新穀尙未熟舊穀今已無就貸一斗許門外立脚蹶夫出教問婦婦出遣問夫慳惜不救乏財多爲累愚。

新穀尙未熟せず。舊穀今已に無し。富有の家就て、米二斗ばかりを貸らんと欲して、其の門外に立ちて脚蹶む、夫出れば婦に問はしめ、婦出れば夫に問はしむ、慳貪愛惜して乏窮を救済することをせず、財多きときは愚を累はすことを爲すぞ、前漢書疏廣傳に曰く、賢にして財多ければ、則ち其の志を損す、愚にして財多れば、則ち其の過を益すと此の詩、此の意なり、

大有好笑事略陳三五箇張公富奢華孟子貧轆軻祇取侏儒飽不恰。

方朔餓巴歌唱者多白雪無入和。

張公トハ、史記貨殖傳に曰く、漿を賣るは小業なり、而して張氏千萬なり、又前漢書貨殖傳に曰く、張氏ハ漿を賣るを以て而して險へ侈れり、云云、轆軻トハ、字彙に、軻の字の註に曰く、軻は車行不利、故人不得志、謂之轆軻、又いはく、史記を按ずるに、孟子名ハ軻、字ハ子輿と、是れ軻軸の義を取る、當さに平聲を用ゆべし、廣韻の箇の韻の内注に云はく、孟子居貧轆軻なり、故に軻を名とし、子輿を字とす、則ち文當さに音去聲なるべし、侏儒トハ、前漢書、東方朔が傳にいはいく、侏儒ハ長け三尺餘、奉一囊の粟、錢二百四十、臣朔ハ長け九尺餘亦奉一囊の粟、錢二百四十、侏儒飽て死なんと欲す、臣朔ハ飢へて死なんと欲す、云云、巴歌、白雪トハ、文選、宋玉が楚王の問に對へていはく、客郢中に歌ふ者あり、その始を下里巴人と云ふ、國中屬て和する者數千人、其陽阿薤露を爲る、國中屬て和する者數百人、其陽春白雪を爲すとき、國中屬て和する者數十人、商を引て羽を刻み、雜ふるに流徵を以てするときハ、國中屬て和する者、數人に過ぎざるのみ、是れその曲彌高ければ其の和彌寡し、云云、恰ハ憐なり、

老翁娶少婦髮白婦不耐老婆嫁少夫面黃夫不愛老翁娶老婆一一無棄背少婦嫁少夫兩兩相憐態。

「老翁少婦をめぐむ。髮白ふして婦耐へず。老婆少夫に嫁ぐ。面黃にして夫愛せず。老翁老婆をめぐむ。」

どれば。一々棄背すること無し。少婦少夫に嫁すれば。兩兩相ひ憐態す。晏子宅婚を辭する篇に
はく、景公愛女あり、晏子に嫁せんことを請ふ、辭していはく、我れ少婦を得ば、我が老いよ
く、以て倍す可しと云ふて受けず云云、

雍容美少年博覽諸經史盡號曰先生皆稱為學士未能得官職不解
乘耒耜冬披破布衫蓋是書誤已

雍容トハ、史記の司馬相如が傳にいはく、雍容とは閑雅にして甚だみやびやかなり云云、扱て雍
容閑雅なる美少年、博く諸の經史子集を涉讀す、世の人盡く號して先生といふ、世の人皆な學士
と爲す、まかれども、いまだ官職を得ず、まかれども、又耒や耜を乗り田地を耕すこと能はず、蚊
も取らねば蜂も取らず、貧困に苦んで三冬の寒天にも破れたる布の衫を着る、蓋し是れ此の讀書
は修身の爲めならずして、却て己れの一生を誤まる階梯とは成りしか、當世の學生それよろしく
熟讀すべきなり、

鳥語情不堪其時臥草庵櫻桃紅燦燦楊柳正蓂蓂旭日銜青嶂晴雲
洗綠潭誰知出塵俗馭上寒山南

馭トハ、韻會に御、古へ馭に作る、進むなり、春天風暖かに、黃鳥の啼く聲聴けば、餘り面白く
て情に耐へ難し、その時ひとり草庵の中に閑臥す、櫻桃の花は紅に開きて燦々爛熳たり、江上の

楊柳は青眼を伸べて綻々たり、あかねさす旭日ハ青々とした障の端にふくみ、晴れくとした雲
ハ、緑り深き潭の水に洗ふ、ア、好ひ景色じや、誰れ人か世俗火宅の熱塵を解脱し去りて、倒ま
に鐵馬に馭して寒山の淨清無垢の境に上らん、南の字深き意味あるにあらす、十三覃の韻を用ゆ、
故に且らく南の字を以て頭の字に代用したるのみ、

昨日何悠悠場中可憐許上爲桃李徑下作蘭蓀渚復有綺維人舍中
翠毛羽相逢欲相喚呱呱不能語

仄韻を用ゆ、此の詩の主意ハ、風水の閑雅、室家の高貴、人物の濫籍、摸寫し得て一片の妙畫の
如し、舍中毛羽翠りなりトハ、後漢書趙壹が傳に曰く、好みんずる所ハ則ち皮を鑽り、其の毛羽
を出だす、惡んずる所ハ則ち垢を洗てその癩痕を求む、今ハ皮を鑽ると垢を洗ふとの二の物を言
ふにはあらず、只だ毛羽トハ恩顧の義を取るのみ、言ふ心ハ、此の人トハ、賢達高明の士、聖德
至善の君に逢て、飽くまで寵偶恩榮を受け盡くして、歸り來りて郷里に遁居して、衰晩を養ふも
のか、桃李の徑トハ、前漢書李廣が傳の贊に曰く、李將恂恂として鄙人の如し、口辭を出だすこ
と能はず、死するの日に及で、天下知ると知らざると皆な爲めに滌を流がす、彼れそれ中心の誠、
士大夫に信せらるゝなり、諺にいはく、桃李言はず、下おのづから蹊を成す、注に曰く、蹊ハ徑
道を謂ふなり、言ふ心ハ、桃李其の華實を以ての故に、召す所あるにあらざるも、しかも人争て

歸越來往絶へず、蘭蓀の渚トハ、文選傳長虞が河郡と三濟とに贈る詩に曰く、吾が兄既に風の如くに翔る、王子も亦龍の如くに飛ぶ、雙鸞蘭渚に遊ぶ、二離清暉を揚ぐ、註に曰く、蘭渚ハ中書雀に比す、那瓜トハ、文選古詩に曰く、河漢清ふして且つ淺し、相ひ去ること復た幾許ぞ、盈盈として 水間り、那瓜として語ることを得ず、注にははく、那瓜莫白の切、五臣に脉々に作る、又曰く脉脉ハ相ひ視る貌、昨日何ぞ悠々たる、塲中可憐許。上にハ桃李の徑ちを爲し。下にハ蘭蓀の渚を作す、復た綺維の人有り。合中毛羽翠なり。相ひ逢て相ひ喚ばんと欲すれば。那瓜として語ることを能はず。

丈夫莫守困。無錢須經紀。養得一牯牛。生得五犢子。犢子又生兒。積數無窮已。寄語陶朱公。富與君相似。

「丈夫困を守ること莫れ。○錢なくんば須らく經紀すべし。一牯牛を養ひ得ば。五犢子を生じ得ん。犢子又た兒を生む。數を積で窮まり已むこと無けん。語を寄す陶朱公。富ハ君と相ひ似かん。此の詩は譬喩なり、丈夫困を守ること莫れトハ、言ふ心ハ、箇箇總に是れ如來の智惠徳相を具有する底の大丈夫兒、豈に空しく貧困を痴守し、長者無禪の窮子と作て、永劫の不如意を受くる者ならんや、須らく一牯牛を養ふべしトハ、牯牛は自己本具の自性なり、因にハ此れを水牯牛と言ひ、果にハ之れを露地の白牛と言ふ、若し人親しく辨得し、親しく養ひ得るときハ、則ち五根五力、

次第に成辨して、終に五智最後の妙果を證す、これを五犢子を生じ得ると謂ふ、こゝに於て、二明六通、八音四辨、機に隨て應現し、手にまかせて受用す、三界の衆生を度して乏しきこと無し、八大劫を経て盡くすること無し、之れを數を積で窮まり已むこと無しといふ、直ちに是れ功、金仙氏に同じく、徳、阿逸多に等し、是の故に言ふ語を寄す陶朱公。富は君と相ひ似たりと、經紀トハ、輟畊録の十九に曰く、今の人善く能く生を營む者を以て經紀と爲す、一牯牛トハ、史記に犢頰が傳の註に、孔叢子を引て曰く、頰ハ魯の窮士なり、耕すときハ則ち常に飢へ、桑とるときハ則ち常に寒へ、朱公が富を聞て往て術を問ふ、朱公之れを告げていはく、子速かに富をんと欲せば、當に五牯を（牯は、メウシ）畜ふべし、こゝに於て、乃ち西河に適て大に牛羊を犢氏と云ふ處の南に畜ふ、十年の間に、其の息計るべからず 賢王公に擬ふ、名を天下に馳す、富を犢氏に與すを以ての故に犢頰と曰ふ、

閑自訪高僧。烟山萬萬層。師親指歸路。月挂一輪燈。

十蒸の韻を用ゆ、閑かに自から高僧を訪ふ。烟山萬萬層。師親から歸路を指す。月ハ一輪の燈を掛く。此の什の如きハ、寒公詩中の幽雅にして平穩なるものなり、

閑遊華頂上。日朗晝光輝。四顧晴空裡。白雲同鶴蜚。

五微の韻を用ゆ、閑かに華頂の上に遊で。日朗かにして晝光り輝く。四に晴空の裡を願れば。白

雲鶴うんかくと同じくひび。蓋ひハ飛となり、此れ亦寒公詩中の佳境、

世有よ多く事わ人し。廣く學ぶ諸しよ。知る見み。不し識し本ほん真しん性じやう。與よ道だう轉てん懸けん遠えん。若し能ん明めい實じつ相じやう。豈いか用ひ。

陳ちん虛きょ願げん。一いつ念ねん了りやう用よう心しん。開かい佛ぶつ之し知ち見けん。

用の字、恐らくは明字乎、いはゆる清淨明の心、佛の知見を開かん云云、法華方便品に詳かなり、さて世の中にハ、事の多きことを好む人が多く有るものや、廣く色々の學問を爲し、諸學の知見を學ぶが、それは皆な枝葉の學問や、本來具有の眞性を識得する能はざるが故に、無上勝眞の大道とハ、天地懸隔や、まがし能く眞如實相の妙旨を明むる時ハ、豈にいたづらに無益の誓願を願ふることを用ひんや、只だ一念清淨明心を悟了せば、皎々赫々たる佛知見を開發成就することを得ん、

寒山有あ一いつ宅たく。宅たく中ちゆう無な關かん隔かく。六りく門もん左さ右う通つう。堂だう中ちゆう見けん天てん碧へき。房ぼう房ぼう虛きょ索さく。東とう壁へき打うち。西せい壁へき其その中ちゆう一いつ物ぶつ無な免めん。被ひ人にん來きた借か。寒かん到たう燒しやう。輦けん火か飢けい來きた。糞ふん菜さい喫く。不ふ學がく。田でん舍しゃ翁うん。廣くわう置ち牛ぎう莊じやう宅たく。盡じん作さく地ぢ獄じやく業ごう。一いつ入に何なに曾そ極ごく。好こう好こう善ぜん。思し量りやう思し量りやう知ち軌き則じやく。

の風を起し、六境の塵を揚ぐるときハ、寄ても附けない大騷動と成る事じやが、若しも意識の風起らざる時ハ、實に平穩湛湛として、白日青天なるが故に言ふ堂中に天碧を見る、房房トハ何ぞ、五臟の房も六腑の房も皆な空虚にして索索トハ一物を留めず洗淨し去りたる姿なり、心胸中間底、本來一無物と云ふことを言ひ顯はさんが爲めに、まばら東壁西壁と云ふことばを設けたるのみ、本有の佛性ハ有にもあらず、無にもあらず、無に非ざるに非らず、有に非ざるに非ざるが故に、意識分別消滅し去りたる時は、洒洒落落、淨清にして空空なり、故に他人の我が具有の寶物を借用に來るものも無い、まかしながら、寒到らば輦火を燒きて煖氣を取り、飢へ來れば野菜を煮て喫す、まことに無作の妙用じや、別に貪慾心の存するにあらず、だから田舎翁の特更に廣く田園を買ひ込んだり、大夏廣屋を造りたり、多くの牛羊を養ふたりすることハ學びません、其の様に貪慾を張ると、盡く地獄の苦園に墮落するの因縁なるが故に、一たび苦園に落ち入らば、苦を受くること極まりなく、又盡くすること無けん、故に諸君もよく思惟測量なされ、思量し去り思量し來らば遂に成佛の軌則が知られる事で御坐るワイ、

之子何惶惶ト居須自審南方瘴癘多北地風霜甚荒陬不可居毒川難可飲魂兮歸去來食我家園菴

之の子トハ、詩經の桃夭の篇に曰く、之の子子に歸ぐ、註に曰く、之子ハ是の子なり、瘴癘トハ、

後漢書の公孫瓚が傳に曰く、日南多瘴氣、云云、魂兮トハ、楚辭宋玉が招魂の篇に曰く、魂兮歸り來れ、北方にハ以て止まる可からず、増水峨峨として飛雪千里些、歸り來れ、歸り來れ、以て久くすべからず、些家園の甚トハ、詩經の氓の篇に曰く、桑の未だ落ちざるとき、其の葉沃若たり、于嗟鳩兮桑甚を食ふ無れ、之の子何ぞ惶惶たる、居をトせバ須らく自から審にすべしトハ、之の子とは、一切學道の人を指すなり、惶惶トハ、字彙に、胡光の切、感なり、恐なり、惶惶の貌なり、言ふこゝろは、大凡そ辨道の士、恐惶疑惑、心火熾々として死に至るまで休罷すること能はざることハ、明師の鉗鑊に逢はず、自心の淵源に徹せず、佗の相似底の禪を信受認得し來て以て得たりとするが故に、死に至るまで此の災厄あり、譬へバ一人あり、廣く經論を窮め、徧く諸史を探て、多智多解を積で以て菩提を得んと欲す、是れ南方の強なり、而して一聰明の凡夫之れに居れり、理智の眞性を傷害し、多聞の自心を困倦せしむること、恰も南方瘴癘の氣の心肺を煩悶し、皮肉を浸害するが如し、急に須らく抛捨すべし、一人あり、八識賴耶無智の暗窟を認得して、眞正菩提の寶處と爲し、徒らに日々寂黙にして、一切總に管せざるを以て眞脩と爲す、道場にて威儀を現すること能はず、動用を以て魔境と爲して佛國土の高妙を知らず、菩薩の威儀を學ばず、淡薄枯槁、或は此れを二乘聲聞の部族と謂ふ、是れ則ち北方の強なり、長者無禪の窮子之れに居れり、その道理を敗棄し、善芽を壞滅すること、恰も三冬の風霜の萬物を戕賊し、

卉を凍損するが如し、急に須らく遠離すべし、一人あり、見聞覺知底の虛妄の識神を認得し來て、賊を認めて子と爲し、背地理に強抗して曰く、佛祖も亦柳を見れば則ち翠りに、花を見てハ則ち紅なり、我も亦鴉を見るときは則ち黒く、鶯を見るときハ則ち白し、佛祖も火は暖かに水ハ寒し、我も亦驢を呼んで馬と爲さず、快活脫酒、脫酒自在、なんの欠少する所有てか佛を尋ね祖を覓めんと云ふや、是れ則ち荒陬の強なり、而して未だ證せずして證すと謂ひ、憍慢不羈の狂者之れに居れり、祖關透らず、棘林猶は深し、之れを稱えて佛法中の夷狄と爲す、寔に惡む可し、又一入あり、一朝乍ち寂滅無相の平等、不生の見、泥獄に顛墜して曰く、也太奇、也太奇、上み諸佛を見ず、下も衆生を見ず、大地山河、全く纖塵無し、我ハ是れ大徹了事の衲僧なりと云て、知識に參せず、朋友に屈せず、辨道實參底の衲子を見ては、腹を抱へて大笑し、德行修善の耆舊に逢ては、齒を切りて罵辱す、是れ則ち彼の毒川の強なり、而して偏見無智の賤人之れに居れり、如何せん夢にも曾て難透向上の宗旨有ることを知らず、祖庭遙かに天涯を隔つること知らず、寔に笑ふ可し、故に道ふ毒川飲む可きこと難しと、呑む者立どころに癡狂するが故へなり、問ふ魂歸り去り來り、我が家園の甚を食へど、如何んが歸り去り來ることを得ん、家園の甚子、如何んが喫著することを得ん、曰く吾子若し如上の禍患を免かれんと欲せば、先づ須らく見性すべし、見性掌上を見るが如くならば、捨て去て一句難透の話題に參せよ、纔かに透過し得バ、眞正の導師

に見へて、十年五載、親炙究竟して、後ち寒公家園の葦子を採摘し來て、手に任せて大法施を行じて、自利利他、能事了畢せん、寔に正眞の佛子にあらざらんや、

昨夜夢還家。見婦機中織。駐梭如有思。擊梭似無力。呼之廻面視。恍惚復不相識。應是別多年。鬢毛非舊色。

「昨夜夢に家に還る。婦の機中に織るを見る。梭を駐めて思ふこと有るが如し。梭を撃けて力無きに似たり。之れを呼へば面を廻らして視る。恍惚として復た相ひ識らず。應に是れ別れて多年なるべし。鬢毛の色にあらず」。入聲の仄韻を用ゆ、

悦トハ、暗昧の義なり、多年他郷に流落して歳老ひ髪白く、容姿全く青年の時の如くにあらず、童子相看て相識らざるのみならず、我が妻子さへも相ひ認むること能はざるに至る、是れ寒公が偶然の口吟、世人に生、住、異、滅、生、老、病、死の時至ること迅速なることを警誡したるものなり、

人生不滿百。常懷千載憂。自身病始可。又爲子孫愁。下視禾根下。上看桑樹頭。秤鎚落東海。到底始知休。

人生百に満たず。常に千歳の憂を懐く。自身の病ハ始めて可なり。又子孫の爲めに愁ふ。下ハ禾根の下を視。上ハ桑樹の頭を看る。秤鎚東海に落として。底に到て始めて休することを知らん。韻字は十一尤の韻を用ゆ、此の詩ハ、人生わづかに限り有れども、情慾の窮まり無きことを賦し

たり、かの文選の古詩にあるが如く、生年百に滿ざるも、常に千歳の憂を懐けり、自分の身ハ病に悩まざるゝとも其れハかまはない、只だ子孫の爲めに財産を繁殖せしめんと心配するばかりヒや、自身の死後の福地ハ修するに及ばぬ、死後の子孫が安樂ならんことを願ふ、故に田に出で、ハ、禾稻の上下の様子を見、園に出で、ハ、桑の木の上下を視て、其の禾桑の一寸でも多く繁殖せんことを願ふなり、その慾情ハ何れの日休むことで有ろうか、先づ試みに秤鎚を東海に落して御覽、其の秤鎚が海の底まで行き着かねバ休まないで御坐ろうよ、その身が北邱の灰と成て後ち其の慾が休むかも知れないワ、

世有^二一等流^一。悠悠似木頭。出語無^二知解^一。云我百不憂。問道道不^二會問^一佛。佛不求。子細推尋著。茫然一場愁。

十一尤の韻を用ゆ、世に一等の流あり。悠悠として木頭に似たり。語を出して知解無し。云く我れ百憂へず。道を問ふに道も會せず。佛を問へば佛をも求めず。子細に推尋著すれバ。茫然たる一場の愁。こゝに一般無智頑陋底の痴人有りて、心源湛寂不動不搖底の黑暗の塵坑を認得し來て、

世を終るまで死守し、悠悠閑閑として日を過さず、恰も一塊の木頭に似たり。木頭とは木偶人なり、深山古廟裡、無轉智の大王の類を言ふなり、而して後ちに公然として自から言はく、我れ舊と何某導師の所に於て、此の大事を信受せり、まかしてよりこのかた、大安樂大解脱、寔に半點

の憂愁無し、只だ一切總に管せざるを以て心要と爲す、故に言ふ無事はれ貴人、佛ハ是れ無事の
人なりと、撥草參玄、霜辛雪苦する底の眞正の禘子を見てハ、微微として誹刺して曰く、彼れハ
是れ悪知識に欺誤せらるゝ底の狂見解の邪黨なり、汝が輩此の保社に入ること莫れ、只だ日日渴
茶餓飯、總に恁麼にし去て、大事了畢するのみ、その徒弟に對して教諭する所を見るに、暗鈍寛
陋、只だ是れ一箇剃頭下賤の頑凡なり、佛も亦知らず、法も亦會せず、全く是れ自救も不了底の
迷人、寔に茫々たる一場の愁ならん乎、

董郎年少時出入帝京裡。衫作嫩鵝黃。容儀畫相似常騎踏雪馬。拂拂
紅塵起。觀者滿路傍。箇是誰家子。

董郎トハ、前漢書の佞幸傳に曰く、董賢字は聖卿、人ど爲り美麗自から喜ぶ、哀帝望み見て其の
儀貌を説ふ、賢寵愛日に甚し、出づるときハ則ち參乘し、入てハ左右に御とす、常に上と臥起す、
嘗て晝寝たり、偏かた上の袖を籍けり、上起さんと欲す、賢未だ覺めず、賢を動かすことを欲せず、
廻ち袖を斷ちて而して起つ、その恩愛此に至る、踏雪馬トハ、海錄碎事の馬驢門に曰く、踏雪馬
トハ、四蹄みな白きを云ふなり、古樂府に曰く、黃金馬頭に絡ふ、觀る者道傍に滿つ、云云、拂
拂トハ、塵起るの貌なり、誰が家の子ぞトハ、曹子建が樂府の詩に曰く、白馬金羈を飾る、連翩
として西北に馳す、借問誰が家の子ぞ、幽井遊俠の兒。文選に見へたり、「董郎年少の時。帝京

の裡に出入す。衫は嫩き鵝黃を作し。容儀は畫に相ひ似たり。常に踏雪馬に騎て。拂拂として紅
塵起る。觀る者路傍に滿つ。箇れは是れ誰が家の子ぞ。四支の仄韻を用ゆ、
箇是誰家子。爲人大被憎。痴心常憤憤。肉眼醉瞢々。見佛不禮佛。逢僧
不施僧。唯知打大禿。除此百無能。

瞢瞢トハ、目明かならざるの貌なり、禿トハ、字彙に切肉なり、塊なり、此の詩ハ、癡心冥蒙に
して、三寶を尊信するの心なく、又殖善見性の志願無きもの、有様を述べたり、
人以身爲本。本以心爲柄。本在心莫邪。心邪喪本命。未能免此殃。何言
懶照鏡。不念金剛經。卻命菩薩病。

この詩は、心根未熟の菩薩、眞修の功積まず、禪定の力全からざる時ハ即ち直心の道場堅剛な
ること能はず、道場堅剛ならざる時ハ、則ち動もすれば法身の慧命を損害す、初心の菩薩常に
慧命を失するを以て憂惱と爲す、法身を損するを以て禍殃と爲す、若し未だ此の禍殃を免るゝこ
と能はざることを知らば、須らく時時に古鏡照眞すべし、古鏡照眞とは、了義諸大乘經及び金剛
般若の一四句偈等を誦誦するを謂ふなり、蓋し了義の大乗及び金剛般若とは、畢竟自己本の眞
性を謂ふ、行人若し自己の眞性に向て反照する時ハ則ち一切生死の禍殃、頓に滅盡す、所以に
達磨大師曰く、佛道を學ばんと欲せば、先づ須らく見性すべし、云云、鏡を照らすとハ、涅槃經

三十四卷迦葉品に、善男子、是の經ハ即ち是れ毀戒の衆生の明鏡なり、世間の鏡に諸の色像を見
るが如し、云云、

城北仲家翁渠家多酒肉仲翁婦死時弔客滿堂屋仲翁自身亡能無
一人哭喫佗盃鬻者何太冷心腹

歷代小志にいはいはく、文翁姓ハ文、名は黨、字は仲翁、景帝の時、蜀郡の太守と爲る、此の詩ハ、
仲翁の家に酒肉多く有て、客を鬻する時ハ、人々の出入すること甚だ多きも、酒肉少き時は人來
らず、人情の輕薄、大略此の如きものなるを述べて、世人を警戒するなり、

下愚讀我詩不解卻嗤謂中庸讀我詩思量云甚要上賢讀我詩把著
滿面笑楊修見幼婦一覽便知妙

老子に曰く、上士は道を開て勤めて之れを行ふ、中士ハ道を開て存するが如く亡するが若し、下
士ハ道を開て大に之れを笑ふ、云云、語林に曰く、楊脩、曹操と江南に至り、曹操が碑を讀じ、
碑背に題して八字あり、曰く黃絹幼婦、外孫豔白と、操解せずして脩に問ふ、脩が曰く、之れを
知る、操が曰く、卿言ふこと勿れ、待て孤之れを思はん、行くこと三十里、脩をして解せしめて
曰く、黃絹は色絲たり、絶の字なり、幼婦ハ少女たり、妙の字なり云云、此の詩ハ、我が寒山詩
ハ、一種の道經なり、忘かれども、下士ハ信せず、中士ハ稍や其の要を知るのみ、上士ハ一讀し

て、手を拍ちて大に笑ひ、把著して之れを行ふ、謂ハゆる其の妙を知るなり、
日有慳惜人我非慳惜輩衣單爲舞穿酒盡緣歌啐當取一腹飽莫令
兩脚僂蓬蒿鑽謁體此日君應悔

謁體を鑽るトハ、莊子の至樂の篇に曰く、列子行て道に食す、從て百歲の謁體を見る、蓬を擡げ
て之れを指す、云云、此の詩ハ、吝嗇慳惜の心深き人ハ、一錢半錢たりども、容易に賤人に與へ
ず、故に寒公ねんころに布施を勸むる也、

我行經古墳淚盡嗟存沒塚破壓黃腸棺穿露白骨欹斜有瓷餅振撥
無簪笏風至攪其中灰塵乱埽埽

黃腸トハ、後漢書、梁商が傳に曰く、梁商薨す、賜ふに銀鑊黃腸を以てす、註に曰く、栢木黃心
を以て栢と爲す、之れを黃腸と曰ふなり、此の詩ハ、人生の無常なる、死し去て蹤跡無きことを
述べて、人に道念を起さしむるなり、

夕陽下西山草木光暉暉復有朦朧處松蘿相連接此中多伏虎見我
奮迅鬣手中無寸刃爭不懼懾懾

此の詩の主意は、光陰ハ無常迅速なり、中に生死と云ふ畏るべき猛虎が伏在せり、我れに見性の
利及なくんば、誠に懼れても猶ほ怖るべきことを述べたるものなり、

出^ス身^ヲ既^ニ擾^ム擾^ム世^ノ事^ハ非^ニ一^ノ狀^ニ未^レ能^ク捨^テ流^俗所以^ニ相^レ追^ヒ訪^ス昨^ノ弔^ハ徐^五死^ヲ今^ニ送^ル
劉^三葬^ヲ日^日不^レ得^テ閑^ニ爲^ス此^ノ心^ハ悽^愴

百五十四

徐^劉の事^ハ、文^選魏^の文^帝、吳^質に與^ヘし書^に出^タり、扱^テ世^中に生^レ出^テハ、誠^に紛^紛擾^擾として煩^雜なる事^多くて、兎^角世^ノ事^ハ一^通でハ御^座らぬものじや、しかれども、肉^身を以^テ此^ノ世^に住^スる以上^ハ、ま^さか流^俗を捨^テつると云^フ譯^{にも}行^カず、是^ノ故^に昨^日ハ西^隣に訪^ヒて、生^兒を賀^シ、今^朝ハ東^舍に行^ヒて、死^去を弔^ム、毎^日一^ノ人^事が繁^忙で、閑^暇を得^ラれぬ、故^に爲^メに心^が悽^愴と、いた^み。いた^み譯^{である}、喜^{、怒}、愛^{、樂}、戀^{、無}常^{の有}様^ハ、此^レ世^相の狀^態なり、し^かしな^がら、一^たび奮^迅見^性成^佛する時^ハ、世^相に住^シて、世^相に着^セざる不^染の妙^心を得^ルなり、

有^レ樂^且須^レ樂^時哉^不可^レ失^雖云^ニ一^百年^豈滿^ニ三^萬日^寄世^是須^臾論^錢
莫^啾啾^孝經^末後^章委^曲陳^情畢^畢

「樂^みあ^らば且^らく須^らく樂^むべし。時^をば失^ふべからず。一^百年^と云^ふと雖^も。豈^に三^萬日^に滿^{たん}や。世^に寄^ること^は是^れ須^臾なり。錢^を論^{じて}啾^啾すること^は莫^れ。孝^經末^後の章^{。委}曲^情を陳^べ畢^{んぬ}。尚^書秦^誓の篇^に曰^く、時^{なる}哉^{、失}ふ^べからず云^云、百^年三^萬日^{トハ}、李^白が襄^陽の歌^{にい}は^く、百^年三^萬六^千日^{、一}日^須傾^{、三}百^盃云^云、孝^經終^りの章^{にい}は^く、美^しき^を服^すれども

安^から^ず、樂^を聞^けども樂^しから^ず、旨^さを食^すれども甘^まから^ず、此^レ哀^戚の情^{なり}云^云、此^ノ詩^の主^意ハ、人^生須^臾の事^{、た}ま^く樂^みを得^れば其^ノ時^を失^はず樂^むべし、いた^づらに名^利の爲^めに人^と争^論して、啾^啾啾^啾と口^喧しくつ^ぶや^さて、心^を煩^悶哀^戚すること^は勿^れどなり、

獨^坐常^忽忽^情懷^何悠^悠山^腰雲^漫漫^谷口^風颼^颼猿^來樹^嫋嫋^鳥入^林啾^啾時^催鬢^颯颯^歲盡^老惆^惆
忽^忽トハ、安^から^ざる^の貌^{なり}、悠^悠トハ、廣^さ貌^{なり}、漫^漫トハ、雲^の布^く貌^{なり}、颼^颼トハ、風^の吹^く貌^{なり}、嫋^嫋トハ、樹^の動^く貌^{なり}、啾^啾トハ、鳥^の啼^く聲^{なり}、散^亂の貌[、]惆^惆トハ、心^を傷^むる貌^{なり}、此^ノ詩[、]寒^公が山^栖して、自^適の情^懷、口^を衝^て朗^吟せしものな^り、

一^人好^頭肚^六藝^盡皆^通南^見驅^歸北^西逢^趁向^東長^漂如^汎萍^不息^似蜚^蓬問^是何^等色^姓貧^名日^窮
「一^人頭^肚好^し。六^藝盡^くみ^な通^ず。南^してハ驅^て北^に歸^へさ^れ。西^してハ趁^て東^に向^へら^る。長^へに漂^へる^こと汎^萍の如^く。息^まざ^ること蜚^蓬に似^たり。問^ふ是^れ何^等の^色ぞ。姓^は貧^名は窮^と曰^ふ。」一^東の韻^を用^ゆる^{なり}、劉^伯倫^が酒^德の頌^に曰^く、俯^{して}萬^物の擾^擾たるを觀^れば、江^漢の浮^萍の如^し、云^云、詩^經の伯^兮の篇^に曰^く、首^ハ飛^蓬の如^し云^云、月^令貧^窮に賜^ふ、註^に、

百五十五

親無きを窮と云ふ、又臭氏が云く、長く無き之れを貧窮と曰ふ、暫らく無き之れを乏絶と云ふ、
肚ハ腹なり、六藝トハ、禮、樂、射、御、書、數、なり、蜚ハ飛なり、汎ハ泛なり、言ふこゝろ
ハ、身六藝に通ずといへども、東西に流落して跡を留めず、貧窮の生涯を樂む底を述べたるもの
なり、

佗賢君即受不賢君莫與君賢佗見容不賢佗亦拒嘉善矜不能仁徒
方得所勸逐子張言抛卻ト商語

論語に、子張の篇に曰く、子夏の門人、交りて子張に問ふ、子張が曰く、子夏か云ひけんこと何
對て曰く、可なる者にハ之れに與せん、其の不可ならん者をば之れを拒がん、子張が曰く、吾が
聞ける所に異なり、君子ハ賢を尊で衆を容る、善を嘉して不能を矜れむ、我れの大賢ならんか、
人に於て何んの容られざる所あらん、我の不賢ならんか、人將た我を拒がん、之れをいかにぞ其
れ人を拒がんや、ト商トハ、家語の七十二、弟子解の篇に曰く、ト商字は子夏とある、
俗薄眞成薄人心箇不同殷翁笑柳老柳老笑殷翁何故兩相笑俱行
論諒中裝車競嶸嶸翻載各瀧凍

一東の韻を用ゆ、箇ハ是れなり、論諒ハ不平の言なり、又姦言なり、嶸嶸トハ、山の高さ貌なり、
凍瀧トハ、沾漬の貌ト俗薄ムして眞に薄きことを成す。人の心箇同じからず。殷翁ハ柳老を笑ひ

柳老ハ殷翁を笑ふ。何んが故へぞ雨ながら相ひ笑ふ。俱に論諒の中を行く。車を裝して嶸嶸に競
ひ。載を翻して各々瀧凍たり。此の詩ハ、人情輕薄にして紙の如く、人心の異なることハ其の面
の如し、故に盜跖の狗ハ堯舜に吠へ、鸚鵡ハ大鵬を笑ふ、不平の言、姦言の中に相ひ争ひて、俗
事紛々たることを述べたるなり、

是我有錢日恒爲汝貸將汝今既飽暖見我不分張須憶汝欲得似我
今承望有無更代事勸汝熟思量

貸トハ字彙に借なり、施なり、將トハ、字彙に送るなり、七陽の韻を用ゆ、「是れ我が錢有りし
日。恒に汝が爲めに貸將す。汝今既に飽暖にして。我れを見て分張せず。須らく汝が得んど欲せ
しことを憶ふべし。我が今望みを承るに似たり。有無更代の事。汝に勸む熟ら思量せよ。」此の時
ハ、貧賤富貴ハ時の運なり、故に錢ある時は人に貸與すべし、無き時ハ我に貸與すべし、初め人
に借りて己れ飽暖衣食の時ハ他を顧ざるハ甚だ不人情ならずやとの意なり、

人生一百年佛說十二部慈悲如野鹿瞋忿似家狗家狗趁不去野鹿
常好走欲伏欄猴心須聽師子吼

「人生一百年。佛說十二部。慈悲ハ野鹿の如く。瞋忿ハ家狗に似たり。家狗趁へども去らず。野
鹿ハ常に好んで走る。欄猴の心を伏せんと欲せば。須らく獅子吼を聽くべし。」韻字ハ上聲の仄韻

を用ゆ、十二部經トハ、涅槃經の十四と、並に三藏法數に詳かなり、家狗トハ、涅槃經の十四に曰く、又家犬ハ人を畏れず、山林の野鹿は人を見て怖れ走るが如し、瞋恚の去り難きことハ家を守る狗の如く、慈心の失ひ易きことハ、彼の野鹿の如し、彌猴トハ、同經二十七に曰く、衆生の心性ハ猶ほ彌猴のごとし、彌猴の性は一を捨て一を取る、衆生の心性も亦復是の如し、色、聲、香味、觸、法に取著して、暫くも住む時無し、師子吼トハ、智度論の二十五と、并に涅槃經の二十五に詳なり、永嘉の證道歌に曰く、師子吼無畏の説、百獸ハ之れを聞て皆な腦裂す、云云、師子吼トハ、釋尊の説法に譬へたるものなり、彌猴(和名、ササル)の心トハ、憎愛取捨生滅の妄心を謂ふなり、此の心休罷せざるが故に永く道に入ること能はず、常に二十五有の苦輪を歴て、恰も彌猴の果實を貪求し、諸樹を攀緣して、片時も安閑なること無きが如し、此の心を休罷せんと欲せば、須らく大獅子吼(佛陀の説法)を聞くべし、若し獅子吼を聞くことを得ば、彼の狸貉野干の部屬の頭腦、たちまち破裂して性命に和して一時に打失するが如し、情量の窠窟、煩惱の本根、直下に滅盡す、是れを彌猴の心を伏する底の時節を謂ふ、如何なるか是れ獅子吼、僧 趙州に問ふ、萬法一に歸す、一何の處にか歸す、我れ青州に在りて一衲の布衾を作る、重きこと七斤と、云云、**教汝數般事思量知我賢極貧忍賣屋纔富須買田空腹不得走枕頭須莫眠此言期衆見挂在日東邊**

一先の韻を用ゆ、文選任産升が齊の竟陵文宣王の行狀に曰く、諸れを日月に懸れり、註に曰く、楊雄が方言に曰く、雄此の篇目を以て、煩しく其の成る者を示す、張伯松が曰く、是れ日月に懸れり、刊せざるの書なり、又曰く、此れハ之れを後世に書傳して日月の天に懸れるが如くにして永く朽ちざるを言ふなり、云云、「汝に數般の事を教へん。思量せば我が賢なることを知らん。極めて貧なりとも屋を賣ることを忍べ。穢かに富まば須らく田を買ふべし。空腹にして走ることを得ず。頭に枕して須らく眠こと莫るべし。此の言衆の見んことを期して。掛けて日東の邊に在く。」扱て諸君に今こゝで數般の事柄を教へ申す、この事に就て能く御思量なされば私の賢人で有ることは知りますよ、諸君が若しも極貧に落ち入るやうな事が有らうとも、必ず家屋を賣却することを御堪忍なされ、又其の内に少々でも富有になりたならば、直ちに田地を買ひ込で置きなされ、兎角世の中は何事にても腔が空てハ走りまはることが出来ませんよ、又高枕安眠すること勿れ、心が墮弱に流れるからサ、心は高尚堅固なるべし、此の數般の教訓の言ハ衆人の見知らんことを期するが故に、高く朝日の赫々と照り輝くあたりに掛けて置くことで御坐るゾ、
**寒山多幽奇登者皆恒攝月照水澄澄風吹草獵獵凋梅雪作花机木
 雲充葉觸雨轉鮮靈非晴不可涉**
 「寒山幽奇多し。登るものは皆な恒に攝づ。月照して水澄澄たり。風吹て草獵獵たり。凋梅は雪を

花と作し。杙木は雲を葉に充つ。雨に觸れて轉た鮮靈なり。晴に非らざれば、涉るべからず。獵獵トハ、風の聲なり、杙とは、五忽の切、木に枝無きなり、サテ寒山幽奇多し、登る者皆な恒に俯づトハ、頭上方寸の虚空無く、脚下一撮の土無し、虚空消殞、鐵船摧けて蓋覆するに天地無く、照臨するに日月無し、火は熱を失ひ、水ハ冷を失ひ、柳ハ緑を失ひ、花ハ紅を失ひ、只だ是れ鬼神迹を潜ひるのみにあらず、佛祖も亦命を乞ふ、是を稍僧本分の家山と云ふ、即今何れの處にか在る、切に忌む外に向て尋究むることを。月照して水澄澄たり。風吹て草獵獵たり。凋梅は雪を花と作し。杙木は雲を葉に充つトハ。歳暮雪昏昏。憲明鴉噪。直下更に回避するに地無し。或る時ハ鐵樹枝を抽す。或る時ハ石樹花を開く。正に是れ生死流轉の迷雲沈没して。業海の疎雨甚だ新鮮、甚だ虚靈の時なり。然りと雖ども迷中登臨することを得ず。獨體那畔識盡き詞窮まり理もまた窮まる時。忽然として佛界魔界淨刹穢土、漢に透り泉に徹して純晴絶點鎮へに寥廓たることを覺得せん、此の時初めて知る威音已前より親しく此の山に住居することを。天下の諸君子、重々吟咏して其の妙を知れ。

有樹先林生計年逾一倍根遭陵谷變葉被風霜改咸笑外凋零不憐
内紋綵皮膚脱落盡唯有眞實在

改めらる。咸く外の凋零することを笑ふ。内の紋綵を憐まず。皮膚脱落し盡きて。唯だ眞實の在る有り。仄韻を用ゆ。涅槃經三十五に曰く。富樓那言はく。一ツの喩を説かんと欲す。唯だ願くは聽採したまへ。佛の言はく。善ひかな善ひかな。意に隨て之れを説け。世尊、大林の外に沙羅林あり。中に一樹あり。林に先ちて生す。一、百年に足れり。是の時林主之れに灌ぐに水を以てし。時に隨て修治す。其の樹陳朽して皮膚枝葉悉く皆な脱落して唯だ眞實のみ在るが如し。如來も亦爾り。所有の陳故。悉く已に除き盡きて。唯だ一切眞實の法のみ在ること有り。云云。詩經の十月の交の篇に曰く。高岸は谷と爲り。深谷は陵と爲る。五燈會元の藥山の章に曰く。馬祖問ふ子近日見處作麼生。藥山曰く。皮膚脱落し盡きて唯だ一眞實のみ有り。此の詩の主意ハ。寒公家山一株の無影樹なり。林とハ衆生生死の稠林なり。年を計れば一倍に逾つトハ。此の樹生死に先だち涅槃に先ちて生す。是の故に實に其の始を知る者無し。今年を計るに一倍に逾へたりトハ。一トハ絶對の一。非一の一にして算數の表に超出せり。是の故に言ふ一倍に逾へたりトハ。根ハ陵谷の變に遭ふトハ。寒公初の見理入道の日。十方虚空。同時に消殞す。是の時本根に和して。霧地に打失し了れり。此れを陵谷の變と言ふ。葉は風霜に改め被るトハ。其の後ち三大劫來。精鍊眞修の霜辛雪苦を歷て。煩惱の枝葉。知見の華果。盡く枯竭し了るなり。今既に本色山形の杜杖子。悉く外の粉飾を加へず。是の故に言ふ皮膚脱落し盡きて。唯だ眞實の在る有り。

寒山有、裸蟲。身白而頭黑。手把兩卷書。一道將一德。住不安。釜竈行不

齋衣。常持智慧劍。擬破煩惱賊。
入聲の仄韻を用ゆ。裸蟲の事ハ。前の百十三首に具す。老子翼註に曰く。玄宗既に老子を註して。始めて章句を改め定めて。道德經と爲す。凡そ道を言ふ者之れを上卷に類し。徳を言ふ者之れを下卷に類す。維摩經菩薩行品に曰く。智慧の劍を以て。煩惱の賊を破る。云云。「寒山に裸蟲あり。身白ふして頭黒し。手に兩卷の書を把る。一道と一徳と。住して釜竈を安んぜず。行くに衣襪を齎たず。常に智慧の劍を持ちて。煩惱の賊を破らんと擬す。」寒山には一匹の裸蟲あり。身は白くして頭髮は黒く。手に二卷の書を把る。その兩卷は何ぞや。道と徳との二經也。住處には釜竈を安かす。佗に行くに衣襪を齎す。衣襪トハ。(着物なり)常に智慧の劍を持ちて。煩惱の賊を破らんと擬す。

有人畏白首。不肯捨朱綬。采藥空求仙。根苗乱挑掘。數年無効驗。癡意

嗔佛。鬻獵師。披袈裟。元非汝使物。
綬音拂。印組なり。朱綬は朱裳なり。易困の九二。朱綬方に來る。文選古詩に曰く。服食して神仙を求む。多くハ藥の爲めに誤られたり。涅槃經の七に曰く。譬へば獵師の身に法衣を服するが如し。云云。「人あり白首を畏る。肯て朱綬を捨てず。藥を采りて空しく仙を求む。根苗亂りに

挑掘す。數年効驗無し。癡意嗔りて佛鬻たり。獵師袈裟を披る。元と汝が使ふ物にあらず。此の

昔時。可貧。今朝。最貧。凍作事。不諧和。觸途成。控僣。行泥。屢脚。屈坐。社

頻腹痛。失却。斑猫兒。老鼠。圍飯。瓮。
斑猫兒トハ。寒公五百劫來。四誓二利の願行。不退堅固の心を謂ふなり。此の心勇健にして。思

念情量の衆魔を推伏すること。恰も猫兒の偷鼠飛蟲の類に於ける。目前に蠢爾たる物皆な盡く吞噉せらるゝが如し。今言ふこゝろハ。貧困窮餓。寔とに一切の病惱疾く一身に擡め上げすが如し。從上堅固の道情。彼の斑猫兒に似ること無くんバ。必らず妄想の偷鼠の爲めに。菩提の資糧を偷却せらるゝなり。貧凍トハ。傳燈錄の仰山の章にいはく。仰山香嚴に問ふ。師弟近日見處如何。嚴曰く。某甲卒に説くこと得ず。乃ち偶あり曰く。去年の貧ハ未だ是れ貧ならず。今年の貧は始めて是れ貧。去年の貧ハ卓錫の地無し。今年の貧ハ錫もまた無し。云云。社に坐すトハ。社禮祭法。群姓の爲めに社を立つを大社と曰ふ。韻會の社の字の註に。二十五家を一社と爲す。而して民或ハ五家十家共に田社を爲るハ。是れ私社なり云云。

我見世間人。堂堂好儀相。不報父母恩。方寸底模樣。欠負他人錢。蹄穿始。惆悵箇箇惜。妻兒爺孃不供養。兄弟似冤家。心中常悵悵。憶昔少年

時、求_レ神願_ニ成長_ス。今爲_レ不孝_ノ子_ト。世間多_ク此_ノ樣_ノ買_ハ肉_ヲ。自家_ニ唾_キ抹_キ。猶_モ道_ヲ我_レ暢_ク自_ラ逞_ク。說_ク嘍_々。聰明無_ク益_ヲ當_ル。牛頭_ノ努_ク目_ヲ。嗔_ク出_テ去_リ。始_メ時_ニ歸_リ。擇_ク佛_ヲ。燒_キ好_ク香_ヲ。揀_ク僧_ヲ。歸_リ供_ガ養_ヲ。羅漢門前_ニ乞_フ。趁_テ卻_ク閑_カ和尚_ト。不_レ悟_ル。無_ク爲_ル人_ト。從來無_ク相_ノ狀_ヲ。封_シ疏_ヲ。請_ク名_{僧_ト}。醵_シ錢_ヲ兩_三樣_ノ。雲光好_ク法師_ト。安_カ角_ヲ在_リ頭_上。汝_レ無_ク平_等心_ヲ。聖賢俱_ニ不_レ降_ル。凡_ノ聖_ト皆_ク混_然。勸_ク君_ヲ休_ム取_リ相_ヲ。我_レ法_ヲ沙_難思_フ。天龍盡_ク廻_向。

法苑珠林の七十一に曰く。唐の汾州孝義縣の人。路伯達。永徽年中に至て。同縣の人の錢一千文を負ふ。後に乃ち契を違ひ拒諱す。契を執て徵を作すに及で。遂に錢の主と共に佛前に於て信誓を爲して曰く。若し我れ未だ公に還さずんば願くハ吾れ死して後に公が家のために牛畜と作らんと言ひ訖りて未だ一年を逾へずして死す。二歳に至る時。向きの錢主家牝牛。一赤犢子を産めり。額上に白毛を生ず。路伯達の三字を爲す。其の子姪等之れを耻ぢて。錢五十文を將て贖を求む。主肯へて與へず。乃ち隰城縣の啓福寺の僧真如に施與して。十五級の浮圖を助け造る。人見る者あれバ。發心して惡を止む。竟に錢物を投じて布施す。云云。嘍々トハ嘍は郎候の切。囉ハ良何の切。方言に猶は黠慧のごときなり。靜齋季士の曰く。聰明も敵すること能はず。業富貴豈に輪回を免れんや。云云。羅漢門前に乞ふトハ。前の四十二首に。智度論の故事を引けり。臘トハ。釋氏要覽中食の篇に曰く。梵語には達臘。こゝには財施と云ふ。今達臘を略して但だ臘ト云ふ。云云。雲光好法師トハ。林泉虛堂集の第八十六則の評に曰く。雲光法師。坦率自怡して。戒律を事とせず。誌公謂く。出家して何にか爲る。光いはく。吾れ齋せずして齋し。食して食せず。後に報を招て牛と作て。車を泥中に拽く。誌公召していはく。雲光牛。頭を擧ぐ。公いはく。何を言はざる拽て拽くに非ずと。牛涙を隨して號咷して逝く。文殊の曰く。龍蛇混雜。凡聖同居と。五灯會元の無著文喜禪師の章に見えたり。法華方便品に曰く。止止不須説。我法妙難思。諸増上慢者。聞必不敬信。云云。

身著空花衣。足躡龜毛履。手把兔角弓。擬射無明鬼。

「身には空花の衣を著け。足には龜毛の履を躡む。手には兔角の弓を把て。無明の鬼を射んと擬す。」此の詩ハ寒山子が自受用の活三昧を述べたるもので御座る。寒公身にハ空花と云ふ十方に充滿して縫ふことも無く裁することも無き衣を著け。足下には龜毛とて。無相の履を躡み。手にハ兔角とて。無性の弓を把りて。無明煩惱の惡鬼を射殺さんと擬す。誠に寒公の如き文殊菩薩の化身にあらざれば。行し得べき行事にあらず。而もかくのごとくなりとも雖も。諸君子若し凡情の一念を轉じて。解脱の妙境に證入することを得ば。日月の行事。皆な無念無想。無爲無作の妙用にして。礙礙あること無し。誠には是れ木人正に歌ひ。石女思ちて舞ふの妙用にして。天真自然。作にして作にあらず。言にして言にあらず。清風の明月を拂ふが如く。明月の清風を照すに似たり。

可貴天然物。獨一無伴侶。竟佗不可見。出入無門戶。促之在方寸。延之

一切處。爾若不信受。相逢不相遇。貴可。可。天然。物。獨。一。無。伴。侶。竟。佗。不。可。見。出。入。無。門。戶。促。之。在。方。寸。延。之。

「貴可。可。天然。物。獨。一。無。伴。侶。竟。佗。不。可。見。出。入。無。門。戶。促。之。在。方。寸。延。之。」
促。む。る。に。方。寸。に。在。り。之。れ。を。延。ぶ。る。に。一。切。處。な。り。爾。若。し。信。受。せ。ず。ん。ば。相。ひ。逢。て。相。ひ。遇。は。ず。
波。羅。提。の。偈。に。曰。く。徧。現。ト。ハ。但。だ。沙。界。を。該。ぬ。收。攝。す。れ。ば。一。微。塵。に。在。り。識。る。も。の。は。是。れ。佛。性。
な。る。こ。と。を。知。り。識。ら。ざ。る。も。の。は。喚。ん。で。精。魂。と。作。す。梁。の。武。帝。の。撰。す。る。達。磨。の。碑。の。文。に。曰。く。
嗟。乎。之。れ。を。見。て。見。へ。ず。之。れ。に。逢。て。遇。は。ず。今。も。古。も。之。れ。を。悔。い。之。れ。を。恨。む。扱。て。貴。ぶ。べ。し。天。
然。の。物。天。然。の。物。と。は。是。れ。何。物。ぞ。十。方。に。獨。立。し。て。伴。侶。無。し。其。の。獨。立。底。の。物。を。覓。む。る。に。見。る。べ。か。
ら。ず。な。せ。見。へ。ま。せ。ん。の。玄。や。伊。れ。元。來。無。相。無。性。の。物。で。御。坐。る。出。た。り。入。た。り。す。る。に。出。入。の。門。口。
が。無。い。な。せ。門。口。が。無。く。と。も。出。入。が。出。來。ま。す。ぞ。從。來。無。形。名。天。真。亡。性。相。故。に。之。れ。を。放。て。六。
台。に。亘。り。之。れ。を。卷。け。バ。退。て。密。に。隠。る。其。の。味。窮。ま。り。無。し。之。れ。を。促。む。る。に。方。寸。に。在。り。之。れ。を。
延。ぶ。る。に。一。切。處。な。り。一。切。處。と。は。徧。十。方。な。り。爾。若。し。信。受。せ。ざ。れ。ば。日。日。相。ひ。逢。て。居。な。が。ら。其。
の。眞。面。目。に。遇。ふ。こ。と。能。は。ざ。る。な。り。信。受。に。二。種。あり。一。ハ。文。字。の。勝。相。に。依。り。一。ハ。師。友。の。提。携。に。
依。る。夫。れ。佛。法。の。大。海。は。信。を。以。て。能。入。と。爲。す。蓋。し。信。と。云。ふ。も。の。は。疑。惑。無。さ。の。義。な。り。速。に。直。心。
是。れ。道。場。の。無。疑。の。妙。境。に。證。入。せ。ば。徧。一。切。處。放。白。毫。光。で。御。坐。る。ゾ。面。白。ひ。境。界。玄。や。

余家有二窟窟中無一物。清潔空堂堂。光華明日日。蔬食養微軀。布裘

遮幻質。任爾千聖現。我有天真佛。余が家の中に一ツの岩窟がある。岩窟の中に一物も無い。岩窟の中は清潔潔淨。空虚にして堂堂
たり。巍巍たり巖巖たり。常に光明を放ちて日日處處に赫赫たり。まかしながら肉身あるからハ。
平常蔬食水飲して此の四大假和合の微身を養はざるべからず。布を以て作りたる裘を着て。如幻
の躰質を遮らざるべからず。此の時まよやれ千聖萬佛その前に出現し來るも。我に於て何んか
有らん。前に釋迦無く。後へに彌勒無し。佛來も打し。祖來も亦打す。我れ從來天上天下。唯我
獨尊の天真佛あり。サア諸君も他處に向て求むること勿れ。一々自己の心性に向て尋覓すべし。
男兒大丈夫。作事莫莽鹵。勁擬鐵石心。直取菩提路。邪路不用行。行之
枉辛苦。不要求佛果。識取心王主。大丈夫トハ。孟子滕の文公の下篇に曰く。天下の廣居に居し。天下の正位に立て。天下の大道を

行ひ。志を得てハ民と之れに由り。志を得ざれば獨り其の道を行ふ。富貴も淫かすこと能はず。
貧賤も移すこと能はず。威武も屈すること能はず。此れを大丈夫と謂ふ。莽鹵トハ。莊子の則陽
の篇に曰く。昔し予れ禾を爲る。耕して之れを鹵莽にするときは則ち其の實も亦鹵莽にして予に
報す。芸て之れを滅裂にするときはハ。其の實も亦滅裂にして予に報す。陸方壺が註に曰く。鹵莽

は土塊大にして草根盛なり。滅裂は善類を滅し而して地膚折くるなり。扱て天に向て愧ぢず。地に向て愧ぢざる大丈夫。佛道の行事を作して。必らず芥菴なる行事を作すこと勿れ。勁く勤め進み行て精進堅固なること鐵の如く石の如き精心を挺で、奮勵すべし。而して邪路に入らず。直ちに真正の菩提道に進取すべし。必らず邪道にハ行くべからず。若し誤て邪道に行かバ特に枉げて辛苦せねばならん。妄りに成佛作祖を求むるを必要とせず。直ちに自己の心王の主人公に向て識取悟了すべし。

粵自居寒山。曾經幾萬載。任運遯林泉。樓遲觀自在。寒巖人不到。白雲常飄飄。細草作臥褥。青天為被蓋。快活枕石頭。天地任變改。

「粵に寒山に居して自り。曾經幾萬載を経たる。任運に林泉に遯る。樓遲して觀自在なり。寒巖人不到。白雲常に飄飄たり。細草を臥褥と作し。青天を被蓋と爲す。快活にして石頭に枕す。天地ハ變改に任かす。」仄韻を用ゆ。懶瓚和尚の歌に曰く。劫石ハ移動す可くも。箇の中は改變無し。又曰く。山雲を暮に當て。夜月を鉤と爲す。藤蘿の下に臥して。塊石を頭に枕す。と傳灯錄に見へたり。此の詩の主意ハ。たとひ天地ハ變改するの時節ありども。滄桑の時節ありども。此の常住にして不變。寂黙にして常照なる寒山の面目ハ永劫にも露堂堂なり。淨赤にして空虛に同じきなり。

可重是寒山。白雲常自閑。猿啼暢道內。虎嘯出人間。獨歩石可履。孤吟藤好攀。松風清颯颯。鳥語聲喧々。

白雲常に自から閑にして。無念無想到岫岩に出入昇下してを是れ寒山の妙境ぞ。夜半猿啼此の時道念益増暢す。是れ寒山の妙境ぞ。猛虎山月に嘯く。其の聲人間に聞ゆ。人間の衆生。其れ宜しく傾聴して道念を起すべし。これも寒山の妙境であるぞ。ある時獨り閑歩して崎嶇たる山溪の石とれ踏破すべし。煩惱の頑石もそれ踏破すべし。これも寒山の妙境で御坐る。孤吟して老松に掛れる藤葛に攀縁して。天上の星を捫るべし。これも寒山の妙境で御坐る。高松にハ清風颯颯たり。幽林には鳥語喧々たり。無性の聲。實相の法。觸處露堂堂たり。これも寒山の妙境で御坐るぞ。

農家暫下山。入到城隍裡。逢見一群女。端正容貌美。頭戴蜀樣花。燕脂塗粉膩。金釧鏤銀朵。羅衣緋紅紫。朱顏類神仙。香帶氤氳氣。時人皆願盼。癡愛染心意。謂言世無雙。魂影隨佗去。狗齧枯骨頭。虛自舐唇齒。不解反思量。與畜何曾異。今成白髮婆。老陋若精魅。無始由狗心。不超解脫地。

儂家トハ。字彙に。奴多の切。音農。俗に我れを謂て儂と爲す。又渠儂とは他人を指すの辭なり。蜀様の花トハ。古語に曰く。蜀川十様の錦。花を添へて色轉た鮮かなり。本草綱目の十五。青箱の下に曰く。雁來紅。六月葉の紅なる者を十様の錦と名づく。燕脂トハ。古今註に曰く。燕脂草は西方より出づ。葉ハ薊に似たり。花ハ茜に似たり。土人以て粉を染む。婦人の面色を爲る。故に燕脂と名づく。氣氤トハ。小補韻會に云く。氣氤は祥氣なり。枯骨頭を敲むトハ。智度論十七に曰く。五欲の益無きこと狗の骨を敲むが如し。宗鏡錄六十四に。正法念處經を引て云く。譬へバ狗の肉を離れたるの骨を敲で。涎の汁和合すれば。其の髓を得んことを望む。是の如きの貪狗齒の間より血出れば其の味を得て已て是れ骨の汁なりと謂つて。自からの血に是の如きの味有ること知らず。味を貪るを以ての故に。次第に自から其の舌を食ふを覺へず。復た其の味を貪りて。貪に覆ることを以ての故に骨の汁の味なりと謂ふが如し。愚癡の凡夫も亦た復た是の如し。云云。狗の心トハ。愚癡貪慾心を謂ふなり。解脱の地トハ。成佛見性の地を謂ふなり。世の中のハ皆な愚癡貪慾心の爲めに。見性成佛の地に超越すること能はざるを謂ふなり。

一自遷寒山養命。食山果。平生何所憂。此世隨緣過。日月如逝川。光陰石中火。任佗天地移。我暢巖中坐。

逝川トハ。前の四十八首に出づ。石中の火トハ。潘安仁が河陽縣の作に云く。人天地の間に生れて。百年孰れか能く要せん。頻たること石を搗く火の如く。暫たること道を截る鷹の若し。文選に見へたり。此の詩ハ。寒山が自得の處を賦す。一たび寒山に遷れしより。命を養て山果を喰ふ。平生何の憂ふる所ぞ。此の世縁に隨て過ぐ。日月逝川の如く。光陰石中の火。任佗天地の移ることを。我ハ暢よく巖中に坐す。

我見世間人。茫茫走路塵。不知此中事。將何爲去津。榮華能幾日。眷屬片時親。縱有千斤金。不如林下貧。

此の詩ハ。世間富貴の人。徒爾として光陰を過ぎて道心無きことを呵責す。千斤トハ。漢誌に。四銖を兩と爲す。十六兩を斤と爲す。云云。我れ世間の人を見るに。茫茫として路塵に走る。此の中の事を知らず。何を將てか去津と爲す。榮華ハ能く幾く日ぞ。眷屬ハ片時の親み。縱ひ千斤の金有れども。林下の貧には如かず。

自聞梁朝日。四依諸賢士。寶誌萬回師。四仙傳大士。顯揚一代教。作持如來使。建造僧伽藍。信心歸佛理。雖乃得如斯。有爲多患累。與道殊懸遠。折西補東。爾不達無爲功。損多益少矣。有聲而無形。至今何處是。

四依トハ。三藏法數に曰く。人の四依トハ。依ハ即ち依止なり。いはゆる五品の位より等覺の菩薩に至る。世間の衆生の依止する所と爲るに堪へたり。能く衆生をして法を聞て開解し修行して

果を證せしむ。故に人の四依と名づく。五品十信を初依と爲す。十住を二依と爲す。十行十回向を三依と爲す。十地等覺を四依と爲す。云云。梁朝トハ。南史に曰く。梁の高祖武帝諱ハ衍。字ハ叔達。南陵中都の人なり。姓ハ蕭氏。五世の祖。齊に仕て梁王に封せられ。和帝寶融の禪りを受け。皇帝の位に即く。天監と改元す。云云。四依に三種あり。人の四依。法の四依。行の四依。人の四依ハ上に記し了る。法の四依とは。法に依りて。人に依らず。了義經に依りて。不了義經に依らず。義に依りて。文に依らず。智に依りて。識に依らず。又行の四依トハ。常住乞食。糞掃衣を著け。蘭若樹下住病。腐爛を以て治す。云云。寶誌トハ。釋氏稽古略二の上に。寶公大士。諱ハ寶誌。世に寶公と稱す。之れを尊でなり。足手鷹爪。初め健康の東陽の民。朱氏の婦。兒の鷹巢の中に啼くを聞て。樹に梯して之れを得たり。舉して以て子と爲す。七歳にして鐘山の僧儉に依りて出家す。専ら禪觀を修す。是に至りて跡を顯はし。剪尺拂扇を以て杖頭に掛け之れを負て行く。異跡甚だ多し。云云。萬回師トハ。唐の高僧傳。梁朝に法雲法師あり。光宅寺に住す。又唐に法雲あり。萬回と名づく。此に梁朝の萬回師と曰ふハ則ち光宅寺の法雲。萬回と號することある乎。亦別に指す所ある乎。未だ之れを考へざるなり。或人の曰く。法雲師と作る合きを錯まつて萬回と作す。三寫の鳥焉かど。此の説是歟。傳大士トハ。釋氏稽古略一の下。傳大士。齊明帝。建武四年五月八日生ずる。婺州義烏縣雙林の傳宣慈が家に生まる。名ハ龔字ハ玄風。善

慧と號す。云云。四仙トハ。佛祖統紀三十八。華陽真人陶弘景化を告ぐ。香氣日を積で散せず。貞白真人と諡す。撰する所の書を眞誥と曰ふ。云へることあり。清虛裴真人弟子三十四人。其十八人學佛道。紫陽周真人。弟子十五人。四人解佛法。桐柏真人。王子喬弟子二十五。八人學佛法。會稽の東に岸を去ること七萬里と對ふ云云。如來の使トハ。法華經の法師品に曰く。法華經の乃至一句を説くハ。當さに知るべし是の人ハ則ち如來の使なりと云云。此の詩の主意ハ。有爲の善業總に所益無きことを説て。以て眞正見性の法門を勵ます。

吁嗟貧復病。爲人絕友親。囊裡長無飯。甌中屢生塵。蓬菴不免雨。漏榻劣容身。莫怪今顛顛。多愁定損人。

貧復病めりトハ。莊子讓王の篇に曰く。原憲魯に居れり。環堵の室。茨くに生草を以てす。蓬戸全からず。桑以て樞と爲す。甌二室あり。禍以て塞ぐことを爲す。上漏り下漏ふ。匡坐して絃す。子貢大馬に乗り。中紺にして表素し。軒車巷に容らず。往て原憲を見る。憲華冠纒履して藜を杖て門に應ず。子貢曰く。噲先生何ぞ病めるや。原憲應へて曰く。憲之れを聞く。財無き之れを貧と謂ふ。學んで行ふこと能はず之れを病と謂ふ。今憲は貧なり。病めるにあらざるなり。貢遂巡して愧づる色あり。云云。甌中塵を生ずトハ。後漢の獨行傳に曰く。范冉字は史雲。桓帝の時冉を以て萊蕪の長と爲す。議者以て侍御史と爲んと欲す。因て身を通れ命を梁沛の間に逃れ。徒

行弊服してトを市に賣る。或ハ客慮に寓息し。或ハ樹陰に依宿す。此の如くすること十餘年。乃ち草室を結で居り。止まる所單陋なり。時有りて粒を絶て窮居して自若たり。言貌改むること無し。閭里之れを歌て曰く。甌中塵を生ず范史雲。釜中魚を生ず范萊蕪。この詩の主意ハ。寒公が屋裡の有様を述べたるものなり。顔頰トハ。屈原が漁父の辭に曰く。顔色頰頰。形容枯槁すと。顔頰とは。形貌衰弱の貌なり。

養女畏大多。已生須訓誘。捺頭遣小心。鞭背令緘口。未解乘機杵。那堪事箕箒。張婆語驢駒。汝大不如母。

小心トハ。詩經の大明の篇に曰く。維れ此の文王。小心翼々たり。云云。口を緘むトハ。家語に曰く。孔子周の廟を觀る。金人あり三どころ其の口を緘す。其の背に銘して曰く。古の言を慎みし人なり云云。箕箒トハ。書言故事。吉事の類に曰く。單父の人呂公好く人を相す。漢の高祖の狀貌魁梧なるを見て。之れを重んじていはく。臣人を相すること甚だ多し。季が相に如くハ無し。臣弱息女あり。願くは箕箒の妾と爲んと。此の詩ハ。女兒を養成するの要法を説くものなり。寒公深山幽林に隱居して。而して人間女兒養成の要法を説示す。まことに是れ元は是れ一切智を具し給ふ大菩薩なることを知る。

秉志不可卷。須知我匪席。浪至山林中。獨臥盤陀石。辯士來勤余。速令

受金壁鑿牆。植蓬蒿。若此非有益。

此の詩ハ寒公通居の志堅固にして。富萬戸と雖も移すべからざることを賦したるものなり。詩經の栢舟の篇に曰く。我が心ハ石に非ず轉すべからず。我が心席にあらず卷くべからず。至の字。一本にハ造に作る。金壁トハ。前の九十九首に出づ。莊子の庚桑楚の篇に曰く。且つ夫の二子ハ又何ぞ以て稱揚するに足らんや。是れ其の辨に於て將に妄りに垣牆を鑿ちて蓬蒿を殖へんとするなり。髮を簡んで櫛つる。米を敷へて炊く。竊竊乎として又何ぞ以て世を濟ふに足らんや。云云。「志を乘りて卷くべからず。須らく知るべし我れ席にあらざることを。浪りに山林の中に至りて。獨り盤陀石に臥す。辯士來りて余を勸む。速かに金壁を受けしめんと。牆を鑿ちて蓬蒿を植ふ此の若さハ益あるにあらず。」入聲の仄韻を用ゆ。

以我棲遲處。幽深難可論。無風蘿自動。不霧竹長昏。澗水緣誰咽。山雲

忽自屯。午時菴內坐。始覺日頭暈。我が棲遲の處を以みるに。幽深にして論す可きこと難し。風無くして蘿自から動き。霧あらずして竹長へに昏し。澗水誰れに縁てか咽ふ。山雲忽ち自から屯まる。午時菴内に坐す。始めて覺ふ日頭の暈くることを。陸士衡が詩に。胡馬雲の屯まるが如し云云。文選に見へたり。此の詩ハ寒山の幽致を述べたるもの。詩句以外の妙意に至りてハ。唯だ知る者の知るに任すのみ。

憶昔過逢處。人間逐勝遊。樂山登萬仞。愛水汎千舟。送客琵琶谷。攜琴鸚鵡洲。焉知松樹下。抱膝冷飈々。

此の詩ハ。寒公が舊懷を述べたるものなり。山を樂み。水を愛すトハ。論語雍也の篇に曰く。子

曰く。知者ハ水を樂み。仁者ハ山を樂む。知者ハ動く。仁者ハ靜かなり。知者ハ樂しむ。仁者ハ

壽し。琵琶谷トハ。白樂天が琵琶行に曰く。潯陽江頭夜送客。楓葉荻花秋瑟瑟。別時茫茫江浸月。

忽聞水上琵琶聲。云云。鸚鵡洲トハ。崔頴が黃鶴樓の詩の註に曰く。黃祖。禰衡を殺し洲上に埋

ひ。後人號して鸚鵡洲と云ふ。衡嘗て鸚鵡の賦を爲るを以てなり。膝を抱くトハ。三國志に。諸

葛亮長く嘯て膝を抱く云云。憶ふ昔過逢せし處。人間に勝遊を逐はんことを。山を樂で萬仞に登

り。水を愛して千舟を汎ぶ。客を送る琵琶谷。琴を携ふ鸚鵡洲。焉んぞ知らん松樹の下。膝を抱

て冷飈々たらんとは。

報汝修道者。進求虛勞神。人有精靈物。無字復無文。呼時歷歷應。隱處不居存。叮嚀善保護。勿令有點痕。

此の詩ハ。誠に學佛修道。參性參禪の輩の爲めにハ。老婆心の教訓なり。今一應朗吟して聽かさ

ん。汝ち修道の者に報す。今寒山が天下の學道の輩に報告す。進求して虛しく神を勞す。諸人が

精進勇猛にして佛道を懇求して。虚しく徒らに精神を煩勞す。此れ必竟我が見性成佛の道に於て

去年春鳥鳴。此時思弟兄。今年秋菊爛。此時思發生。綠水千場咽。黃靈四面平。哀哉百年內。腸斷憶咸京。

咸京トハ。咸陽なり。秦、漢、都を此に建つ。故に咸京といふ。此の詩寒山が舊懷を述べ。去年

春鳥鳴く。此の時弟兄を思ふ。今年秋菊爛たり。此の時思ひ發生す。綠水千場に咽ぶ。黃靈四面

に平かなり。哀ひ哉百年の内。腸た断ちて咸京を憶ふ。寒公面前。山河大地の草木森羅。行雲流

水。秋葉春花總に是れ自己の本有常寂光の本土にして黃鸞花に嘯じ。紫燕柳に入り。春蛙夏蟬。

皆是れ紫磨聚の全身。回遶するに所無し。又大權菩薩。一切衆生を見て。生生の父母。世世の兄弟なることを見徹す。故へに哀愍猶は深し。恨むる所。觸處湛然全く是れ諸佛の淨刹なることを知らずして。五趣に流轉し。三有に牢落す。今諸佛刹土の常樂を觀見する毎に衆生永夜の苦患を哀念すること深く。衆生永夜の苦患を哀念すること深きが故に。諸佛刹土の常樂を追憶すること切なり。故に言ふ。腸斷ちて咸京を憶ふ。咸京ハ諸佛の刹土に擬するものなり。作麼生か是れ諸佛の刹土。他に向て求むること勿れ。

多少天台人。不識寒山子。莫知真意度。喚作閑言語。

「多少天台の人。寒山子を識らず。真意度を知ること莫く。喚作閑言語と作す。」此の詩ハ寒山子が知音無きの嘆息を述べたるものなり。扱て天台山に多少ある僧侶たちハ。寒山子が菩薩の淨身を晦らまして。蓬頭垢面。寒巖窟中に坐し。國清寺の廻廊下に立ちて呵呵大笑し。拾得が筒中の殘食物の贈物を食して生を養ひ。咄哉咄哉。三界輪回と罵詈し去て。貴戚權客を顧ざる底。是れ何の心行ぞ。深く大慈大悲救濟衆生の心を持して。應壁に木葉に門壁に市街に。觸處に警醒の詩句を録して去る。凡人ハ其の深意を知らずして妄りに呼評して閑々無用の言語なりと罵到せり。嗚呼人世誰れか是れ寒山と知音底の人ぞ。

可惜百年屋。左倒右復傾。牆壁分散盡。木植乱差橫。甃瓦片片落。朽爛不堪停。狂風吹。蒸塌再堅。卒難成。

不。堪。停。狂。風。吹。蒸。塌。再。堅。卒。難。成。

植ハ。立つるなり。置くなり。栽ふるなり。百年の屋トハ。涅槃經二十に曰く。譬ハ朽宅の崩るゝに垂んとするの屋の如し。我が命も亦爾なり。云何ぞ惡を起さんや。塌トハ。地の低下なり。堅字ハ一本豎に作る。扱て百年の屋トハ。四大空華の幻質。五蘊泡影の肉身。次第に倦疲衰朽することを謂ふなり。牆壁分散し盡くトハ。血肉漸く枯竭し。骨節盡く疼痛す。甃瓦片片落つトハ。髮毛齒牙總に謝するなり。狂風吹て蒸塌すトハ。無常の殺鬼。一刹那の間に奪ひ將ち去る底の時節。再び完全を得ること大に難きを謂ふなり。

精神殊爽快。形貌極堂堂。能射穿七札。讀書覽五行。經眠虎頭枕。昔坐象牙牀。若無阿堵物。不啻冷如霜。

此の詩ハ。文を能くし武を能くするの達士も錢無きか爲めに屈を受くるの嘆を述ぶ。「七札トハ。左傳成公十六年に曰く。潘厓が黨、養由基と甲を踏めて之れを射る。七札を徹はす。戰國策燕王噲篇の註に。札ハ牒なり。甲の革の線之の如し。」五行トハ。後漢書應奉が傳に曰く。奉少ふして聰明なり。童兒たりしより長するに及ぶまで。凡そ經歷する所。暗記せざる無し。書を讀で五行并び下す。虎頭の枕トハ。西京雜記に曰く。李黃兄と冥山の北に遊獵す。猛虎を見る。一矢にして之れを斃す。其の頭を斷ちて枕と爲す。猛を服することを示すなり。象牙の牀トハ。戰國策齊

の閻王の篇に曰く。孟嘗君出て國を行ぐる。楚に至りて象牀を献す云云。阿堵トハ。書言故事に。晋の王衍の妻郭氏。聚斂を喜む。衍其の貪鄙を疾む。故に口未だ嘗て錢を言はず。妻之れを試みんと欲して。婢をして錢を以て床を遷らせめ。行くことを得ざらせむ。衍早く起き錢を見て婢に謂て曰く。阿堵の物を舉げ去れど。註に。阿堵ハ眼中なり。精神殊に爽爽たり。此の句ハ其の人の心のさはやかなる事を述べたり。形貌極めて堂堂たり。此の句ハ其の人の容貌の瑰梧にして人にすぐれたるを述べたり。「射を能くして七札を穿ち。」此の句ハ其の人の武藝に老けたる事を述べ。書を讀で五行を覽る。此の句は其の人の文學に秀でたることを述べ。虎頭の枕に眠ることを經て。昔し象牙の床に坐す。此の二句ハ其の人の武勇にして豪壯なることを述べ。若し阿堵の物無くんバ。曾だ冷かなること霜の如くなるのみにあらず。此の二句ハ文武兩道の達士と雖ども。若しも錢無くバ大に閉口して人に屈することを言ふなり。錢トハ何ぞ。工夫すべき所也。

笑我田舎兒。頭頰底繫澁。巾子未會高。腰帶長時急。非是不及時。無錢趁不及。一日有錢財。浮圖頂上立。

頰トハ。古協の切。音劫。面の旁なり。繫トハ。質入の切。音執。馬足を絆るなり。晋書に。魯褒字は元道。南陽の人なり。學を好で多聞なり。貧素を以て自立す。元康の後ち。綱紀大に壞る。褒、時の貪鄙を傷み。乃ち姓名を隠して錢神論を著して以て之れを刺る。其の略に曰く。之れ

百八十

を親ふすること兄の如し。字して孔方と曰ふ。之れを失ふときハ則ち貧弱なり。之れを得るときは則ち富昌なり。翼無くして飛び。足無くして走る。云云。浮圖トハ。梵語に佛陀。或ハ浮圖と云ふ。或は部多と云ふ。今并に譯して覺と云ふ。云云。「我を笑ふ田舎の兒。頭頰底んぞ繫澁なる。巾子未だ曾て高からず。腰帶長時に急なり。是れ時に及ばざるのみにあらず。錢無くバ趁へども及ばず。一日錢財あらバ。浮圖頂上にも立たん。」此の詩は。上の四句ハ。笑ふ者の語を演じ。下の四句ハ。笑はるゝ人を扶く。

買肉血漉漉。買魚跳鱖鱖。君身招罪累。妻子成快活。纒死渠便嫁。佗人誰敢遏。一朝如破牀。兩箇當頭脫。

「肉を買へバ血漉漉たり。魚を買へバ跳りて鱖鱖たり。君が身罪累を招き。妻子快活を成す。纒かに死すれバ渠便ち嫁す。佗人誰か敢て遏めん。一朝破床の如し。兩箇當頭脱す。」入聲の仄韻を用ゆ。渺は活と同じ。鱖鱖は字彙に魚尾を動かすの貌なり。此の詩ハ。肉を食ひ色に荒むの人。畢竟多少の罪障を重くすることを誡む。

客難寒山子。君詩無道理。吾觀乎古人。貧賤不爲耻。應之笑。此言談何疎。關矣。願君似今日。錢是急事爾。

此の詩ハ。傍難を設けて意を通ずるなり。客寒山子を難す。君が詩道理無しと。吾れ古人を觀る

百八十一

に。貧賤耻ぢど爲さず。之れに應へて此の言を笑ふ。談何ぞ疎闊なる。願くば君今日に似んことを。錢ハ是れ急事ならくのみ。灰韻を用ゆ。

從生不往來。至死無仁義。言既有枝葉。心懷便險詖。若其開小道。緣此生大偽。詐説造雲梯。削之成棘刺。

此の詩ハ。有道の士、道と混一にして佗伎無きことを説く。老子曰く。其の食を甘くし。その服を美にし。その居を安んじ。其を俗を樂み。隣國相ひ望み。鷄狗の聲相ひ聞へ。民老死に至て相ひ往來せず。又老子の曰く。大道廢れて仁義あり。知慧出て大偽あり。云云。枝葉トハ。易の繫辭に曰く。中心疑ふ者ハ其の辭枝かる。云云。雲梯トハ。戰國策。宋の景公の篇に曰く。公輸般雲梯を爲り將さに以て宋を攻めんとす。云云。生れてより往來せず。死に至るまで仁義無し。言既に枝葉あることは。心懷便ち險詖なればなり。若し其れ小道を開かば。此に緣りて大偽を生ず。詐雲梯を造ると説けども。之れを削りて棘刺と成す。詖ハ諛なり。争なり。

一餅鑄金成。一餅埴泥出。一餅任君看。那箇餅牢實。欲知餅有二。須知業非一。將此驗生因。修行在今日。

泥を埴すトハ。老子三十幅の章に。埴を埴して器を爲る。注に。埴ハ土を和する也。二餅トハ。涅槃經の五に曰く。譬へば瓦餅ハ破れて聲響し。金剛寶餅ハ則ち是の如くならざるが如し。夫れ

解脱の者も亦破無し。金剛寶餅ハ。眞の解脱に譬ふるなり。餅ハ(和名、ツルベ)。此の詩ハ譬喩を設けて以て眞偽二種の行人に比す。大凡を行人に眞正と相似との兩般あり。是の故に解脱にも亦眞正と相似との兩般あり。譬へば此に一人あり。潜窮密參。理盡き詞窮まりて。伎も亦窮まる處。喜識盡き消息盡くるに到て。これを獨體那畔と謂ふ。是れ則ち抛身捨命。嶮崖に手を撒して。魂飛ひ魄散する底の時節。まばらくありて蘇息し歸り來れば。一斬一切斬。一了一切了。理の本根に達し。法の淵源に徹す。今時那邊。一點の疑惑無し。祖師難透の話頭に於て。分明に透過了て後ち。長劫不退の願輪を成辨す。一切の含識と同じく共に進で佛道を成就す。之れを一餅金を鑄て成す底の眞正の行人。誠實の解脱と謂ふ。茲に一人あり。見聞覺知底の光影を信受し。湛然寂默底の賴耶の暗谷を認得し來て。眞正無比の大道なりと爲して。揩磨淨盡して以て佛道を成せんと欲す。死に到るまで精鍊刻苦して終に一毫の利益無し。之れを一餅泥を埴して成す底の相似の解脱。虚偽の行者。未得謂得。未證謂證。賊を認めて子と爲す底の癡人と謂ふなり。修行今日に在りトハ。言ふこゝろハ。即今一步を錯り了れば則ち千里萬里。全く錯まり了る。所以に達磨大師曰く。佛道を成せんと欲せば。先づ須らく見性すべしと云云。「一餅は金を鑄て成す。一餅は泥を埴して出す。二餅君が看るに任す。那箇の餅か牢實なる。餅二つあることを知らんと欲せば。須らく知るべし業の一にあらざることを。此れを將て生因を驗せよ。修行今日に在

摧殘荒草。慮其中煙火蔚。借問群小兒。生來凡幾日。門外三車。迎之。不肯出。飽食腹膨脹。箇是癡頑物。

「摧殘せる荒草の慮。其中の煙火蔚し。借問す群小兒。生來凡幾日ぞ。門外三車あり。之れを迎れども肯へて出でず。食に飽て腹膨脹たる。箇は是れ癡頑の物。」入聲の仄韻を用ゆ。此の詩の全篇。法華譬喩品の意を以て述ぶ。法華第三譬喩品に曰く。爾の時に長者即ち是の念を作さく。此の舎己に大火の爲めに焼かる。我れ及び諸子若し時に出でせんば。必ず焚かるゝことを爲さん。我れ今當に方便を設けて諸子等をして斯の害を免るゝことを得べし。父、諸子先心に各々好む所種種の珍玩奇異の物情必ず樂著することあるを知りて。而も之れに告げて言はく。汝等玩好すべき所。希有にして得がたし。汝若し取らずんば後ち必ず憂悔すべし。此の如く種種羊車鹿車牛車。今門外に在り。以て遊戯すべし。汝等此の火宅に於て。宜しく速かに出で來るべし。汝が欲する所に隨て。皆な當に汝に興ふべし。荒草廬トハ。衆生の火宅を云ふ。三車トハ。羊車。鹿車。牛車。を云ふなり。膨脹トハ。腹飽食充滿の義なり。

有身與無身。是我復非我。如此審思量。遷延倚巖坐。足間青草生。頂上紅塵墮。已見俗中人。靈牀施酒果。

「有身か無身か。是れ我が復た我にあらざるか。此のごとく審かに思量して。遷延として巖に倚りて坐す。足間青草生じ。頂上紅塵墮つ。已に見る俗中の人。靈牀酒果を施すことを。」青草生ずトハ。觀佛三昧海經に曰く。爾の時に菩薩樹下に坐して。滅意三昧に入る。三昧の境界を寂諸根と名づく。諸天啼泣し涙下ること雨の如し。勸請す菩薩當に起て飲食すべし。是の請を作す時。音三千世界に徧げれども菩薩覺へ給はず。一りの天子あり。名を悅意と云ふ。地より生ずる草。菩薩の肉を穿ち。上り生じて肘に至るを見て諸天に告げて曰く。奇なる哉善男子。苦行乃ち爾り。食はざるご多時。喚ぶ聲も聞へず。草生ずとも覺へず云云。有身か無身か。是れ我が復た我にあらざるが。是のごとく單單に體窮觀察し岩に倚りて坐すれば。物我總に忘却し。心身共に脱落して。足間青草生じ。頂上に紅塵積るも亦知らず。此の時生佛一如。淨穢不二。忽然として金剛不壞の全身を突出し。寂滅實相の全身を煥發す。これを眞正辨道の佛子と爲す。若し然らずんば縦ひ欄ぢ萬善を行じ。衆德を集むるも。都て是れ依草附木底の野鬼閑鬼。何の日か流轉沈没の苦患を免れ得ん。悲ひべし俗中の人。如上の佳趣あることを知らず。空しく靈牀に昏愚酒果を施し。祭りて以て足れりと爲し。徒らに空壇に臭穢の犠牲を備へて。哭して以て盡くせりと爲せり。誰れか知らん盡く是れ暗上に暗を添へ。苦上に苦を重ねる底の夢中の幻事なることを。韻字ハ仄韻を用ゆ。

昨見河邊樹摧殘不可論。二三餘幹在。千萬斧刀痕。霜凋萎疎葉。波重
枯朽根。生處當如此。何用怨乾坤。

河邊の樹トハ。史記蘇秦の傳の評林に。袁淑が真隱傳を引て曰く。鬼谷先生ハ何許の人と云ふこと
を知らず。隱居して智を韜み。鬼谷山に居れり。因て以て稱と爲す。蘇秦、張儀之れを師とし
て遂に功名を立つ。先生書を遣はし之れを責めていはく。二君の若き豈に河邊の樹を見ずや。僕
御其の枝を折く。波浪其の根を盪かし。上に經尺の陰無く。身に數千の痕を被む。此の木豈に
天地と仇怨あらんや。所居の然らしむるなり。子、嵩岱の松柏華霍の檀桐を見ずや。上枝青雲を
干し。下根三泉に通ず。千秋萬歲。斧斤の痕を受けず。此の木豈に天地と骨肉あらんや。蓋し所
居の然らしむるなり。昔し鬼谷子、張蘇二子に授與する書中。人生の壽夭禍福。悉く其の所居の
當否に依ることを教諭す。寒公も亦其の書中の大意を取て以て學人最初錯りて入處痛快ならざる
が故に修行一生勞疲多きことを呵責す。學人あり最初莽鹵にして入理深遠ならず。見道著實なら
ず。人の光影邊の事を説くことを聞て。認めて以て佛法と爲す。或は經教文字の中に著て願覺し。
情量意識の中に向て承當し。湛寂頼耶の藏識を捉て以て本具の大道と爲す。憐む可し一生半醒半
醉。終に寂靜空閑の處に向て指定し。情念を空却して以て佛道を成せんと欲す。その靜處に在る
ときハ則ち渾渾沌沌として平穩なるに似たりと雖ども。纔かに動處に向ふときハ則ち游魚の水を

離るゝが如く。飛鳥の翼を失するに似て。半點の氣力無し。只だ胸喘ぎ肌汗するのみ。是れ最初
錯て門閭戸庭を認め來て立處眞實ならず。基趾堅牢ならざるが爲めの故へなり。所以に内讒浪性
海を濁亂し。情波此の岸を鼓激し。常に菩提の本根を盪突し。外六塵胸宇を昏亂し。八風水霜を
飛ばして永く覺樹の枝葉を殘賊す。恰かも河邊の樹の浪は枯朽の根を衝き。霜は萎疎の葉を凋す
が如し。情量の凡解を逞し。法身の惠命を屠害すること。恰も千萬刀斧の痕に似たり。是れ佛法
の然らしむるにあらず。學人立處眞ならざるが爲めの故なり。是の故に言ふ生處當さに此の如く
なるべし。何を用てか乾坤を怨みんと。眞正の褫子の如きハ則ち然らず。其の最初傑烈勇猛の大
志を憤起し。長劫不退の道情を激發して。一則難透の話頭を執て。十二時辰。三四威儀。堅に參
じ横に窮めて。窮め窮めて窮む可き處無きに到て。參窮する底の心を和して。一時に打失して氣
息も亦斷絶す。是れを大死一番底の時節と謂ふ。此に於て佛道の淵源を踏斷し。至理の根盤を振
御して。鳳の金網を離るゝが如く。鶴の籠を脱するに似て。上下四維。全く纖毫の過患無く。半
點の疑惑無し。動靜一如。逆順不二。生死涅槃大虛僞。禪道佛法閑妄想。臨濟德山。誰が家の老
秃奴ぞ。虚空の骨を爛嚼し。乾坤の髓を吸盡す。通身是れ狼毒。涕唾も亦鳩酒。氣は八紘を呑み。
眼は四海を空くして。石に唾せば石郭も亦裂く可く。鐵を吹かば鐵城も亦流る可し。野鬼も恐れ
走り。閻神も悲哭し。百億の須彌も一片の脊梁骨。盡大千界一枚。廣長舌萬斛の毒焰を吐き出し。

四生の含識を殺害す。その厚重寛大。彼の嵩岱の松柏。華岳の檀桐の上枝青雲を干し。下根三泉に通じて。千秋萬歳。斧斤の痕を受けざるが如く。佛祖も亦手を扱むこと得ざる底の瞎臭禿破落戸。是れ佛法の然らしむる所以にあらす。從初入處の痛快なるが爲めの故へなり。是の故に達磨大師曰く。若し人佛道を成せんと欲せば。先づ須らく見性すべしと云云。

惻底衆生病。冷骨畧不厭。蒸豚糞蒜醬。炙鴨點椒鹽。去骨鮮魚膾。兼皮熟肉臉。不知佗命苦。祇取自家甜。

此の詩ハ。他の畜類を殺して食して苦業を作ること知らざることを呵責す。「惻底衆生の病。冷し骨めて略ぼ厭かず。豚を蒸して蒜醬を糞け。鴨を炙て椒鹽を點す。骨を去る鮮魚の膾。皮を兼ぬ熟肉臉。佗命の苦むことを知らず。祇だ自家の甜を取る。」黃山谷が詩に曰く。我が肉衆生の肉。形は殊なれども體殊ならず。元同一種性。只だ是れ形軀を隔つ。苦惱ハ他の受くるに從す。肥甘我が須ふることを爲す。閻老をして判せしむること莫れ。自から揣て如何と看よ。云云。

臉トハ。千廉の切。臆なり。又力減の切。臉臘は羹なり。
讀書豈免死。讀書豈免貧。何以好識字。識字勝佗人。丈夫不識字。無處可安身。黃連糞蒜醬。忘計是苦辛。
糞トハ。鳥困の切。温去聲。手物を擦る貌。又説くるなり。管修篇に曰く。一年の計ハ穀を樹ふ

るに如くは莫し。十年の計は木を樹ふるに如くは莫し。終身の計ハ人を樹ふるに如くは莫し。云云。此の詩は。一向己れの事を窮めず。道德を修めず。徒らに文字に耽著する底の癡人を呵す。「書を讀で豈に死を免れんや。書を讀で豈に貧を免れんや。何を以てか字を識ることを好む。字を識れば佗人に勝らんとなり。丈夫字を識らざれば。身を安んず可き處なしとす。黃連糞蒜醬を糞く。是れ苦辛なることを計るに忘る。」

我見謾人漢。如盤盛水走。一氣將歸家。監裡何曾有。我見被入謾。一似園中韭。日日被刀傷。天生還自有。

「此の詩ハ。人を欺くものと。欺かるゝものとの得失を説く。「我れ人を謾する漢を見るに。監に水を盛て走るが如し。一氣將て家に歸る。監裡何を曾て有らん。我れ人に謾せらるゝを見れば。一に園中の韭に似たり。日日刀に傷を被れども。天生還て自から有り。」

不見朝垂露。日燂自消除。人身亦如此。閻浮是寄居。切莫因循過。且令三毒祛。菩提即煩惱。盡令無有餘。

「見ずや朝に垂るゝ露。日燂て自から消除す。人身も亦此の如し。閻浮は是れ寄居。切に因循として過すこと莫れ。且らく三毒をして祛かまむ。菩提即ち煩惱。盡く餘り有ること無からまめよ。涅槃經の三十四に曰く。亦朝露の勢久しく停まらざるが如し。云云。智度論の三十五に曰く。閻

浮提の如きハ。閻浮は樹の名なり。其の林茂盛にして。此の樹林中に於て最も大なり。提ハ名けて洲と爲す。洲上此の樹林あり。林中に河あり。河底に金沙あり。名けて閻浮檀金と爲す。又閻浮洲と名づく。此の洲に五百の小洲あり。圍繞す通じて閻浮提と爲す。云云。寄居トハ。魏の文帝樂府に曰く。人生て寄するが如し。憂多きこと何爲ぞ云云。此の詩ハ。朝露に寄せて世の無常なることを演ぶ。三毒トハ。貪と瞋と癡とを云ふ。此の三の者は法性を傷害するが故に毒と云ふ。

水清澄澄瑩徹底自然見心中無一事萬境不能轉心既不安起永劫無改變若能如是知無背面

「水清ふして澄澄として瑩かなり。徹底自然に見ゆ。心中一事無ければ。萬境轉ずること能はず。心既に妄に起らざれば。永劫改變無し。若し能く是の如く知らば。是に知んぬ背面無きことを。」此の詩は。寒公が老婆心の説法。已に透關底の士ハ可なり。未透關底の士ハ。之れを認むるハ甚だ不可なり。扱て人々本來具有底の性海の水。澄澄とすみわたたりて。底までも清徹して水中の魚藻自然に歴歷分明なり。かくのごとく心中妄想煩惱の一事無ければ。色聲香味觸法の萬境も轉ずること能はず。諸法其のまゝにして法體現成なり。心中妄りに前境に對して妄想分別を起さざれば。未來永劫生死の改變なく。六道に回轉輪廻する無し。諸子若し能くかくのごとく會得し去らば。こゝに於て佛道の眞面目に背面すること無きことを得ん。

說食終不飽說衣不免寒飽喫須是飯著衣方免寒不解審思量祇道求佛難廻心即是佛莫向外頭求

「食を説て終に飽かす。衣を説て寒を免れず。喫ふに飽くことは須らく是れ飯なるべし。衣を著て方に寒を免る。審かに思量することを解せず。祇だ佛を求むるの難しと道ふ。廻心即ち是れ佛なり。外頭に向て求むること莫れ。此の詩ハ。食ハ是れ饑を免ることを得。衣ハ是れ寒を免ることを得。心を廻せば佛を成ずることを得の決定の常理を説く。」

可畏輪回苦往復似翻塵蟻巡環未息六道亂紛紛改頭換面孔不離舊時人速了黑暗獄無令心性昏

此の詩ハ。三界流轉の苦を述べ。以て自性を證得せんことを勸むるなり。「畏るべし輪回の苦。往復翻塵に似たり。蟻の如くに巡環して未だ息まず。六道亂れて紛紛たり。頭を改めて面孔を換ふれども。舊時の人を離れず。速かに黑暗獄を了して。心性をして昏からしむること無れ。」扱て諸君よ。地獄。餓鬼。畜生等三界に輪回生死するの苦患ハ誠に畏るべき事ぞ。三界に生死往復する有様ハ。疾風に黃塵の飄るが如くじやぞ。又蟻の磨上に巡環して日夜休息すること無きが如くぞ。地獄道。餓鬼道。畜生道。修羅道。人間道。天堂界にかわるく輪回生死して亂て紛々ど絲のもつれたるが如く取り止めもつかざる有様ぞ。餓鬼となり畜生となり。種々頭を改め面孔を換

ふれども。本來舊時の人には相違無いぞ。本來本法性は其のまゝなれども。唯だ善因善果。惡因惡果の報應に依りて。六道に生死するのみ。故に諸君よ速かに無間黑暗の苦界ハ畢竟是れ何物ぞと大悟大覺して。時時に勤めて拂拭して。心性の寶鏡をして黑暗昏々ならまむること無れ。諸君若し見性悟道の境界に至らば。劔樹刀山も。鑊湯爐炭も。一喝に喝散し。一吹に吹滅せんのみ。可畏三界輪念念未曾息。纔始似出頭。又卻遭沈溺。假使非非想蓋緣多福力。爭似識眞源。一得即永得。

此の詩の。世間有爲の善果の。見性の功に如かざることを示す。名義集に。無色界の頂きの天を非有想、非無想天と名づく。扱て地獄、餓鬼、畜生、等の三界に生死輪廻の苦を受くるの誠に畏る可き事じや。起滅紛紛。前念後念。貪瞋癡慢の止まざるが故に。何れの日か三界を出頭するとの難かるべし。わづかに出頭するが如くなるも。又卻て三界の苦海に沈溺せらるゝなり。たゞひよしんば無色界の頂きの天堂に生じたりとも。蓋し是れ世間有爲の福にして。其の福分盡くる時の。復却て下界に下落するなり。其れよりの速かに法性靈水の眞源を證して。一だひ無漏涅槃を得るときなり。永劫までも三界生死輪廻を免れん。

昨日遊峯頂。下窺千尺崖。臨危一株樹。風擺兩枝開。雨漂即零落。日曬作塵埃。嗟見此茂秀。今爲一聚灰。

「昨日峰頂に遊ぶ。下に千尺の崖を窺ふ。危に臨む一株樹。風擺て兩枝開く。雨漂せば即ち零落す。日曬して塵埃と作る。嗟此の茂秀せしを見る。今の一葉の灰と爲る。此の詩ハ。生ずる者ハ必ず滅するの理を説く。涅槃經三十四に曰く。復た次に知者是の壽命を觀すること。猶ほし河岸の峻に臨める大樹の如しと。云云。

自古多少聖。叮嚀教自信。人根性不等。高下有利鈍。眞佛不肯認。置力枉受困。不知清淨心。便是法王印。

此の詩の。自の心性を見ず。故に行人多く徒らに困苦すること説く。西天の四七。東土の二三。番番御出世の聖賢賢の。皆な叮嚀に自己の心性を證得して。堅牢に自から信せざるの無し。又人の根機心性の。上中下の三等ありて均しからず。智慧高等にして利根なるあり。智慧下等にして鈍根なるあり。世の多くの學人の。自己の眞佛を肯て證認せず。妄りに蒙昧にして力を置てまげて無用の困苦を受く。是れ此れ自己本來具有清淨心性の取りも直さず毘盧法王の寶印なることを知らざるが故へならん。

我聞天台山。山中有琪樹。永言欲攀之。莫曉石橋路。緣此生悲歎。幸居將已暮。今日觀鏡中。颯颯鬢垂絲。

琪樹トハ。文選。孫興公天台山に遊ぶ賦に。建木景を千尋に滅し。琪樹璀璨として珠を垂れたり。

駱賓王が靈隱寺の詩に。待入天台路。看余度石橋の註に。天台赤城山高きこと一萬八千丈。上に石橋あり。廣さ尺に盈たず。下萬丈の深淵に臨む。惟だ其の身を忘れて。然る後ちに能く濟る。此の詩ハ。世人憤烈の志なくして。素志を遂げざることを述ぶ。我れ聞く天臺山。山中琪樹あり。永言して之れを攀ぢんと欲す。石橋の路を曉ること莫し。此に縁りて悲歎を生ず。幸居將に已に暮れんとす。今日鏡中を觀れば。颯颯として鬢絲を垂る。鬢垂絲トハ。老衰の貌なり。

養子不經師不及都亭鼠何曾見好人豈聞長者語爲染在薰蕕應須擇朋侶五月販鮮魚莫教人笑備

「子を養て師を経ざれば。都亭の鼠に及ばず。何ぞ曾て好人を見ん。豈に長者の語を聞かんや。染めて薰蕕に在るが爲に。應に須く朋侶を擇ぶべし。五月鮮魚を販く。人をして僞を笑はまむること莫れ。此の詩ハ。人の父たる者を誠む。都亭の鼠トハ。史記。李斯が傳に曰く。李斯年少き時。郡の小吏と爲る。吏の舍の廁の中の鼠の不潔を食ひ。人と犬とに近づくに。數は驚き恐るを見る。又斯倉に入りて倉中の鼠の積粟を食ひ。大廡の下に居て。人と犬との憂を知らざるを觀る。此に於て李斯乃ち歎じて曰く。人の賢不肖ハ譬ハ鼠の如し矣。自から處る所に在るのみ。乃ち苟卿に従ひ。帝王の術を學ぶ。未だ都亭の鼠の事を考へず。薰蕕トハ。左の僖公四年に曰く。一薰一蕕。十年に猶ほ臭きことあり。註に。薰ハ香艸。蕕ハ臭艸。十年にして臭ありとは。言く善ハ

消し易く。惡ハ除き難きなり。朋侶を擇ぶトハ。家語の六本の篇に曰く。善人と居るときハ芝蘭の室に入るが如し。久くして其の香を聞かず。即ち之れを化すればなり。不善人と居るときハ鮑魚の肆に入るが如し。久くして其の臭を聞かず。亦之れと化すればなり。丹の藏むる所の者ハ赤く。漆の藏むる所の者ハ黒し。是を以て君子ハ必ず其の與に處る所の者は慎む。古語に曰く。水ハ方圓の器に隨ひ。人ハ善惡の友に依る。故に君子ハ善惡の朋侶を擇で交る。人の父たる者は宜しく其の子の爲めに善友益朋を擇びて交らまめ。良師潔士を擇で隨從せしむ可きなり。

徒閉蓬門坐頻經石火遷唯聞人作鬼不見鶴成仙念此那堪說隨須自憐廻瞻郊郭外古墓犁爲田

「徒に蓬門を閉て坐す。頻りに石火の遷るを經。唯だ人の鬼となるを聞く。鶴の仙と成るを見ず。此を念ふに那ぞ説くに堪へん。縁に隨て須らく自から憐むべし。郊郭の外を仰瞻すれば。古墓犁れて田と爲る。此の詩ハ。寒公が大台山の巖窟に安祥三昧に入りて。世間の無常迅速にして電光石火の如くなることを説示せられたり。サテ寒山が徒らに蓬門を閉ちて安然として禪坐するに。とかく浮世ハ流水の逝くが如く、石火の遷るが如く。速か經年歷月し去ること玄や。古より人の死して鬼籍に登ることを聞たが。今に至て未だ鶴が仙人と成たと云ふことを見たことが無いよ。ア。漫問しき世の中を何んど譬へん術も無し。唯だ縁に隨て居し。縁に隨て去り。縁に隨て往復す

べし。而して自から此の五薙假和合。無常迅速の身を憐ひべし。夫れ諸君よ。かの郊郭の外にふりかえり見て御覽なさい。人死して屍は墓に埋まれ。墓も亦古びて農夫に犁れて田畝となりかはれり。かく世の中の常定無き幻化の世相ならずや。松柏も摧けて薪となる。ア、世人何を欲してか短夢に驚き。短夢に勞し。短夢に悲み。短夢に怒り。短夢に喜び。短夢に戀ひするぞ。

時人見寒山各謂是風顛貌不起入目身唯布裘纏我語佗不レ會佗語
我不言爲報往來者可來向寒山

此の詩の。寒公が自家の真相に贅語を下したるものに似たり。此の一篇中の大眼目の。寒山と云ふ二字に向て猛烈に參得すべし。寒山ハ是れ必竟何れの處にか在るや。他處に向て求覓すれば千里萬里。許着するに由なし。直ちに自己の寶藏に向て尋覓すれば必ず承當すべし。時の人寒山を見て。各々是れ風顛なりと謂へり。貌ハ人の目に起たず。身ハ唯だ布裘纏ふ。我が語佗會せず。佗の語我れ言はず。爲めに報ず往來の者。來て寒山に向ふべし。

自在白雲閑從來非買山下危須策杖上險捉藤攀澗底松常翠谿邊
石白斑友朋雖阻絕春至鳥喧喧

山を買ふトハ。事文類聚前集の第十四に。戴徳山人、襄陽の節度于頔に問て。山を買ふ錢を求む。頔、百萬を與ふ。世説新書に。支遁字は道林。人に因り深公に就て隱山を買ふ。深公曰く。未だ

聞かず巢由山を買て隠ることを。沃州の小嶺に入る。云云。友朋トハ。詩經の伐木の篇に。彼の鳥相るに。猶は友を求むる聲あり。矧んや伊の人をや。友生を求めざらんや。云云。扱て寒山の景况の。如何で御坐る。頂上には白雲自在に往復して閑なり。此の白雲青山ハ孔れ自から財貨を出して買ひ求めたる譯にハあらず。我れ從來此の山に住して曾て出でたる事ハ無いのじや。大方諸君も皆な長の仲間なるとに御氣が附かれハせんか。總べて諸法は實相で御坐る。實相ハ無相で御坐るぞ。これ危き處を下るにハ須らく杖に依りすがりて能くそろくと氣を附て御下りなさい。險しき山へ上る時ハ宜しく藤の葛に捉りすがりて攀ぢ登る。これが實相の正法で御坐るぞ。それ澗の底の方を御覽なされ。松は常に翠り蒼々としてをるぞ。サア何んど見へました。谿の邊りにハ石が自から斑で御坐る。サア何んど看へました。寒山ハ山中に居て。世の中の友朋とハ。かけ阻り且つ絶交したりと雖ども。春風吹き來る時ハ。花ハ咲き。鳥ハ歌ひ。喧々として朋友を相呼び相求めてをる事で御坐る。諸法實相の妙用ハ不可思議。不可商量なり。天何をか言ふや。四時行はれ。百物生ず。無作の作。無言の言。それ聞取せよ。それ看取せよ。さても面白き妙法で御坐ろうがな。

我在村中住衆推無比方昨日到城下仍被狗形相或嫌誇太窄或說
珍少長攀卻鷓子眼雀兒舞堂堂

此の詩ハ。寒公が知己無きことを嘆じたるものなり。我れ村中に在りて住せしに。衆比方無しと
稱す。昨日城下に到れば。仍は狗に形相せらる。或ハ袴の太だ窄きを嫌ひ。或は衾少し長しと説
く。鶴子の眼を撃つれば。雀兒舞て堂堂たり。衾は苦故の切。股衣なり。衾は小襦なり。衾衣
ハ袖端無きなり。鶴は鷺鳥なり。俊鷹なり。善く雀を捉る。故に負雀と名づく。又鶴の類なり。擊
は音戀。手足の曲るなり。又綴るなり。鶴の眼を綴る時ハ。雀が威張て堂堂となるなり。形相せ
らるトハ。犬が寒山の乞食兒の如き風をして徘徊してをるから。怪しかる者と思てぞろろ見ま
はす様子なり。是れ世に厭はれ。人に容れられざる事を云ふ。

死生元有命富貴本由天。此是古人語吾今非謬傳。聰明好短命癡騃
卻長年。鈍物豐財寶。惺惺漢無錢。

此の詩は。大凡人壽長短。貧富智愚。貧卑貴賤。ことごとく因果應報の理あり。此れを天命と謂
ふ。世人之れを識破せざるが故に。奇計を施し。姦謀を設けて富貴を求め利達を希つて終に身不
義に陥り大に錯まり了ることを示したるなり。死生もど命あり。富貴本天に由る。此れは是れ
古鶴人の語。吾今譯まりて傳ふるにあらず。聰明好く短命なり。癡騃は卻て長年なり。鈍物ハ財
寶豊かなり。惺惺漢ハ錢無し。論語に。顔淵の篇に曰く。死生命有り。富貴天に在り。云云。騃
ハ愚なり。

國以人為本猶如樹因地。地厚樹扶疎。地薄樹憔悴。不得露其根。枝枯
子先墜。決陂以取魚。是求一朝利。

尙書に。五子の歌に曰く。民ハ惟れ邦の本。本固くして邦寧し。云云。文選に。孟夏草木長し。屋
を繞て樹扶疎たり。註に云く。扶疎トハ所謂枝葉四に布く貌なり。國ハ人を以て本とす。猶如樹
の地に因るが如し。地厚くして樹扶疎たり。地薄くして樹憔悴す。その根を露すことを得され。枝
枯れて子先づ墮つ。陂を決て以て魚を取る。是れ一朝の利を求む。

衆生不可説。何意許顛邪。面上兩惡鳥。心中三毒蛇。是渠作障礙。使爾
事煩拏。擧手高彈指。南無佛陀耶。

衆生説くべからず。何の意ぞ許顛の邪なる。面上ハ兩惡鳥。心中ハ三毒蛇。是れ渠れ障礙を作
す。爾をして事煩拏たらまむ。手を擧げて高く彈指す。南無佛陀耶。不可説トハ。華嚴經に十大
數を説く。その第九を不可説と云ふ。兩惡鳥トハ。事文類後集四十七に。尹吉甫が子伯奇。繼母
の讒に依り伯勞と作る。云云。梟は不孝の鳥なり。一名ハ流離。少きときハ好にして。長じて醜
し。大なれば則ち其の母を食す。蓋し兩惡鳥とは。伯勞と梟となり。煩拏トハ。宋玉が九辨の語
なり。註に。擾亂なりと云云。涅槃經の十四に。調達酥を服し苦を受く。南無佛陀と呼ふと云ふ事
あり。云云。此の詩ハ。衆生貪瞋癡の三惡の爲めに役せられて。無常を以て常と爲し。無樂を以

て樂と爲し。無我を以て我と爲し。不淨を以て淨と爲の四顛倒あること多き有様を説示せり。

自樂平生道烟蘿石洞間野情多放曠長伴白雲閑有路不通世無心
孰可攀石牀孤夜坐圓月上寒山

此の詩ハ。寒公が山居自適の境界を説く。自から樂む平生の道。煙蘿石洞の間。野情放曠多し。長く白雲の閑なるに伴ふ。路あれども世に通せず。心無くして孰か攀すべき。石牀孤り夜坐すれば。圓月寒山に上る。妙詩は講せずして吟するに妙味あり。此の詩一吟すれば心自から爽快を覺ふ。再吟すれば身骨自から登仙するを覺ふ。扱て寒公自から平生須臾も離るべからざる直心の大道を履踐する事を樂む。其の住する處は如何なる處ぞ。濕烟深く籠めたる薜蘿のかゝりたる石洞巖窟の間で御坐る。山野の情ハ素より青紫黄蓋の權家とハ異なり。唯だ天真爛漫にして威儀形式を重すること無し。放達空曠。一の俗念無し。長く白雲の無心にして閑なるに伴ひ遊ぶ。洞外路有れども幽深にして世俗に通するなし。此の内道心無き者ハ何ぞ攀ぢ登ることを得んや。山中の石牀上に獨夜坐しいれば。眞如實相。無欠無餘の圓月。一點の雲翳を絶じて。高く寒山の峰頂に昇りたど。諸君能く目を刮て御覽なされ。

大海水無邊魚龍萬萬千遞互相食噉冗冗癡肉團爲不心了絶妄想
起如烟性月澄澄朗廓爾照無邊

此の詩は。一切有情の類。互に相ひ噉食して生死輪回の止むこと無きことを説く。淮南子齊俗訓に曰く。水積れば則ち相ひ食むの魚を生ず。云云。冗は而離の切。冗は忙なり。又雜なり。大海の水無邊なり。魚龍萬萬千。遞互に相ひ食噉す。冗冗たる癡肉團。心の了絶せざるが爲めに。妄想の起ること烟の如し。性月は澄澄として朗かなり。廓爾として無邊を照す。扱て本來の本性の明月は。澄澄朗朗。廓爾として無邊法性海を照すことなるが。奈何せん無明煩悩の大海は。無量無邊。無涯無際。まかも其の中に浮沈する魚類。蛟龍其の類の多きこと其の幾百千萬億なることを知るべくもあらず。相ひ遞互に食ひ合ひをする。冗冗雜々たる諸の痴肉團。畢竟是れ本來の佛心を悟了せざるが爲めの故へなり。妄想分別の前念後念起ることは宛も暴風に黃塵を揚ぐるが如し。まかしながら本性の明月に於ては少しも。變相は御坐らんから。本性の明月を暗まさないよりに致されよ。

目見天台頂孤高出衆群風搖松竹韻月見海潮頻下望山青際談立
有白雲野情便山水木志慕道倫

此の詩は。天台の境を述べて。寒公自得のありさまを謂ふ。目天台の頂を見れば孤高にして衆群を出づ。風松竹の韻を搖し。月海潮の頻りなるを見る。下も山の青際を望む。玄を談するに白雲あり。野情山水を便りす。木志道倫を慕ふ。木志とは。俗念凡情を脱したる志を云ふなり。寒山詩

中。此の篇の如きも亦高雅幽韻の妙ある詩と云ふべし。吟ず可くして講ずべからず。

三五癡後生。作事不眞實。未讀十卷書。強把雌黃筆。將化儒行篇。喚作賊盜律。脫體似蟬蟲。皎破佗書帙。

雌黃トハ。書言十二に。議論反復するを口中の雌黃と曰ふ。晋の王衍の玄言を善くす。義理未だ安からざる所あれば。隨て更に改む。口中の雌黃と號す。註に曰く。雌黃は古人字を寫す。誤あれば雌黃を以て塗りて之れを改正す。王衍口中に就て改變す。紙上に改むることを待たず。云云。儒行トハ。禮記の篇名なり。律トハ。律呂、萬法の出づる所なり。故に法令之れを律と謂ふ。釋名に律は累なり。人心を累して放肆なることを得ざらまひ。蟬蟲トハ。書中の蟲なり。帙トハ。書衣なり。此の詩は。無賴の後學。人才を養ふことを知らずして。妄りに人の師と爲ることを好むを責む。

心高如山嶽。人我不伏人。解講韋陀典。能談三教文。心中無慚愧。破戒違律文。自言上人法。稱爲第一人。愚者皆讚歎。智者拊掌笑。陽燄虛空華。豈得免生老。不如百不解。靜坐絕憂惱。

韋陀トハ。外道の書なり。名義集半滿書籍の篇に。梵語。意陀此には智論と云ふ。之れを知れば智を生ず。即ち邪智論なり。上人の法トハ。楞嚴經六に曰く。各々自から謂へり。已に上人の法

を得たりと。無識を恥感し。恐して失心せしむ。又曰く。或は世間に付勝第一なることを求めて前人に謂て。我今已に須陀洹果。斯陀含果。阿那含果。阿羅漢道。辟支佛乘。十地地前の諸位の菩薩を得たりと言ふ。彼の禮儀を求めて供養を貪ると云云。此の詩は。廣學多智にして。未だ得ずして得たりと謂ひ。未だ證せずして已に證せりと云ふ底の痴人を責む。

如許多寶貝。海中乘壞舸。前頭失却桅。後頭又無柁。宛轉任風吹。高低隨浪簸。如何得到岸。努力莫端坐。

「如許の多寶貝。海中壞れたる舸に乗る。前頭に桅を失却し。後頭に又柁無し。宛轉として風の吹くに任かす。高低浪の簸るに隨ふ。如何ぞ岸に到ることを得ん。努力めて端坐すること莫し。」人々本具の自性。箇箇圓有の佛心之れを髻中の眞珠と名づく。之れを衣内の至寶と稱す。未だ見性せざるが爲めに。見思の雲霧に蓋覆せられ。貪瞋の家賊に劫奪せらる。外持律の善巧無く。內定惠の動果に乏し。生死海中恰も破壊の朽舟の桅無く柁無きが如し。色聲等の六塵は沈没せられ。識譽等の八風に漂流せられて。永劫の苦輪を免れず。鎮へに三途八難の衆生と爲りぬ。幸に今浮木の人身を受く。此の嘉運に乗じて。須らく努力すべし。坐して亡を待つこと莫れ。前進して乍ち自の本源を見徹し。永く生死の患難を免れ得ん。豈に憚らざるや。

我見凡愚人。多畜資財穀。飲酒食生命。謂言我富足。莫知地獄深。唯求

上天福罪業如毘富豈得免災毒財主忽然死爭共當頭哭供僧讀文
疏空是鬼神祿福田一箇無虛設一群禿不如早覺悟莫作黑暗獄狂
風不動樹心真無罪福寄語冗冗人叮嚀再三讀

此の詩は。世人自家本有の福田を知らず。錯て癡福を行じ地獄に墮することを責む毘富トハ。山の名なり。毘富羅山と稱せり。涅槃經に出づ。鬼神の祿トハ。冥福なり。福田トハ。衆僧は三界を出づるの福田なり。謂く比丘戒体を具有す。戒は萬善の根と爲る。是の故に世人歸信供養して福を種て沃壤の田の能く嘉苗を生ずるが如し。故に良福田と號す。云云。永嘉の證道歌に。罪福も無く損益も無し。寂滅性中間覓すること莫れ。云云。

勸爾三界子莫作勿道理理短被佗欺理長不奈爾世間濁濫人恰似
鼠粘子不見無事人獨脫無能比早須返本源三界任緣起清淨入如
流莫飲無明水

本草綱目十五に曰く。惡質或は牛旁と名づく。亦鼠粘と名づく。註に曰く。實の殼刺多し。鼠之れを過ぐるときは則ち縋り惹ひて脱する能はず。故に之れを鼠粘子と謂ふ。此の詩は。三界出離の要路を説く。如流とは。無漏真如海なり。無明の水とは。煩惱海を云ふなり。

三界人蠢蠢六道人茫茫貪財愛姪欲心惡若豺狼地獄如箭射極苦

若爲當兀兀過朝夕都不別賢良好惡總不識猶如豬及羊共語如木
石嫉妬似顛狂不自見已過如豬在圈臥不知自償債卻笑牛牽磨

此の詩は。世間多少の人。出離の志無く。再び三途の舊里に歸ることを惜む。

人生在塵蒙恰似盆中蟲終日行遠遠不離其盆中神仙不可得煩惱
計無窮歲月如流水須臾作老翁

此の詩は。世人往往に塵縁に勞役せられて休期無きことを歎す。

寒山出此語復似顛狂漢有事對面說所以足人怨心真出語直直心
無背面臨死度奈河誰是嘸囉漢冥冥泉臺路被業相拘絆

此の詩は。道人志氣直くして絃の如くなることを演ぶ。奈河は前の七十三首に之れを記す。嘸囉

は前の一百五十五首に之れを記す。

我見多智漢終日用心神岐路逞嘸囉欺慢一切人唯作地獄滓不修
正直因忽然無常至定知亂紛紛

此の詩は。見性悟道の眼孔無くして。亂りに多智多解を好む底の人を誡む。

寄語諸仁者復以何爲懷達道見自性自性即如來天真元具足修證
轉差廻棄本卻逐末祇守一場歎

「此の詩は。徒に修證に亘りて見性の志無き底の行人を誡む。默は愚なり。

世有_二一般人_一。不_レ惡_二又不_レ善_一。不_レ識_二主人公_一。隨_二客處_一々々。轉_二因循_一過_二時光_一。渾_レ是_二癡肉_一。雖_レ有_二一靈臺_一。如同_二客作_一漢。

莊子庚桑楚篇の註に。靈臺は心なり。客作の漢トハ。流落の客を云ふなり。

常聞_二釋迦佛_一。先_レ受_二然燈_一記。然燈_レ與_二釋迦_一。祇論_二前後_一。智_二前後_一體_二非_レ殊_一。異_二中_一無_レ有_二異_一。一佛_レ一切_二佛_一。心_レ是_二如來_一地。

常に聞く釋迦佛。先に然燈の記を受くと。然燈と釋迦と。祇だ前後の智を論ず。前後體殊なるに非ず。異中に異なること無し。一佛一切佛。心是れ如來の地。

大論に云く。太子生るゝ時一切身邊の光燈の如し。故に云ふ然燈瑞應經に云く。錠光佛の時。我れ菩薩と爲る。鹿皮の衣を被して王家の女を見る。名づけて瞿夷と云ふ。七枚の青蓮華を持して。菩薩追て呼で大姉且らく止めと云ふ。即ち五百の銀錢を以て。五青蓮華を買ふ等。云云。佛其の意を知りて之れを記して曰く。爾後ち九十一劫に。當に作佛を得て釋迦文と號すべし。云云。金剛般若經功德論に曰く。若し自身を見れば即ち佛身を見ん。若し佛身を見れば即ち自身を見ん。自身清淨を見ん。即ち佛身清淨を見ん。佛身清淨を見ん。即ち一切智清淨を見ん。一切智清淨を見ん。即ち一切智智清淨を見ん。此の中清淨智を見る。是れを佛を見ると名づく。我れ是の如く然

燈如來を見て。無生忍。一切智を得。一切智明了現前。即ち授記を受くと爲す。此の授記の聲耳に到らず。亦餘智の能く知る所にあらず。我れ此の時に於て亦昏蒙にして無覺なるにあらず。然れども所得無きなり。前後の智。前後の體トハ。前トハ。所見本具の大理なり。所謂然燈佛是れなり。後トハ。能見無師の眞智。いはゆる釋迦文佛是れなり。然れども前後の本體は殊異なるにあらず。

常聞_二國大臣_一。朱紫簪纓祿。富貴百千般。貪_レ榮_二不_レ知_一辱。奴馬滿_二宅舍_一。金銀盈_二帑屋_一。癡福暫時_レ扶_二埋_一頭_レ作_二地獄_一。忽_レ死_二萬事_一休。男女當_二頭_一哭。不_レ知_二有_三禍殃_一。前路何_レ疾_二速_一。家破_レ冷_二飈飈_一。食_二無_一一粒_二粟_一。凍_レ饑_二苦_一悽悽。良_レ由_二不_レ覺_一觸。

大惠が湯丞相に答ふる書に曰く。教中に説く。癡福を作れば是れ第三生の冤。何をか第三生の冤と謂ふ。第一生の癡福を作して見性せず。第二生の癡福を受く。慙愧無くして好事を做さず。一向に業を作る。第三生に癡福を受く。盡く好事を做さなければ。殼漏子を脱卻する時。地獄に入る。こと箭の射るが如し。此の詩は。富貴にして道を好むこと難し。寔に人難所の一なることを演ぶ。

上_二人心_一猛利_一。一聞_レ便_二知_一妙_二中流_一。心清淨_レ審思_二云_一甚_二要_一。下_二士鈍_一暗癡_レ頑皮_一。最_レ難_二裂_一。直_レ得_二血淋_一。頭_レ始_二知_一自_レ摧_二滅_一。看_レ取_二開眼_一。賊_レ鬧_二市集_一。人_レ決_二死屍_一棄_レ如_二塵_一。此_レ時_二向_一誰_レ説_二男兒_一大丈夫_一。一_レ刀_二兩段_一截_二人面_一禽獸_レ心_二造_一作_二何時_一歇。

此の詩も亦是れ世人の名聞利養の心の爲めに地獄の業を造ることを責む。

我有六兄弟就中一箇惡打伊又不得罵伊又不著處處無奈何耽財
好嬌殺見好埋頭愛貪心過羅刹阿爺惡見伊阿嬢嫌不悅昨被我捉
得惡罵恣情擊趁向無人處一一向伊說備今須改行覆車須改轍若
也不信受共備惡合殺備受我調伏我共備覓活從此盡相同如今遇
菩薩學業攻鑪冶鍊盡三山鐵至今靜恬恬衆人皆讚說

晏子春秋に。諺に曰く。前車の覆るは後車の戒めなり。文選に見る。龐居士が偈に。三山の鐵を
鍊り盡し。五岳の銅を鎔銷す。云云。此の詩ハ。六兄弟を以て六根に比況して以て意根の警誡す
べきことを説くなり。六兄弟トハ。眼耳鼻舌身意等の六識なり。中に就て一箇惡き者謂く第六意
識なり。行人あり工夫密ならず保護嚴ならざる時は則ち第六の妄識大に力を得て。疾きこと石
火電影の如く。猛きこと狂風怒濤の如し。貪愛詭曲慳慢嫉妬。無量の形を現はし。百千の態を作
す。五蘊十二處。十八界盡く伊が爲めに混亂せられて。處處奈何ともすること無し。打つことも
亦得ず。罵ることも亦得ず。所以に阿爺も惡んで伊を見る。阿嬢も嫌て悦びず。いはゆる阿嬢ト
ハ。第八頼耶含藏識是れなり。阿爺トハ。第七摩那傳送識是れなり。七八總に伊が慢を受く。宜
なるかな悦びざること

昔日極貧苦夜夜數佗寶今日審思量自家須營造掘得一寶藏純是
水晶珠大有碧眼胡密擬買將去余即報渠言此珠無價數

此の詩は。廣學多智ハ。見性の人に如かざることを説く。華嚴十三頌に曰く。譬ハ貧窮の人。日
夜に佗人の寶を數へて。自から半錢の無きが如し。法に於て修行せざれば。多聞も亦是の如し。混
繁經八に曰く。たとへば貧女人の如し。舍内多く眞金の寶藏あり。家人大小知る者ある無しと。又
曰く。貧女人トハ。即ち是れ一切無量の衆生なり。眞金藏トハ即ち佛性なり。云云。碧眼の胡ト
ハ。初祖達磨。眼に紺青の色あり。故に碧眼胡と云ふ。事苑の三に見へたり。般若多羅尊者。行
化して本國に到る。王無價珠を施す。等と正宗普達磨の章に就て見るべし。

一生慵懶作憎重祇便輕佗家學事業余持一卷經無心裝標軸來去
省人擊應病則說藥方便度衆生但自心無事何處不惺惺

龐居士の偈に財を開けバ。耳納れず。聲を聞けバ心生せず。有無の語を愛せずんバ。何ぞ慮らん
惺惺ならざること。

我見出家人不入出家學欲知眞出家心淨無繩索澄澄絶玄妙如如
無倚託三界任縱橫四生不可泊無爲無事人逍遙富快樂
逍遙トハ。莊子の註に。優遊自在なりと。此の詩ハ。大に辨道を助るなり。作麼生か是れ出家の

學。若し人出家の學に入らんと欲せば。先づ須く見性すべし。若し見性の眼無くんば。縦ひ繩索。無きも亦是れ一條の繩索。倚託無きも亦是れ一重の倚託。泊トハ止まるなり。

昨到雲霞觀。忽見仙尊士。星冠月帔橫。盡云居山水。余問神仙術。云道若爲比。謂言靈無上。妙藥必神秘。守死待鶴來。皆言乘魚去。余乃返窮之。推尋勿道理。但見箭射空。須臾還墜地。饒備得仙人。恰似守屍鬼。心月自精明。萬像何能比。欲知仙丹術。身內元神是。莫學黃巾公。握愚自守擬。

此の詩ハ。仙道一生困苦して所益無し。終に空亡に落つることを演ぶ。列仙全傳の五に曰く。桓闔者何れの許の人と云ふことを知らず。陶隱君に役事して茅山に居ること十餘年。立性端謹にして役を執るの外。寂然として無爲なり。一日二の青童あり。一の白鶴空よりして下り庭に集まる。隱君欣然として接し。必ず己れ之れに當ると謂へり。青童の曰く。太上の召す所の者は桓先生のみに。隱君黙して計るに門人桓を姓とする者無し。去ばらくありて云く是れ役を執る桓闔なり。其の致す所を語るに曰く。常に默朝の道を修め。親しく大帝に朝すること已に九年なりと。闔乃ち天衣を脱し白鶴に駕して虚に昇て去る。又周の王子喬は好で笙を吹く。後ち白鶴に乗じて去る。事物紀原第三に。三代に帔の説無し。披帛あり。練帛を以て之れを爲す。晋の永喜中に。絳暈帔子

を制す。開元中に三妃より以下をして通じて之れを服せしむ。是れ披帛ハ秦に始まり。帔は晋に始まる。列仙傳琴高善く瑟を鼓す。冀州涿郡の間に浮遊す。二百餘年後に水旁に於て祠人屋を設く。果して赤鯉に乗じて祠に來る。且つ萬人あり。之れを觀る一月にして後水に入り去る。證道歌に曰く。住相布施は生天福。猶ほし箭を仰て虚空を射るが如し。勢力盡くれば箭還て墜つ。來生の不如意を招き得たり。五燈曾元八に。呂洞賓。黃龍に問ふて曰く。一粒粟中に世界を藏し。半升鑑内に山川を煮る。且く道へ此の意如何。龍指して曰く。這の守屍鬼。呂曰く。爭奈せん囊に長生不死の藥あり。龍曰く。饒ひ。八萬劫を経るとも。終に是れ空亡に落つ。書言故事の道教の類に曰く。道子を稱して黃冠子と曰ふ。又曰く。黃冠師と。又後漢書の靈帝中平元年甲子鉅鹿縣の張角。黃老に奉事す。妖術を以て衆に教授して共に之れを神とす。其の徒衆數十萬。凡て三十六萬。角が弟子唐周上書して之れを告ぐ。詔ありて角等を追捕す。諸方に勅して俱に起り皆な黃巾を著て以て標幟と爲す。故に時の人之れを黃巾の賊と謂ふ。京師之れが爲めに震動す。云云。余郷有一宅。其宅無正主。地生一寸草。水垂一滴露。火燒六箇賊。風吹黑雲雨。子細尋本人。布裏眞珠爾。此の詩ハ。四大虛偽の理を説き。以て本來真人を了知すべきことを勸む。慧照禪師語録に曰く。問ふ如何なるか。是れ四種無相の境。師曰く。爾が一念心の疑ひ地に來り礙へ被る。爾が一念心の愛。

歌に來り溺さる。備が一念心の嘆。火に來り焼かる。備が一念心の喜。風に來り飄さる。若し能く是の如く辨得せば。境に轉せられず。處處に境を用ゆ。

傳語諸公子。聽說石齊奴。僮僕八百人。水確三十區。舍下養魚鳥。樓上吹笙竽。伸頭臨白刃。癡心爲綠珠。

韻瑞に曰く。石崇、齊州に生まる。故に小字を齊奴と曰ふ。事文類聚後集十六に。梁氏の女容貌あり。石季倫眞珠三斛を以て之を買ふ。即ち綠珠なり。晉書に石崇字季倫渤海南皮の人なり。衛尉に拜せらる。妓あり綠珠と曰ふ。美にして艶なり。善く笛を吹く。中書令孫秀。人をして之れを求めしむ。崇時に金谷の別館に在り。方に涼臺に登る。清流に臨む。婦人側に侍へり。使者以て告ぐ。崇盡く其の婢妾數十人を出して以て之れを示す。みな蘭麝を薫み。羅縠を被る。曰く擇ふ所に在りと云ふ。使者曰く。命を受く指して綠珠を索む。孰れか是なることを識らず。崇勃然として曰く。綠珠は吾が愛する所なり。秀怒る乃ち趙王倫を勸めて崇を誅す。遂に詔を矯げて之れを收へしむ。崇正に樓上に宴す。介士門に到る。崇綠珠に謂て曰く。我今汝が爲りに罪を得たり。綠珠泣て曰く。當に死を君が前に致すべし。因て自から樓下に投じて死す。崇東市に詣て嘆して曰く。奴輩吾が家財を利とす。收ふる者曰く。財の害を致さんことを知りて。何ぞ早く之れを散せざる。崇答ふるに能はずして害せらる。云云。水確三十區トハ。事文類聚別集十八に曰く。石崇富を致すこと賢からず。水確三千餘口。佗の珍寶賄之れに稱へり。

何以長惆悵。人生似朝菌。那堪數十年。新舊凋落盡。以此思自哀。哀情不可忍。奈何當奈何。脫體歸山隱。

莊子逍遙遊の篇に曰く。朝菌晦朔を知らず。蟪蛄春秋を知らず。文選陸士衡樂府の詩に曰く。新友多くハ零落し。舊齒皆な凋喪す。此の詩ハ。無常の變遷を説て。眞の歸處を示す。

縹緲關前業。莫訶今日身。若言由冢墓。箇是極癡人。到頭君作鬼。豈令男女貧。皎然易解事。作麼無精神。

此の詩ハ。専ら因果報應の理を説く。縹緲トハ。敝衣なり。精神トハ。易の繫辭に曰く。義に精くして神に入るなり。

我見黃河水。凡經幾度清。水流如急箭。人生若浮萍。癡屬根本業。無明煩惱。阮輪廻幾許。却祇爲造迷盲。

黃河トハ。前の六十三首に記す。浮萍トハ。前の一百四十四首に在り。煩惱唯識論に曰く。根本煩惱に六。貪。嗔。癡。慢。疑。惡見。等あり云云。此の詩ハ。人世無常迅速にして。其間に六煩惱よりして。數水の輪廻の迷城を造營して。解脱の期無き事を説く。

二儀既開闢。人乃居其中。迷爾即吐霧。醒爾即吹風。惜爾即富貴。奪爾

即貧窮碌碌群漢子萬事由天公

此の詩或ハ寒公の作にあらざるべし。

余勸諸稚子急離火宅中三車在門外載爾免飄蓬露地四衢坐當天
萬事空十方無上下來去任西東若得箇中意縱橫處處通

此の詩ハ全篇法華譬喻品の大意なり。法華譬喻品に是の時長者。諸子等の安穩に出づることを得て皆な四衢道中露地に於て而して坐して復の障碍無きことを見る。其の心泰然として歡喜踊躍す云云。科註に。四衢道中ハ四諦に譬ふるなり。露地トハ。三界思盡を露地と名づくるなり。若し箇の中の意を得ばトハ。見性悟道し去らば。縱橫處々に通せんとなり。處々心處々現なり。

可歎浮世人悠悠何日了朝朝無閑時年年不覺老總爲求衣食令心
生煩惱擾擾百千年去來三惡道

此の詩ハ人の五慾に耽て。永劫に流轉三界することを責む。一本には世の字。生字に作る。

時人尋雲路雲路杳無蹤山高多嶮峻澗澗少玲瓏碧嶂前兼後白雲
西復東欲知雲路處雲路在虛空

此の詩ハ寒公山居自適の景況なり。古詩に。九天の雲路早く須らく尋ねべし。蹉跎として歲月深からしむること莫れ。謝氏才あり白髮を憐む。顔生黄金を戀ふに意無し。云云。

寒山樓隱處絕得雜人過時逢林內鳥相共唱山歌瑞草聯谿谷老松
枕嵯峨可觀無事客憩歇在巖阿

此の時ハ寒公が獨眺山中の風彩なり。

五嶽俱成粉須彌一寸山大海一滴水吸入其心田生長菩提子徧蓋
天中天語爾慕道者慎莫繞十纏

五嶽トハ。泰山。華山。恒山。嵩山。衡山なり。須彌トハ。翻譯名義集に。衆山の篇に曰く。蘇

迷盧。西域記に云く。唐にハ妙高と云ふ。舊に須彌と云ふ。又須彌樓と云ふ。皆な訛なり。毘盧

俱舍に云く。妙高トハ。七寶所成の故に妙と名づく。七金山の上に出づるが故に高と名づく。同

じく林木篇西域記に云く。菩提樹即ち畢鉢羅樹なり。昔佛在世にハ。高さこと數百丈。屢く殘伐

を経て。猶ほ高さこと四五丈。佛その下に坐して。等正覺を成じ給ふ。釋氏要覽三寶篇に曰く。

天中天トハ佛の小名なり。本行經に云く。淨飯王の云く。太子生れて後ち諸事皆な成す。宜しく

薩婆類他悉陀と字づくべし。又一日太子を抱て。釋迦増上大天神に謁す。廟神石を以て像と爲す。

即ち起て太子の足を禮す。王曰く。我が子ハ天神の中に於て更に尊勝と爲す。宜しく天中天垂裕

と名づくべし。云云。忿恚を喚と云ふ。自罪を隱藏するを覆と云ふ。意旨昏迷を睡と云ふ。五情

暗冥を眠と云ふ。嬉游を戲と云ふ。三業躁動を掉と云ふ。屏處起罪自から羞ぢざるを無慚と云ふ。

露處罪を起し他に羞ぢざるを無愧と云ふ。財法恩施すること能はざるを慳と云ふ。他の榮心熱惱を生ずるを嫉と云ふ。是れを十纏と云ふ。

無衣自訪覓莫共狐謀裘無食自采取莫共羊謀羞借皮兼借肉懷歎復懷愁皆緣義失所衣食常不周

差トハ。忠留の切。進なり薦なり大勝なり。符子に曰く。魯孔子を用ひんと欲す。三桓を召して之を議す。左丘明が曰く。周人千金の裘を爲ることあり。而して狐と其の皮を講す。少宰の珍を具へんと欲す。而して羊と其の差を謀る。云云。

自羨山間樂逍遙無倚託逐日養殘軀閑思無所作時披古佛書往往

登石閣下窺千尺崖上有雲旁磳寒月冷颼颼身似孤飛鶴

磳磳トハ。莊子逍遙遊篇に云く。磳磳の語あり。註に。周遊無心の貌。字彙に廣被なり。寒月冷颼颼。身似孤飛鶴。一讀心自爽快を覺ふ。

我見轉輪王千子常圍繞十善化四天莊嚴多七寶七寶隨隨身莊嚴甚妙好一朝福報盡猶若棲蘆鳥還作牛領蟲六趣受業道況復諸凡夫無常豈長保生死如旋火輪廻似麻稻不解早覺悟爲人柱虛老此の詩ハ。輪王の溼陁を説て。凡夫虛生浪死を示す。維摩法供養品に云く。是の時轉輪聖王あり。

名けて寶蓋と曰ふ。七寶具足して四天下を主る。王千子あり。端正勇健。能く怨敵を伏す。華嚴經に曰く。王道を得る。其の正殿に於て。綵女圍繞。七寶自から至る。一にハ金輪寶。勝自在と名づく。二には白象寶。青山と名づく。三には紺馬寶。勇疾風と名づく。四にハ神殊寶。光藏雲と名づく。五にハ主藏臣寶。大財と名づく。六にハ玉女寶。淨妙徳と名づく。七には主兵臣寶。離垢眼と名づく。此の七寶を得バ。閻浮提に於て。轉輪王と作る。寶藏論に云く。夫れ道に進むの由中に萬途あり。困魚窟に止まり。病鳥蘆に栖ひ。説者の曰く。此れ事を擧げて以て漸に況ふ。學者進路の由を言ふなり。途ハ道なり。即ち八萬四千の法門。機に隨て各々解す。困魚の小窟に止まり。病鳥の蘆叢に栖がむ如し各々安する所を得ると雖ども。俱に未だ大海深林に到らざるなり。釋語解に曰く。牛領蟲有り。車を駕すれバ則ち輓の爲めに必ず厭殺せらる云云。楞嚴三に。生じてハ死し。死してハ生じ。生生死死。旋火輪の如し。未だ休息あらず。法華方便品に曰く。稻麻竹葦の如しと云云。

平野水寬濶丹丘連四明仙都最高秀群峯聳翠屏遠遠望何極硯硯

勢相迎獨標海隅外處處播嘉聲

文選孫興公が天台山の賦に。天台山ハ蓋し山岳の神秀なる者なり。海を渉るときハ則ち方丈蓬萊あり。陸に登るときハ則ち四明あり。又曰く羽人を丹丘に仍り。不死の福庭を尋ぬ。又曰く。陟

降り宿にして仙都に至る。硯硯トハ。山の高く抜き出づるの貌なり。
可貴一名山。七寶何能比。松月颯颯冷。雲霞片片起。厝匝幾重山。廻還
多少里。谿澗靜澄澄。快活無窮己。

詩中いはゆる一の名山とは。専ら天台山を指す乎。七寶も何ぞ能く比せんと將た又別に之れ有る
乎。佳遁の治亂聞へず。榮辱知らず。飄然として世累を脱脱す。濁世の患難を救ふに到てハ。
寔に七寶も亦及ぶべからざる乎。然りと雖ども世累を脱するに唯だ是れ生死の岸頭。暫時休息の
み。若し是れ見性して本分一箇の名山に入得せば。乍ち生死永劫の苦縛を脱却せん。是れ真正七
寶も及ばざる底の名山乎。

我見人間人。生而還復死。昨朝猶二一八。壯氣胸襟士。如今七十過。力困
形憔悴。恰似春日花。朝開夜落爾。

此の詩ハ。専ら無常の有様を説きたるものなり。

迥聳霄漢外。雲裡路峩嶢。瀑布千丈流。如鋪練一條。下有接心窟。橫安
定命橋。雄鎮世界。天台名獨超。

騎賓王靈隱寺の詩に曰く。待て天台の路に入て。余が石橋を廣るを看よ。註に。天台赤城山高
きこと一萬八千丈。上に石橋あり。廣きこと尺に盈たず。下萬丈の深澗に臨めり。惟だその身を

忘れて。然る後ちに能く濟る。峩嶢トハ。山の高さ貌なり。

盤陀石上坐。谿澗冷淒淒。靜玩偏嘉麗。虛巖蒙霧迷。怡然憩歇處。日斜
樹影低。我自觀心地。蓮華出淤泥。

隱士遁人間。多向山中眠。青蘿疎麓麓。碧澗響聯聯。騰騰且安樂。悠悠
自清閑。免有染世事。心靜如白蓮。

此の詩二首。隱遁高勝を説く。四十二章經に曰く。沙門濁世に居することハ。當に蓮華の泥の爲
めに汚されざるが如くなるべし。云云。

寄語食肉漢。食時無逗留。今生過去種。未來今日修。祇取今日美。不
來生憂老鼠入。飯食雖飽難出頭。

此の詩ハ。食肉の苦因なることを誡む。義楚六帖二十四に。甘露道經に曰く。長者あり蘇瓶を
じ樓に在く。一鼠蘇を食て瓶に入る。而して蘇を食ひ盡くす。身大にして瓶を出づること得ず。

長者蘇を取る。是れ凝結すと謂て。火を以て瓶を燒く。鼠死す是れ食の爲めに因る。云云。
自從出家後。漸得養生趣。伸縮四肢全。勤聽六根具。褐衣隨春冬。糲食
供朝暮。今日懇懇修。願與佛相遇。

此の詩ハ。遁世の佳趣を述ぶ。褐衣トハ。毛布なり。賤者の服する所。詩に衣無く糲無くんば何

を以てか歳を卒へん。韓非子の五蠹の篇に曰く。堯の天下に王たるや。茅茨剪らず。采椽剝らず。

糲糲の食。藜藿の羹。冬日ハ鹿裘。夏日ハ葛衣す。云云。

世事繞悠悠。貪生未肯休。研盡大地石。何時得歌頭。四時周變易。八節急如流。爲報火宅主。露地騎白牛。

傳灯錄懶瓚和尚の歌に曰く。世事悠々として山丘に如かず。智度論の五に曰く。劫の義。佛譬喩を以て説き給ふ。四十里の石山。長壽の人あり百歳を過ぎ細粟の衣を持て。一だひ來て拂ひ拭ふ。此の大石山をして盡さむとも却ハ故未だ盡さず。云云。八節トハ。立春。春分。立夏。夏至。立

秋。秋分。立冬。冬至。等なり。露地。白牛の事前に出づ。

可笑五陰窟。四蛇同共居。黑暗無明燭。三毒遞相驅。伴黨六個賊。劫掠法財珠。斬卻魔軍輩。安泰湛如蘇。

涅槃經二十二に曰く。身を觀ること鏡の如し。地水火風ハ四毒蛇の如し。云云。涅槃經二十一に曰く。此六塵は六賊の如し。何を以ての故に。能く一切の善法を劫むるが故にと云云。

常聞漢武帝。爰及秦始皇。俱好神仙術。延年竟不長。金臺旣摧折。沙丘遂滅亡。茂陵與驪嶽。今日草茫茫。

此の詩ハ。仙を求めて成らず空しく老死することを述ぶ。一統志三十二西安府の武帝の茂陵は興平縣の東北七十里に在り。同じく三十一に。西安府。秦の始皇の陵は驪山の下に在り。云云。神仙の術トハ。始皇不死の薬を求めて遂に海に並て平原津に至て病む。七月丙寅に沙丘の平臺に崩す。

金臺トハ。是れ恐らくバ金莖乎。漢武建章宮に承露盤有り。高さ二十丈。大さ七圍。銅を以て之れを爲る。上に仙人掌あり。承露を玉屑に和して之れを飲ひ。西都の賦に仙人掌を拏げて以て露を承く。雙び立つるの金莖を擲さんでたり。

憶得二十年。徐步國清歸。國清寺中人。盡道寒山癡。癡人何用疑。疑不解。尋思我尙自不識。是伊爭得知。低頭不用問。問得復何爲。有人來罵我。分明了了知。雖然不應對。卻是得便宜。

四十二章經に。佛言く人あり吾れ道を守り大に慈を行ずるを聞く。故に佛を罵ることを致す。佛黙して對へず。罵ることを止む。龐居士が偈に曰く。耳他の罵言を聞ても。心知て口對ふること莫れ。云云。

語備出家輩。何名爲出家。奢華求養活。繼綴族姓家。美舌甜唇贊。諂曲心鈎加。終日禮道場。持經置功課。鑪燒神佛香。打鐘高聲和。六時學客

春。晝夜不得臥。祇爲愛錢賤。心中不脫灑。見他高道人。卻嫌誹謗罵。驢屎比麝香。苦哉佛陀耶。

二百二十一

此の詩ハ。澆末の出家。真正の道心無くして。妄りに佛法を街賣する底の賈僧を責む。法華經序品に曰く。名利を求めて厭くことを無く。多く族姓の家に遊ぶ云云。客春トハ。禮拜を云ふ。萬善同歸集に曰く。行導禮拜。末だ真修を具せず。祖ハ客春の倦りを立て。佛ハ磨牛の誦りあり。云々。課トハ。試なり。又ハ程なり。

又見出家兒有力及無力。上上高節者。鬼神欽道德。君王分輦坐。諸侯拜迎送。堪爲世福田。世人須保惜。下下低愚者。詐現多求覓。濁濫即可知。愚癡愛財色。著卻福田衣。種田討衣食。作債稅牛犂。爲事不忠直。朝朝行弊惡。往往痛腎脊。不解善思量。地獄苦無極。一朝著病纏。三年臥牀席。亦有眞佛性。翻作無明賊。南無佛陀耶。遠遠求彌勒。

此の詩ハ。分明に出家の邪正を説く。古語に。只だ是れ信進念定慧根力同體名異ならず。五カトハ。定力。通力。大願力。法威徳力。借識力。十カトハ。是處非處力。智業力。三昧力。智根力。智欲力。智性力。至道力。宿命力。天眼力。無漏力。等なり。六物の圖に。袈裟或ハ福田衣と名づく。章服儀に曰く。條堤の相ハ。事田疇に等し。畦に水を貯へて嘉苗を養ふが如し。此の衣を服して功德を生ずるに譬ふるなり。云云。智度論十九に。問て曰く。何等か是れ五種の邪命。答へて曰く。一にハ若くハ行者利養の爲めの故に詐りて奇特を現す。二にハ利養の爲めの故に自か

ら功德を説く。三には利養の爲めの故に吉凶を占相して人の爲めに説く。四にハ利養の爲めの故に。高聲に威を現す。人をして畏敬せまひるなり。五にハ利養の爲めの故に。所得供養を稱説す。以て人心を動す。邪因縁活命するが故に是れを邪命と爲す。

寒巖深更好。無人行此道。白雲高岫閑。青嶂孤猿嘯。我更何所親。暢志自宜老。形容寒暑遷。心珠甚可保。

此の詩の如きハ。寒公詩中の無瑕無玷の最上乘なるものなり。條理分明にして。韻調秀絶なり。誰れか是の什を稱して心地登仙せざるものあらんや。

巖前獨靜坐。圓月當天耀。萬象影現中。一輪本無照。廓然神自清。含虛洞玄妙。因指見其月。月是心樞要。

楞嚴經二に曰く。人手を以て月を指して人に示すが如し。彼の人指に因りて當さに月を見るべし。云云。

本志慕道倫。道倫常獲親。時逢杜源客。每接話禪賓。談玄月明夜。探理日臨晨。萬機俱泯迹。方識本來人。

法苑珠林に云く。夫れ其の流を導ぐものハ。未だ其の源を杜ぐに若かず。其の濁を揚ぐものハ。未だ其の火を撲つに如かず云云。杜源トハ。諸の無明煩惱を杜絶するなり。

元、非、隱、逸、士、自、號、山、林、人、仕、魯、蒙、幘、帛、且、愛、裏、練、巾、道、有、巢、許、操、耻、爲、堯、舜、臣、獼、猴、罩、帽子、學、人、避、風、塵、

此の詩ハ。大體北山移文を用ゆ。偽隱の輩を責む。幘トハ。側革の功。方言に覆髻。之れを幘と謂ふ。漢書に云く。幘は卑賤執事。冠せざる者の服する所。或ハ之れを承露と謂ふ。

自、古、諸、哲、人、不、見、有、長、存、生、而、還、復、死、盡、變、作、灰、塵、積、骨、如、毘、富、別、淚、成、海、津、唯、有、空、名、在、豈、免、生、死、輪、

涅槃經二十に曰く。昔し然數劫よりこのかた。常に苦惱を受く。一々の衆生。一切の中に積む所の身骨。王舍城の毘富羅山の如し。云云。

今、日、巖、前、坐、坐、久、煙、雲、收、一、道、清、谿、冷、千、尋、碧、嶂、頭、白、雲、朝、影、靜、明、月、夜、光、浮、身、上、無、塵、垢、心、中、那、更、憂、

此の詩ハ。巖中禪坐。無心無想の狀況を述べたり。

千、雲、萬、水、間、中、有、一、閑、士、白、日、遊、青、山、夜、歸、巖、下、睡、倏、爾、過、春、秋、寂、然、無、塵、累、快、哉、何、所、依、靜、若、秋、江、水、

此の詩ハ。山居自適の狀況を述べ。

今、生、道、勉、備、信、余、言、識、取、衣、中、寶、

義楚六帖十六に。俱舍論を引て云く。梵語には閻羅。或ハ琰摩羅と云ふ。此に譯して息諍と云ふ。能く諸の罪人の諍を止息するが爲めの故に。云云。三藏法數に曰く。火途即ち地獄道なり。刀途即ち餓鬼道なり。血途即ち畜生道なり。云云。衣中の寶トハ。法華五百弟子授記品に出づ。

世、間、一、等、流、誠、堪、與、人、笑、出、家、弊、己、身、誑、俗、將、爲、道、雖、著、離、塵、衣、衣、中、多、養、蚤、不、如、歸、去、來、識、取、心、王、好、

釋氏要覽の法衣の篇に曰く。袈裟を離染衣と名づく。又離塵服と名づく。云云。

高、高、峰、頂、上、四、顧、極、無、邊、獨、坐、無、人、知、孤、月、照、寒、泉、泉、平、且、無、月、月、自、在、青、天、吟、此、一、曲、歌、歌、中、不、是、禪、

秀才ハ文士の通稱なり。事物記原の三に。進士時の爲に尙ばること久し。其の通稱之れを秀才と謂ふ。詩人玉屑十一に曰く。詩病八ツあり。其の三を蜂腰と云ふ。第二字第五字と聲を同ふすること得ざるなり。聞く君が我を愛して甘んずることを。竊かに自から修飾せんと欲すと云ふが如し。君甘みな平聲。欲飾皆不入聲。その四を鶴膝を曰ふ。第五の字と第十五の字と聲を同ふ

すること得ざるなり。客從遠方來。遺我一書札。上言長相思。下言久離別。と云ふが如き。來思みな平聲。此の説行て看るべし。

我住在村郷。無爺亦無孃。無名無姓第人喚。作張王並無人教我貧賤也尋常自憐心的實堅固等金剛。寒山出此語。此語無入信。蜜甜足人嘗。黃連苦難吞。順情生喜悅。逆意多瞋恨。但看木傀儡。弄了一場困。

實語に。孔子の曰く。良藥は口に苦けれども。病に利あり。忠言は耳に逆へども行ひに利あり。云云。

我見入轉經。依佗言語會。口轉心不轉。心口相違背。心真無委曲。不作諸纏蓋。但且自省躬。莫覓佗替代。可中作得主。是知無內外。

六祖大師曰く。口に誦して心に行ずれば。即ち是れ經を轉ずるなり。口に誦して心に行せざれば。即ち是れ經に轉せらるゝなり。又曰く。心迷へば法蓮に轉せらる。心悟れば法華を轉ず。云云。

寒山唯白雲。寂寂絕埃塵。草座山家有。孤燈明月輪。石牀臨碧沼。虎鹿每爲鄰。自羨幽居樂。長爲象外人。

文選孫興公が天台山上遊ぶ賦の註に。象外は道を謂ふ。云云。

義講詩山寒

鹿生深林中。飲水而食草。伸脚樹下眠。可憐無煩惱。繫之在華堂。儲膳極肥好。終日不肯嘗。形容轉枯槁。

此の詩は。萬物との處を得ざれば。則ち其の心を安んずること能はざるを云ふ。

花上黃鶯子。啾啾聲可憐。美人顏似玉。對此弄鳴絃。玩之能不足。眷戀在韶年。花蜚鳥亦散。灑淚秋風前。

此の時も亦是れ人生無常なることを述べたるもの。

接運寒巖下。偏訝最幽奇。携籃采山茹。挈籠摘果歸。蔬齊敷茅坐。啜啄食紫芝。清沼濯瓢鉢。雜和煮稠稀。當陽擁裘坐。閑讀古人詩。

抄に曰く。稠稀の二字。未だ詳かならず。有る説には。多少の義なり。字彙に。稠は音稠。多なり。稀は音禿。疎なり。少なり。云云。

昔年經行處。今復七十年。故人無來往。埋古冢間。余今頭已白。猶守一片雲。山爲報後來。子何不讀古書。

此の詩は。舊懷を述ぶ。以て後昆を教諭す。何ぞや。詩中に謂はゆる古書とは。黃卷赤軸の謂ひ乎。將た又聖經賢典を指す乎。曰く然らず。人人本具の心上。一篇無字の經卷あり。竺墳五千四百軸。魯論二萬三千字。盡く是れ者理より出づ。若し人此の書を傳寫せんと欲せば。先づ須らく

見性すべし。

欲向東巖住。于今無量年。昨來攀葛上。半路困風煙。徑窄衣難進。苔黏履不前。住茲丹桂下。且枕白雲眠。我見利智人。觀者便知意。不假尋文字。直入如來地。心不逐諸緣。意根不妄起。心意不生時。內外無餘事。我今稽首禮。無上法中王。慈悲大喜捨。名稱滿十方。衆生作依怙。智慧身金剛。項禮無所著。我師大法王。

慈悲喜捨。之れを四無量心と謂ふ。慈は能く樂を與へ。悲は能く苦を抜く。喜は彼の樂を慶し。捨は冤親平等。涅槃經十四に詳かなり。詩經の蓼莪に。父なくバ何ぞ恃まん。母なくバ何ぞ怙ん。云云。智度論二十一に曰く。大名稱あり十方に遍滿す。是を以ての故に婆伽婆と名づく。涅槃經の三如來の身は猶ほ真金剛のごとし。維摩經の佛國品に曰く。稽首す空の如くにして所依無きが故に云云。

君看葉裡花。能得幾時好。今日畏人攀。明朝待誰掃。可憐嬌艷情。年多轉成老。將世比於花。紅顏豈長保。

此れ亦觀無常の意なり。王駕が晴景の詩に。雨前初看花間葉。雨後兼無葉底花。

畫棟非我宅。青林是我家。一生俄爾過。萬事莫言除。濟度不造筏。漂淪爲采花。善根今未種。何日見生芽。

涅槃經二十に曰く。水を度んと欲するには善く船筏を護るが如し云云。同じく二十七に曰く。譬へば人あり妙華に貪著して。之れを採り取るの時。水の爲めに漂さるゝが如し。衆生も亦然り。五慾に貪著して生老病死の爲めに漂没せしむる。

出生三十年。當遊千萬里。行江青草合。入塞紅塵起。鍊藥空求仙。讀書兼詠史。今日歸寒山。枕流兼洗耳。

晋書に孫楚字は子荆。大原中都の人なり。才藻卓絶。爽邁不群。陵傲する所多し。郷曲の譽を缺ぐ。年四十餘にして始めて鎮東の軍事に參ず。馮翊の太守に終ふ。初め楚少かりし時隱居せんと欲す。王濟に謂て曰く。當に石に枕し流に漱がんと欲すと云ふべきを。誤りて石に漱で流に枕すと云ふ。濟いはく。流は枕す可きにあらず。石は漱ぐ可きにあらず。楚いはく。流れに枕する所には其の耳を洗はんと欲す。石に漱ぐ所以は其の齒を厲がんと欲す。云云。

寒山無漏岩。其大甚濟要。八風吹不動。萬古人傳妙。寂寂好安居。空空離譏誚。孤月夜長明。圓日常來照。虎丘兼虎谿。不用相呼召。世間有主傳。莫把同周召。我自遜寒巖。快活長歌笑。

淨名經の註に。肇云く。利。衰。毀。譽。稱。讚。苦。樂。八法の風。如來を動さざること猶ほ四風の須彌を吹くが如きなり。虎丘平江路の虎丘山なり。晋の安西將軍桓温が主簿王珣。宅を捨て寺と爲す。道生法師涅槃經を此の山に説く。群石首肯の蹤あり。虎谿は盧山の虎谿なり。慧遠客を送て虎谿を過ぎず云云。王傳トハ。太子の大傳等。東海の仲翁が傳を引く。詳かに蒙求に見へたり云云。周召トハ。周公旦と召公奭なり。相ひ呼び召すことを用ひすトハ。無漏岩中の佳趣。豈に虎丘と虎谿とに換ふ可けんや。

沙門不持戒道士不服藥自古多少賢盡在青山脚

列女傳に。婕妤自傷の賦に曰く。願くは骨を山足に歸し。松柏の餘休に依らん。管解に曰く。智度論二十二に曰く。亦淨戒を持し。精進して以て脱す可きにあらず。死賊憐愍無し。來る時は避くるに處無し云云。此の篇の主意は沙門緇を被し戒を持つと雖ども。豈に不生不滅を得んや。道士藥を服し穀を避くと雖ども。豈に不老不死を得んや。豈に見ずや古より多少の羽客釋流。盡く埋れて青山の脚古冢の間に在ることを。寧ろ美酒を飲み。執と素とを被服せんには如かざるなり。然れども持戒は僧道の本面目なり。亦須臾も離るべからざる者なり。

有人笑我詩我詩合典雅不煩鄭氏箋豈用毛公解不恨會人稀祇爲知音寡若遺趁官商余病莫能罷忽遇明眼人即自流天下

流は傳の意なり。箋は鄭玄が箋註なり。解は毛萇が詩の註解なり。字彙に箋音煎。表なり。讀なり。鄭庚成毛氏が詩の傳の未だ盡さざる者を行て。名けて箋と云ふ。張華博物志に云く。鄭玄は即ち毛萇が郡の人なり。謙敬して敢て註と言はず。但だ其の明かならざるを表識する耳。此の説は本後漢書の衛宏が傳の註に出でたり。

五言五百篇七字七十九三字二十一都來六百首一例書巖石自誇云好手若能會我詩真是如來母

此の詩は。寒公が一生の所作の詩數を算結す。閻丘わづかに三百十首を得たり。七字トハ。劉義慶が世説に云く。王子猷謝公に詣る。云く詩何ぞ七言なる。子猷曰く昂昂として千里の駒の若く。泛泛として水中の鳥の如し。此の語離騷に出たり。東方朔が傳に曰く。漢武帝柏梁臺に在て。群臣をして七言を作らしむ。七言の作こゝに起る。云云。如來の母トハ。仁王般若經不思議品に曰く。此の般若波羅密多是是れ諸佛の母。諸菩薩の母。不共功德神通の生ずる所なり云云。

◎七言詩

余曾昔親聰明士博達英靈無比倫一選嘉名喧宇宙五言詩句越諸人爲官治化超先輩眞爲無能繼後塵忽然富貴貪財色五解冰消不可陳

此の詩は。聰明博達も遂に永劫の福を造るに足らざることを述ぶ。事苑に天地四方を宇と曰ひ。

古往今來を宙と曰ふ。後漢書陳寔傳に。繼塵の二字有り。

貪愛有_レ人求_レ快活。不知_レ禍在_二百年_一。身但看_レ陽燄浮漚。水便覺_レ無常敗壞。人丈夫志氣直如_レ鐵。無_レ曲心中道自_レ眞行。密節高霜下。竹方知_レ不_レ枉用_二心神_一。

此の詩は。世俗の風塵を脱して。清行高節の道人たるべきことを勸告せらる。智度論の六に曰く。

餓の如き者。餓は日光風塵を動かすを以ての故に。曠野の中野馬の如し。無智の人初めて見て謂て水と爲す。

汝謂埋_レ頭癡兀兀。愛向_二無明羅刹窟_一。再三勸_レ爾早修行。是爾頑癡心恍惚。不肯_レ信受寒山語。轉轉倍_レ伽業。汨汨直待_レ斬首作_二兩段_一。方知_レ自身奴賊物。

法華普門品科註に曰く。羅刹は是れ人を食する鬼なり。又曰く。見愛の境に墮して。見愛羅刹の爲めに害せらる云云。揚子法言に。神心恍惚。恍惚トハ意を失するなり。汨汨トハ。字彙に音骨。亂なり。濁なり。

雲山疊疊連_二天碧_一。路僻林深無_レ客遊。遠望孤蟾明皎皎。近聞群鳥語啾啾。

老夫獨坐_レ棲青嶂。少室閑居任_二白頭_一。可_レ歎往年與_二今日_一。無_レ心還似_二水東流_一。

塞公山居して歲月事物の變遷異動するの迅速なることを静観す。

一住寒山萬事休。更無_レ雜念掛_二心頭_一。閑於_二石壁_一題詩句。任_レ運還同_二不_レ繫舟_一。

買誼が鵬鳥の賦に曰く。澹たること深淵の静なるが如く。泛たること繫がざるの舟に似たり。

余見僧絲性。希奇_レ巧妙間生_二梁朝_一。時道子飄然爲_二殊特_一。二公善繪手毫揮。逞_レ畫圖眞意氣。異龍行鬼走神巍巍。饒貌_レ虛空寫_二塵跡_一。無_レ因畫得_二志公師_一。

事苑第六に。張僧繇は吳の人なり。梁の天監中に武陵王國が侍郎直秘閣知畫事と爲る。右將軍吳興の太守を歴たり。列仙傳第六に。僧繇龍を畫て睛を點し。雷を聞くときは則ち壁を破て飛び去る。道子龍を畫て鱗甲飛動するが若し。佛祖綱目二十七に。梁の武帝嘗て畫工僧繇に詔して。誌公の像を寫させむ。筆を下す輒ち自から定まらず。誌公遂に指を以て面門を劈して。分披して十。二面觀音の相を出す。或は慈或は威。繇竟に寫すこと能はず。誌公曰く。毘婆尸佛。蚤く心を留めて直ちに而今に至て妙を得ず。云云。

久住寒山凡幾秋。獨吟歌曲絕無憂。蓬扉不掩常幽寂。泉涌甘漿長自流。石室地爐砂鼎沸。松黃柏茗乳香甌。飢飡一粒伽陀藥。心地調和倚石頭。

二百三十四

東坡詩集卷の三に曰く。崎嶇食松黃。註に曰く。本草圖經に。松枝上の黄粉を松黄と名づく。山人時に拂ひ取りて湯を作り之れを點す。本草に。乳香は仙方に用て以て穀を避く。名義集什物の篇に曰く。阿伽陀。こゝには普去と譯す。能く衆病を去ればなり。又圓藥と翻す。華嚴經に曰く。阿伽陀圓。衆生見者衆病悉く除く云云。

千生萬死何時已。生死來去轉迷盲。不識心中無價寶。猶似盲驢信脚行。

此の篇の如きは學佛祖道者の頂門の金針とも謂ふべきものなり。

老病殘年百有餘。面黃頭白好山居。布裘擁質隨緣過。豈羨人間巧樣摸。心神用盡爲名利。百種貪婪進已軀。浮世幻化如燈燼。冢内埋身是有無。

名聞利養は是れ外物なり。皮肉骨筋も亦是れ外物なり。唯だ本來の眞面目のみ是れ我が家内の無價の寶珠なることを説破せり。

世間何事最堪嗟。盡是三途造罪愆。不學白雲崑下客。一條寒衲是生涯。秋到任佗林落葉。春來從佗樹開花。三界橫眠閉無事。明月清風是我家。

愆は音查。復なり。寒公山居。清風と明月とを以て我が居となすの意を述べたり。三途トハ。火途。刀途。血途なり。

昔年曾到大海遊。爲采摩尼誓懇求。直到龍宮深密處。金關鎖斷主神愁。龍王守護安耳裏。劍客星揮無處搜。買客卻歸門内去。明珠元在我心頭。

名義集七寶篇に曰く。摩尼或は踰摩と云ふ。應法師云く。正には末尼と云ふ。即ち珠の惣名なり。此には離垢と云ふ。此の寶光淨にして垢穢の爲めに染せられず。或は梵の字を加ふ。其の淨を顯はすなり。又増長と翻譯す。此の寶處ありて威徳を増長す。又増長論に云く。摩尼珠多くは龍腦の中に在り。有福の衆生自然に之れを得。亦如意珠とも名づく。常に一切の寶物衣服飲食を出づ。隨意みな得。此の球は毒も害する能はず。火も焼く能はず。善友太子の事。事苑八に之れを載す。智度論十二に。能施太子の事を載す。諸教要集等並はせ考ふべし。此の詩は。親しく巧喻を設く。菩薩最初因地の時。昏衢の智燈を挑げ。長夜の慧炬と爲りて。薄福昏暗の衆生を利濟せんが爲め

に。大精習を發起し。阿耨菩提如意珠を求む。恰も商主の海に入りて無價の寶珠を求むるが如し。龍宮深密の處トハ。第八識賴耶渺茫湛寂の處を指すなり。既にして衆善を積み。萬行を勤め。多拜多禮。長坐不臥。轉た求むれば轉た遠し。轉た進むれば轉た失す。晝夜困苦して主神大に憂愁す。其の法珠の得がたきことや。恰も金關鎖斷して海神劍を揮ふが如し。心神憤悶。精魂煩亂して手脚の著くべき無し。伎盡き詞窮まりて。手を放ちて茫然として坐すれば。何ぞ計らん内ト中間。八紘四維。總に是れ一類粲然たる摩尼寶珠なり。初めて知る彼の南岳の謂はゆる頼に心源を悟りて寶藏を開くなり。是れ亦丹霞の謂はゆる智者は安然として得ると云ふ者乎。

衆星羅列夜明深。崑點孤燈月未沈。圓滿光華不磨瑩。柱在青天是我心。

明月滿ち輝きて光り萬里を照らす。是れ寒山が三千大千世界を照破するの妙心なり。

千年石上古人蹤。萬丈崑前一點空。明月照時常皎潔。不勞尋討問西東。

人々具足。箇箇圓成の佛心は。法界に充滿して遍からずと云ふこと無し。是れ恰も明月の碧空に昇りて私照無きが如し。常寂にして皎潔たり。是の妙心他に向て求むること勿れ。人々の胸襟に向て尋問すべし。極樂は西にも有らず東にも北道問へば南(皆身)に在る。

寒山頂上月輪孤照見。晴空一物無。可貴天然無價寶。埋在五蔭溺身軀。

本來無住の妙心。是れ寒山峰頂の孤月輪に似たり。天然無價の寶珠。一切衆生みな此の五蔭(空、風、火、水、地)の袋中に埋没して。執着惑溺して我が物と思へり。無根の芳草を戀着して蝶夢未だ醒めざるの時なり。

我向前溪照碧流。或向崑邊坐盤石。心似孤雲無所依。悠悠世事何須覓。

寒山身を青山碧水の間に寄せて。或る時は碧流に臨み。或る時は石上に坐す。心事すべて孤雲の軸を出没するが如し。此の外俗塵すべて到る無し。

我家本住在寒山。石崑樓息離煩緣。浪時萬象無痕迹。舒處周流徧大千。光影騰輝照心地。無有一法當現前方知。摩尼一顆珠。解用無方處處圓。

此の詩の主意は。一切衆生本具の佛性とも稱すべき一顆の明珠を詠じたるものなり。我今寒山栖息して此の寒山の巖窟に在りて。諸縁を放捨し。萬事を休息せり。心念泯絶する時は。明珠の跡かたも無い。明珠光を舒ふる時は。大千世界に周遍す。その光明は發揚して心地を照らし。無性

無相なるが故に一法の面前に當る無し。まさを知るべし此の摩尼寶珠。盡天盡地唯だ是れ一顆ののみ。諸子若し此の一顆の明珠を巧用することを解得せば。應用無邊無方。處々身處々現。一切に應じて不足あること無し。左右源に逢ひ。觸處に王三昧を得ん。

世人何事可吁嗟。苦樂交煎勿底涯。生死往來多少劫。東西南北是誰家。張王李趙權時姓。六道三途事似麻。祇爲主人不了絕。遂招遷謝逐迷邪。

張王李趙とは。趙高李斯が縁にあらす。只だ張三李四の事と見て可なり。此の詩は。一切衆生。貪。瞋。癡。苦。樂の爲めに。六道三途に生死輪廻し永劫にも停止すること無く。東西南北。皆是れ無住なることを知らず。却て張三李四の假の名に執着す。畢竟本來の主人公が大悟眞道せざるが故に。何時までも生死遷謝を招て。迷ダノ悟ダノ。正ダノ邪ダノ。聖ダノ凡ダノと無用物を追ひ廻らねばならぬ次第である。

余家本住在天台。雲路煙深絕客來。千仞巖巒深可遞。萬重谿澗石樓臺。樺巾木屐沿流步。布裘藜杖繞山廻。自覺浮世幻化事。逍遙快樂實善哉。

此れ寒公が天台山に遷居して。浮世は皆是れ夢幻空華。實相無きことを説示せられたり。樺巾木

屐。布裘藜杖は是れ寒公が服装なり。

丹丘迥聳與雲齊。空裡五峯遙望低。雁塔高排。出青嶂。禪林古殿入。虹蜺風搖松葉赤。城秀霧吐中崑仙路迷。碧落千山萬仞現。藤蘿相接次連谿。

雁塔トハ。釋氏要覽住處の篇に曰く。西域記に。昔比丘あり群雁の飛翔するを見て。戯に時を知ると言ふ。忽ち一雁あり投下して自から殞す。衆曰く。此の雁誠を垂る。宜しく厚德を旌はずべし。此に於て雁を瘞で塔を建つ云云。赤城トハ。天台山の事なり。謝玄暉が敬亭山の詩に曰く。茲山亘萬里。合沓與雲齊。丹丘亦天台に在り。

自從到此天台境。經今早度幾冬春。山水不移。人自老。見卻多少後生人。

此の詩ハ。寒公が天台山に到り住せしより春秋幾許をか經たる。山水の風景は古今異ならずと雖ども。人はをのづから老ひ去て。昨日の少年も今は白頭。又多少後生の人を見ることである。昔し記す山川の是。今いたむ人代の非と云ふ詩也。その意同也。

◎三字詩

寒山道無人。到若能行。稱十號。有禪鳴。無鴉噪。黃葉落。白雲掃。石磊磊。

山隴。我獨居。名善導。子細看。何相好。

十號トハ。瓔珞經に曰く。如來。應供。正遍知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御。丈夫。天人師。佛世尊。磊磊トハ。衆石の貌。隴トハ。尙書の禹貢の註に。隴は隈なり。善導トハ。法華經序品の註に曰く。善導とは佛を謂ふなり。良や以れば法を説き定に入り。能く人を導く。故に導師と稱す。云云。相好トハ。三十二相。八十種好を謂ふ。三藏法數。及び智論に詳かなり。

寒山寒。氷鎖石。藏山青。現雪白。日出照。一時釋。從茲暖。養老客。

寒公寒山に住すれば。寒氣澗水を結で氷となる。青山白雪を以て埋み。一面皚々として明かなり。日出て暖氣生すれば一時に消融して。氣候甚だ人に可なり。宛か好し此の處。殘年を養ふに耐へたり。韻字は入聲を用ゆ。此の什韻調甚だ雅なり。甚だ幽なり。

我居山。勿入識。白雲中。常寂寂。

入聲の韻を用ゆ。寒公寒山に住す。白雲を以て伴侶となす。山菓を食ひ溪流に飲む。山寂寂として道心豊かなり。水滾滾として妙用自から自在なり。此の内俗客塵人の知ることを得る無し。

寒山深。稱我心。純白石。勿黃金。泉聲響。撫伯琴。有子期。辨此音。

韻字は十一侵を用ゆ。列子湯問の篇に曰く。伯牙善く琴を鼓す。鍾子期伯牙が琴を鼓するを聴く。志高山に在れば。鍾子期曰く。善哉。峨峨として泰山の若し。志流水に在れば。鍾子期曰く。善哉。

洋洋として江河の若し。伯牙念ふ所。鍾子期必ず之れを得。伯牙泰山の陰に遊ぶ。率に暴雨に逢ふ。巖下に止まる心に悲む乃ち琴を撥て之れを鼓す。初め霖雨の操をつくり。更に崩山の音曲を造る。奏する毎に鍾子期輒ちその趣きを究む。伯牙乃ち琴を捨て、歎じて曰く。善哉善哉。子が聴くこと。夫れ志想の象ハ。猶ほ吾が心の如きなり。吾れ何に於て聲を逃れんや。云云。此の詩ハ。寒公が寒山に住するハ。寒山山深くして。純清絶潔にして俗臭無し。甚だ我が心に稱適へり。甘泉夜淥淥として響あり。伯牙の琴を鼓して。鍾子期が之れを聴て。其の曲調の峨々と洋々を辨別するが如し。寒公世間にハ知己はなければども。寒山の中にハ甚だ我心に適合する物がある。そハ山を觀るに附け。水を聴くに附け。一々我が心に稱はざるもの無し。是れ宛も伯牙と鍾子期との如し。知音は青山の外にあり。

重巖中。足清風。扇不搖。涼氣通。明月照。白雲籠。獨自坐。一老翁。

韻字ハ一東の韻を用ゆ。此れ寒公山居の景況なり。一扇を搖かさずとも清風拂々として吹き。涼氣水の如し。明月の來りて青苔を照らすあり。白雲の虚巖を擁するあり。此の内一老翁の獨り自から禪坐するあり。此の老翁こそ寒山ならめ。

寒山子。長如是。獨自居。不生死。

此詩僅かに十二字。その妙旨を合むことは。如來一代時經と相對詩すべし。夫れ寒山子とは。何

れの處の人ぞ。長く是くの如くなる者ハ何ぞや。獨自居するどハ如何。不生死底の物はれ何ぞ。諸人試みに自己の鼻端を把て子細に看よ。去かも是の如くなりといへども。未だ痛痒を感せざる者ハ生ながら坑中に埋没せしめん。

◎拾遺二首新添

我見世間人。箇箇爭意氣。一朝忽然死。祇得一片地。闊四尺長丈二。偏若會出來。爭意氣。我與爾立碑記。

寒山詩三百餘篇。學佛祖道者の良藥なり。道心上に病疾を生じたる者は必ず用ひざるべからざるなり。

少年懶讀書。三十業由未。白首始得官。不過十鄉尉。不如多種黍。供此伏家費。打酒詠詩。眠百年期。髣髴。

抄に。此の詩舊本に載せず。有る説には。異本を検して之れを得たり。異本ハ隨州大洪住山慶預の序並に劉覺先が跋に之れ有りと云ふ。

◎豊干禪師錄

道者豊干。未だ其の根裔を窮めず。古老之れを見るに。天台山の國清寺に居す。髮を剪ること眉に齊し。毳裘負を擁す。緇素問擲すれバ。乃ち隨時と云ふ。貌ち悴て昂藏たり。俛端にして七尺なり。唯だ米を舂て僧に供することを攻む。夜ハ則ち房を扃して吟詠して自から樂む。郡縣詣じて威な風僧と謂ふ。或は一言を發するに常流に異なり。忽爾として一日虎に騎り松徑より來りて國清に入る。巡廊唱道す。衆皆驚き訝る。怕れ懼て恒然として並にその徳を欽む。昔京輩にして胤が與めに疾を救ふ。丹丘に任ずるに到り。跡を追ひ訪ふ無し。賢人隠れ遷れて化を東甌に示す。唯だ房中の壁上に於て詩を書するあり。裔とは。以制の切。未なり。胃なり。別本に云く。

東甌は閩中なりと云云。

余自來天台。凡經幾萬回。一身如雲水。悠悠任去來。逍遙絕無聞。忘機隆佛道。世途岐路心。衆生多煩惱。

前の詩ハ。豊干が道履は洒洒落落として。三界無住の境界なることを説けり。後の詩ハ。豊干が法界に逍遙して。世機を忘却して佛祖の大道を興隆す。そハ何が故ぞ世の途には衆生の迷心種種様にして一定ならず。其れは煩惱と云ふ曲者の仕業なり。今豊干ハ自から機を忘れたり。忘機なれば佛法の隆興は論を待たず。四家録黃檗大師いはく。師門祖中の事ハ。只だ息機息見を論す。故に機を忘るときハ則ち佛道隆なり。分別するときハ則ち魔軍熾なり。

兀兀沈浪海。漂漂轉三界。可惜一靈物。無始被境埋。電光瞥然起。生死紛塵埃。
寒山特相訪。拾得罕期來。論心話明月。大虛廓無礙。法界即無邊。一法普徧該。
本來無一物。亦無塵。可拂若能了。達此不用坐兀兀。

此れ亦大乘の道人の口吻なり。小乘法數を算弄する底の癡漢の夢にだも了解すること能はざる所なり。浪は是れ何物ぞ。三界是れ何物ぞ。一喝すれハ赤然として空なり。太虚廓然。法界無邊。一靈の心性に歸着し。一靈の心性。光り萬象を照すことを知らば。坐して兀兀たることを用ひず。禪坐せ。四條五條の橋の上。往來の人を草木にぞ見て。

◎拾得錄

豐干禪師。寒山。拾得ハ。唐の太宗貞觀年中に任りて。相ひ次で跡を國清寺に垂る。拾得ハ豐干禪師因に松徑に遊ぶ。赤城に徐歩す。道路の側に偶として啼くことを聞く。乃ち其の由を尋ね。一子を見る。年十歳ばかり。初め彼の村の牧牛の子とおもへり。委く逗留を問ふ。云く我は。舍も無く姓も無し。遂に引て寺に至りて庫院に付て。人の來り認むるを候す。數旬の間。其の親鞫を絶つ。乃ち知庫の僧靈燭に事へしむ。三祀を経て頗る人の言を會す。食堂の香灯供養を知らし

ひ。忽ち一日像と對坐して。佛盤にして同じく餐す。復た聖僧の前に於て。云く。小果の位喃喃。阿俚にして傷哉と云ふ。燭。老宿等に謂て。此の子心風せり。供養を下さしむること無れど。乃ち厨内にして器物を洗滌せしむ。毎に食滓を澄して筒を以て盛る。寒山子來りて之れを負て去る。或ハ一言を發す。我れに一珠あり埋で陰中に任り。人の別つ者無し。衆、癡子と謂へり。寺内の山王僧常に參奉す。供養香灯等の務を下すに及で。食物多くハ鳥の爲めに耗やさる。忽ち一夜僧衆同じく夢ひ。山王の云く。拾得我れを打て瞋て云く。爾ハ是れ神道。伽藍を守護すべし。更に沙門を受く。供養を參奉す。既に靈驗有らば。何を以てか食を鳥に残はるゝや。今より後ち僧の參奉供養を要せざれ。且に至て僧衆堂に上りて各々夢みる所を説く。皆な一も差ふこと無し。靈燭も亦然り。喧喧として未だ止まず。燭供養を下す。忽ち山王の身上に杖の痕の損する所あるを見る。燭乃ち衆に報す。衆みな奔て看る。各々云く。夜の夢ハこの事なり。乃ち知りぬ拾得ハ是れ凡間の子にあらざることを。一寺紛紛たり。狀を具して州に申し縣に報す。符下る賢士の遯跡。菩薩の化身なり。宜しく令號して拾得賢士と爲す。此の後ちより常に淨人をして香華供養に直らしむ。又莊頭に於て牛を牧して歌詠して天に叫ぶ。又因みに半月の布薩に衆僧説戒す。法事合ふる時拾得牛を驅て堂前に至て門に倚て立つ。掌を拊て微笑して曰く。悠悠たるかな頭を聚めて相を作す。這箇如何。老宿律德、怒て呵して曰く。下人風狂説戒を破す。拾得笑て言て曰く。心に瞋

無き即ち是れ戒。心淨ければ即ち出家。我が性備と合す。一切の法差ふこと無し。尊宿堂を出て拾得を打ち趁て。牛を騙て出で去らしむ。拾得言く。我れ牛を放たざるなり。此の群牛ハ皆な是れ前生の大徳知事の人なり。咸く法號あり。喚べる、者みな認めん。時に拾得一々牛を喚で云く。前生の律師弘靖出よ。時に一の白牛聲を作して過ぐ。又喚ぶ前生の典座光超出よ。時に一の黒牛聲を作して過ぐ。又直歲靖本出よと喚ぶ。時に一の牯牛聲を作して出づ。又喚で云く。前生の知事法忠出よ。時に一の牯牛聲を作して出づ。乃ち獨り牽て牛に謂て曰く。前生戒を持たず。人面にして畜の心なり。汝今この咎を招く。何人をか怨み恨んや。佛力然も大なりと雖も。備は佛恩に孤けり。大衆驚き訝て忙然たり。此れに因て又州縣に報す。使令州に入れども召命に赴かず。代を舉て人仰ぐ。此れに因て顯現す。寺衆傍徨として。咸く菩薩人世に來ることを歎ず。聊か實録を纂て貴ぶらくバ墜ちざらんことを。兼て土地堂の壁上に於て書する語數聯。後人に示すことを貴んで乃ち集む語に曰く。

東洋海水清。水清復見底。靈源涌法泉。斫水無刀痕。

楞嚴經九に曰く。然も彼の諸魔。大に塵勞の内に怒ることありと雖も。汝が妙覺の中にハ風の光を吹くが如く。刀の水を断るが如く。了に相ひ觸れず。汝ハ沸湯の如く。彼ハ堅氷の如し。氣漸く隣けバ。不日に消殞す。

我見頑罽士。燈心挂須彌。寸燧煖大海。甲抹大地石。

頑罽トハ。左傳僖公二十四年に曰く。心德義の經に則らざるを頑と爲す。口忠信の言を道はざるを罽と爲す。

蒸沙豈成飯。磨磑將作鏡。說食終不飽。須著力行。

沙を蒸すとハ。楞嚴經第一に曰く。諸の修行人。無上菩提を成ずることを得る能はず。乃至別れて聲聞緣覺と成り。及び外道諸天魔王及び魔の眷屬と成る。皆な二種の根本を知らず。錯亂して修習するに由る。猶は沙を煮て嘉饌と成さんと欲するが如し。云云。華嚴十三に曰く。人の美饌を設けて自から餓へて食はざるが如し。法に於て修行せず。多聞も亦是の如し云云。此の詩の大意ハ。見性明了ならず。入理真得ならず。見聞覺知を認得し。八識無知を證取して以て菩提とする底ハ。三祗劫數を歷ると雖も。法成就を得ること能はず。覺へず聲聞二乘の部類に隨ず。捨も砂を蒸すが如く。磑を磨するに似たり。所以に謂ふ直ちに須らく力を著けて行すべしと。試みに問ふ作麼生か是れ力を著けて行する底。寒公曰く。咄咄。三界輪回。この語若し見得分明ならば備に許す親しく力を著けたることを。

恢恢大丈夫。堂堂六尺士。枉死埋冢間。可惜孤標物。不見日光明。照耀於天下。大清廓落洞。明月可然貴。

余本住無方。磅礪無爲理。時陟涅槃山。徐步香林裡。

此の詩ハ。拾得賢士ハ清淨無爲不生不滅の妙境に逍遙する底を説く。磅礪の二字ハ。寒公詩二百四十一首に出でたり。

左手握驪珠。右手執摩尼。莫耶未足及。智劍斬六賊。

般若酒清冷。飲啄澄神思。余閑來天台。尋人人不至。

寒山同爲侶。松風水月間。何事最幽邃。唯有遯居人。

悠悠三界主。悠悠たり三界の主。唯だ一句にして全壁を成さず。恐らくバ衍文ならん乎。然かりと雖も。此一句の妙甚し。拾得が平生の素懷唯だ此の意に在らんのみ。寒公ハ常に咄咄三界輪回と叫び。拾得ハ悠悠たり三界の主と叫ぶ。宛かも好し一對の連璧。

古佛路凄凄。無人行至此。企跡誰不踏。旋機滯凡累。

可畏生死輪。輪之未曾息。嗟彼六趣中。茫茫諸迷子。

人懷天真佛。太寶心珠秘。迷盲沈沈流。汨沒何時出。

智度論五に曰く。生死の輪人を載す。諸の煩惱結業大力自在に轉ず。人の能く禁止する無し。何れの時か出でん。

拾得、閭丘の太守に拜せられてより後ち。寒山子と同じく手を把て走り寺を出づ。跡隠れぬ。後に因みに國清の僧。南峰に登て薪を采る。一僧の梵儀に似たるが。錫を持して巖に入りて銷子骨を挑て去るに遇ふ。乃ち僧に謂て曰く。拾得の舍利を取ると。僧遂に寺衆に白す。衆まさに拾得此の巖に在りて入滅することを委す。乃ち號して拾得巖と爲す。寺の東南の隅に在り。山に登ること二里餘の地なり。いさゝか録すること前の如し。貴ぶらくば後人に示さんことを。

◎拾得の詩

諸佛留藏經。祇爲人難化。不唯賢與愚。箇箇心構架。造業大如山。豈解懷憂怕。那肯細尋思。日夜懷姦詐。

嗟見世間人。箇箇愛喫肉。椀椀不曾乾。長時道不足。昨日設箇齋。今朝宰六畜。都緣業使牽。非于情所欲。一度造天堂。百度造地獄。閻羅使來追。合家盡啼哭。鑪子邊向火。鑊子裡澡浴。更得出頭時。換卻汝衣服。

祖庭事苑一に曰く。建中の初め。蜀の相崔寧が女。金茶杯の儲け無きを以て。其の指を毀するこ
とを病ふ。様子を以て之れを盛る。既に啜るに杯傾く。乃ち蠟を以て様子に環し。其の杯をして
途に定まらしむ。即ち匠をして漆を以て環らして蠟を代へしむ。之れを相國に進む。相國之れを
奇として爲めに製して托子と名づく。因りて代に行る。この後傳ふる者更にその底に環らす。云
云。問摩羅上に義楚六帖を引く。又瑜珈論に曰く。問ふ欲摩王能く損害するが爲め乎。能く饒益
するが爲め乎。何故にか法王と名づく。答ふ饒益衆生に由るが故に。若し諸の衆生。王の所に
到るを執へて憶念せしむ。遂に爲めに彼の相似の身を現じて。告げて曰く。爾等自から作して當
に其の果を受くべし。那落迦を感ずるに由りて。新業更に積集せず。故業盡き已て那落伽を脱す。
是れ能く衆生を饒益するに由る。故に法王と名づく。云云。龐居士の偈に云く。婬欲は暫時の情。
長劫地獄に入る。たどひ出來ることを得せしむるも。異形にして人識らず。云云。左傳二十五年。
杜預が註に。六畜とは。馬。牛。羊。雞。犬。豕。是れなり。

出家要清閑。清閑即爲貴。如何塵外人。卻入塵埃裏。一向迷本心。終朝
役名利。名利得到身。形容已顛頓。况復不遂者。虛用平生志。可憐無事
人。未能笑得備。

班固が答賓戲にいはいく。朝には榮華を爲し。夕には顛頓を爲し。

養兒與取妻。養女求媒娉。重重皆是業。更殺衆生命。聚集會親情。總來
看盤釘。目下雖稱心。罪簿先注定。

釘トハ。字彙に丁定の切。食を置くなり。又食を貯ふるなり。十王經に曰く。爾の時に世尊大衆

に告げてのたまはく。諸の衆生同生神あり。左神は惡を記す。形羅刹の如し。常に隨て離れず。
悉く小惡をも記す。右神善を記す。形ち吉祥の如し。常に隨て離れず。皆な微善をも記す。地に雙
童と名づく。亡人先身の若くは福。若しくは罪。諸業みな書して盡く持して閻羅法王に奏與す。
その王簿を以て亡人に推問し。所作を算計して。善に隨ひ惡に隨て之れを斷分す。云々。

得此分段身。可笑好形質。面貌似銀盤。心中黑如漆。烹豬又宰羊。誇道
甜如蜜。死後受波吒。更莫稱冤屈。

三藏法數に。二種の生死を出す。その一に曰く。分段生死。釋してはいはいく。分は即ち分限。段は
即ち形段。謂く六道の衆生。業力に隨て感ずる所。果報の身には則ち長あり短あり。命には則ち
壽あり天あり。而して皆な生死に流轉す。故に分段生死と名づく。同卷に入寒地獄を出だす。そ
の三に曰く。阿吒吒地獄。釋して曰く。梵語阿吒吒。或は嚙嚙と云ふ。謂く受罪の衆生。寒苦の
増極するに由りて。唇動かすこと能はず。唯だ舌の中に於て此の聲を作すなり。その四に曰く。
阿波波地獄。釋して曰く。梵語に阿波波。或は噉噉と云ふ。謂く受罪の衆生。寒苦増極すれば。

舌動くこと能はず。唯だ唇の間に於て此の聲を作す也。今此に波吒と云ふ者は。蓋し阿波波阿吒吒を略取するの言乎。

佛哀三界子。總是親男女。恐沈黑暗坑。示儀垂化度。盡登無上道。俱證菩提路。教備癡衆生。慧心勤覺悟。

法華經譬喻品に云く。今此の三界は皆な是れ我が有なり。其の中の衆生は皆な是れ我が子なり。云云。黑暗坑トハ。地獄經に云く。鐵圍山の東西。黑暗處なり。

佛捨尊榮樂。爲愍諸癡子。早願悟無生。辨集無上事。後來出家者。多緣無業次。不能得衣食。頭鑽入於寺。

法華譬喻品に。佛王子たりし時。國を棄て世榮を捨つ。云云。嗟見世間人。永却在迷津。不省這箇意。修行徒苦辛。我詩也是詩。有人喚作偈。詩偈摠一般。讀時須子細。緩緩細披尋。不得生容易。依此學修行。大有可笑事。

西域記に曰く。舊に曰く偈と。梵本の略なり。或は偈と曰ふ。梵音の訛なり。今は正音に従ふ。宜しく伽佗と云ふべし。唐には頌と云ふ。

有偈有千萬。卒急述應難。若要相知者。但入天台山。巖中深處坐。說理及談玄。共我不相見。對面似千山。

世間億萬人。面孔不相似。借問何因緣。致令遣如此。各執一般見。互說非兼是。但自修己身。不要言佗已。

男女爲婚嫁。俗務是常儀。自量其事力。何用廣張施。取債誇人我。論情入骨癡。殺佗鷄犬命。身死墮阿鼻。

名義集に。地獄の篇に。梵語には阿鼻。こゝには無間と云ふ。世上一種人。出生常多事。終日傍街衢。不離諸酒肆。爲佗作保見。替佗說道理。一朝有乖張。過咎全歸備。

異本に性に作る。韓文六に。年十二三に至りて。頭角各々相ひ疎す。二十に漸く乖張す。云云。我勸出家輩。須知教法深。專心求出離。輒莫染貪滯。大有俗中士。知非不愛金。故知君子志。任運聽浮沈。

龐居士の偈に曰く。世人は珍寶を重んず。我は刹那の靜を貴ぶ。金多く人の心を亂る。靜は眞如の性を見る。性空にして法も亦空なり。十八行蹤を絶して。但だ自心無碍なり。何ぞ愁へん神通せざることを。

寒山自寒山。拾得自拾得。凡愚豈見知。豐干卻相識。見時不可見。覓時

何處覓借問有何緣向道無爲力

維摩經の序に云く。妙華無爲にして爲さずと云ふこと無し。然る所以を知る罔くして而も能く然るものは不思議なり。證道歌に曰く。有人問我解何宗。報道摩訶般若力。

從來是拾得不是偶然稱別無親眷屬寒山是我兄兩人中心相似誰能

徇俗情若問年多少黃河幾度清若解捉老鼠不在五白猫若能悟理性那由錦繡包眞珠入席袋佛性止蓬茅一群取相漢用意總無交

退之が盧同に寄する時に。立どころに賊曹を召し五白を呼ぶ。盡く鼠輩を取る。諸市に尸す。管解に云く。ある説に此れを引て以て五白の猫の證と爲す。黃河の水。千年にして一度清む。

運心常寬廣此則名爲布輟已惠於人方可名爲施後來人不知焉能會此義未設一庸僧早擬望富貴

獼猴尙教得人何不憤發前車既落坑後車須改轍若也不知此恐君惡合殺比來是夜叉變即成菩薩

徐學老が童行動學を勸むるの文に曰く。且つ獼猴の如きは獸の類なり。尙は教ふるに藝を以て解せまひ可し。鶴鶴禽鳥なり。尙は教ふるに歌を以て唱へまひべし。人ハ萬物の靈たり。如し學

君不見三界之中紛擾擾祇爲無明不了絕一念不生心澄然無去無來不生滅

故林又斬新剡源溪上人天姥峽關嶺通同次海天灣深曲島間森森水雲雲借問嵩禪客日輪何處噉

謝靈運か海嶠に登臨し。惠連に與へし詩に曰く。眠に剡中に投て宿し。明に天姥の谷に登る。注に。漢書に云く。會稽に剡縣あり。吳錄地理志に云く。剡中ハ縣の名。天姥山あり。又孫興公が

天台山に遊ぶ賦の註に。剡縣の東南に天台山あり。嵩禪客は。南泉の法嗣なり。洛京の嵩山和尚。僧問ふ如何なるか是れ嵩山の境。師曰く。日は東より出て。月は西に向て傾く。云々。蘇トハ。

大水の貌なり。雲雲トハ。濛濛なる江水大波なる之れを濛と云ふ。自笑老夫筋力収偏戀松岩愛獨遊可歎往年至今日任運還同不繫舟

一入雙溪不計春鍊暴黃精幾許斤鱸竈石鍋頻煮沸土甌久蒸氣味珍誰來幽谷餐仙食獨向雲泉更勿人延齡壽盡招手石此樓終不出山門

招手石トハ。傳燈二十七に。智者大師十五にして佛像を禮して。志を誓て出家す。恍然として夢の如し。大山海際に臨む。峰頂に僧あり手を招て接して一伽藍に入る。爾ち當に此に居るべし。汝ち當に此に終ふべし。後ち大建七年乙未に。徒衆を謝遣して。天台山の佛隴峰に隱る。定光禪師あり。先きに此の峰に居す。弟子に謂て云く。久からずして當に善知識有り。徒を領して此に至るべし。俄爾として師至る。光曰く。還て曠昔手を擧げて招引せし時を憶ふや否や。師即ち佛像の微を悟り。悲喜懷に交る。乃ち手を執りて共に菴處に到る。

躑躅一群羊。沿山又入谷。看人貪竹塞。且遭豺狼逐。元不出孳生。便將充口腹。從頭喫至尾。餽餉無餘肉。

餽々トハ。飽食するなり。張籍が李渤に寄する詩の註に。本草に躑躅は即ち杜鵑花なり。羊食へば則ち死す。之れを見て躑躅たり。此れを以て名を得たり。竹塞とは是れ塞の字なるべし。華トハ。詩經に。鳥獸は華尾す。註に乳化を華と云ふ。此の詩ハ。拾公が一群羊の山經を涉り溪流に臨むを見て。感ずる所ありて慘然として賦す者なり。言ふ心ハ。彼れ偶々虞人の竹塞を貪りて羊を逐ふことを忘るゝに逢て。幸に人禍を免ると雖ども。終に獸厄に罹りて。豺狼の齒牙に費らんと必らず遠からず。寔に怒むべきなり。一切の群生。互に相ひ噉噬す。何れの日か輪回生死を免れ得んや。

銀星釘秤衡。綠絲作秤紐。買人推向前。賣人推向后。不顧佗心。怨唯言我好手。死去見閻王。背後挿掃帚。

龐居士が偈に曰く。法を枉げて人の錢を取る。誇て道ふ能く計算す。閉門私造罪。擬免災殃。被佗惡部童。抄得報閻王。縱不入饅湯。亦須臥鍊牀。不許雇人替。自作自身當。

雙童の事ハ。上十王經を引く。永嘉の證道歌に曰く。作すこと心に在れば。殃身に在り。怨訴して。更に人を尤むることを須ひず。

悠悠塵裡人。常樂塵中趣。我見塵中心。多生慙願。何哉慙此流。念彼塵中苦。

無去無來本。湛然不居。内外及中間。一顆水晶絕瑕翳。光明透滿出。入天。

少年學書劍。吒馭到荊州。聞伐匈奴。盡婆娑無處遊。歸來翠巖下。席草枕清流。莊士志朱紱。欄猴騎土牛。

詩經閭宮の篇に。戎狄是れ虜也。荆舒是れ懲りす。又殷武の篇に。捷たる彼の殷武。奮て荆楚を伐つ。云云。事文類聚別集に云く。魏の周泰新城の太守となる。司馬宣王鎧鍔をして囑りて云は

まむ。君禍を釋て宰府に登る。三十六日にして塵蓋を擁し。兵馬郡に守たり。乞見小車に乗る。
一に何ぞ賦さや。秦が曰く。君は名公の子。少より文采あり。故に史職を守る。彌猴土牛に騎る。
又何ぞ遅さや。云云。

三界如轉輪。浮世若流水。蠢蠢諸品類。貪生不覺死。備看朝垂露。能得幾時子。

閑入天台洞。訪人不知寒山。爲伴侶。松下嗽靈芝。每談今古事。嗟見世愚痴。箇箇入地獄。那得出頭時。
古佛路凄凄。愚人到卻迷。祇緣前業重。所以不能知。欲知無爲理。心中不挂絲。生生勤苦學。必定親吾師。
各有天真佛。號之爲寶王。珠光日夜照。玄妙卒難量。盲人常兀兀。那肯怕災殃。唯貪姦佚業。此輩實堪傷。
出家求出離。哀念苦衆生。助佛爲揚化。令教選路行。何曾解救苦。恣意亂繼橫。一時同受溺。俱落大深坑。

佛を助けて爲めに化を揚ぐトハ。佛世尊の本懷を扶助して。難値難遇の大教を播揚するの義なり。たとひ佛教の本旨殊勝なりと雖ども。見性悟道底の鐵漢の出づるを待たずんば。いづくんぞ弘通

することを得んや。佛は覺なり。法は靜なり。僧は和なり。和は以て争を無みするなり。靜は以て散を無みするなり。覺は以て迷を無みするなり。夫れ已に無迷無散無争なれば一切の衆生みな是れ得道と叫ぶも可なり。衆生を度せんと欲するに衆生無しと云ふも亦可なり。

常飲三毒酒。昏昏都不知。將錢作夢事。夢事作鐵圍。以苦欲捨苦。捨苦無出期。應須早覺悟。覺悟自歸依。

雲山疊疊幾千重。幽谷路深絕。入蹤碧澗。清流多勝境。時來鳥語合。人心後來出家子。論情入骨痴。本來求解脫。卻見受驅馳。終朝遊俗舍。禮念作威儀。博錢沽酒。喫翻成客作兒。

若論常決活。唯有隱居人。林花長似錦。桃李色常新。或向巖間坐。旋瞻丹桂輪。雖然身暢逸。卻念世間人。

我見出家人。總愛喫酒肉。此合上天堂。卻沈歸地獄。念得兩卷經。欺花市廛俗。豈知鄙俗士。大有根性熟。

我見頑鈍人。燈心柱須彌。蟻子蓄大樹。焉知氣力微。學較兩莖菜。言與祖師齊。火急求懺悔。從今輒莫迷。
君見月光明。照燭四天下。圓輝挂大虛。瑩淨能肅灑。人道有虧盈。我見

無衰謝狀似摩尼珠。光明無晝夜。
 余住無方所。磅礪無爲理。時陟涅槃山。或玩香林寺。尋常祇是閑。言不
 干名利。東海變桑田。我心誰管備。
 左手握驪珠。右手執慧劍。先破無明賊。神珠自吐燄。傷嗟愚痴人。貪愛
 那生厭。一墮三途間。始覺前程險。
 般若酒冷冷。飲多人易醒。余住天台山。凡愚那見形。常遊深谷洞。終不
 逐時情。無思亦無慮。無辱也無榮。
 自從到此天台寺。經今早已幾冬春。山水不移人自老。見卻多少後生
 人。
 平生何所愁。此世隨緣過。日月始逝波。光陰石中火。任佗天地移。我暢
 巖中坐。
 嗟見多知漢。終日枉用心。岐路逞嘍囉。欺謾一切人。唯作地獄滓。不修
 來世因。忽爾無常到。定知亂紛紛。
 嗟囉トハ。自負多口の義なり。
 迢迢山徑峻。萬仞險隘危。石橋莓苔綠。時見白雲飛。瀑布懸如練。月影

落潭暉。更登華頂上。猶待孤鶴期。
 松月冷颼颼。片片雲霞起。匝匝幾重山。縱目千萬里。溪潭水澄澄。徹底
 鏡相似。可貴靈臺物。七寶莫能比。
 世有多解人。愚痴學閑文。不憂當來果。唯知造惡因。見佛不解禮。觀僧
 倍生瞋。五逆十惡輩。三毒以爲隣。死去入地獄。未有出頭辰。
 人生浮世中。箇箇願富貴。高堂車馬多。一呼百諾至。吞併佗田宅。準擬
 承後嗣。未逾七十年。冰消瓦解去。
 水浸泥彈丸。思量無道理。浮漚夢幻身。百年能幾幾。不解細思惟。將言
 長不死。誅剝壘千金。留將與妻子。
 雲林最幽棲。傍澗枕月溪。松掃盤陀石。甘泉涌淒淒。靜坐偏佳麗。虛巖
 朦霧迷。怡然居恬地。日斜樹影低。
 可笑是林泉。數里勿入烟。雲聳巖嶂起。瀑布水潺潺。猿啼暢道曲。虎嘯
 滿山間。松風清颼颼。鳥語聲關關。獨步繞石澗。孤陟上峯巒。時坐盤陀
 石。偃仰攀蘿沿。遙望城隍處。唯聞鬧喧喧。
 閑自訪高僧。青山與白雲。東家一稚子。西舍衆群群。五峯聳雲漢。碧落

水澄澄師指令歸去日下一輪燈

此の詩ハ。洞山悟本大師の偏正の宗旨を説くものなり。洞山云く。青山は白雲の父。白雲は青山の兒。白雲終日青山に倚りて總に知らずと云云。又云く。雲の少きを一の稚子と謂ひ。雲の多きを衆群たりと謂ふは即ち是れ洞山が偏正五位の説なり。

昨夜得一夢。夢見一團空。朝來擬說夢。舉頭又見空。爲當空是夢。爲復夢是空。想計浮生裡。還同一夢中。身貧未是貧。神貧始是貧。身貧能守道。名爲貧道人。神貧無智慧。果受餓鬼身。餓鬼比貧道。不如貧道人。井底紅塵生。高山起波浪。石女生石兒。龜毛數寸長。欲覓菩提路。但看此勝樣。

井底に紅塵生じ。高山波浪起るとは。時經の桑田變じて海となり。山谷岡となるの義なり。以上二十餘首は。有眼の君子。一讀下せらるれば。則ち意義おのづから分明なれば。妄りに閑言語の講説を費さいるは。諸君子をして日子を無用に費消せしめざるなり。請ふ之れを諒せよ。講述者識す。

◎朱晦庵與南老帖

五月十三日。熹悚息啓上。久不聞動靜。使至特辱惠書。獲審比日住山安穩。爲慰天台之勝。夙所願游。往歲僅得一過山下。而以方有公事。不能登覽。每以爲恨。今又聞故人挂錫其間。想見行住坐臥。不離水聲山色之中。尤以不得往同此樂爲念也。新詩見寄。筆勢超精。又非往時所見之比。但稱說之過。不敢當耳。二刻亦佳作也。但機行奪市。恐不免夫故步耳。寒山詩。彼中有好本否。如未有能爲。讎校刊刻。令字畫稍大。便於觀覽。亦佳也。寄惠黃精。筍乾。紫菜。多品。尤荷厚意。偶得安樂茶。分去甘餅。并雜碑刻。及唐詩三冊。護附回便。幸視至相望千里。無由會面。臨書馳情。千萬自愛。不宣。

熹悚息啓上

國清南公禪師方丈

熹再啓

清衆各安佳。兒輩附問。黃壻歸三山已久。時得書也。出師表未暇寫。俟寫得轉寄去。未晚也。寒山詩刻成。幸早見寄。有便只附至臨安。趙節推廳。託其尋便。必無不達。渠黃巖人也。熹再啓。國清南公所刊寒山詩。錯誤最多。甚不稱晦庵先生丁寧流布之意。今以江東漕司本。參互校定。重刻之。山間据詩稱五言五百。七字七十九。

三字二十一。則今所存讒半耳。寶祐三年乙卯九月旦。住靈鷲山行果謹書

◎陸放翁與明老帖

有人兮山陘。雲卷兮霞纓。秉芳兮欲寄。路漫兮難征。心惆悵兮狐疑。蹇獨立兮忠貞。此寒山子所作楚辭也。今亦在集中。妄人竄改。附置至不可讀。放翁書寄。天封明公。或以刻之山中也。

寒山詩講義終

明治卅二年九月十二日印刷
明治卅二年十二月十五日發行
明治四十年十月廿五日四版發行

（寒山詩講義與付）
定價金五拾錢



著者 若生國榮
發行者 平正次

東京市神田區駿河河原四紅梅町十番地

印刷者 羽田恭輔
印刷所 株式會社 葆光社

東京市本郷區湯島一丁目二、三番地

發行所

東京市神田區駿河河原
お茶の水角

板橋口座二三一三番
電話本局二九九九番

光融館

●正信偈講義

(四版) 前田慧雲師講述 定價十二錢 郵税四錢

本講は眞宗碩學前田師が眞宗安心を平易に領解せしめんため深切に釋さし者

●普勸坐禪儀 講義

(五版) 山田孝道師講述 定價二十錢 郵税四錢

坐禪の眞儀及び心得方を解説して漏さず僧俗共に修禪者の好伴侶なり

●菩提心論講義

合本 姫宮大圓師講述 二版) 定價十三錢 郵税四錢

釋 清潭師講述

●大乘止觀頌講義

八宗の祖師と崇めらるゝ龍樹菩薩の菩提心論を平明に釋く者也大乘止觀頌は天台宗の觀心の要義を師が平易に講述せし者也

●因明學大意

村上專精師講述 定價三十錢
池原雅壽師講述 (再版) 郵税四錢

●因明三十三過本作法講義

因明學は五明學の一て論理術を研究する學なり一讀千金
○三十三過本作法論理的に吾意志を成立するに過三十三を素索する也

●證道歌講義

山田孝道師講述 三版) 定價十六錢 郵税四錢
本書は參禪に志す者の必讀すべき良伴也熟讀の價大悟の値あり

●信心銘講義

三版) 山田孝道師講述 定價十錢 郵税二錢

此書は參禪の要旨を韻文にて説顯して證道歌と伯仲の必讀書也

●天台西谷名目講義

(三版) 前田慧雲師講述 定價三十錢 郵税四錢

本書は天台宗の術語を集めしもの該宗の學をなすに最用初學有益の者

●華嚴學栞

(二版) 藤谷暹由師講述 定價十八錢 郵税四錢

華嚴經は八十卷あり釋尊成道後最初の説法なり本書は其要義を示せり

●八宗綱要講義

(再版) 織田得能師講述 定價七十錢 郵税六錢

南都東大寺凝然大徳が述べられしものにて八宗の要義を簡易に網羅せり

●梵文阿彌陀經講義

(二版) 南條文雄師講述 定價四十錢 郵税四錢

南條師は梵學に明なる識見を以て淨土教の基礎たる梵文阿彌陀經を述ぶ

●佛教大意

(四版) 織田得能師講述 定價二十錢 郵税四錢

本書は日本現在佛教の三大宗に於て教理行果は轉迷開悟の一味道を明せり

●寒山詩講義

(四版) 若生國榮師著 定價四十錢 郵税六錢

若生師が輕快流暢の辯舌もて寒山詩の玄妙なる奥義を發揮せられたる者

●般若心經講義

(九版) 大内青壽居士講述 定價十五錢 郵税四錢

●佛說法滅盡經講義

般若經六百卷中の眞髓を簡明に講じたる心經。末代の佛法滅盡する慘狀を講述せし佛法滅盡經。大内居士が特得の能辯もて平易に解釋せしもの也

●學道用心集講義

山田孝道師著 定價三十錢 郵税四錢

本書は承陽大師御遺文中髓中の眞髓なり、宗祖の眞意を何人にも解了し得る様平易懇切に説かれたるもの也

●改悔文講話

全一冊 伊藤哲英師講述 定價十五錢 郵税二錢

本文は蓮如上人の御遺述で眞宗の安心法門は殘らず明瞭に講述す

●大乘起信論義記講義

(三版) 織田得能師講述 定價七十五錢 郵税十錢

釋尊滅後大乘佛教一時廢退せしを馬鳴師興隆せられたる妙論の通俗講義書

●七十五法名目講義

(二版) 織田得能師講述 定價四十五錢 郵税六錢

素人が佛教の奥義を知るに必要な書也織田師が平易に説明せられたる者

●金剛經講義

(四版) 釋 宗演禪師著 定價二十錢 郵税四錢

本經は佛祖の心法人類の性源を説顯したるを師が引證説明せられたり

●俱舍宗大意

合本(二版) 齋藤唯信師講述 定價四十五錢 郵税六錢

●三十唯識論講義

俱舍論三十卷あり印度哲學の一で佛教に必要な書を簡明に釋く者なり
三十唯識論万法唯心の理は佛教大乘家の主張する所其要領を明説せり

●修證義說教大全

曹洞宗務局文書課編 定價五十五錢 郵税六錢

洞宗の安心たる修證義を斬新なる方法により説教の模範を示したるもの

●佛家人名辭書

鷲尾順敬先生著 大形千七百頁定價金九圓 郵税卅錢

本書は六千五百有餘の高僧碩徳の詳傳を收め且つ廿餘の系圖索引年表及百餘個の肖像を掲げたる世界唯一の大著書なり

●父母恩重經講話

若生國榮師講述 定價十錢 郵税二錢

佛說父母恩重經は人道忠孝の大本を示されたるものにして全文を和譯し之れを平易懇切に説かれし者

●禪門法語集

(五版) 山田孝道師校註 定價一圓五十錢 郵税十五錢

訂正五版内容は各高僧の法語三十種を收む參禪者必須の珍寶也

●續禪門法語集

(三版) 森 大狂居士校註 定價二圓 郵税十五錢

本集は古僧高德の法語三十六種を收め禪味津津悟道の案内者たり

●一休和尚 一休和尚全集 (四版) 森大狂居士參訂 定價四十錢 郵稅六錢

●真蹟入 一休禪師の隨筆、小説物語、謠曲、佛經講義、偈頌、和歌、盡く網羅す

●勅諭正 白隠和尚全集 (三版) 禪學編輯局參訂 定價四十錢 郵稅六錢

●宗國師 白隠禪師一生八十餘年間横説堅説見孫の爲に垂示せる者のかな文法語集なり

●佛教のすゝめ (三版) 山田孝道師著 定價三十錢 郵稅六錢

●山田師が懇に古今東西の教理を引證して圓融快活悲哀種々の法語面白し

●淨土三經之大綱 齋藤唯信師著 定價廿五錢 郵稅四錢

●我國佛教各宗多き中に最盛なる淨土教の基礎たる三經の綱領を解く者

●眞宗七祖の大綱 齋藤唯信師著 定價廿五錢 郵稅四錢

●本書は淨土教々義の父たる七祖につき學佛修道の士の爲め簡明平易に講せられたるもの

●佛教倫理の大觀 (二版) 齋藤唯信師著 定價十二錢 郵稅二錢

●廣大なる佛教倫理の一斑を容易に知らしむる爲めに言文一致にて懇切に説きしもの

●武士道 (六版) 安部正人先生編 定價卅五錢 郵稅六錢

●日本武士道につき鐵舟居士の講話せられたのを海舟居士の評を註せられしもの

●國文學 佛語解釋 織田得能師著 定價一圓五十錢 郵稅十五錢

●十二種 本書は國文學十二種中の佛敎語を平易通俗に解釋せられたる者

●日本哲學要論 (再版) 文學士有馬祐政君著 定價七十錢 郵稅八錢

●日本の哲學的系統即ち神儒佛の發端及び其調和發達を概論せし書なり

●禪林叢書第壹編 森 大狂居士參訂 正價三十五錢 郵稅六錢

●此書は東坡禪喜集、澤庵和尚垂示、正眼國師眼目を収む珍書也

●禪林叢書第貳編 森 大狂居士參訂 正價三十五錢 郵稅六錢

●此書は承陽大師(道元)法燈國師等の和歌法語居士分燈錄を收む

●和漢高僧傳 織田得能師編 定價六十錢 郵稅六錢

●本傳は織田師が意を注て漢土日本各高僧の傳を網羅せられたる者也

●校訂 大乘起信論義記 (三版) 縮刷 定價廿五錢 郵稅六錢

●本書は大乗佛教の眞髓とも云つべき良書也學佛者は必讀すべきものなり

●教育と宗教との關係 (三版) 文學博士元良勇次郎君著 定價郵稅共十五錢

●教育と宗教とは離るべからざるかの要點を論じたる者也

● 佛教大家論集

全十二冊 定價一圓卅錢 洋裝合本一圓五十錢 郵税不要

本集は全部十二輯にして近代屈指の佛教大家の論辯説話は網羅して燦爛たり

● 鐵舟隨筆

海舟居士評論、泥舟居士校閱、安部正人先生編 定價六十五錢 郵税十錢

近世稀有の大英傑たる鐵舟先生の十五才より晩年に至る隨筆を輯めたるもの也

● 佛教金言集

(再版) 織田得能師著 定價廿五錢 郵税四錢

佛書浩瀚一々披見し難し本書の如きは金言を抜粹明解せし者以て坐の右銘とせよ

● 通俗活禪談

(四版) 形山若生國榮師著 第一集各定價廿五錢 郵税四錢
第二集 定價廿五錢 郵税四錢

本集を一讀すれば生死苦樂無礙自在神通妙用も奇特にあらず悟道の要路也

● 達磨禪經說通考疏

東嶺禪師著 定價三圓 郵税卅四錢

白隱會下に其人ありと知られた東嶺禪師が越格の手眼もて編せられたる珍書也

● 延命十句觀音經靈驗記

白隱禪師著 定價四十錢 郵税四錢

白隱禪師が寶曆の頃横説堅説廣く編纂を益せられたる垂範なり

● 訂正曹洞在家日課要集

(五版) 松崎覺本師編輯 定價八錢 郵税二錢

此編は専ら在家の日用行持に備へたる者至極便益なる小冊子なり

● ちご櫻

(再版) 山田夢白君著 定價八錢 郵税二錢

坊ちやんお嬢ちやん方へ佛教主義の面白い身ましい御話や唱歌が澤山々々

● 寢惚の眼覺

白隱禪師著 定價六錢 郵税二錢

勅諭正宗國師白隱和尚が江戸へ曳錫の時衆生の迷夢を覺破せられたる者

● 森田悟由禪師法話集

若生國榮師 白鳥勳芳師 共編 定價十二錢 郵税二錢

本書は禪師の垂示、講話、法語等を網羅したるもの也

● 訓譯原人論

釋 雲照律師著 定價五錢 郵税二錢

本書は原人論の原本を雲照律師が懇切丁寧に訓譯せられしものなり

● 追善の心得

高田道見師述 定價三錢 郵税二錢

本書は追善をする施主の心得方より供物の撰擇壇上の莊嚴等に至る迄苦口丁寧に説かれたるもの

● 施餓鬼の由來

高田道見師述 定價三錢 郵税二錢

施餓鬼の緣由、其功德等何人にも解し易しく問答牀に書述べられたるもの也

● 盆の由來

高田道見師述 定價三錢 郵税二錢

宇闍盆につき其緣起、其功德を極平易なる詞にて自問自答したるもの施本には極適せり

9214
W 25

國書刊行會

●大乘佛說論批判

文學博士村上專精著

定價五十錢

郵税八錢

佛敎界千古の未決の大問題たる大乘佛說非佛說につき明晰精要に解決せらる

●禪門 殺活自在

(再版) 山田孝道師著

定價二十五錢

郵税四錢

此書は師が優麗の健筆を揮ひ禪學の奧義を尤も平易に記したるもの也

●脩養 禪話

(二版) 後藤北溟師著

定價廿五錢

郵税不要

本書は古今大禪定家の參禪學道の要訣言行逸話等を網羅す趣味津津

●單刀直入

(三版) 若生國榮師著

定價郵税共二十五錢

參禪修養の法を單刀直入的に懇々と説きたる禪學書なり

●茶禪一味

(再版) 田中 仙橋著

定價郵税共二十五錢

茶道と禪道と擲する所を師の健筆もて説き盡されたる書なり

●一味の禪旨

原僧蓮師著

定價郵税共廿五錢

老師の語道の活眼より滿腔の熱誠を凝き禪學の垂示講話せられたるものなり

●佛敎通俗講義

全廿五冊 毎月一回發行

一冊三十七錢 三冊一圓
六冊一圓九十二錢

佛敎家廿二名の懇切に佛典廿餘科を講述せられたれば佛敎研究者の好指圖書なり

終

